

千葉東南部ニュータウン 11

— 六通金山遺跡 —

1981

日本住宅公団 首都圏宅地開発本部
財団法人 千葉県文化財センター

千葉東南部ニュータウン 11

— 六通金山遺跡 —

1 9 8 1

日本住宅公団 首都圏宅地開発本部
財 団 法 人 千葉県文化財センター

序 文

千葉市の南部を流れる村田川流域には、その恵まれた自然環境等により先土器時代から歴史時代に至る数多くの遺跡が残されております。

近年首都圏の人口増加は著しく、それに対応して大規模な宅地造成事業が各地で実施されております。本県においても、日本住宅公団がこの地域に約600ヘクタールに及ぶ千葉東南部地区土地区画整理事業を計画しました。

そのため、千葉県教育委員会では昭和46年度に事業地内の埋蔵文化財の所在について分布調査を実施し、これらの遺跡の取扱いについて、日本住宅公団をはじめ関係諸機関と協議を重ねてまいりました。

その結果、できるだけ公園緑地に取り込んで現状保存をはかる一方、やむを得ず現状保存が困難な遺跡については、事前の発掘調査を十分におこない、記録保存の措置を講ずることで協議が整いました。当初（昭和49年度）は（財）千葉県都市公社文化財調査事務所が、次いで昭和50年度からは当センターが調査機関の指名を受け、調査を実施してまいりました。

昭和51・53・54年度に実施した六通金山遺跡の調査では、先土器、縄文、古墳、平安の各時代の遺構及び遺物が多数発見され、当地域における原始・古代文化を明らかにすることができました。

このたび、3か年にわたる「六通金山遺跡」の調査結果を、『千葉東南部ニュータウン一第十一集』として刊行する運びとなりました。この報告書が学術的な資料としてはもとより、文化財の保護、普及のために広く一般の方々に活用されることを望んでやみません。

終りに、日本住宅公団の御協力と千葉県教育庁文化課、千葉市教育委員会の御指導、助言にお礼を申し上げるとともに、極寒酷暑の中で調査に協力された調査補助員の皆様に心から謝意を表します。

昭和56年9月30日

財団法人 千葉県文化財センター

理事長 今 井 正

凡 例

1. 本書は、日本住宅公団首都圏宅地開発本部による千葉市東南部地区におけるニュータウン建設計画（土地区画整理事業）に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
2. 本書に所収される内容は昭和51・53・54年度に調査の対称となった千葉市大金沢町に所在する六通金山（ろくつうかなやま）遺跡についての資料報告である。
3. 発掘調査は1. 2号墳については昭和51年8月27日から11月13日、その他の遺構については昭和53年5月1日から11月25日までと、昭和54年4月1日から9月19日までの2次にわたって実施した。
4. 発掘調査は日本住宅公団首都圏宅地開発本部の依頼により、千葉県教育庁文化課の要請・指導を受け、財団法人千葉県文化財センターが受託し、調査部千葉東南部事務所が担当した。
5. 発掘調査は、調査部長 中村恵次（故人）、西野元（～54. 3. 31）、白石竹雄（54. 4. 1～）、班長 栗本佳弘の指導のもとに、1. 2号墳については豊田佳伸（～52. 3. 31）が、その他の遺構については、第1次調査を篠原国勝（～53. 3. 31）、白井久美子（～55. 3. 31）、第2次調査を白井久美子、伊藤智樹（54. 4. 1～）がそれぞれ担当した。
6. 整理作業は、調査部長 西野元、白石竹雄、部長補佐 栗本佳弘（55. 4. 1～）、班長 栗本佳弘（～55. 3. 31）、山田常雄（55. 4. 1～）の指導のもと、豊田佳伸、白井久美子、関口達彦（55. 4. 1～）が担当した。
7. 本書は、関口が執筆・編集したものを山田が加筆・補正して全体をまとめた。
8. 岩石の石質鑑定は県立上総博物館学芸員吉村光敏氏の御教示による。記して感謝の意を表す。
9. 発掘調査から本書の刊行に至るまで、日本住宅公団首都圏宅地開発本部、千葉県教育庁文化課の関係者各位をはじめとして、多くの方々から御指導・助言をいただいた。深く感謝の意を表する次第である。
10. 六通金山遺跡の遺跡コードは201-011を与えてあるが、以下の遺構は市町村コード採用前の調査のため次のコードを使用している。
六通1号墳…218、六通2号墳…219、J01号跡…307
11. 本遺跡は計3次にわたる調査で大グリットの呼称法について統一を欠いたため、本書では調査区全域に大グリットを図上で設定し、新たな呼称を与えてある。
その新旧対比は次のとおりである。

新	旧	新	旧	新	旧	新	旧
G01	2次12区	G11	2次21区	G21	1次C地区	G31	1次6区
G02	2次16区	G12	2次25区	G22	1次C地区	G32	1次7区
G03	2次20区	G13	2次3区	G23	2次8区	G33	1次9区
G04	2次24区	G14	2次5区	G24	1次1区 2次11区	G34	1次10区
G05	2次2区	G15	2次7区	G25	1次2区 2次15区	G35	1次11区
G06	2次4区	G16	2次10区	G26	1次C地区	G36	1次12区
G07	2次6区	G17	2次14区	G27	1次C地区	G37	1次14区
G08	2次9区	G18	2次18区	G28	1次C地区	G38	1次15区
G09	2次13区	G19	2次12区	G29	1次C地区	G39	1次16区
G10	2次17区	G20	2次26区	G30	1次5区		

註) 1次…第1次調査(昭和53年度), 2次…第2次調査(昭和54年度)

12. 遺構番号は、古墳については調査時の番号をそのまま使用しているが、その他の遺構については整理的に改訂し、旧遺構番号はタイトル横のカギカッコ内に表示した。
13. 遺物への註記、図面・写真等の記録類は、旧遺構番号で表示してある。
14. 本書では遺構について次の略称を用いている。

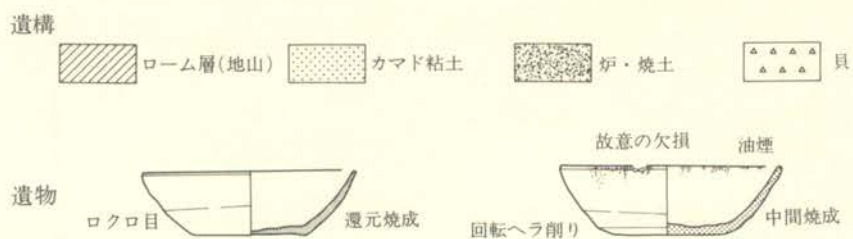
Loc…先土器時代遺物出土地区, J…縄文時代住居跡, U…埋襲, F.P.…炉穴, O…古墳時代後期住居跡, K…歴史時代住居跡, M…周溝遺構, 溝状遺構, P…土壇

本書の遺構・遺物挿図の指示は次のとおりである。

i) 縮 尺

- 先土器時代の遺構… $\frac{1}{60}$, 石器… $\frac{1}{2}$
- 縄文時代の住居跡… $\frac{1}{60}$, 炉… $\frac{1}{30}$, 埋襲… $\frac{1}{20}$, 炉穴… $\frac{1}{60}$, 土器… $\frac{1}{4}$, 土器拓影・石器… $\frac{1}{3}$
- 古墳全体図… $\frac{1}{200}$, $\frac{1}{300}$, 墳丘断面… $\frac{1}{80}$, $\frac{1}{20}$, 周堀… $\frac{1}{40}$, 主体部… $\frac{1}{60}$, 遺物出土状況… $\frac{1}{20}$, 土器… $\frac{1}{4}$, 直刀… $\frac{1}{5}$, 鉄製品・玉類… $\frac{1}{2}$
- 古墳時代後期～歴史時代の住民跡… $\frac{1}{40}$, カマド… $\frac{1}{30}$, 土器… $\frac{1}{4}$
- 時代不詳の周溝遺構… $\frac{1}{80}$, 溝状遺構… $\frac{1}{100}$, 土壇… $\frac{1}{30}$, 土器拓影… $\frac{1}{3}$
- ただし、作図の都合で統一されなかったものもある。

ii) スクリーントーンの指示は主に挿図中に示したが、それ以外は次のとおりである。



iii) 遺構平面図内の遺物番号は、遺物実測図、写真図版中の遺物番号と一致する。

16. 方位は座標北を示す。

17. 第1図は国土地理院発行の1:25,000地形図・蘇我(千葉15号-2)を使用した。

本文目次

序 文

凡 例

I 序 章	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 遺跡の位置と環境	1
3. 調査の経過と方法	4
II 層位と文化層	8
III 先土器時代の遺構と遺物	10
IV 縄文時代の遺構と遺物	45
1. 住居跡	45
2. 埋 葬	60
3. 炉 穴	63
4. 住居跡出土の貝類等遺体について	83
V 古墳時代の遺構と遺物	88
1. 古 墳	88
2. 住居跡	154
VI 歴史時代の遺構と遺物	164
VII 時代不詳の遺構と遺物	170
1. 周溝遺構	170
2. 溝状遺構	175
3. 土 壙	178
4. 遺構外出土遺物	189
VIII 自然科学分析とその結果	191
1. 重鉍物分析 (バリノ・サーヴェイ株式会社)	191
2. 花粉分析 (バリノ・サーヴェイ株式会社)	197
IX 結 語	206

挿 図 目 次

第 1 図	六通金山遺跡の位置と周辺の主要遺跡	2
第 2 図	六通金山遺跡周辺地形図	3
第 3 図	小グリット分割図	5
第 4 図	グリット配置図及び先土器時代調査区	6
第 5 図	標準層序	8
第 6 図	遺跡土層断面図	9
第 7 図	Loc. 1 遺物出土状況図	1 0
第 8 図	Loc. 2 遺物出土状況図	1 2
第 9 図	Loc. 1, 2 出土石器実測図	1 3
第 10 図	Loc. 3 遺物出土状況図	1 4
第 11 図	Loc. 4 遺物出土状況図	1 4
第 12 図	Loc. 3, 4, 5(1)出土石器実測図	1 5
第 13 図	Loc. 5(1)遺物出土状況図	1 6
第 14 図	Loc. 5(2)遺物出土状況図	1 7
第 15 図	Loc. 5(2)出土石器実測図	1 8
第 16 図	Loc. 6-1 遺物出土状況図	2 1
第 17 図	Loc. 6-1 出土石器実測図	2 2
第 18 図	Loc. 6-2 遺物出土状況図	折込
第 19 図	Loc. 6-2 出土石器実測図(1)	2 4
第 20 図	Loc. 6-2 出土石器実測図(2)	2 5
第 21 図	Loc. 6-3 遺物出土状況図	2 6
第 22 図	Loc. 6-3 出土石器実測図	2 7
第 23 図	Loc. 6-4 遺物出土状況図	2 8
第 24 図	Loc. 6-4 出土石器実測図	2 9
第 25 図	Loc. 6-5 遺物出土状況図	3 0
第 26 図	Loc. 6-5 出土石器実測図(1)	3 2
第 27 図	Loc. 6-5 出土石器実測図(2)	3 3
第 28 図	Loc. 6-6 遺物出土状況図	3 4
第 29 図	Loc. 6-6 出土石器実測図	3 5
第 30 図	Loc. 6-7 遺物出土状況図	3 7
第 31 図	Loc. 6-7 出土石器実測図	3 8
第 32 図	Loc. 6-8 遺物出土状況図	3 9
第 33 図	Loc. 6-8 出土石器実測図(1)	4 1

第 34 图	Loc. 6 - 8 出土石器实测图(2)	4 2
第 35 图	Loc. 6 - 8 出土石器实测图(3)	3 5
第 36 图	J 01号迹实测图	4 5
第 37 图	J 01号迹出土遗物实测图	4 6
第 38 图	J 02号迹实测图	4 7
第 39 图	J 02号迹出土土器实测图	4 8
第 40 图	J 02号迹出土土器拓影图	4 9
第 41 图	J 02号迹出土石器实测图	4 9
第 42 图	J 03号迹实测图	5 1
第 43 图	J 03号迹出土遗物实测图	5 2
第 44 图	J 03号迹出土土器拓影图	5 2
第 45 图	J 04号迹实测图	5 3
第 46 图	J 04号迹炉实测图	5 4
第 47 图	J 04号迹出土土器实测图	5 5
第 48 图	J 04号迹出土土器拓影图	5 6
第 49 图	J 05号迹实测图	5 7
第 50 图	J 05号迹出土土器实测图	5 8
第 51 图	J 05号迹出土土器拓影图	5 9
第 52 图	J 05号迹出土遗物实测图	5 9
第 53 图	U 01号迹实测图	6 0
第 54 图	U 01号迹出土土器拓影图	6 1
第 55 图	U 02号迹实测图	6 1
第 56 图	U 02号迹出土土器实测图	6 2
第 57 图	U 03号迹实测图	6 2
第 58 图	U 03号迹出土土器实测图	6 3
第 59 图	F. P. 01, 02, 03号迹实测图	6 4
第 60 图	F. P. 04, 05, 10号迹实测图	6 6
第 61 图	F. P. 06, 08号迹实测图	6 8
第 62 图	F. P. 07, 09号迹实测图	6 9
第 63 图	F. P. 11号迹实测图	6 1
第 64 图	F. P. 13, 14号迹实测图	7 2
第 65 图	F. P. 12, 15号迹实测图	7 4
第 66 图	F. P. 16, 17号迹实测图	7 5
第 67 图	F. P. 18, 19, 20号迹实测图	7 7
第 68 图	炉穴内出土土器拓影图(1)	7 9
第 69 图	炉穴内出土土器拓影图(2)	8 0

第 70 図	炉穴内出土土器拓影図(3)·····	8 1
第 71 図	炉穴内出土土器拓影図(4)·····	8 2
第 72 図	1 号墳実測図·····	8 8
第 73 図	1 号墳墳丘, 周堀断面図·····	折込
第 74 図	1 号墳出土遺物実測図·····	9 0
第 75 図	1 号墳第 1 主体部実測図·····	折込
第 76 図	1 号墳第 1 石室内遺物出土状況図·····	9 3
第 77 図	1 号墳第 1 石室内出土直刀実測図·····	9 5
第 78 図	1 号墳第 1 石室内出土鉄鏃実測図(1)·····	9 6
第 79 図	1 号墳第 1 石室内出土鉄鏃, 刀子実測図(2)·····	9 7
第 80 図	1 号墳第 1 石室内出土玉類等実測図·····	9 9
第 81 図	1 号墳第 2 主体部実測図·····	1 0 1
第 82 図	1 号墳第 2 主体部内出土鉄製品実測図·····	1 0 2
第 83 図	1 号墳第 2 主体部内出土須恵器実測図·····	1 0 4
第 84 図	2 号墳実測図·····	1 0 5
第 85 図	2 号墳, 3 号墳墳丘, 周堀断面図·····	折込
第 86 図	2 号墳主体部実測図·····	折込
第 87 図	2 号墳石室内遺物出土状況図·····	1 0 7
第 88 図	3 号墳実測図·····	1 0 9
第 89 図	3 号墳周堀及び墳丘内出土土器実測図·····	1 1 0
第 90 図	3 号墳主体部実測図·····	折込
第 91 図	3 号墳石室内遺物出土状況図·····	1 1 3
第 92 図	3 号墳石室内玉類出土状況図·····	1 1 4
第 93 図	3 号墳石室内出土玉類実測図·····	1 1 5
第 94 図	4 号墳実測図·····	1 1 8
第 95 図	4 号墳周堀土層断面図·····	1 1 9
第 96 図	4 号墳周堀内出土鉄製品実測図·····	1 1 9
第 97 図	4 号墳第 1 主体部実測図·····	折込
第 98 図	4 号墳第 1 石室内遺物出土状況図·····	1 2 2
第 99 図	4 号墳第 1 石室内出土鉄釘実測図(1)·····	1 2 4
第 100 図	4 号墳第 1 石室内出土鉄釘実測図(2)·····	1 2 5
第 101 図	4 号墳第 1 石室羨道部内出土須恵器実測図·····	1 2 7
第 102 図	4 号墳第 2 主体部実測図·····	折込
第 103 図	4 号墳第 2 石室内遺物出土状況図·····	1 3 0
第 104 図	4 号墳第 2 石室内出土鉄鏃実測図(1)·····	1 3 2
第 105 図	4 号墳第 2 石室内出土鉄鏃実測図(2)·····	1 3 3

第106 図	4号墳第2石室内出土鉄鏃実測図(3).....	1 3 4
第107 図	4号墳第2石室内出土鉄釘実測図(1).....	1 3 6
第108 図	4号墳第2石室内出土鉄釘実測図(2).....	1 3 7
第109 図	5号墳実測図.....	1 4 0
第110 図	5号墳周堀土層断面図.....	1 4 1
第111 図	5号墳第1主体部実測図.....	1 4 2
第112 図	5号墳第1石室内遺物出土状況図.....	1 4 3
第113 図	5号墳第1石室内玉類出土状況図.....	1 4 5
第114 図	5号墳第1石室内出土玉類実測図.....	1 4 6
第115 図	5号墳第2主体部実測図.....	1 5 0
第116 図	5号墳第2石室内遺物出土状況図.....	1 5 1
第117 図	5号墳第2石室内出土直刀実測図.....	1 5 2
第118 図	5号墳第2主体部出土須恵器実測図.....	1 5 4
第119 図	O01号跡実測図.....	1 5 6
第120 図	O01号跡カマド実測図.....	1 5 7
第121 図	O01号跡出土土器実測図.....	1 5 8
第122 図	O02号跡実測図.....	1 6 1
第123 図	O02号跡カマド実測図.....	1 6 2
第124 図	O02号跡出土土器実測図.....	1 6 2
第125 図	K01号跡実測図.....	1 6 4
第126 図	K01号跡カマド実測図.....	1 6 5
第127 図	K01号跡出土土器実測図.....	1 6 5
第128 図	K02号跡実測図.....	1 6 6
第129 図	K02号跡カマド実測図.....	1 6 7
第130 図	K02号跡出土土器実測図.....	1 6 8
第131 図	M01号跡実測図.....	1 7 0
第132 図	M02号跡実測図.....	1 7 1
第133 図	M03号跡実測図.....	1 7 2
第134 図	M04号跡実測図.....	1 7 3
第135 図	M05号跡実測図.....	1 7 4
第136 図	M06, 07, 08号跡実測図.....	1 7 6
第137 図	M09号跡実測図.....	1 7 7
第138 図	P01, 02号跡実測図.....	1 7 9
第139 図	P03, 04号跡実測図.....	1 8 0
第140 図	P05, 06号跡実測図.....	1 8 2
第141 図	P07, 08号跡実測図.....	1 8 3

第 142 図	P09, 10号跡実測図	185
第 143 図	P11, 12号跡実測図	186
第 144 図	P13号跡実測図	187
第 145 図	土壌内出土土器拓影図	188
第 146 図	遺構外出土遺物実測図	189
第 147 図	鉦物組成図 (G25-D-65)	192
第 148 図	鉦物組成図 (G11-D-90)	194
第 149 図	花粉分析試料採取位置	197
第 150 図	主要花粉孢子化石ダイアグラム	199
付 図	六通金山遺跡遺構配置図	

図 版 目 次

図版 1	航空写真	図版 7	先土器時代遺構(3)
	1. 遺跡全景 (南東から)		1. Loc. 6-8 遺物出土状況
	2. 遺跡全景 (南東から)		2. Loc. 5 遺物出土状況
図版 2	航空写真		3. 発掘調査風景
	1. 遺跡全景 (南西から)	図版 8	先土器時代石器(1)
	2. 4, 5号墳全景 (南から)		Loc. 1~4 出土石器
図版 3	遺 跡	図版 9	先土器時代石器(2)
	1. 遺跡近景 (調査前)		Loc. 5 出土石器
	2. 遺跡近景 (調査前)	図版10	先土器時代石器(3)
図版 4	層 序		Loc. 6-1 出土石器
	1. G32-A-3, 4	図版11	先土器時代石器(4)
	2. G11-D-30		Loc. 6-2 出土石器
	3. G19-B-40	図版12	先土器時代石器(5)
図版 5	先土器時代遺構(1)		Loc. 6-3, 4, 7 出土石器
	1. Loc. 1 遺物出土状況	図版13	先土器時代石器(6)
	2. Loc. 2 遺物出土状況		Loc. 6-5 出土石器
	3. Loc. 6-5 遺物出土状況	図版14	先土器時代石器(7)
図版 6	先土器時代遺構(2)		Loc. 6-6 出土石器
	1. Loc. 6-1 遺物出土状況	図版15	先土器時代石器(8)
	2. Loc. 6-2 遺物出土状況		Loc. 6-8 出土石器(1)
	3. Loc. 6-5 遺物出土状況	図版16	先土器時代石器(9)

- Loc. 6 - 8 出土石器(2)
- 図版17 縄文時代遺構(1)
 1. J 01号跡全景 (東から)
 2. J 02号跡全景 (南から)
- 図版18 縄文時代遺構(2)
 1. J 03号跡全景 (南から)
 2. J 04号跡全景 (南から)
- 図版19 縄文時代遺構(3)
 1. J 05号跡全景 (南から)
 2. U 01号跡
- 図版20 縄文時代遺構(4)
 1. U 02号跡
 2. U 03号跡
- 図版21 縄文時代遺構(5)
 1. F. P. 01号跡
 2. F. P. 02号跡
 3. F. P. 03号跡
- 図版22 縄文時代遺構(6)
 1. F. P. 04, 05号跡
 2. F. P. 06号跡
 3. F. P. 07号跡
- 図版23 縄文時代遺構(7)
 1. F. P. 08号跡
 2. F. P. 09号跡
 3. F. P. 10号跡
- 図版24 縄文時代遺構(8)
 1. F. P. 11号跡
 2. F. P. 13号跡
 3. F. P. 14号跡
- 図版25 縄文時代遺構(9)
 1. F. P. 15号跡
 2. F. P. 16号跡
 3. F. P. 17号跡
- 図版26 縄文時代遺物(1)
 1. J 01号跡出土土器
 2. J 02号跡出土土器
 3. J 02号跡出土土器
 4. J 03号跡出土土器
- 図版27 縄文時代遺物(2)
 1. J 05号跡出土土器
 2. 住居跡出土石器
- 図版28 縄文時代遺物(3)
 1. J 02号跡出土土器
 2. J 05号跡出土土器
- 図版29 縄文時代遺物(4)
 J 03号跡出土土器
- 図版30 縄文時代遺物(5)
 J 04号跡出土土器
- 図版31 縄文時代遺物(6)
 1. U 02号跡出土土器
 2. U 03号跡出土土器
 3. U 01号跡出土土器
- 図版32 縄文時代遺物(7)
 炉穴内出土土器(1)
- 図版33 縄文時代遺物(8)
 炉穴内出土土器(2)
- 図版34 縄文時代住居跡出土の貝類遺体
- 図版35 貝類遺体
- 図版36 1号墳
 1. 墳丘全景 (南から)
 2. 調査後の全景 (南から)
- 図版37 1号墳
 1. 墳丘断面 (北西から)
 2. 墳丘断面 (南東から)
- 図版38 1号墳
 1. 周堀土層断面
 2. 同
 3. 同
- 図版39 1号墳
 1. 第1主体部全景 (南から)
 2. 同奥壁, 左側壁 (北西から)
- 図版40 1号墳

- | | | | | |
|------|----------------------|------|-----|---------------------|
| | 1. 第1主体部奥壁,右側壁(北東から) | 図版50 | 4号墳 | |
| | 2. 奥壁背後の裏込め | | | 1. 主体部の検出状況(南から) |
| | 3. 西側壁背後の裏込め | | | 2. 調査後の全景(南から) |
| | 4. 東側壁背後の裏込め | 図版51 | 4号墳 | |
| 図版41 | 1号墳 | | | 1. 周堀土層断面 |
| | 1. 玄室内直刀出土状況(羨門側から) | | | 2. 同 |
| | 2. 羨道部内直刀出土状況(羨門側から) | | | 3. 同 |
| 図版42 | 1号墳 | 図版52 | 4号墳 | |
| | 1. 第2主体部全景(東から) | | | 1. 第1主体部全景(南から) |
| | 2. 同直刀出土状況 | | | 2. 同羨道部内遺物出土状況(西から) |
| 図版43 | 2号墳 | 図版53 | 4号墳 | |
| | 1. 墳丘全景(南から) | | | 1. 第1主体部玄門(南から) |
| | 2. 調査後の全景(南から) | | | 2. 同左側壁(北西から) |
| 図版44 | 2号墳 | | | 3. 同羨門閉塞状況(南から) |
| | 1. 周堀土層断面 | 図版54 | 4号墳 | |
| | 2. 同 | | | 1. 第2主体部全景(南東から) |
| | 3. 同 | | | 2. 同(北西から) |
| 図版45 | 2号墳 | | | 3. 同奥壁(北東から) |
| | 1. 主体部全景(南から) | 図版55 | 4号墳 | |
| | 2. 同奥壁,左側壁(北西から) | | | 1. 第2主体部奥壁(玄門側から) |
| 図版46 | 2号墳 | | | 2. 同玄門(羨門側から) |
| | 1. 石室全景(奥壁側から) | | | 3. 同(奥壁側から) |
| | 2. 奥壁背後の裏込め | 図版56 | 5号墳 | |
| | 3. 玄室内遺物(人骨片)出土状況 | | | 1. 主体部の検出状況(南東から) |
| 図版47 | 3号墳 | | | 2. 調査後の全景(南東から) |
| | 1. 墳丘全景(東から) | 図版57 | 5号墳 | |
| | 2. 調査後の全景(南西から) | | | 1. 周堀土層断面 |
| 図版48 | 3号墳 | | | 2. 同 |
| | 1. 周堀南西コーナー | | | 3. 同 |
| | 2. 同北西コーナー | 図版58 | 5号墳 | |
| | 3. 周堀土層断面 | | | 1. 第1主体部全景(南東から) |
| | 4. 同 | | | 2. 同玄室内遺物出土状況(南東から) |
| 図版49 | 3号墳 | 図版59 | 5号墳 | |
| | 1. 主体部全景(南から) | | | 1. 第1主体部全景(北西から) |
| | 2. 同 | | | 2. 同奥壁(南東から) |
| | 3. 同奥壁 | | | 3. 同左側壁(東から) |

- 図版60 5号墳
1. 第2主体部全景(南東から)
2. 同玄室内直刀出土状況(上から)
- 図版61 5号墳
1. 第2主体部奥壁(北西から)
2. 同左側壁(南西から)
3. 同羨門(南東から)
- 図版62 1号墳
第1石室内出土直刀
- 図版63 1号墳
第1石室内出土鉄鏃(1)
- 図版64 1号墳
第1石室内出土鉄鏃(2)、刀子
- 図版65 1号墳
1. 第1石室内出土玉類
2. 墳丘、周堀内出土遺物
- 図版66 1号墳
第2主体部内出土鉄製品
- 図版67 3号墳
1. 石室内出土玉類
2. 周堀内出土須恵器
- 図版68 4号墳
1. 第1石室内出土鉄釘(1)
2. 周堀内出土鉄製品
- 図版69 4号墳
第1石室内出土鉄釘(2)
- 図版70 4号墳
第1石室羨道部内出土須恵器
- 図版71 4号墳
第2石室内出土鉄鏃(1)
- 図版72 4号墳
第2石室内出土鉄鏃(2)
- 図版73 4号墳
第2石室内出土鉄鏃(3)
- 図版74 4号墳
第2石室内出土鉄釘(1)
- 図版75 4号墳
第2石室内出土鉄釘(2)
- 図版76 5号墳
第1石室内出土玉類
- 図版77 5号墳
1. 第2主体部出土須恵器
2. 第2石室内出土直刀
- 図版78 古墳時代後期住居跡(1)
1. O01号跡(東から)
2. 同カマド(南東から)
- 図版79 古墳時代後期住居跡(2)
1. O02号跡(南東から)
2. 同カマド(南東から)
- 図版80 古墳時代遺物
O01, O02号跡出土土器
- 図版81 歴史時代住居跡(1)
1. K01号跡全景(南東から)
2. 同出土土器
- 図版82 歴史時代住居跡(2)
1. K02号跡全景(南西から)
2. 同遺物出土状況(南西から)
- 図版83 歴史時代遺物
K02号跡出土土器
- 図版84 時代不詳の遺構(1)
1. M01号跡全景(南から)
2. M02号跡全景(南東から)
- 図版85 時代不詳の遺構(2)
1. M03号跡全景(南から)
2. M04号跡全景(南から)
- 図版86 時代不詳の遺構(3)
1. M05号跡全景(東から)
2. M07, 08号跡全景(北から)
- 図版87 時代不詳の遺構(4)
1. P01号跡
2. P02号跡
3. P03号跡

図版88 時代不詳の遺構(5)

1. P04号跡

2. P05号跡

3. P06号跡

図版89 時代不詳の遺構(6)

1. P07号跡

2. P08号跡

3. P12号跡

図版90 遺物

土壌内出土土器

図版91 遺物

遺構外出土遺物

図版92 花粉

図版93 花粉分析試料産出花粉(1)

図版94 花粉

図版95 花粉分析試料産出花粉(2)

表 目 次

第 1 表	J 02号跡 St 1 貝層サンプルにおける貝類等遺体の分析結果	8 4
第 2 表	J 02号跡 St 2 貝層サンプルにおける貝類等遺体の分析結果	8 4
第 3 表	J 03号跡 St 1 貝層サンプルにおける貝類等遺体の分析結果	8 5
第 4 表	J 03号跡 St 2 貝層サンプルにおける貝類等遺体の分析結果	8 5
第 5 表	J 04号跡 St 1 貝層サンプルにおける貝類等遺体の分析結果	8 6
第 6 表	J 04号跡 St 2 貝層サンプルにおける貝類等遺体の分析結果	8 7
第 7 表	1号墳第1石室内出土直刀計測表	9 8
第 8 表	1号墳第1石室内出土鉄鏃計測表	9 8
第 9 表	1号墳第1石室内出土勾玉計測表	1 0 0
第10表	1号墳第1石室内出土切子玉計測表	1 0 0
第11表	1号墳第1石室内出土白玉・小玉計測表	1 0 0
第12表	1号墳第2主体部内出土直刀計測表	1 0 3
第13表	1号墳第2主体部内出土鉄鏃計測表	1 1 3
第14表	3号墳石室内出土勾玉計測表	1 1 5
第15表	3号墳石室内出土切子玉計測表	1 1 6
第16表	3号墳石室内出土棗玉計測表	1 1 6
第17表	3号墳石室内出土白玉計測表	1 1 7
第18表	4号墳第1石室内出土鉄釘観察表	1 2 6
第19表	4号墳第2石室内出土鉄鏃計測表	1 3 5
第20表	4号墳第2石室内出土鉄釘観察表	1 3 8
第21表	5号墳第1石室内出土勾玉計測表	1 4 7
第22表	5号墳第1石室内出土棗玉計測表	1 4 7

第 23 表	5号墳第1石室内出土切子玉計測表	1 4 8
第 24 表	5号墳第1石室内出土白玉計測表	1 4 8
第 25 表	5号墳第2石室内出土直刀計測表	1 5 3
第 26 表	重鉍物分析組成表 (G25-D-65)	1 9 3
第 27 表	重鉍物分析組成表 (G11-D-90)	1 9 5
第 28 表	花粉分析試料の層位と花粉・胞子化石産出傾向	1 0 1
第 29 表	花粉分析結果一覧表	2 0 1

I 序 章

1. 調査に至る経緯

六通金山遺跡は、日本住宅公団首都圏宅地開発本部によって計画された千葉市東南部地区における土地区画整理事業によるニュータウン建設計画に際して記録保存の対象となった遺跡群の一つである。

六通古墳群は、昭和46年度に実施されたニュータウン造成地区内の遺跡分布調査により6基の古墳が確認され、千葉県教育庁文化課と日本住宅公団との協議の結果、このうちの2基について記録保存の措置をとることで協議が整った遺跡である。発掘調査は、当センターが昭和51年8月27日から11月13日まで実施した。

六通金山遺跡も前記の分布調査により確認され、千葉県教育庁文化課と日本住宅公団との協議の結果、記録保存の措置をとることで協議が整った遺跡である。発掘調査は当センターが昭和53・54年度の2次にわたって実施した。第1次調査は舌状台地の先端部を中心とした地域(21,000m²)を対象に昭和53年5月1日から11月25日まで、また第2次調査は台地の奥部を中心とした地域(12,000m²)を対象に昭和54年4月1日から9月19日まで行った。

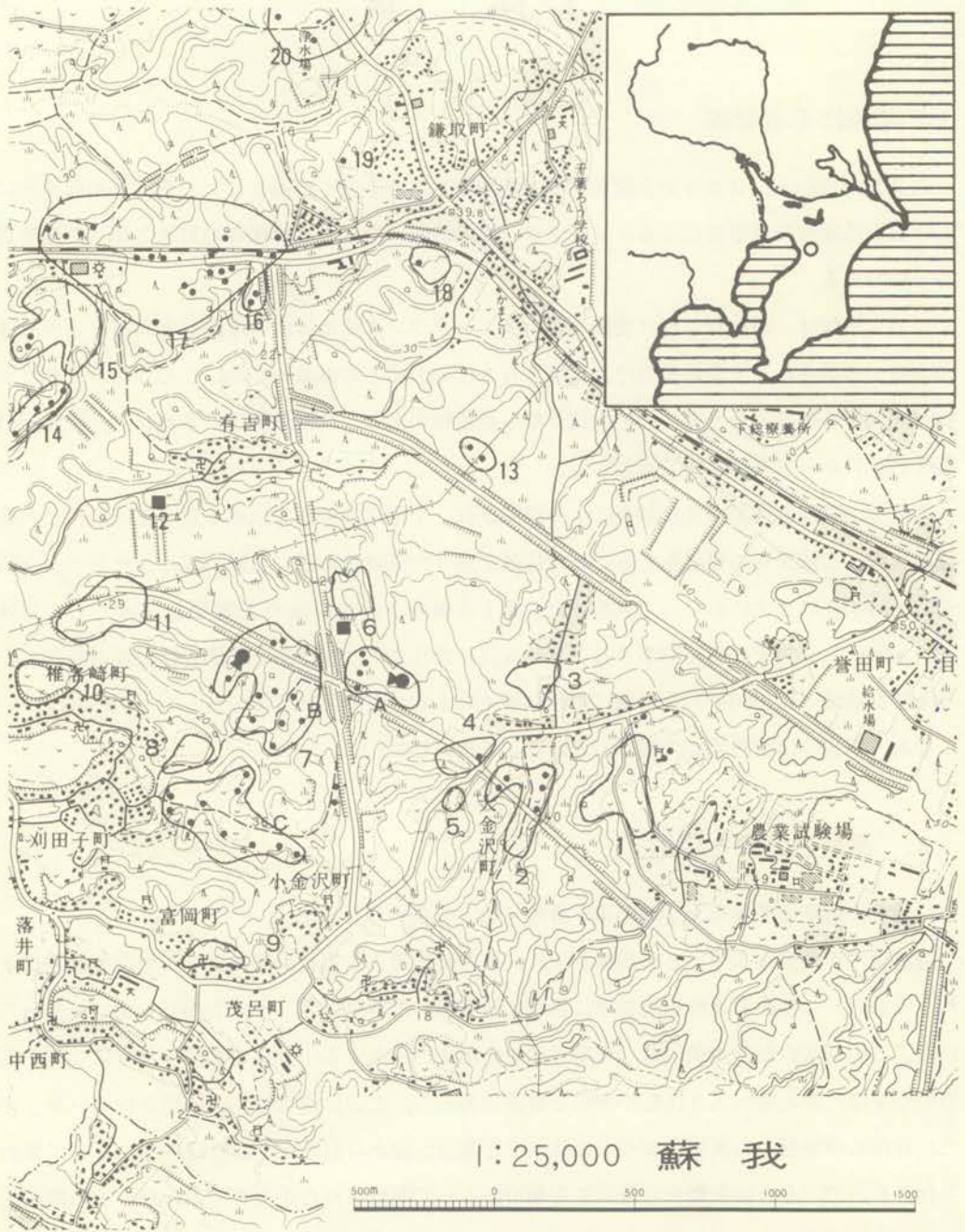
なお、本書では遺跡名を六通金山遺跡として統一した。

2. 遺跡の位置と環境

六通金山遺跡は千葉市大金沢町480番地・他に所在する。

遺跡は、千葉市と市原市との境界を流れ、東京湾に流入する村田川によって樹状状に開折された支谷の一つである通称坂崎谷津に舌状に張り出した下総台地(下未吉段丘)上に位置している。この舌状台地の南側には、坂崎谷津から南東へ侵入する小谷支があり、さらにこの小支谷のなかほどを北側へ入り込む小規模な谷津があつて、ここに湧水地点が確認されている。また、台地の中央部から東側へ緩やかに傾斜する部分が認められたが、これは近年になって埋められたもので、もとは東側から侵入する都川によって開析された小支谷であった。この旧小支谷を境にして遺跡は舌状台地の先端部と奥部とに大きく2分され、それぞれ有機的に関連しあいながら、一つの遺跡としてまとまった様相を示している。

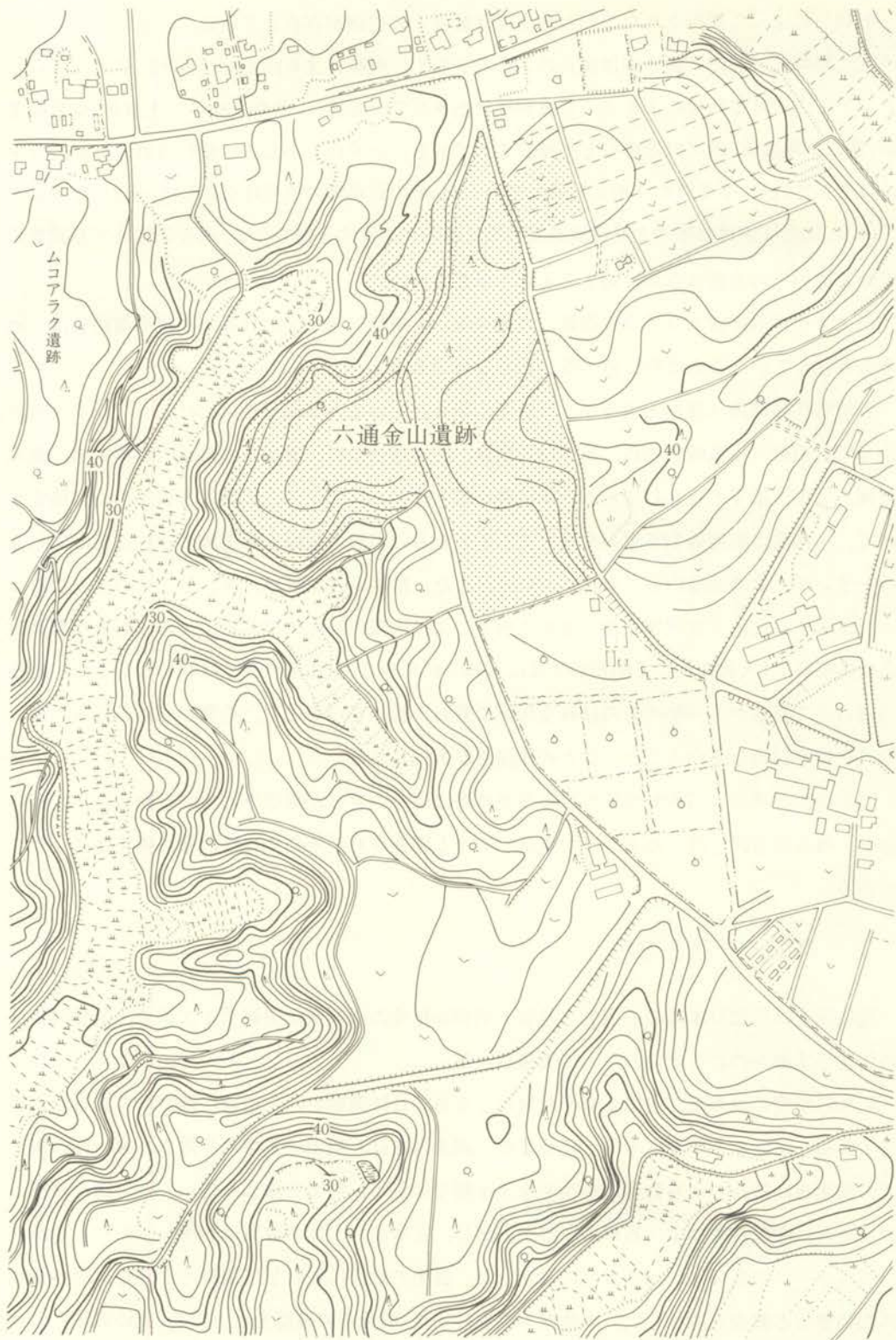
遺跡は、現在の海岸線より約6km内陸の比較的谷奥の台地上に位置している。この台地上は前述の旧小支谷の部分を除いて平坦面で、台地先端部は標高46m、奥部は47mとほぼ同じ高さで、低地との比高差は約22mを測る。



1:25,000 蘇 我

1. 六通金山遺跡 2. ムコアラク遺跡 3. 六通貝塚 4. 小金沢古墳群 5. 御塚台遺跡
6. 木戸作遺跡 7. 椎名崎古墳群 (ABC支群) 8. 今台遺跡 9. 富岡古墳群
10. 伯父名台遺跡 11. 椎名崎遺跡 12. 扇田古墳 13. 馬ノ口遺跡 14. 上赤塚古墳群
15. 有古遺跡 16. 南二重堀遺跡 17. 兼塚古墳群 18. 鎌取古墳群 19. 吉重荒子古墳
20. 菱名古墳群

第1図 六通金山遺跡の位置と周辺の主要遺跡



第2図 六通金山遺跡周辺地形図(1/5000)

村田川によって開析されたこの台地上には数多くの遺跡が存在している。(第1図)

先土器時代の遺跡の調査例は現在のところ少なく、坂崎谷津を挟んだ台地上に位置しているムコアラク遺跡で比較的まとまって遺物が検出されている他は、県立コロニー内遺跡、椎名崎遺跡、南二重堀遺跡、馬ノ口遺跡などで確認されている。いずれも小支谷に望む良好な河岸段丘上に位置しており、本遺跡の立地と共通しているが、その石器群の様相は必ずしも一致しないようである。最近に住民跡等の上層遺構調査の際に遺物が出土する例も多く、東南部地区でも調査の進捗に従いその遺跡はさらに増えるものと予想される。

縄文時代の遺跡はムコアラク遺跡、六通貝塚、大膳野貝塚、同北貝塚、木戸作遺跡をはじめ多数存在していることは特に述べる必要もないであろう。

古墳時代の遺跡は後期古墳を中心に数多く知られている。東南部地区にはムコアラク古墳群、小金沢古墳群、椎名崎古墳群、馬ノ口古墳群、上赤塚古墳群、兼塚古墳群、人形塚古墳、狐塚古塚、扇田古墳等が存在している。本遺跡に最も近いムコアラク古墳群は方墳を中心に構成されて、主体部は軟質砂岩を用いた横穴式石室である。方墳の規模も本遺跡のそれとほぼ同じものが多く、副葬品は内容を異にしている。また、椎名崎古墳群は、A、B、Cの3支群によって構成された前方後円墳を含む後期古墳としては大規模なものである。このうちA支群は椎名崎古墳群第1次調査として昭和49年度に実施されている。主体部の多くは軟質砂岩を用いた横穴式石室であるが、一部のものは石室床面に敷石を敷いていること、追葬が認められること、箱式石棺を採用していること、などの相違点があげられる。

歴史時代の遺跡は昭和46年度の分布調査の際にはその存在が確認されていなかったが、有吉遺跡、椎名崎遺跡をはじめ大規模な集落が次々と調査され、その全容は次第に明らかになりつつある。

3. 調査の経過と方法

発掘調査は昭和51年度の六通1、2号墳と昭和53年度の六通金山遺跡第1次調査、昭和54年度の同第2次調査の計3次にわたって実施された。

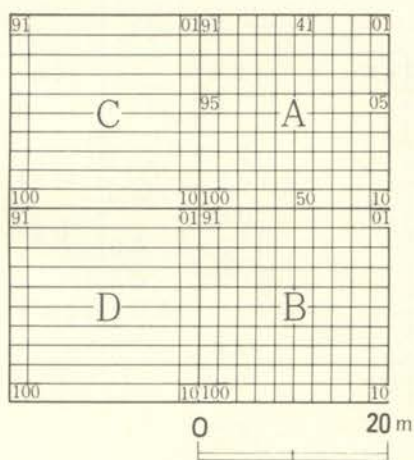
昭和51年度の調査は、古墳2基を対象とし8月27日に開始した。道路の西側に存在した古墳を1号墳、東側のものを2号墳と呼称した。調査方法は、墳頂に基準点を置き、東一西、南一北の基準線に墳丘の土層観察用ベルトを1m幅で設定し、封土を除去していく四分法を採用した。また、攪乱抗等により石材の一部が露出し、主体部の大体の位置は判明していたため南北のベルトをこの部分にかかるように設定した。封土の除去に並行して周堀を全掘し、その後主体部の検出と調査を開始した。主体部の調査終了後、墳丘下の確認を行うため、先に設定した基準線に沿って幅2mのトレンチを設定し精査を行ったところ、2号墳丘下から縄文時代中期

の住居跡（J01号跡）が検出されたため同時に調査を実施した。11月13日に現地を撤収し、調査を終了した。

六通金山遺跡は第1次調査（昭和53年5月1日から11月25日まで）と、第2次調査（昭和54年4月1日から9月19日まで）が実施された。

調査は、発掘調査区全域に40×40mの方眼網を座標北にあわせて設定し行うことにした。この方眼網をG01、G10等と呼称する大グリットとする。この大グリットを20×20mの中グリット4区画（A～D）に分割し、さらにこの中グリットを2×2mの小グリット100区画に分割し、北東隅から01、02と順に付し南西隅を100とする。そして各小グリットの呼称はG01-A-01、G02-B-99等とすることにした。（第3、4図）

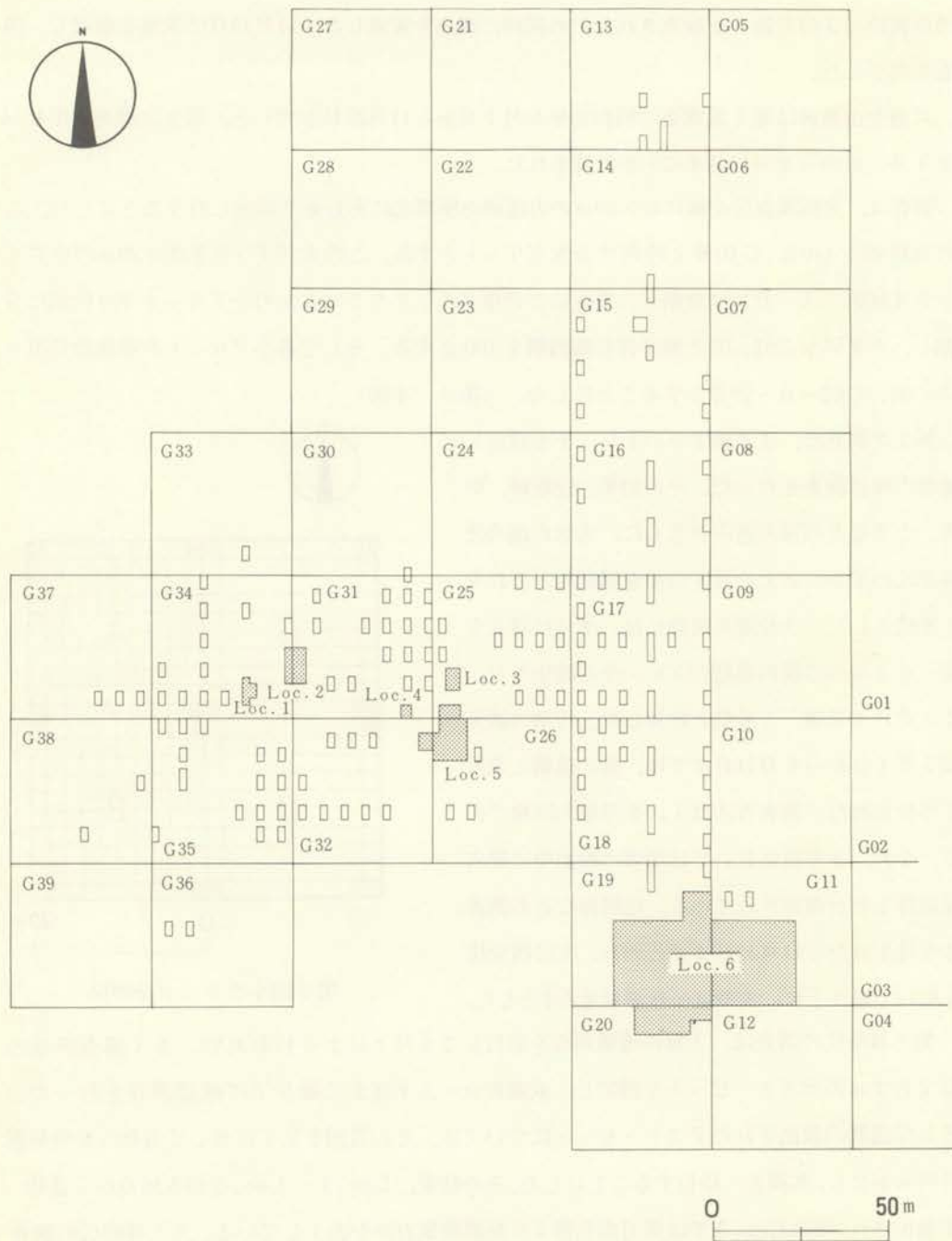
第1次調査は、まず幅2mのトレンチを設定し遺構の確認調査を行った。その結果、住居跡、炉穴、土壇などの落ち込みとともに、舌状台地の先端部にわずかに盛土を残す古墳を確認し、これを3号墳とした。3号墳の東側には、すでに墳丘を失った2基の古墳の周堀がトレンチで検出され、それぞれ4号墳、5号墳と呼称した。古墳の調査は5月1日から8月11日までに、他の遺構と並行して行われた。調査方法は1、2号墳と同様である。なお、3号墳においては周堀の検出中に竪穴住居跡1軒が確認されている。住居跡などの調査は6月1日から11月20日まで行われ、主に四分法を用いて掘り下げ、実測は平板測量を基本とした。



第3図小グリット分割図

先土器時代の調査は、上層の遺構調査を並行して8月2日より行われた。まず調査区域内に2×4mのテスト・ピットを設定し、武蔵野ローム上面まで掘り下げ確認調査を行った。そして遺物の検出されたテスト・ピットについては、その周囲を広く拡張して遺物の分布範囲を明らかにし、本調査へ移行することにした。その結果、Loc.1～Loc.5の5地点から遺物が検出され、特にLoc.3では第Ⅱ黒色帯より局部磨製石斧が出土している。先土器時代の調査は11月22日に終了した。

また、第1次調査を実施中に、G21、22、27、28にまたがる区域（調査時はC地区と仮称）を10月31日から調査を開始した。ここでは、わずかに表土の盛り上がる部分があり、墳丘を一部削平されている古墳である可能性も考慮して、四分法を用いて掘り下げたところ、主体部、周堀等の施設は全く確認されず、土層も墳丘の様相を呈していないことから、古墳ではないと



第4図 グリッド配置図及び先土器時代調査図(1/2000)

判明した。また、遺構は検出されなかったが、表土層中から鉄斧等が出土している。この区域の調査は11月20日に終了した。

11月21日に航空撮影を行い、11月25日には撤収作業を終え、第1次調査を完了した。

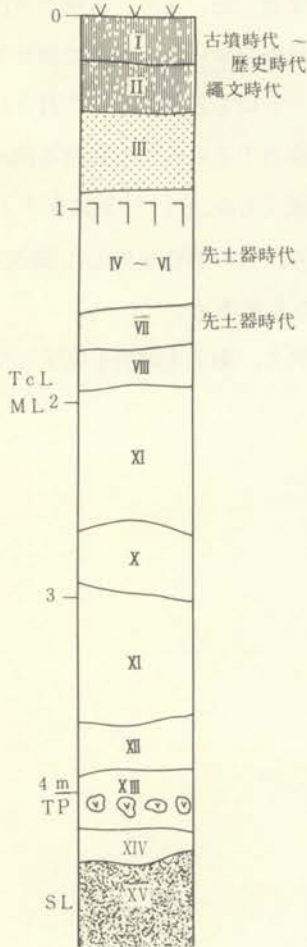
第2次調査は昭和54年4月4日より現場作業を開始した。まず、幅1mのトレンチを5m間隔で設定し、遺構の確認を行った。その結果、調査区域の北側に遺構が集中しているが、南側では遺構は全く確認されていなかった。住居跡などの調査は4月9日から始まり8月8日に終了した。調査方法は第1次調査と同様に平板測量を実測の基本としたが、一部で遣り方を用いて実測した。

先土器時代の調査は、上層の遺構調査に並行して6月15日から開始した。まず、遺構の検出が認められなかったG17に2×4mのテスト・ピットを設定し、武蔵野ローム上面まで掘り下げ確認調査を行い、同様のテスト・ピットを除々に南側のグリットにも設定した。7月2日からG11の確認調査を開始、4日からは次々と石器が検出され、隣接するG19にも分布範囲が広がるため、大きく拡張して確認を行ったところ、1464㎡の区域(Loc.6)を本調査することになった。石器の出土層位がⅣ～Ⅵ層に集中していることから、この層位を中心に調査を実施したが、部分的にⅨ層上面までトレンチで確認を行ったところもある。

その結果、後述するような成果を得て、9日19日に撒収作業を終え、第2次調査を完了した。

II 層位と文化層

六通金山遺跡の層序は第5図に示すとおりである。



第5図 標準層序

第I層 表土層。黒色土を基調に暗褐色土を含むバサついた土層である。調査区内の大半は削平されているため、部分的に残存しているにすぎない。

第II層 暗褐色土層。黄褐色土を含み、粘性をもつ。下層の第III層（ソフト・ローム層）へ漸移的に移行する、いわゆるローム漸移層である。縄文時代から歴史時代にかけての遺物を包含する。

第III層 明褐色軟質ローム層。いわゆるソフト・ローム層である。地点によって厚さが異なる。本遺跡ではこの層からの石器類の出土はない。

第IV層 明褐色硬質ローム層。いわゆるハード・ローム層である。乾燥するとクラック帯となる。

第V層 本遺跡においては肉眼的な観察では第IV層との識別はできなかつた。立川ローム層第I黒色帯に相当する。

第VI層 第V層と同様に第VI層との識別はできなかつた層である。佐倉市星谷津遺跡で始良丹沢バミスとして確認されている層である。

第VII層 褐色ローム層。第VI層～第VI層よりやや暗い程度で、比較的強い粘性をもつ固い層である。立川ローム層第II黒色帯に相当し、Loc. 3では局部磨製石斧が検出されている。台地平坦部では第VII層までは確認し得たが、東側斜面部においては検

出されず、ハード・ローム層下がすぐ第IX層になることもあった。

第VIII層 褐色ローム層。第VII層よりはやや明るく軟質である。立川ローム最下層に相当する。

第IX層 暗褐色ローム層。強い粘性をもちやや軟質である。武蔵野ローム最上層である。

第X層 褐色ローム層。硬質で第XI層に比べ粘性はやや弱い。

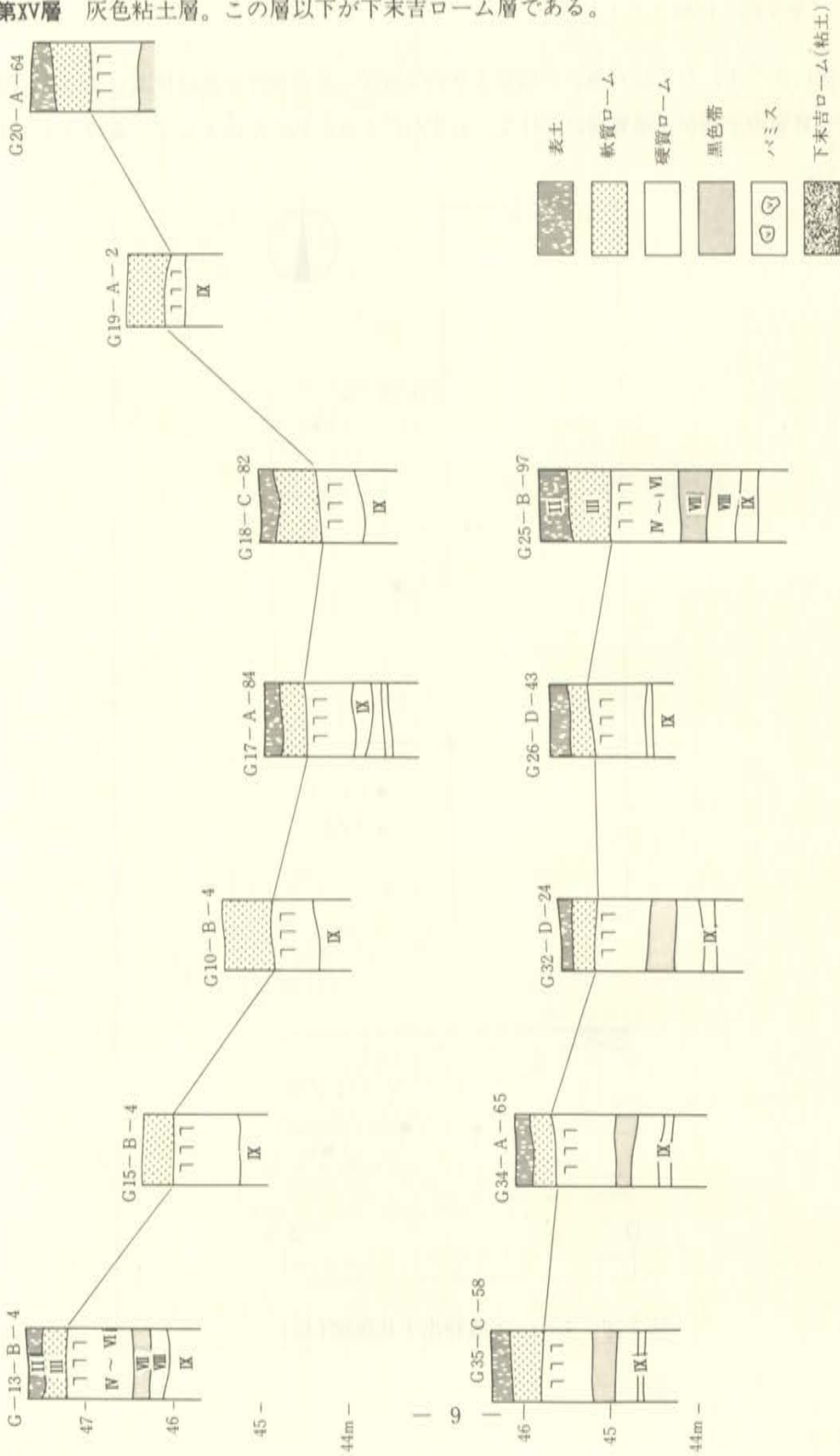
第XI層 暗褐色ローム層。やや軟質で第X層に比べ粘性はやや強い。

第XII層 チョコレート色粘質土。

第XIII層 褐色粘質土。硬質で酸化鉄の粒子を多く含む。ブロック状に東京パミスと呼ばれる軽石が認められる。

第XIV層 灰褐色粘質土。

第XV層 灰色粘土層。この層以下が下末吉ローム層である。

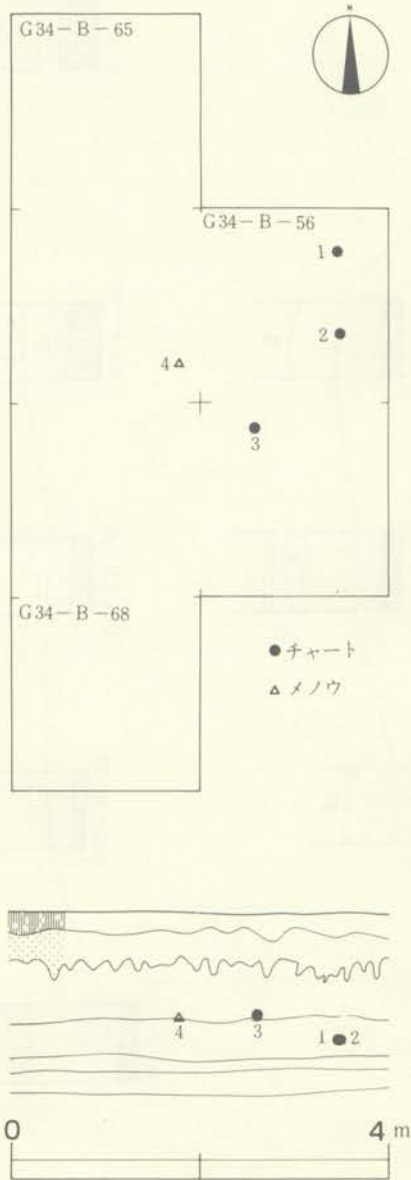


第6図 遺跡土層断面図 南北セクション(上) 東北セクション(下)

III 先土器時代の遺構と遺物

Loc. 1 (第7図, 図版5-1)

坂崎谷津に張り出した舌状台地の先端部より約50m入った台地平坦部に位置している。層位は第IV層～VI層の下部から第VII層にかけて、わずかに4点の剥片が出土しているのみで、あまりもない。



第7図 Loc. 1 遺物出土状況図(1/50)

遺物 (第9図1~4, 図版8)

すべて剥片であるが、2には使用痕が認められる。石材はチャート3点、メノウ1点である。

1は縦長の剥片で平坦な打面を持つ。剥離はすべて上方向から行われる。チャート製。2は裏面左側縁に使用痕が認められる剥片である。表面は上方向から剥離されている。裏面は下半に一次剥離面、右下方からの打撃、上部に左右からの打面が認められる。チャート製。3もチャート製の剥片で平坦な打面を持つ。4はメノウ製の縦長の剥片。表面から裏面へ約120°回転して上端より打撃を加えている。裏面には右上方向からの剥離も行われている。

Loc.2 (第8図, 図版5-2)

Loc.1の北東約8m, 台地平坦部に位置している。層位は第IV層~VI層の下部が中心であるが、1点だけ第VII層から検出されたものもある。これは第IV層~VI層出土の剥片と接合しており、何らかの攪乱作用で第VII層中に移動したものと考えられる。2×2mの範囲に集中して出土し、一定のまとまりをみせる。

遺物 (第9図5~14, 図版8)

総数14点の剥片が検出されている。石材はチャート12点、石英斑岩2点である。

5, 6は石英斑岩製の剥片である。5は表裏両面に数度の小さな剥離が行われている。6の裏面は主剥離面のままである。

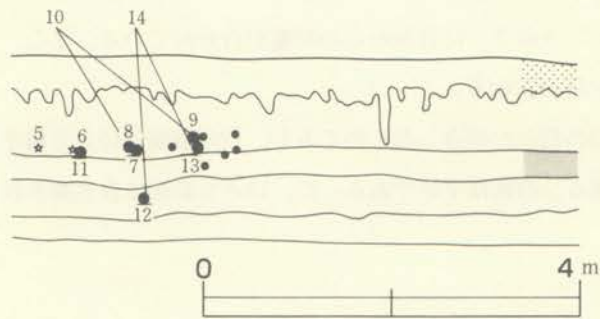
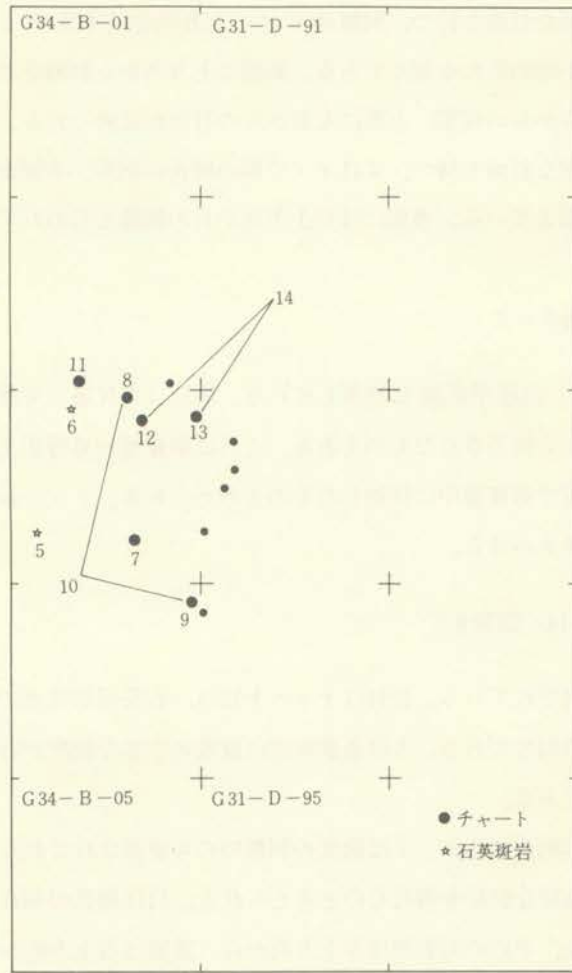
7~14はチャート製の剥片である。7は数度の剥離ののち廃棄された剥片である。裏面右方向からの剥離によって良好な剥片を得たものと考えられる。11は縦長の剥片である。表裏両面ともに上端から剥離され、そののち表面は左上方向から、裏面は右上方向からの小さな剥離が行われている。一部に自然面を残す。

接合資料10。8と9の剥片が接合したものである。中央に認められる右上方向からの剥離ののちに両者が分離され、9はさらに背面からの剥離が行われている。また、9の表面右側縁には使用痕らしい痕跡が認められる。

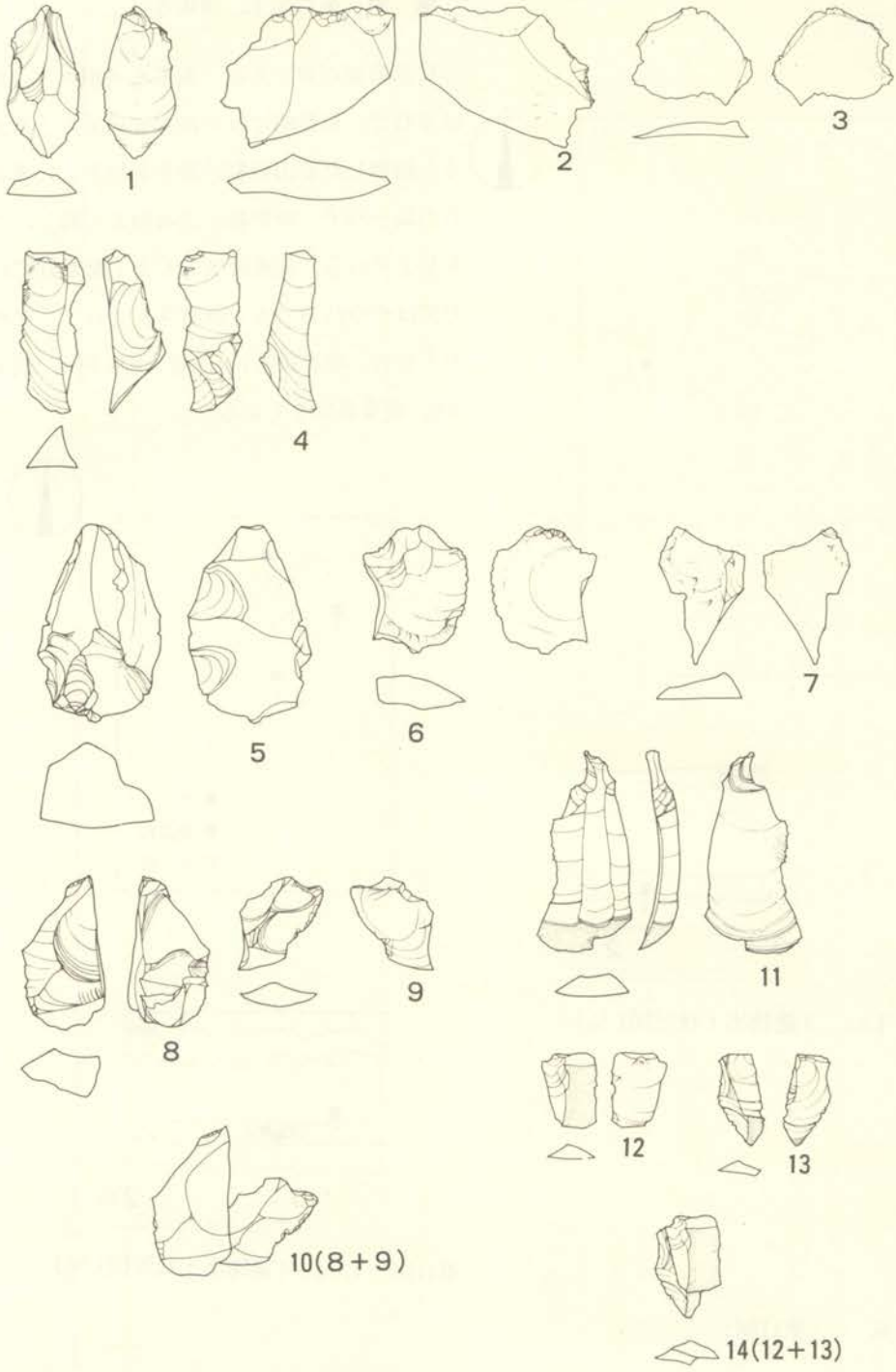
接合資料14。12と13の剥片が接合したものである。12の裏面は13と分離された際の剥離面で、打点は12裏面上端に残る。打面は平坦である。12, 13とも表面に自然面を残す。

Loc.3 (第10図)

舌状台地の基部で、Loc.2の東40mの台地平坦部に位置している。第VII層下部から1点のみの出土である。



第8図 Loc. 2 遺物出土状況図(1/80)



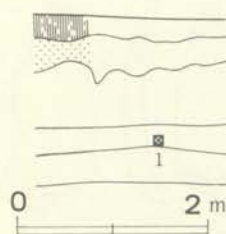
1~4 - Loc. 1, 5~14 - Loc. 2

0 5cm

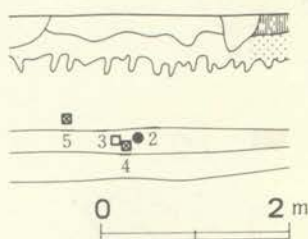
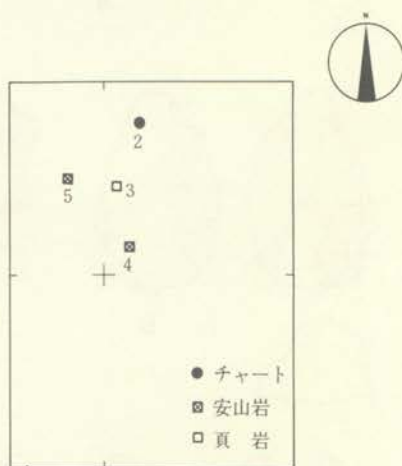
第9图 Loc 1, 2出土石器实测图(1/2)

遺物 (第12図1, 図版8)

局部磨製石斧である。基部を欠損する。両側縁は平行で、形態的には短冊形を呈すると考えられる。縦割した安山岩製の礫を素材とし、裏面には自然面を残す。両側縁に二次加工を施し、かたちを整えている。表裏両面ともよく磨かれている。刃部はやや凸刃でよく研磨されており、鋭利な両刃となる。現存長5.1cm, 最大幅4.5cm, 最大厚1.3cm, 現重量55gを測る。



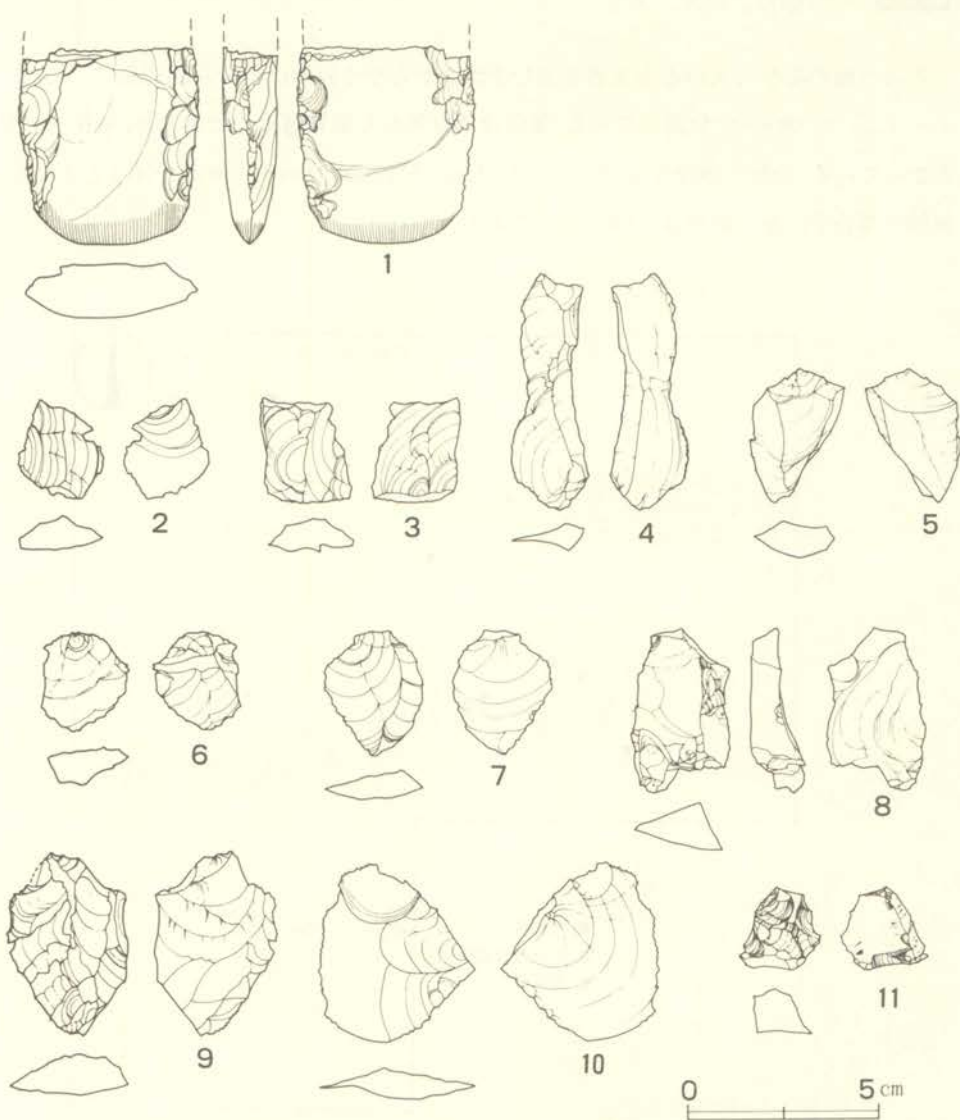
第10図 Loc. 3 遺物出土状況図 (1/80)



第11図 Loc. 4 遺物出土状況図 (1/80)

Loc. 4 (第11図)

舌状台地の基部に近い平坦部で、Loc. 3の南西10mに位置している。層位は第IV層～VI層の下部と第VII層からである。剥片が4点出土したのみで、まとまりはない。



1 - Loc. 3, 2 ~ 5 - Loc. 4, 6 ~ 11 - Loc. 5(1)

第12図 Loc. 3, 4, 5(1)出土石器実測図(1/2)

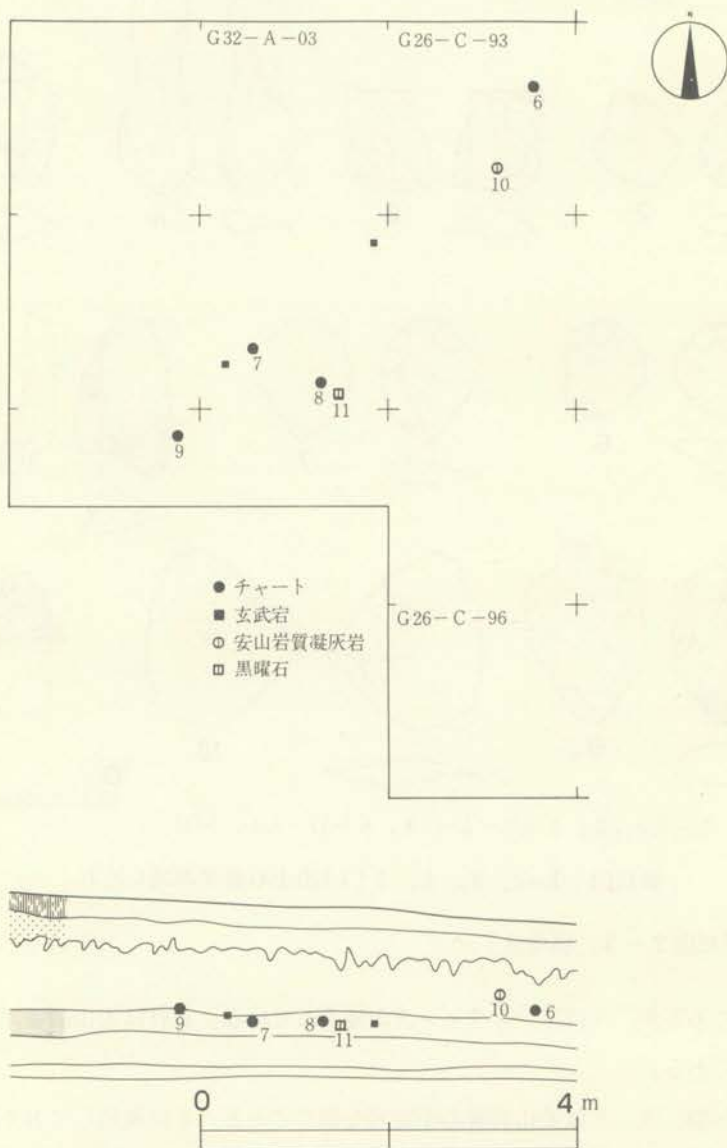
遺物 (第12図2~5, 図版8)

すべて剥片であるが、4はブランティングが施されている。石材は安山岩2点、チャート、頁岩、各1点である。

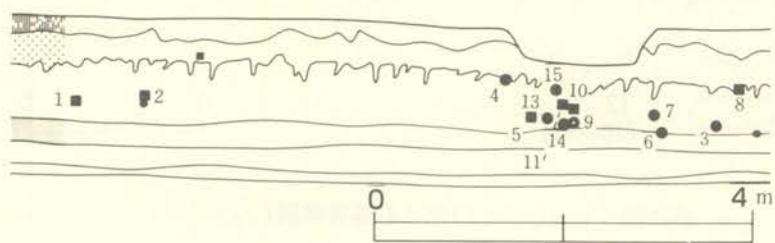
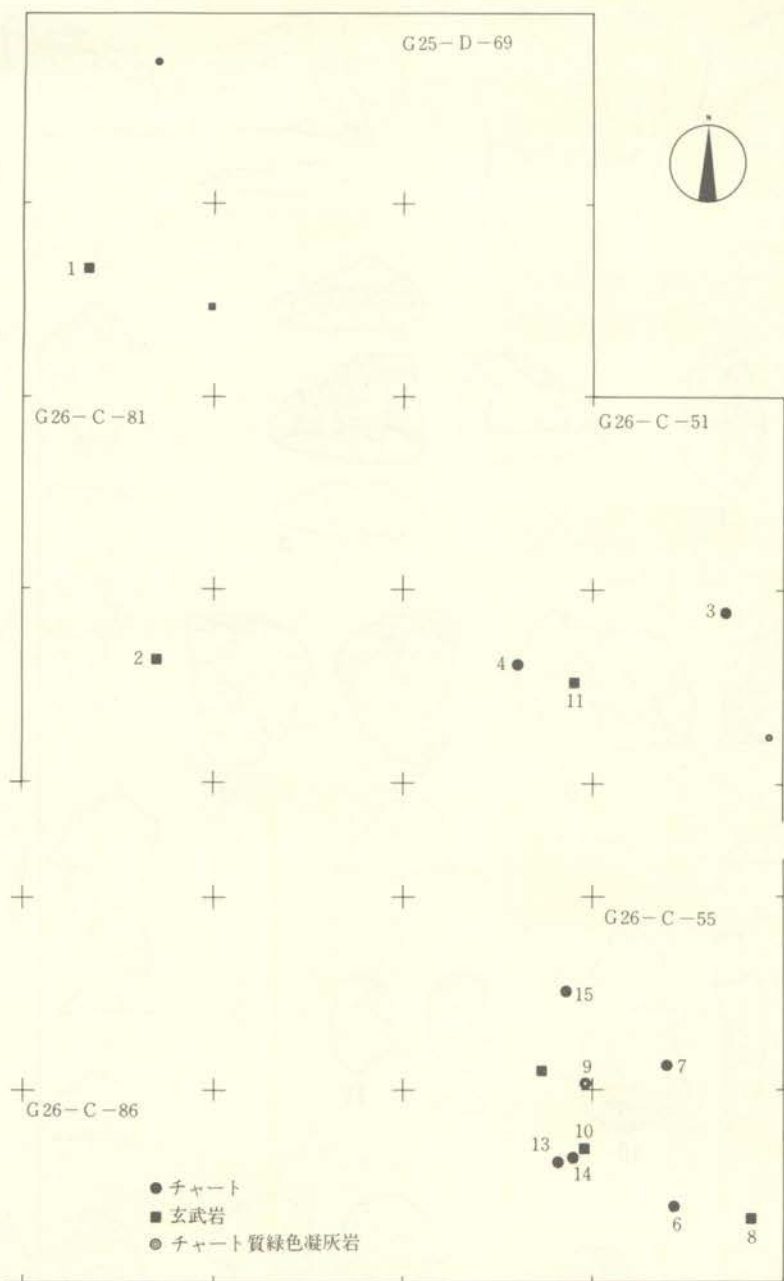
2はチャート製、3、5は安山岩製の不定形な剥片である。5は風化しており、剥離の状態は判明しにくい。4は頁岩製の横長の剥片である。表面下部の左側縁にはブランティングが施されている。

Loc.5 (第13, 14図, 図版7-2)

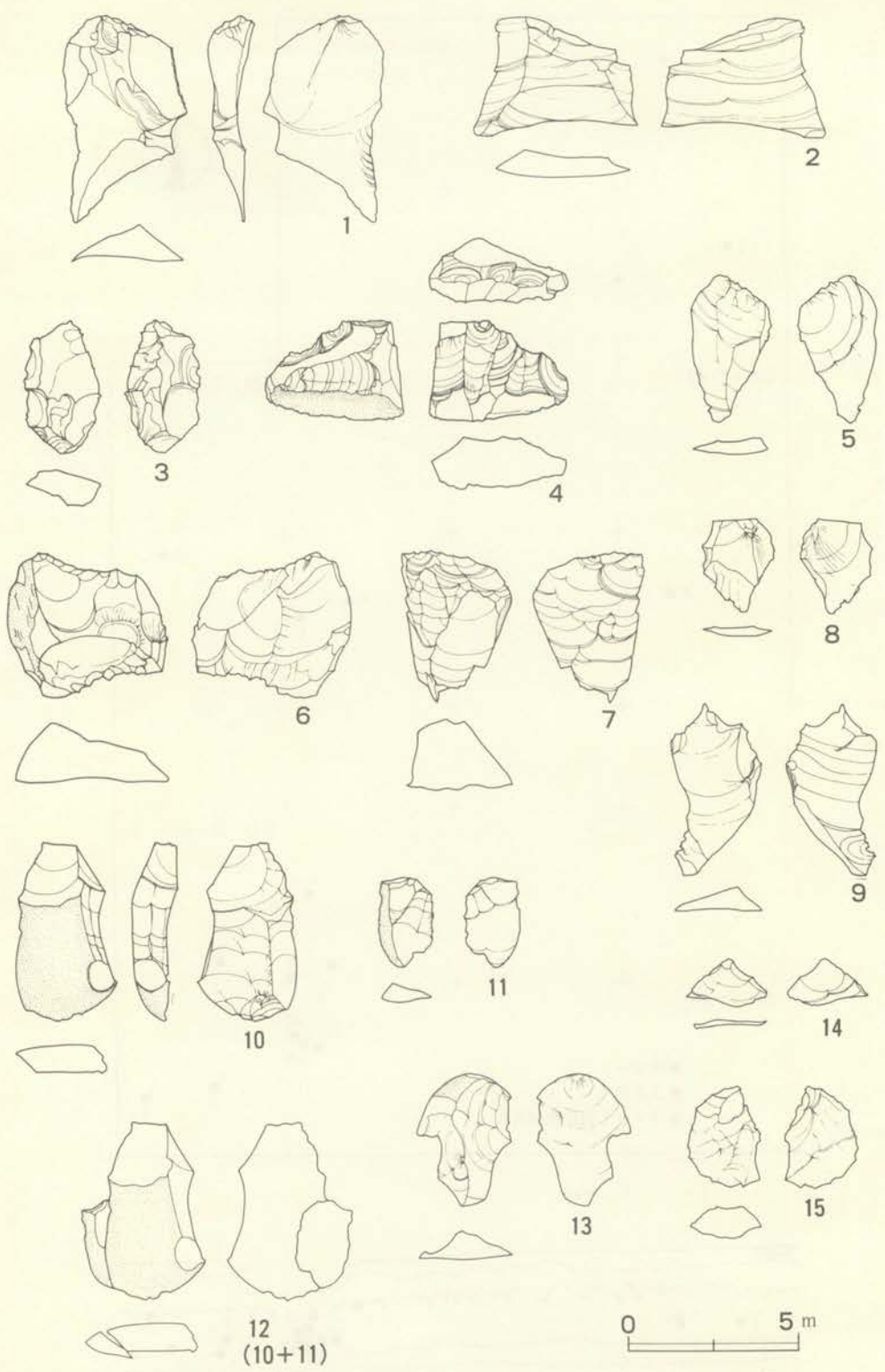
舌状台地の北から入る小支谷を望む平坦面からやや斜面にかかる縁辺部で, Loc. 3の南4m, Loc. 4の東8mに位置している。層位は第IV層から第VII層までであるが, 第IV~VI層が中心となっている。全体に散漫な分布であるが, Loc. 5(2)南東コーナー付近ではまとまりをみせる。挿図の都合上, 出土状況は2図に分けてある。



第13図 Loc. 5 (1)遺物出土状況図(1/80)



第14図 Loc. 5 (2)遺物出土状況図(1/50)



第15图 Loc. 5 (2)出土石器实测图(1/2)

遺物 (第12図6~11, 第15図1~15, 図版9)

石核1点と剥片24点の総数25点が検出されている。剥片の中には使用痕が認められるものと、ブランディングが施されているものが含まれている。石材はチャート13点, 玄武岩9点, 安山岩質凝灰岩, チャート質緑色凝灰岩, 黒曜石, 各1点である。

第12図6~9はチャート製の剥片である。6は表面上部に平坦な打面を持つ。7は使用痕のある剥片で, 裏面上部に平坦な打面を持つ。表面左側縁に使用痕が認められ, 右側縁にはブランディングと考えられる痕跡が観察される。第Ⅶ層出土。8は風化による磨滅が著しく, 剥離の状態は判別しにくい。第Ⅶ層出土。9は表面左側縁の基部にブランディングが施されている。左側縁全面は薄く調整されており, 刃部として使用された可能性も考慮されるが, 破損が著しく判然としない。

10は安山岩質凝灰岩製の剥片で表面下半の右側縁はブランディングらしい痕跡が認められる。11は黒曜石製の剥片で表面に2か所の打面を残している。

第15図7はチャート製の残核である。表面上端に3か所の打点が認められ, 右側の剥離からは比較的良好な剥片を得たものと考えられる。裏面上端からも下方向への打撃が加えられ, 中央部2か所にも打点が認められる。

1, 2, 5, 8は玄武岩製の剥片で, 1は裏面上端に平坦な打面を持つ。表面上半の右側縁にはブランディングが施され, 刃部として使用された剥片である。5は裏面上端に平坦な打面を持つ剥片。8は打面を平坦に調整してから打撃を加えている。

3, 4, 6, 13~15はチャート製の剥片である。4は自然面を残し, 表面では打面転位が行われ, 小さな剥片を剥離している。6は自然面を残し表面上方に調整痕か, 使用痕らしい痕跡が認められる。第Ⅶ層出土。13は自然面を残し裏面は自然面上端に打点を残す。表面は右下方のほぼ同じ打点から2条の剥離が行われている。15は裏面右下方からの打撃で一次剥離が, 表面は下方向からの小さな剥離が行われている。

9はチャート質緑色凝灰岩の剥片である。表面上端に打点を持つ。

接合資料12。10と11の剥片が接合したものである。大きく自然面を残し, とともに石核調整剥片である。10は裏面下方向からの打撃を受け, パルプを残している。玄武岩製。

Loc. 6

坂崎谷津から東へ派生した小支谷を南西に望み, 東側から入る都川の旧支谷の南側の緩斜面にかかる縁辺部に位置している。湧水地点にも近く良好な立地である。

全般的に散漫な出土状況であるが, 北側の斜面にかかる部分(Loc. 6-5)と, その地点

より南へ入った平坦地の部分（Loc. 6-8）では比較的良好なまとまりをみせている。層位は第Ⅳ層～Ⅵ層に集中しているが、第Ⅶ層から検出されるものもある。この範囲は1,464㎡を全面的に掘り下げ、遺物の検出が多かった第Ⅶ層下部までを中心に調査したが、部分的に第Ⅸ層上部までをトレンチで掘り下げたところもある。

遺物は総数196点が検出されている。ハンマーストーン2点、台石1点、残核3点の他は剥片で、定形的な石器と考えられるものは1点もない。このことが本遺跡の特徴の一つとなっている。石材は13種に及んでいる。その内訳は、玄武岩75点、チャート42点、メノウ30点、チャート質頁岩22点、凝灰岩7点、頁岩5点、チャート質緑色凝灰岩4点、安山岩3点、黒曜石3点、安山岩質凝灰岩2点、砂岩、チャート質砂岩、石英斑岩、各1点である。

挿図作成の都合上、Loc. 6は便宜的に8区に分けて記載し、Loc. 6-1、Loc. 6-8等の表示をつけた。

Loc. 6-1（第16図、図版6-1）

都川の旧支谷へ緩い傾斜を始める縁辺部に位置している。層位は第Ⅶ層から1点検出された他は第Ⅳ層～Ⅵ層に集中している。散漫に出土するが、G11-D-31には8点ほどまとまって検出されている。

遺物（第17図、図版10）

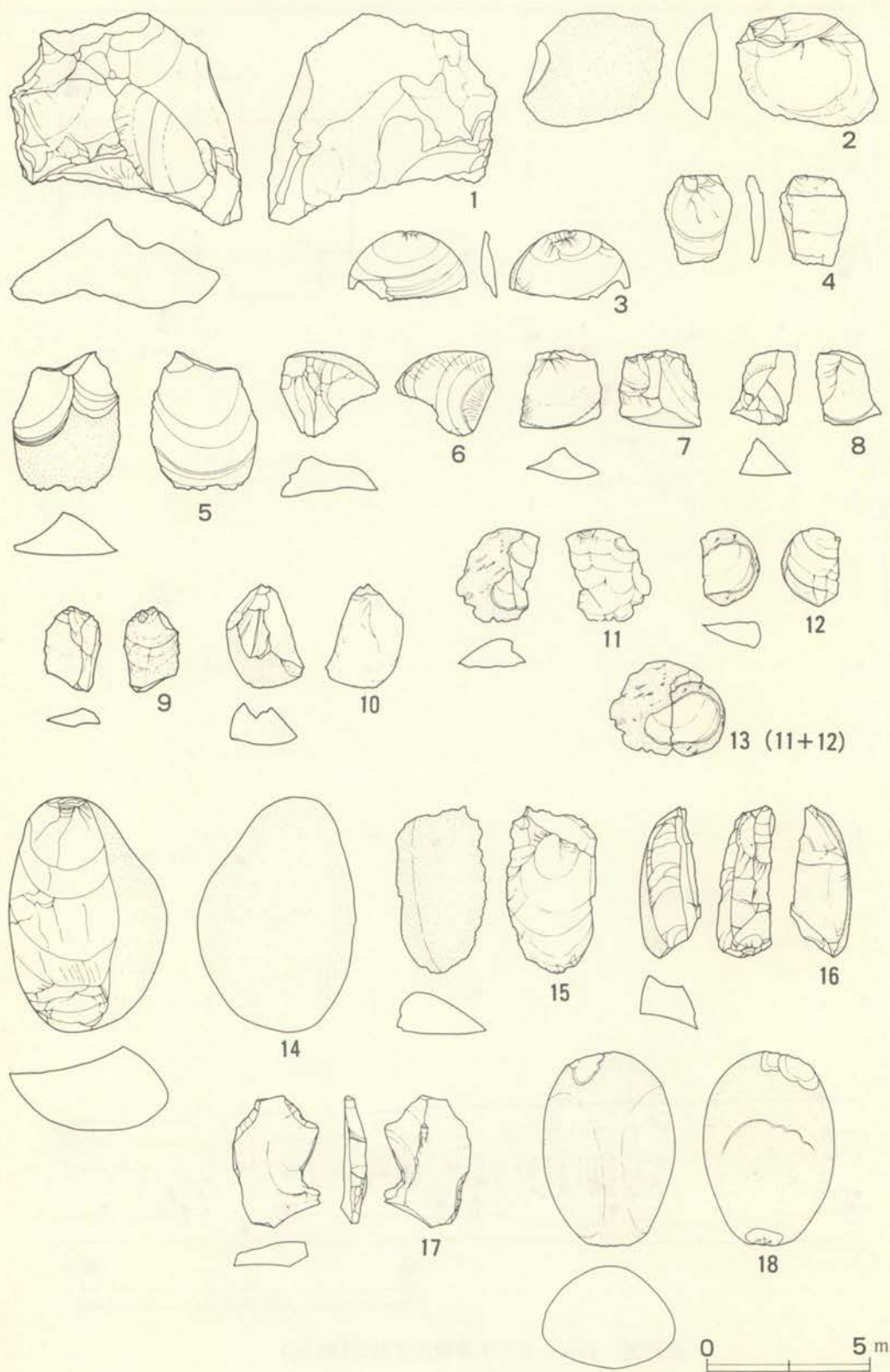
この範囲からは石器類総数25点、ハンマーストーン1点、残核1点、剥片23点が検出されている。石材は玄武岩12点、チャート6点、メノウ3点、チャート質緑色凝灰岩2点、安山岩1点、チャート質砂岩1点である。

1～8は玄武岩製である。1は自然面を残す残核である。表面は部分的に小剥離が行われているが、基本的には求心的に剥離されている。裏面は上方より左下方向へ主な剥離を行っている。第Ⅶ層出土。2は円礫を素材とし、表面はほとんど自然面のままである。裏面方向から1、2度の打撃により打面を形成し、この打面の方向から90°回転して剥離を行っている。3も円礫を素材とし、自然面を直接打撃して剥離を行っている。4は裏面左側面に自然面を残す縦長の剥片である。表裏両面とも同一打面からの打撃が行われている。5は表面の一部に自然面を残す剥片である。表面は2回の剥離が行われている。6は円礫を素材とし、自然面の一部を残す。7の裏面右側縁には調整痕らしい痕跡が認められている。8は表面から裏面へ90°の打面転移が行われている。

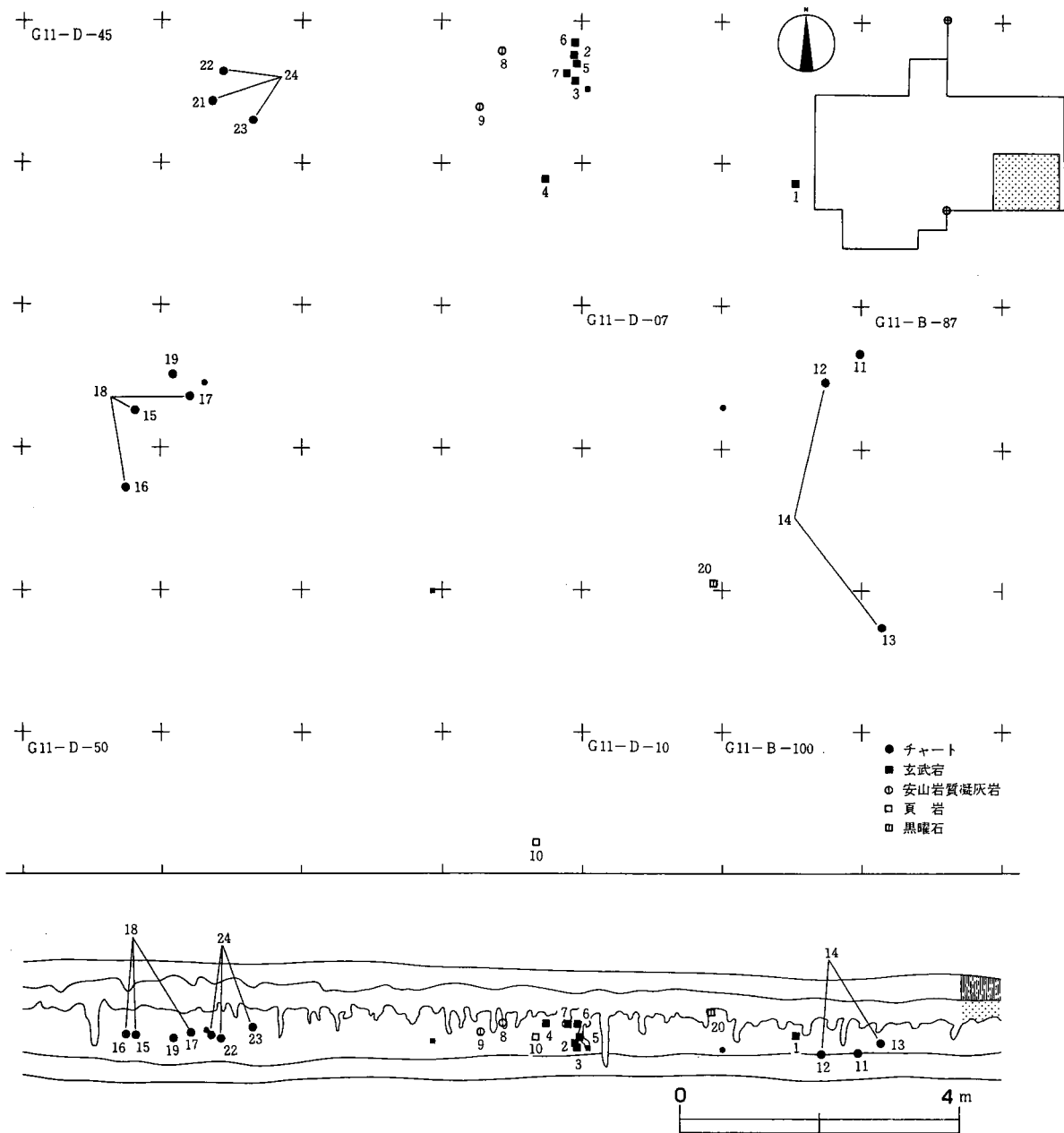
9、10はチャート質緑色凝灰岩製の剥片である。9の表裏両面の剥離は同一打面からほぼ同じ方向への打撃による。10は小形の礫を素材とする。表裏両面とも同じ打面を使用し、自然面



第16図 Loc. 6-1 遺物出土状況図(1/50)



第17图 Loc. 6-1 出土石器实测图(1/2)



第18図 Loc. 6-2 遺物出土状況図(1/80)

を直接打撃して剥離を行っている。

14~16はチャート製である。14は表面上方向から打撃を加え、比較的良好な縦長の剥片を得たものと考えられる。下方向からも小さな剥離が行われている。自然面を大きく残す。15も表面全面に自然面を残す。裏面上部に平坦な打面を持ち、そのほぼ中央から剥離が行われている。16は円礫を素材とし、片面に自然面を残している。両端から剥離が行われ、上方向からの剥離は打面を形成せずに自然面を直接打撃して行われている。

18は安山岩製のハンマーストーンである。楕円形の礫を素材とする。両端の打撃痕は不規則で他の石を打撃した際の痕跡であろう。

11, 12, 17はメノウ製である。17は表面左側縁、裏面右下にブランディングと考えられる痕跡が認められる剥片である。

接合資料13。11と12の剥片が接合したものである。11の表面右下と12の裏面右下に認められる打点での上方向に向かう打撃によって両者は分離されている。自然面を残し、11の両面、12の裏面に上方から下方への数度の剥離痕が認められる。

Loc. 6-2 (第18図, 図版6-2)

Loc. 6-1の南側に隣接し、ほぼ平坦地に位置する。層位は第IV層~VI層が中心である。小さなまとまりが4か所確認され、それぞれ半円状に並んだように位置している。特にG11-D-15では玄武岩がよくまとまって出土した。

遺物 (第19, 20図, 図版11)

この範囲からは総数25点の剥片等が検出されている。石材はチャート12点、玄武岩9点、安山岩質凝灰岩2点、頁岩1点、黒曜石1点である。

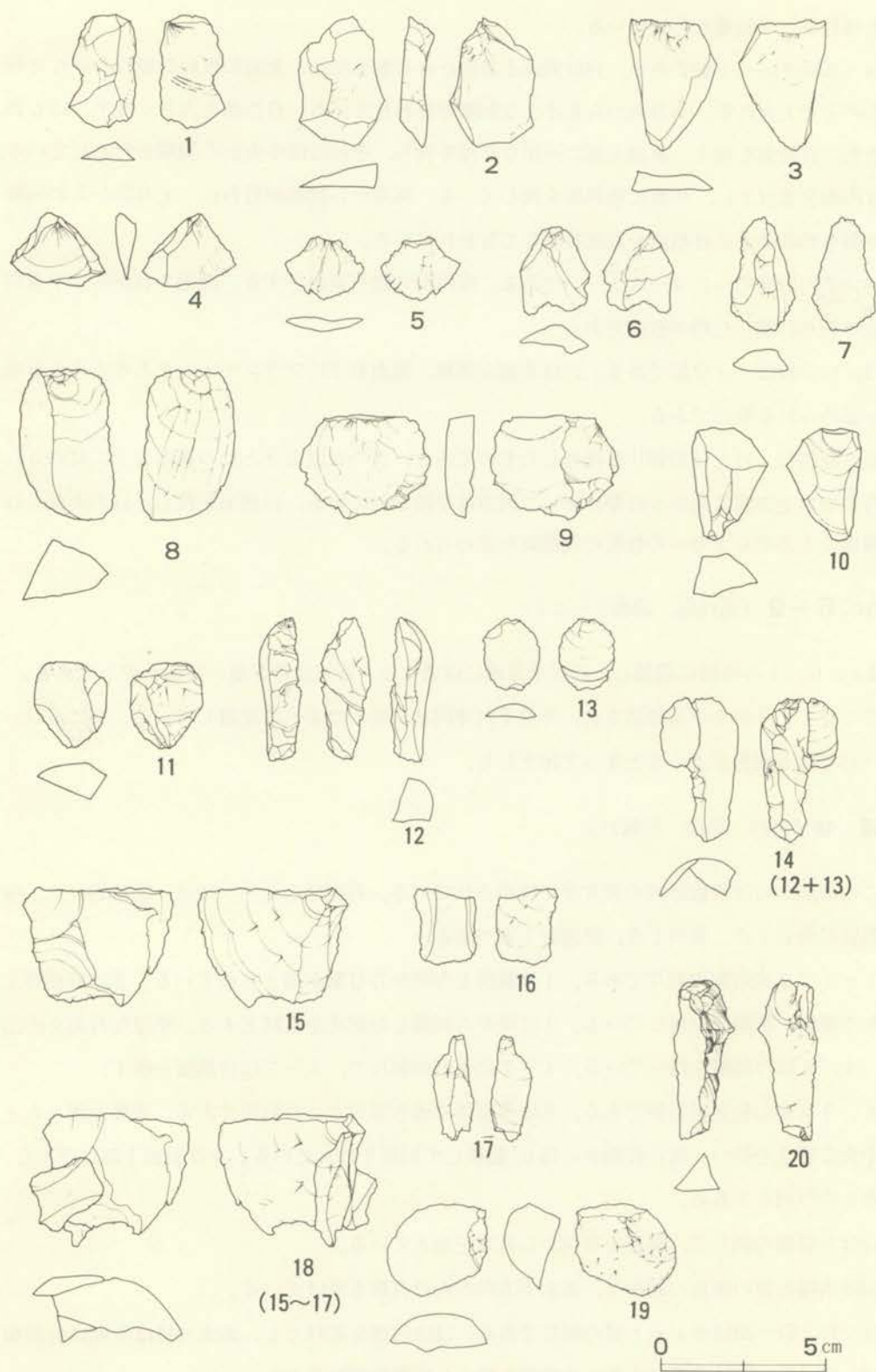
1~7は玄武岩製の剥片である。1は裏面上方向から打撃が加えられている。2は打面再生剥片で周囲に剥離面を残している。3は礫から剥離した剥片を素材とする。平坦な打面を作出し、4, 5回の剥離を行っている。4~7は小形の剥片で、5~7は自然面を残す。

8, 9は安山岩質凝灰岩製である。8は多面体の礫を素材とした剥片である。表裏面両とも上端中央に打点を持つ。同じ打面から180°転移して剥離を行っている。9は表面上端に平坦な打点を持つ剥片である。

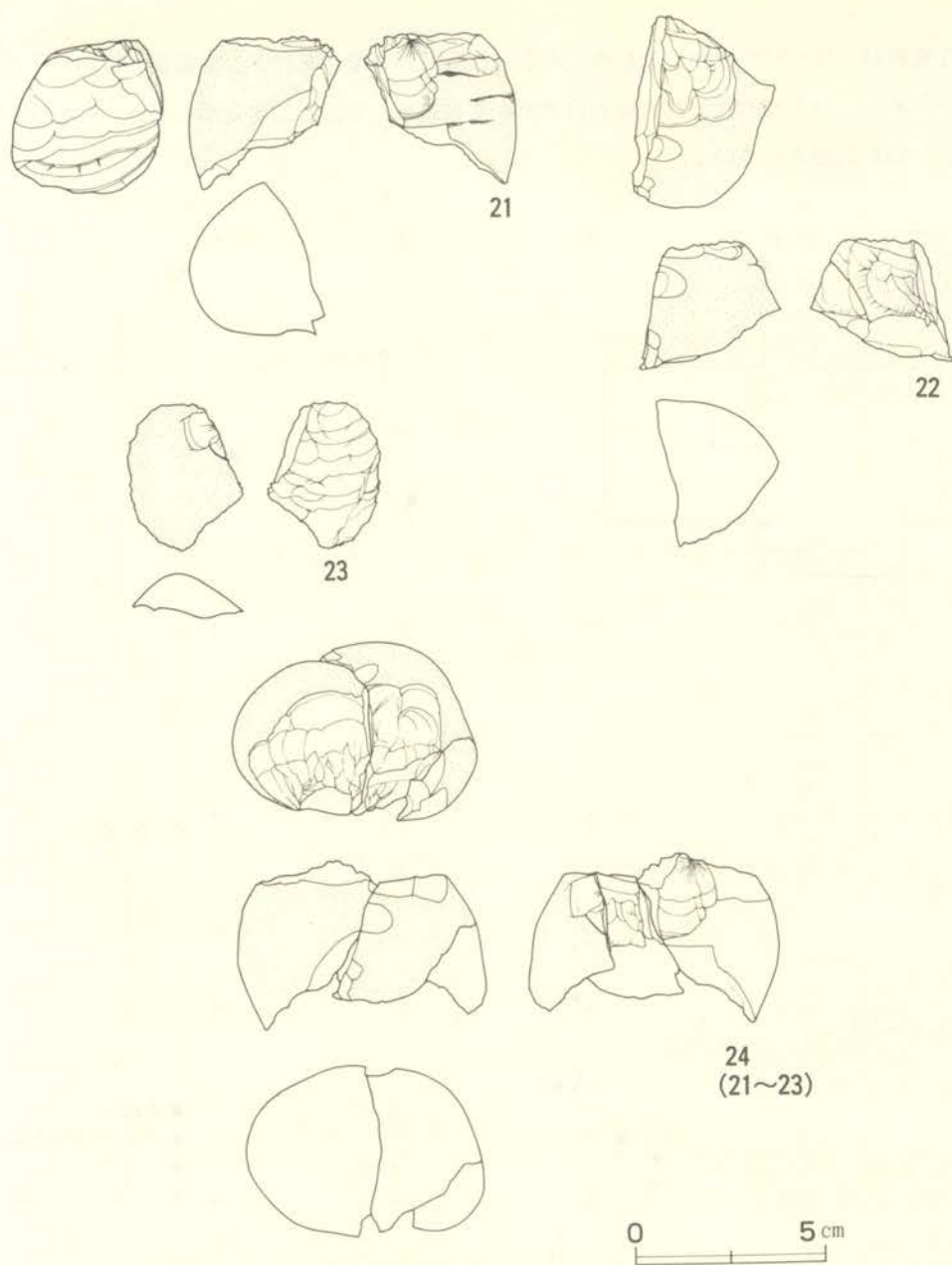
10は頁岩製の剥片で、裏面上方向から打撃を加えている。

20は黒曜石製の縦長の剥片で、裏面上方向からの打撃を受けている。

11~19, 21~23はチャート製の剥片である。11は円礫を素材とし、表面のほぼ全面に自然面を残している。19は表面に大きく自然面を残す石核調整剥片である。



第19图 Loc. 6 - 2 出土石器实测图(1), (1/2)

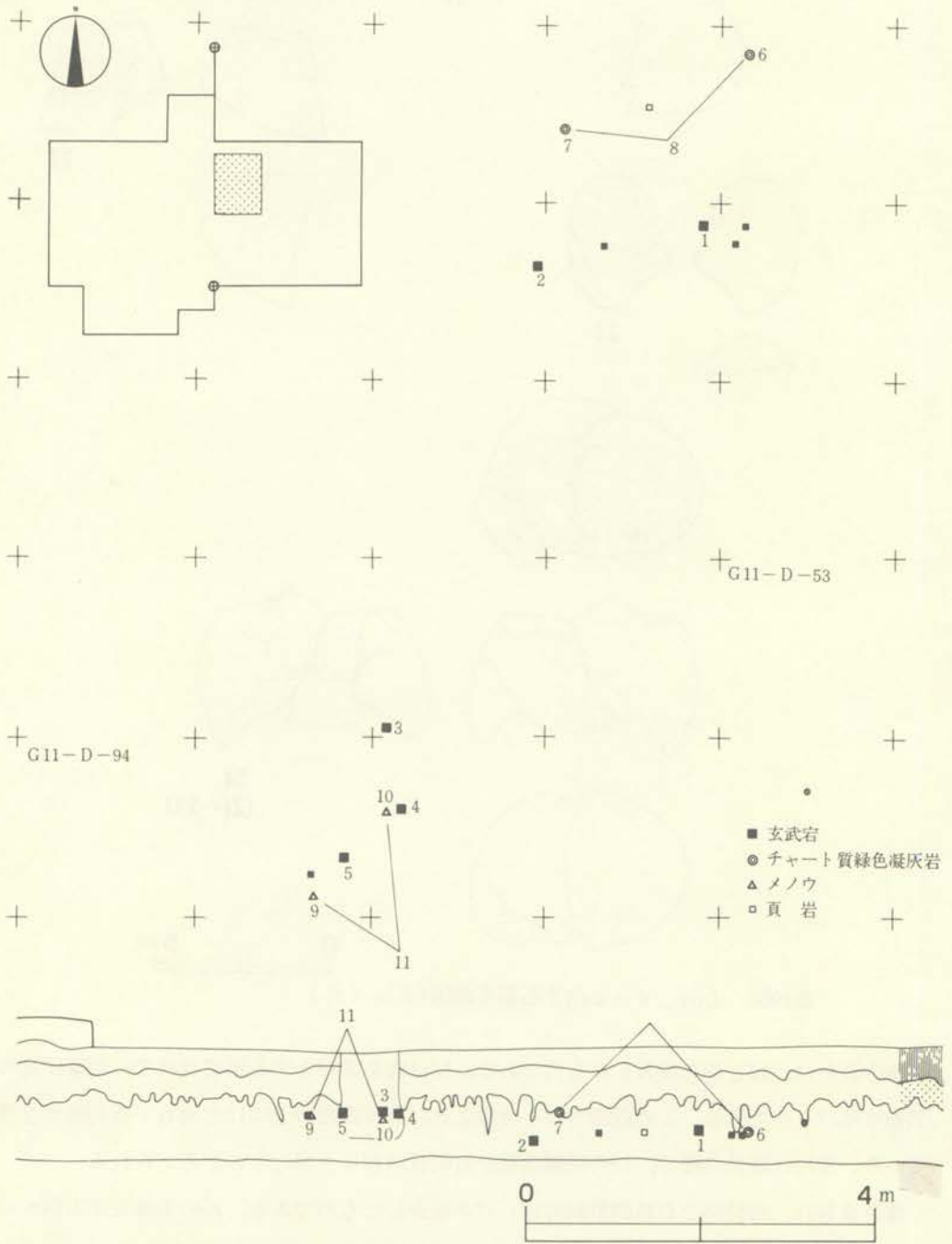


第20図 Loc. 6-2 出土石器実測図(2), ($\frac{1}{2}$)

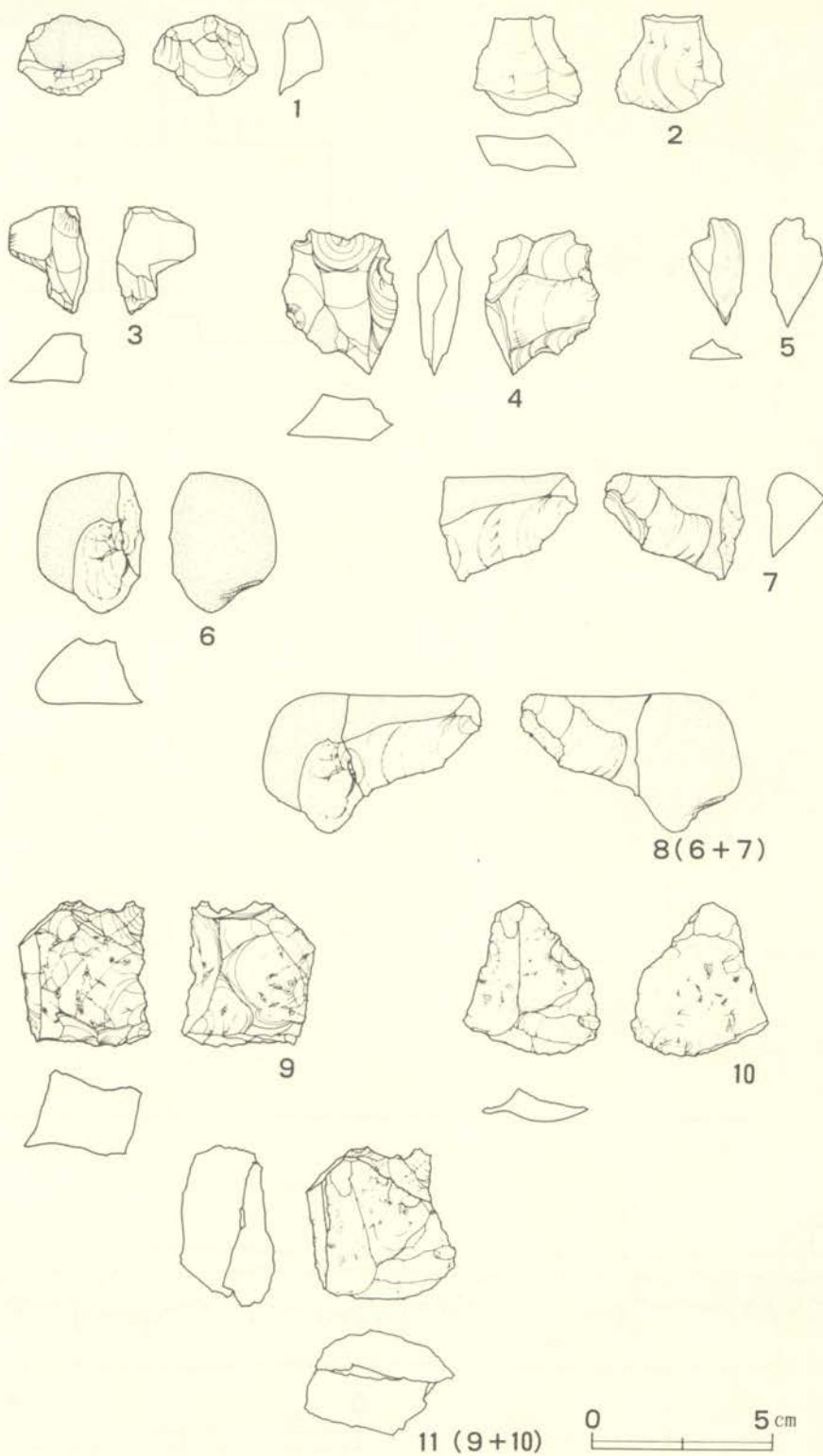
接合資料14。12と13の接合したものである。13は礫を素材とする母岩資料で、剥離作業の初期の段階のものである。この段階で12と分離され、12は表面右上に13と共有する剥離面を残している。素材は縦長の礫で、12の剥離状態から縦長の剥片を得たものと考えられる。

接合資料18。残核15と石核調整剥片16、17の接合したものである。15の表面左下方向からの打撃で16が剥離されたのち、90°の打面転移を行い、裏面右上端の平坦な打面からの打撃で17が剥離されている。17は下方向からの剥離も行われている。

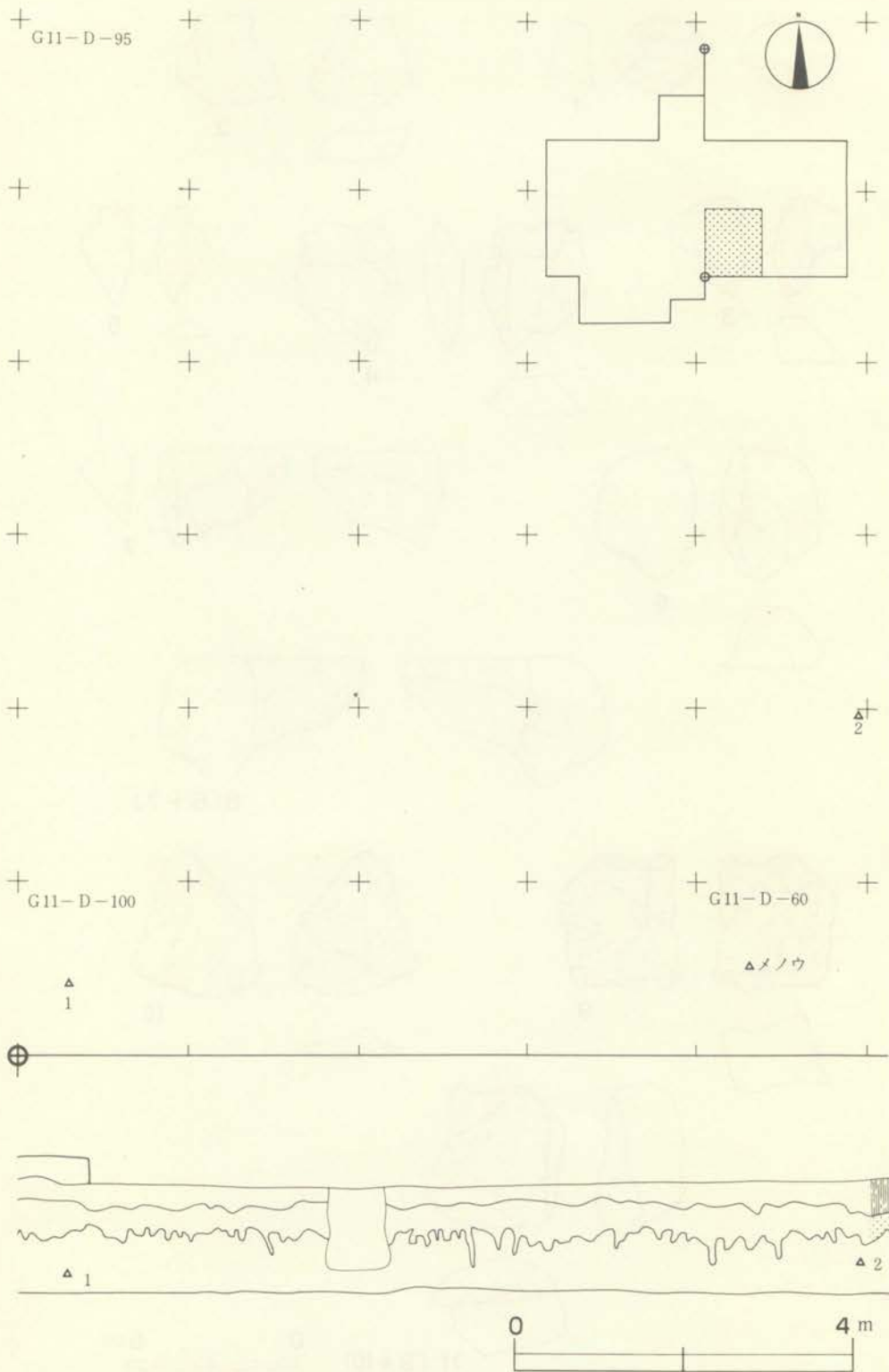
接合資料24。21～23の接合したものである。長楕円形の礫を素材とし、縦長に置いて上部に打面を形成し、21と22の接合部表面の自然面を直接打撃して21と22を剥離してから打面を90°転移し、23が剥離されている。



第21図 Loc. 6-3 遺物出土状況図(1/80)



第22图 Loc. 6-3 出土石器实测图(1/2)



第23図 Loc. 6-4 遺物出土状況図(1/50)

Loc. 6-3 (第21図)

Loc. 6-1の西側に隣接し、縁辺部に位置する。層位は第IV層～VI層である。北側と南側に数点の小規模はまとまりをみせている。

遺物 (第22図, 図版12)

この範囲からは総数15点の剥片等が検出されている。石材は玄武岩9点、チャート質緑色凝灰岩3点、メノウ2点、頁岩1点である。

1～5は玄武岩製の剥片である。1は円礫を素材とし、表面の自然面を直接打撃して剥離を行っている。裏面では打面を90°転移し、ほぼ同一の打点から3方向へ剥離を行っているが、あまり良好な剥片は得てないようである。2は石核調整剥片で自然面を残す。3は表面上方向からの打撃を受けている。4は表面の上端、右側面、左下方の3方向から、裏面は右側面2方向からの打撃が認められる。

接合資料8。6と7が接合したもので、チャート質緑色凝灰岩製である。比較的肩平な長方形の礫を素材とする。6と7は7の表面右上方向からの打撃による剥離面を共有する。この剥離に際して、7の表面右上の打面形成が行われている。両者の分離は剥離面接合部中央の打撃による。

接合資料11。9と10が接合したもので、メノウ製である。9の右上方向から強い打撃を加え、次に左上方向からの弱い打撃によって10が剥離されている。打面はいずれも平坦である。10の右側縁の一部使用痕が認められる。

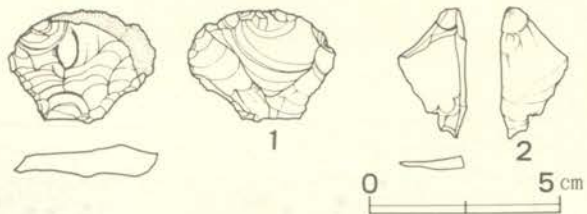
Loc. 6-4 (第23図)

Loc. 6-3の南側に隣接し、ほぼ平坦地に位置する。層位は第IV層～VI層である。この範囲はLoc. 6の中で遺物の出土が最も少ない地区である。

遺物 (第24図, 図版12)

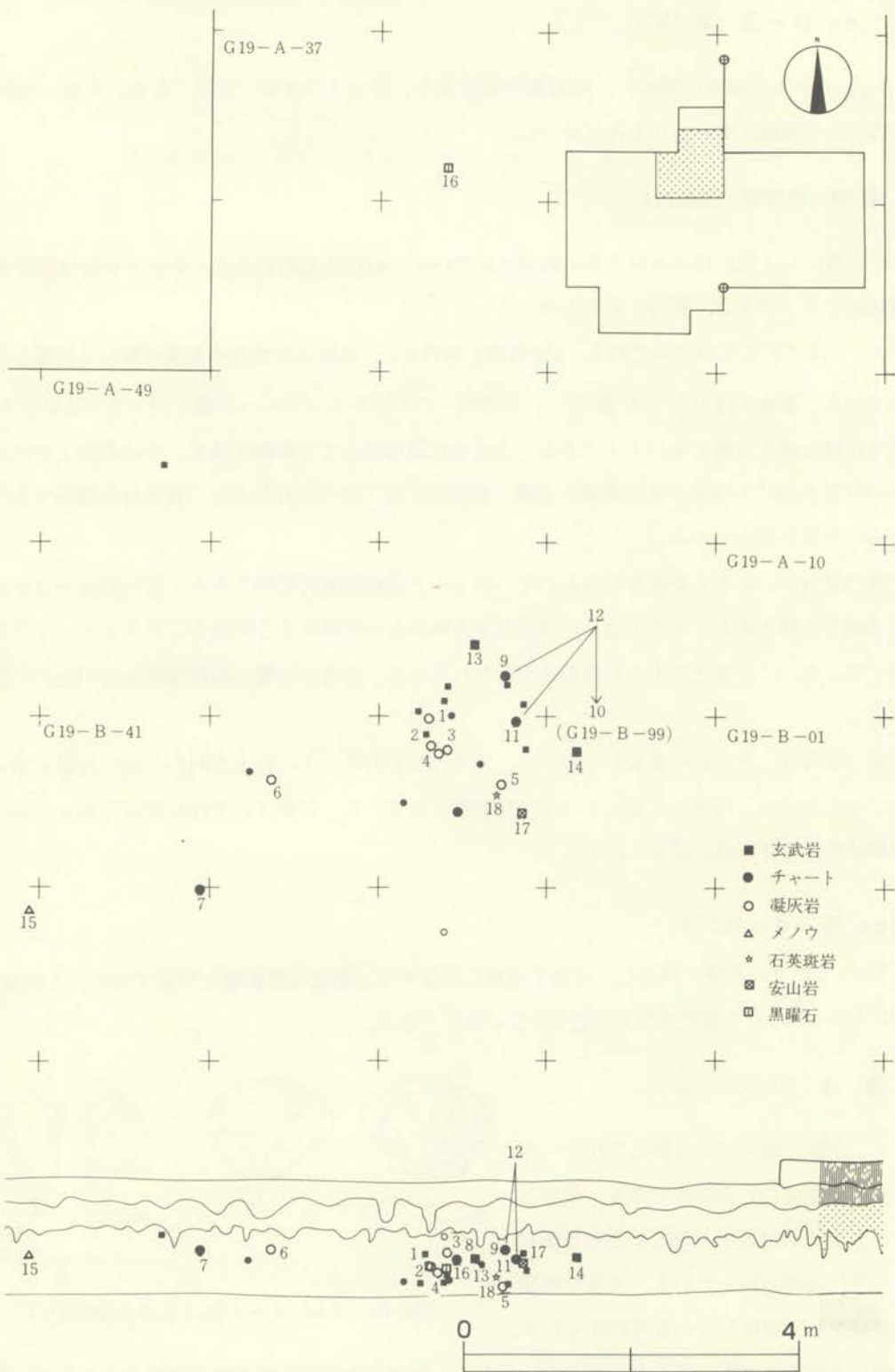
メノウ製の剥片が2点検出されている。

1は加工痕のある剥片である。素材となった剥片の打面を基部とし左右両側縁の下半に調整を加えている。表面左側縁を刃部として使用している可能性もある。



第24図 Loc. 6-4 出土石器実測図(1/2)

上部に自然面を残す。2は打面調整剥片である。裏面上方向からの打撃で剥離が行われている。



第25図 Loc. 6-5 遺物出土状況図(1/50)

Loc.6-5 (第25図, 図版5-3, 6-3)

Loc.6-3の両側に隣接し、縁辺部に位置している。層位は第Ⅳ層～Ⅵ層である。2×3mの範囲に22点の剥片類が台石、ハンマーストーンを伴ってまとまって出土しているが、10はG19-B-99から検出され、9、11と接合している。また、凝灰岩はLoc.6ではこの範囲のみ検出されている。

遺物 (第26, 27図, 図版13)

この範囲からは台石1点、ハンマーストーン1点、残核1点、剥片26点の総数29点の石器類が検出されている。石材は玄武岩10点、チャート8点、凝灰岩7点、メノウ、安山岩、石英斑岩、黒曜石、各1点である。

1～6は凝灰岩製の剥片である。1は表面で同一面からの180°方向を変えた打撃が認められる。2は石核調整剥片で裏面上方向からの剥離が行われている。3は裏面で両端から打撃が加えられている。4は表面上方向から、裏面は右上方向からの剥離が行われている。5は石核調整剥片で、表裏両面の剥離は共有する。一部に自然面を残す。6は石核調整剥片で裏面上方向から打撃が加えられている。

13, 14は玄武岩製の剥片で同一母岩資料である。13は表面に自然面を残す。表面の剥離は打面作出に伴うもので、裏面右上端に平坦な打面を持つ。14は石核調整剥片で表面に自然面を残し、2条の剥離が行われている。上端に平坦な打面を持つ。

15はメノウ製の剥片である。表面上端に自然面を直接打撃した打点が残る。風化のため剥離痕は明瞭ではない。

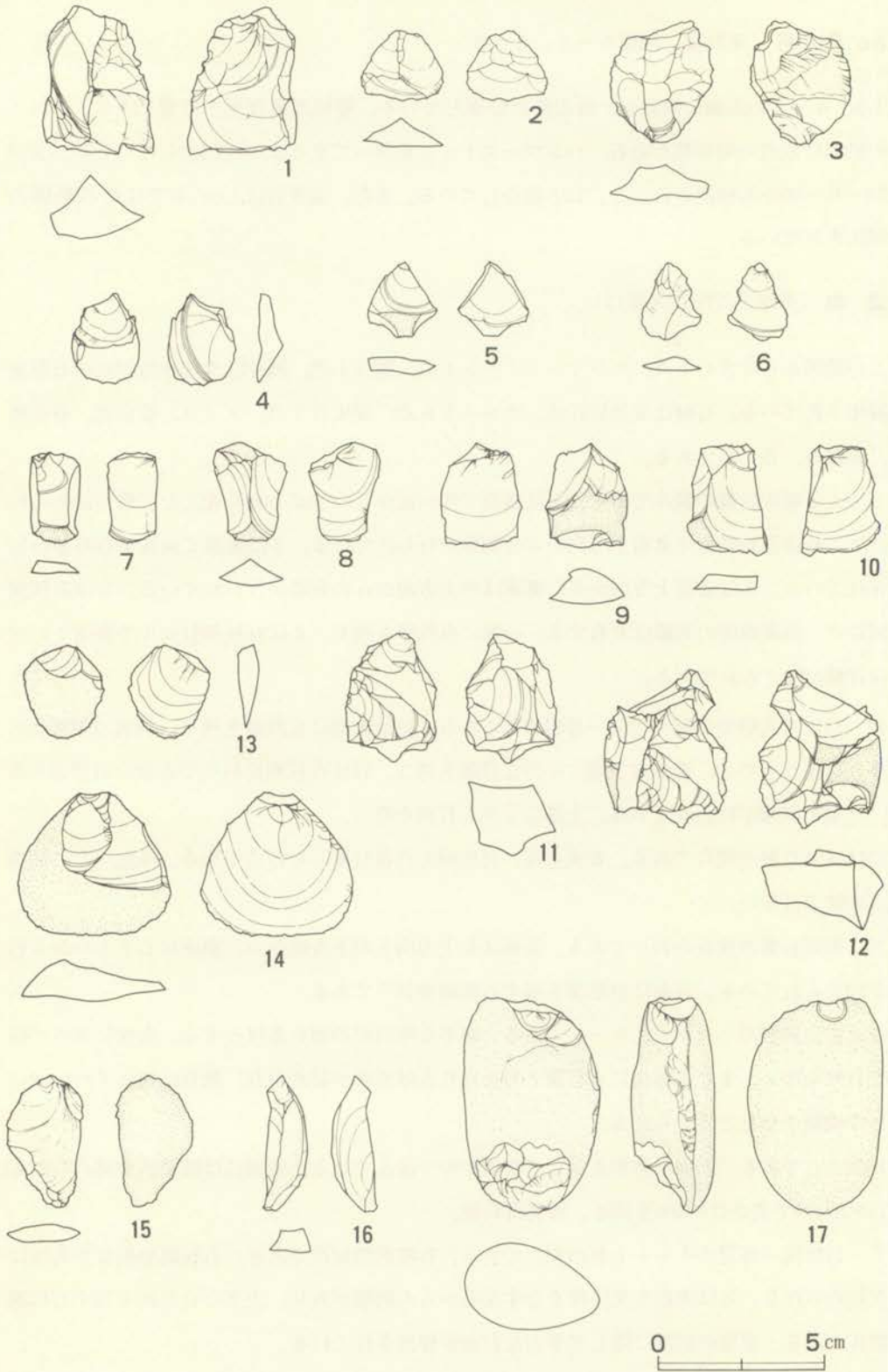
16は黒曜石製の横長の剥片である。表面は左上方向と左下方向から、裏面は右下方向から打撃が加えられている。表面に自然面を残す石核調整剥片である。

17は安山岩製のハンマーストーンである。肩平な楕円形の礫を素材とする。縦長に使うと両端で打撃を加え、また右側辺にも打撃と考えられる敲潰痕が認められ、横長に使うとハンマーとして機能させたと考えられる。

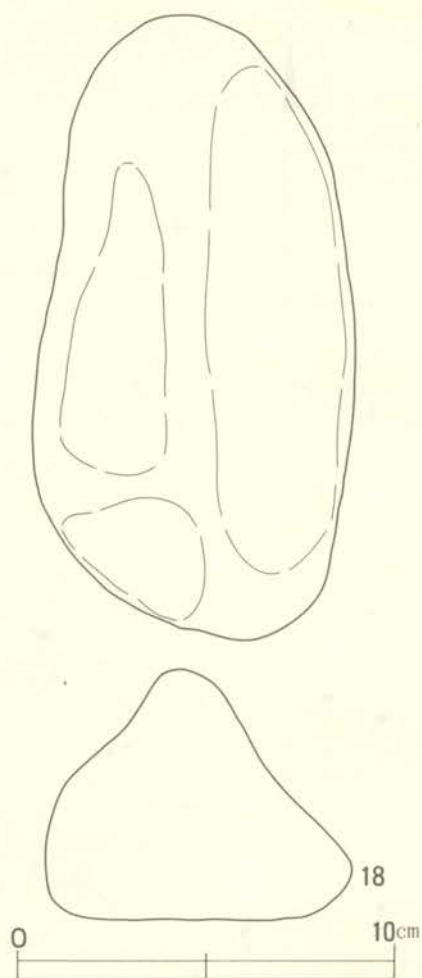
18は台石である。断面三角形を呈し、側面がやや窪んでいる。底面には敲潰痕が認められる。16.3×8.4cmで高さは6.4cmを測る。石英斑岩製。

7～11は同一母岩のチャート製の剥片である。石核調整剥片である。石核調整剥片で表面に面が認められる。8は表面中央に稜をなす左右からの剥離があり、上下に自然面を残す石核調整剥片である。裏面の剥離に際して平坦な打面が作出されている。

接合資料12。9の石核調整剥片、10の目的剥片、11の残核が接合したものである。まず10



第26图 Loc. 6-5 出土石器实测图(1), (1/2)



第27図 Loc. 6 - 5 出土石器実測図(2), (1/2)

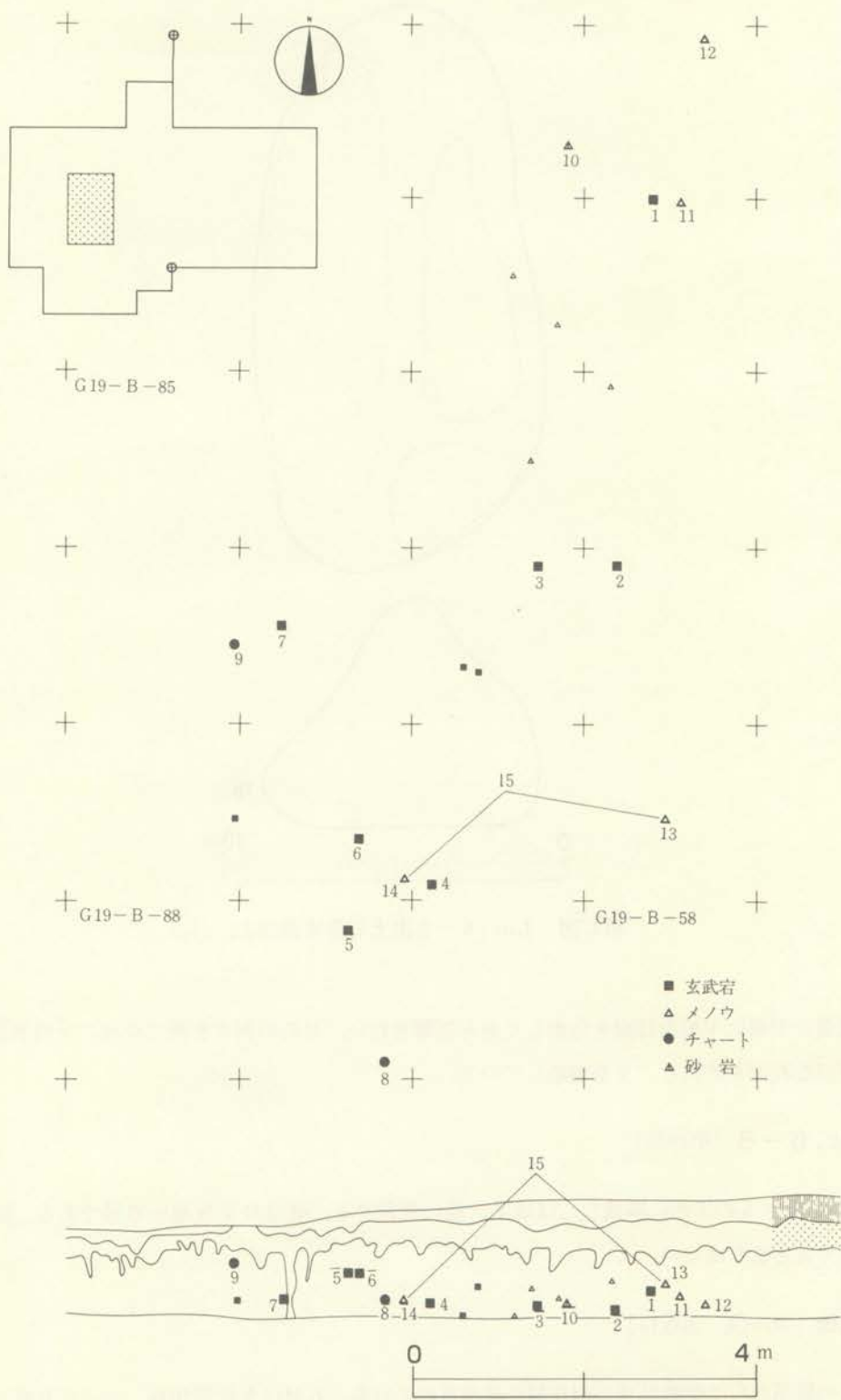
の裏面に平面に平坦な打面を作出してから剥離を行い、目的剥片を得てから、9の表面上端に平坦な打面を作出し、9を剥離している。

Loc. 6 - 6 (第28図)

Loc. 6 - 5の南西に隣接し、ほぼ平坦地に位置する。層位は第IV層～VI層である。散漫な分布でまとまりはない。

遺物 (第29図, 図版14)

この範囲からは総数21点の剥片類が検出されている。石材は玄武岩10点、メノウ8点、チャート2点、砂岩1点である。



第28図 Loc. 6-6 遺物出土状況図(1/80)



第29图 Loc. 6 - 6 出土石器实测图(1/2)

1～7は玄武岩製の剥片である。1は表面に自然面を残し、裏面上部には平坦な打面が作出されている。2は石核調整剥片で自然面を残す。3は楕円形の礫を素材とする。表面は自然面を残し、上方向から2条の剥離が行われている。裏面は下端の自然面を直接打撃して剥離を行なってからほぼ求心的な剥離をしている。4は円礫を素材とする剥片で表面に自然面を残す。裏面では90°の打面転位を行っている。5は一部に自然面を残し、表裏両面とも同じ打点からの剥離が行われている。6は表面に自然面を残す石材調整剥片である。7は表面に平坦な打面を作出している。

8, 9はチャート製である。8は彫器の削片である。表面は自然面を直接打撃して剥離が行われている。裏面は下方向からの剥離によるものと考えられる。側面も下方向からの打撃によって表裏面より先行して剥離されたものである。裏面の右側縁下部に使用痕が認められる。一種の石器として使用された可能性も考慮される。9は石核調整剥片である。

10は砂岩製の石核調整剥片で表面に自然面を残す。裏面上方向からの剥離が行われている。

11～14はメノウ製である。11の剥片は表面上端に打点が残し、右下方向へ打撃が加えられている。裏面下半には上方向からの剥離が認められる。上半は左右両方向からの剥離が行われている。12は使用痕のある剥片である。表面上端に平坦な打面を形成してから剥離が行われている。表面には2条の剥離面が認められ、右側の剥離が先行する。裏面には右上端からの大きな剥離が認められ、剥離面は裏面全体に及んでいる。

接合資料15。13と14の剥片が接合したものである。13の裏面の剥離は表面上部の剥離とほぼ同じ打点から反対方向への打撃によるものである。14は裏面上部に平坦な打面を持ち、約120°打点を転移させて同一方向へ剥離を行っている。この両者は14の裏面上方向からの打撃によって分離され、さらに数回の剥離が行われたものである。13の素材から剥離された剥片は幅広の良好な縦長剥片であったと推定できる。

Loc. 6-7 (第30図)

Loc. 6-4の西側に隣接し、ほぼ平坦地に位置している。層位は第IV層～VI層である。遺物は散漫に分布しまとまりは認められない。

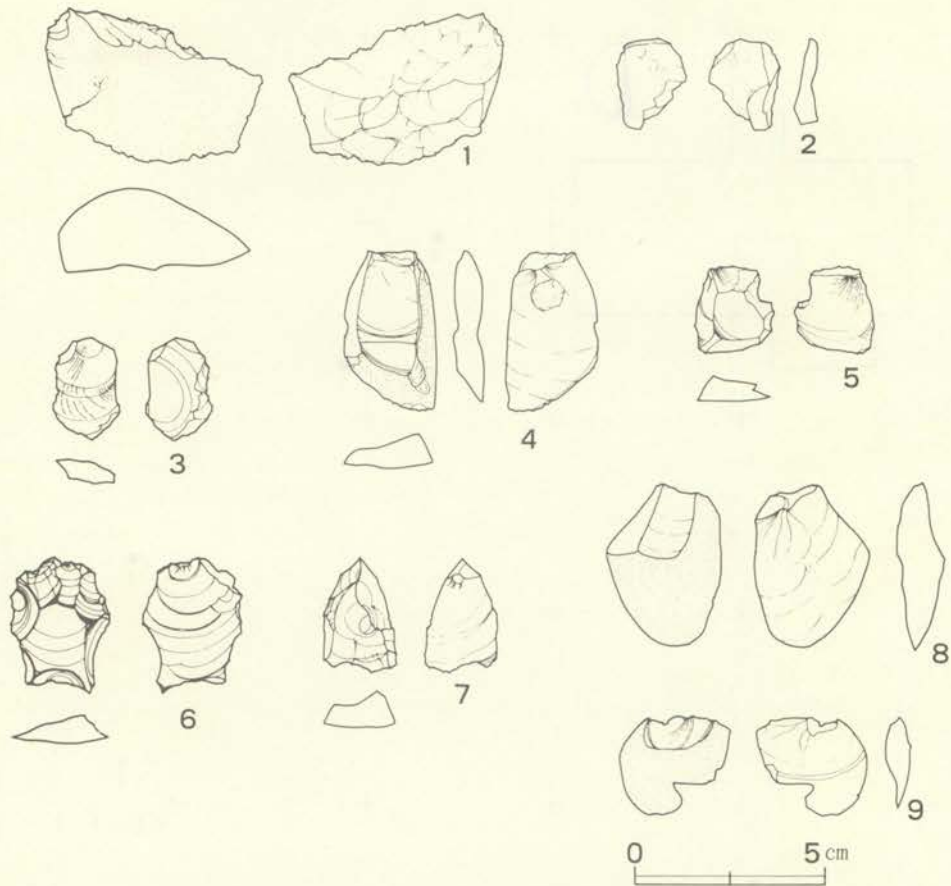
遺物 (第31図, 図版12)

この範囲からは総数11点の剥片が検出されている。石材は玄武岩7点、メノウ2点、頁岩2点である。

1～5は玄武岩製の剥片である。1は長楕円形の礫を素材としている。表面上部は打面形成のため平坦に調整されている。裏面右上方向から2条の剥離が行われている。2は表裏両面と



第30図 Loc. 6-7 遺物出土状況図(1/80)



第31図 Loc. 6 - 7出土石器実測図(1/2)

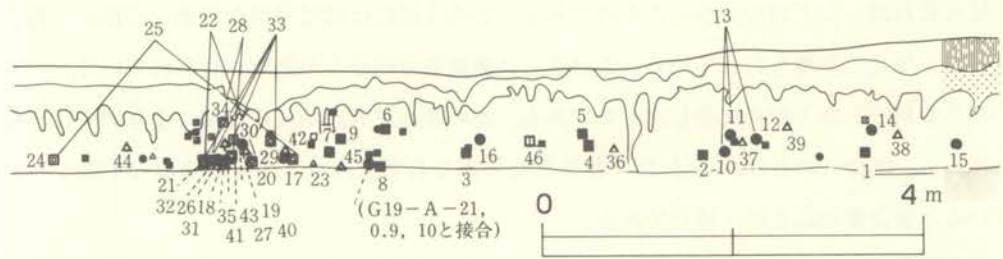
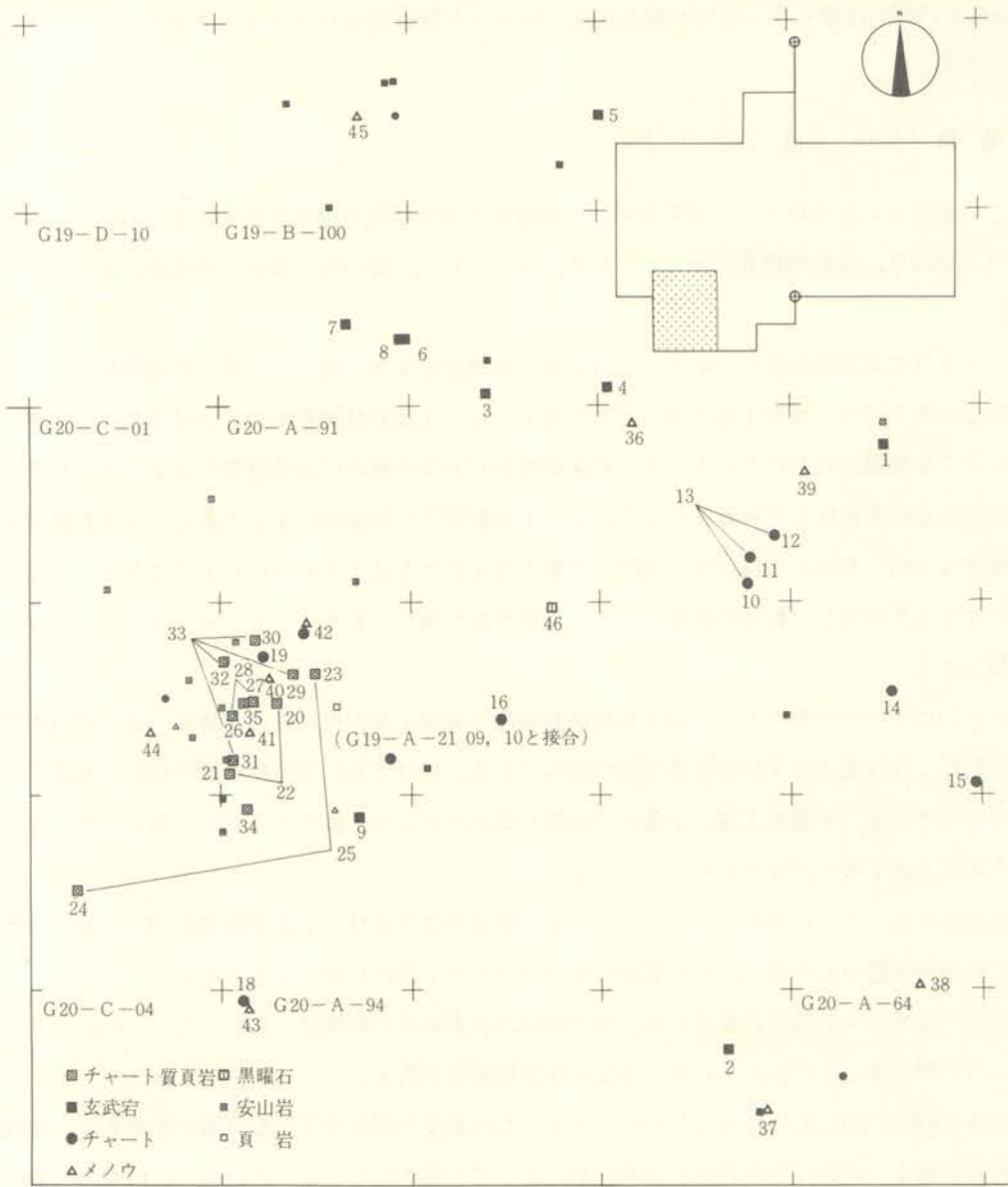
も同一打面から剥離されている。3は裏面左側方向からの打撃ののち、表面上方向からの剥離が行われている。4は表裏両面とも同一打面から剥離され、表面左側の剥離はこれに先行するものである。5も表裏両面の剥離は同一打面から行われている。表面はさらに小さな剥離が認められる打面再生剥片である。

6, 7はメノウ製の剥片である。6の裏面上端には打点が残る。表面の調整は打面調整で、表面の主剥離面を打面としまわりから打面調整を行ったのち、上端の打点より剥離を行ったと考えられる。7は裏面上端に調整された打面を持つ。

8, 9は頁岩製の剥片である。8は表面に自然面を残し、平坦な調整された打面を持つ。9は表面に自然面を残し、打面を作出せずに自然面を直接打撃して剥離を行っている。

Loc. 6-8 (第32図, 図版7-1)

Loc. 6-6の南側に隣接し、ほぼ平坦地に位置している。層位は第IV層~VI層である。



第32図 Loc. 6-8 遺物出土状況図(1/50)

Loc. 6の中では最も多く遺物が検出され、チャート質頁岩を中心とする良好なまとまりも認められる。

遺物 (第33~35図, 図版15, 16)

この範囲からは残核3点, 剥片類65点の総数68点の石器類が検出されている。石材はチャート質頁岩22点, 玄武岩18点, チャート13点, メノウ12点, 安山岩, 頁岩, 黒曜石, 各1点である。

1~9は玄武岩製の剥片である。1は表面に自然面を大きく残し, 上部に打面調整が行われ平坦な打面を持つ。裏面上端中央に打点が残る。2~4は石核調整剥片。2は一部に自然面を残し小さな剥離が行われている。3は打面調整を行わず自然面に直接打撃を加え, 同じ打点から約120°方向を転移して剥離を行っている。4の裏面は主剥離面のままである。5の表裏両面の剥離は, 同一打面からほぼ同じ方向へ打撃を加えることにより行われたものである。7は縦長の剥片を素材とし, 数度の剥離ののちに廃棄された残片であろう。6, 8, 9は不定形な剥片類である。

10~19はチャート製である。14は石核調整剥片で裏面上端中央に打点が残る。15, 17は不定形な剥片, 16は裏面に平坦な打面を持つ剥片である。18は上面に平坦な打面を作出し裏面の剥離を行っている。表面左上端に2条の小剥離が認められる加工痕のある剥片である。19は表面に自然面大きく残す円礫を素材としている。

接合資料13。10~12の接合したものである。縦長の礫を素材とする母岩資料で, 3回の分離はその接合状態からみると, 13の表面の接合部からの1回の打撃によると考えられる。

20~35はチャート質頁岩製である。34の剥片の表裏両面の剥離は, 同一打面からほぼ同じ方向への打撃によって行われている。35は石核調整剥片である。

接合資料22。20と21の接合したものである。22の裏面上部には平坦な打面が作出され, 中央に打点が残る。両者はこの打点からの打撃によって分離されている。20はさらに内側の打点より剥離を受け, 裏面にその剥離面を残している。

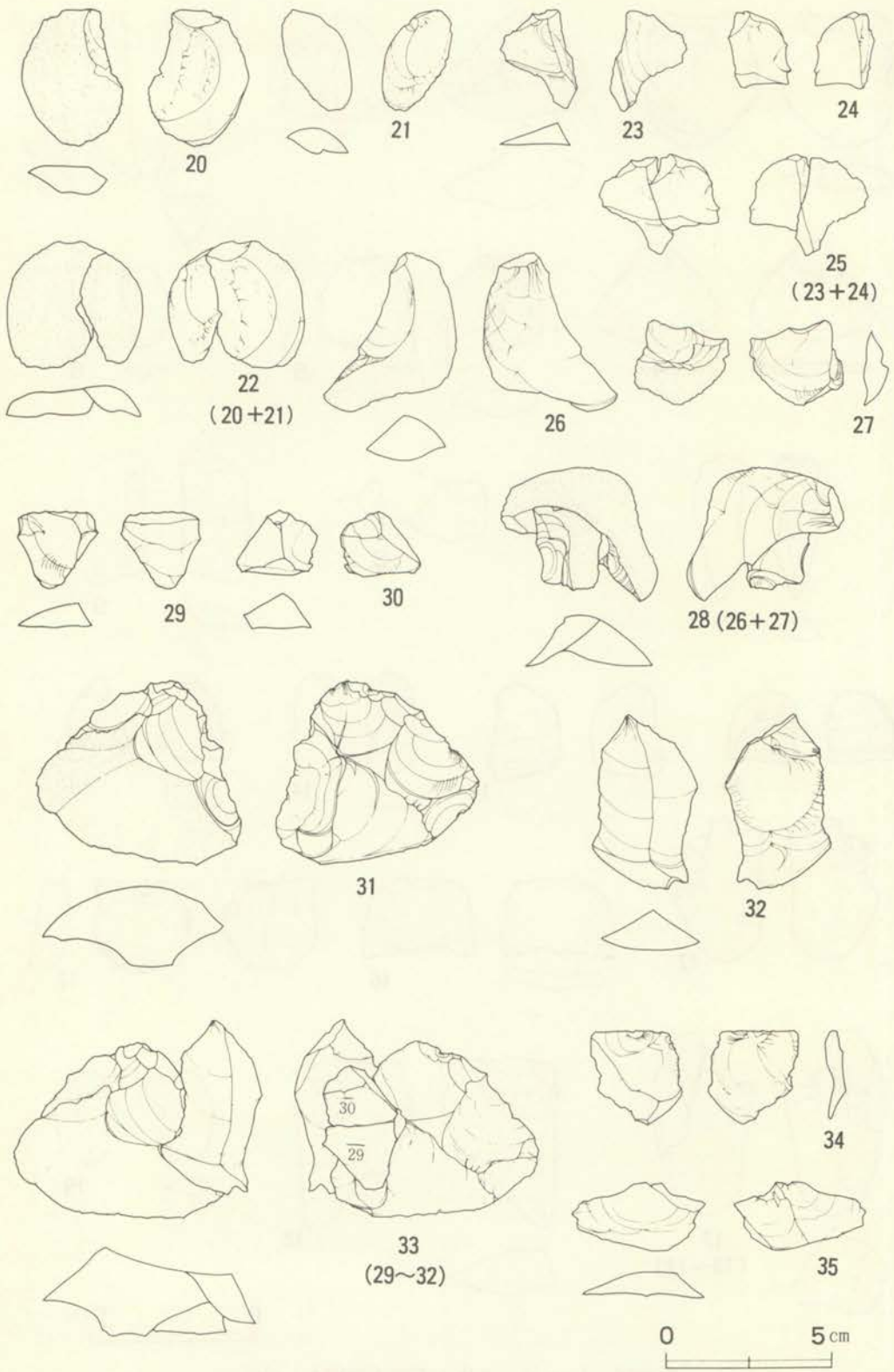
接合資料25。23と24の接合したものである。25の上部にはほぼ平坦な打面を作出し, 接合部へ打撃を加えて剥離を行っている。23はさらに裏面右方向からの剥離が行われている。

接合資料28。26と27の接合したものである。28の表面左方向からの打撃により両者は分離されている。26はこの打撃からほぼ90°転移した平坦な打面を持ち, 比較的良好な剥離が行われている。接合資料22と同一母岩である。

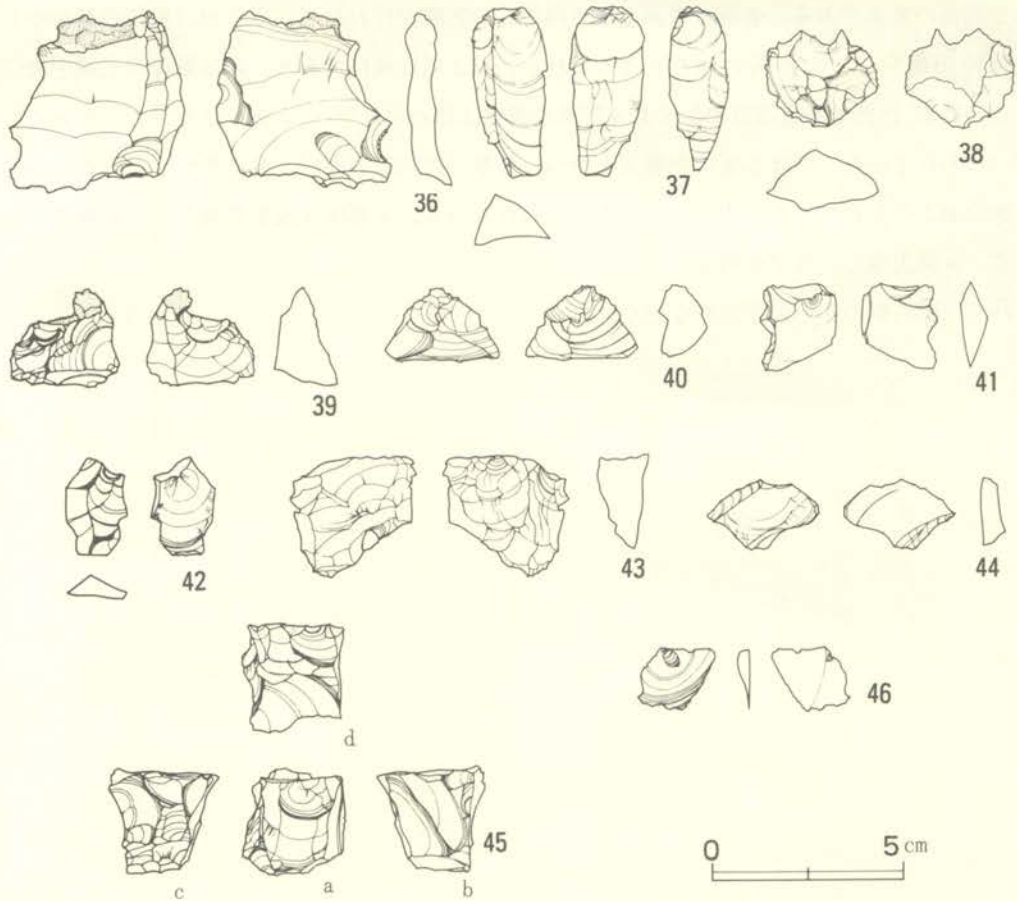
接合資料33。29~32の接合したものである。角礫を素材とする。31の残核と32の剥片は礫面を残し, 表面に大きな剥離面を共有する。上方向からの打撃により縦長の良好な剥片を得たもの



第33图 Loc. 6 - 8 出土石器实测图(1), (1/2)



第34图 Loc. 6-8出土石器实测图(2), ($\frac{1}{2}$)



第35図 Loc. 6 - 8 出土石器実測図(3), (1/2)

と考えられる。29, 30は32の剥離による剥離面を打面とし、同時に剥離された打撃による衝撃で分離したものであろう。また、31の裏面の剥離はほぼ求心的に行われ、表面および32の右側面等からは裏面の求心的な剥離に先行する剥離が認められる。

36~45はメノウ製である。36は加工痕のある剥片である。裏面右側縁の下部に半円状の細かい剥離が施されている。表面右側に明確な下方向からの縦長剥離面が2条認められる。裏面の主剥離面は右下方向からの打撃によるものである。37は縦長の剥片である。上部に平坦な打面を持ち、同一打面で約120°転移して3条の剥離を行い、打撃の方向もほぼ同じである。38, 39は剥片で、38は裏面に自然面を残し、表面は上方向から打撃を加えられている。39の上部には風化した自然面の一部が残っている。裏面は自然面の上端に直接打撃を加えている。表面は右下方向からの剥離が行われている。40は横長の剥片を素材とし、数回の剥離が行われた不定形の剥片である。41は表裏両面に小さな剥離が数回行われている。42は上部に平坦な打面を持ち、裏面

は主剥面のままである。表面は数回の多方向からの剥離が行われている。44は横長の剥片から数回の剥離を行ったのちの残片と考えられる。43と45は残核である。43は裏面上端中央に打点が残る。自然面を直接打撃しており打面の調整は認められない。表面では右下方向からの剥離が行われている。45は6条の剥離面を持つ。打撃の方向は各面によって異なっている。b面は他の面より先行して左上方向から剥離が行われている。a面はd面を打面として剥離された面で、a面上端にバルブが残る。

46は黒曜石製の小形の不定形な剥片である。

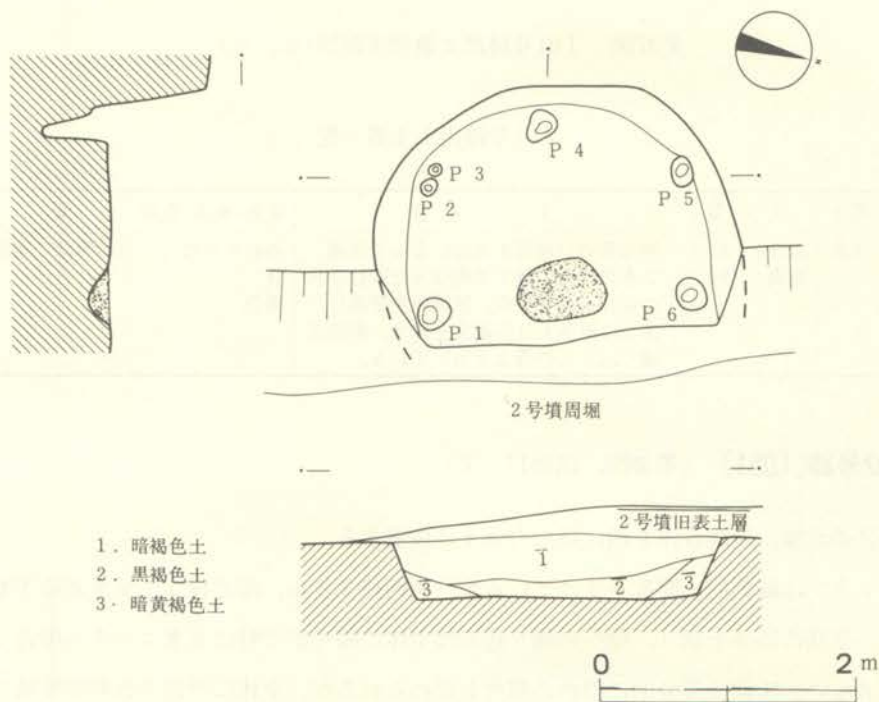
IV 縄文時代の遺構と遺物

1. 住居跡

J01号跡〔307〕（第36図、図版17-1）

調査区の最北端で台地平坦部に位置する。2号墳墳丘下で検出され、東側の $\frac{1}{3}$ を周堀によって切断されている。

平面プランは南北径2.9m、東西径は現存値で2mを測り、推定径約3mの円形を呈する。壁高は45cmを測り、床面より緩やかに立ち上がっている。床面はソフト・ローム中に掘り込まれており、炉跡の周辺部がやや踏み固められているほかは全体に軟弱である。壁溝は認められない。柱穴は壁沿いに検出され6本が確認されている。主柱穴はP1、P4～P6でP5は住居跡の中央部へ向ってやや傾斜しながら穿たれている。P2、P3は規模も小さく浅いが、P1 P4の中間に位置することからセットで柱穴の役割を果たしていたと考えられる。炉跡は70×50cmの長円形プランを呈し、やや住居跡の東側に偏在していると考えられる。火床までの掘り込みは中央部で15cmを測り断面形はレンズ状を呈する、火床はよく焼けて硬くなっているが、焼土層として明瞭に捉えられる層はない。



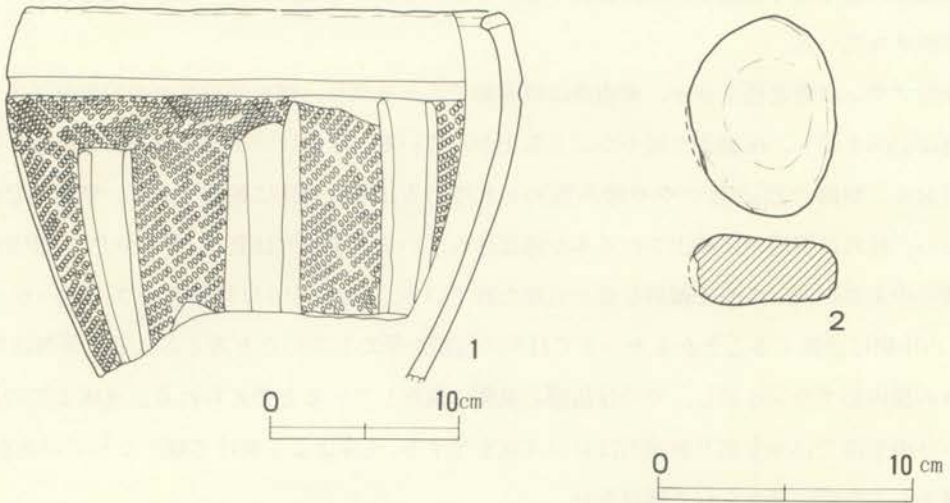
第36図 J01号跡実測図(1/60)

出土遺物 (第37図, 図版26-1, 27-2)

遺物は稀少で, 1がP3のすぐ北側から, 2がP4とP5との間から, ともに床面直上で検出されたのみである。

1は胴部以下と口縁部の一部を欠損する深鉢である。

2は磨石である。全体によく磨かれており, 両面とも中央部がやや窪み, 下端と右側面に磨面が認められる。長径8cm, 短径6cmを測り, 粗粒砂岩製である。



第37図 J01号跡出土遺物実測図(1/4, 1/3)

J01号跡出土土器一覧

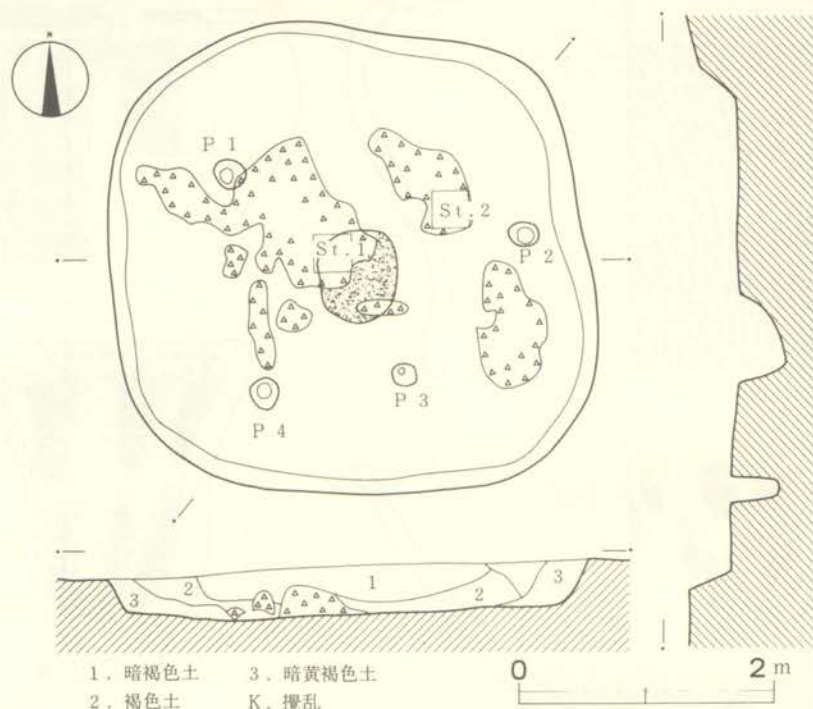
単位はcm, () 現存値

番号	器種	法量	文様	胎土・焼成・色調	備考
1	深鉢	口径 25.1 器高 [19.5]	無文帯の口縁部を沈線によって区画。 2本の沈線の垂下で角ばった逆U字状の文様を構成する。区画内を磨消し, 地文は原体LRの縄文を施文。胴部上端ではRLの縄文を用いている。	砂粒を含む 良 褐色	口唇部に接合痕が認められる。

J02号跡〔051〕 (第38図, 図版17-2)

調査区の北端, 坂崎谷津を西に望む台地上に位置する。

平面プランは部分的に攪乱を受けているが, 東西径3.8m, 南北径3.7mを測る不整形方形を呈する。壁高は35cmを測り, 壁への掘り込みは全体に緩やかで特に北東コーナー附近ではその傾向が著しい。床面は部分的に凹凸の個所も認められるが, 全体に平坦で比較的堅緻である。



第38図 J02号跡実測図(1/50)

壁溝は認められない。柱穴は4本検出されているが、主柱穴はP1, P2, P4の3本が該当すると思われる。P3は他の柱穴に比べ規模も小さく浅く掘り込まれているので柱穴とは異なる性格のピットであることも考えられる。炉跡は住居跡の中央からやや南側へ偏った位置にあり、75×60cmの不整楕円形プランを呈し、火床までは最深部約35cmと大きく掘り込まれている。焼土は南に偏って遺存し、堆積土中には貝殻の破片が混入している

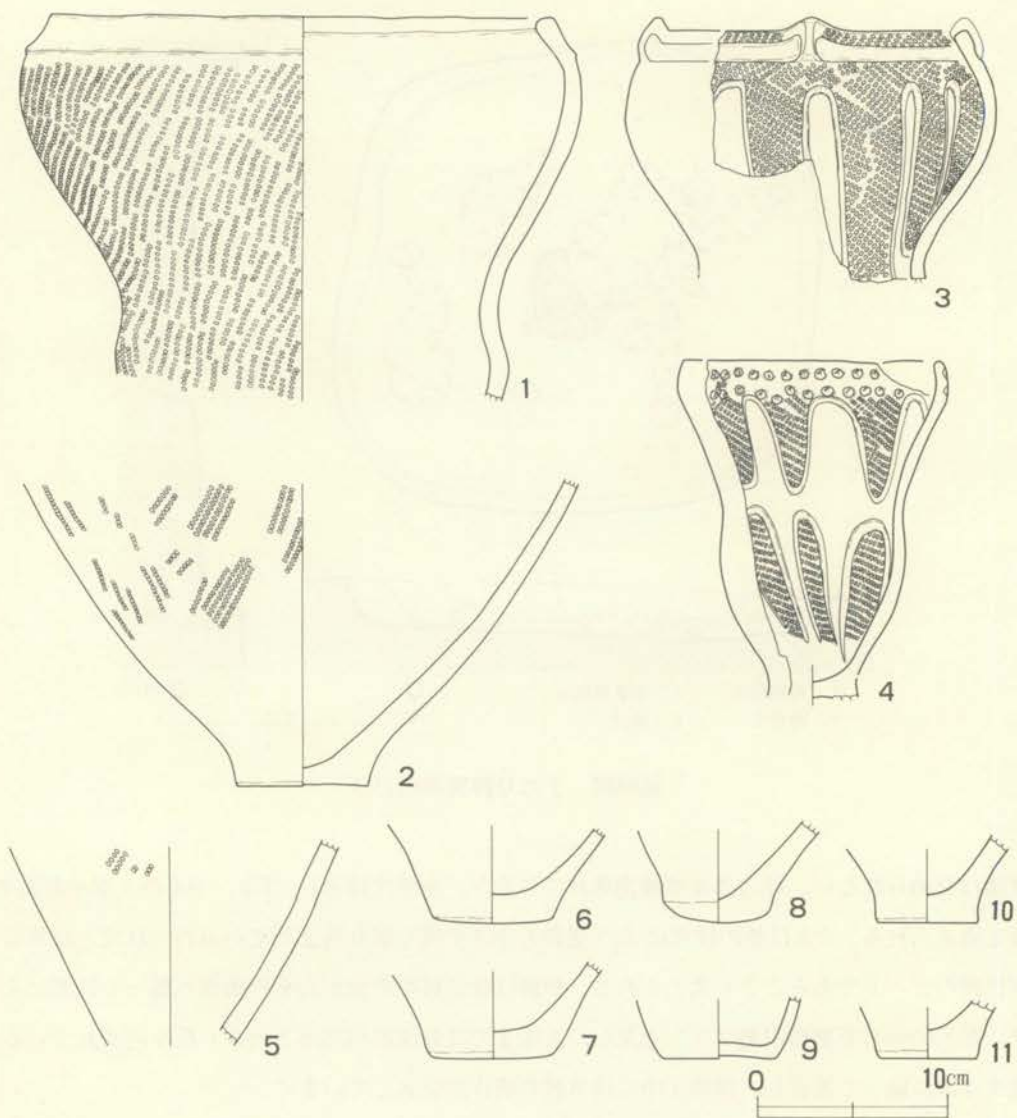
炉跡の北側を中心に東側へかけて貝殻ブロックが床面から床直上に堆積している。その堆積状況に層序的な変化は認められないことから、住居跡廃絶後にほぼ同時に投棄されたものと考えられる。サンプルした貝類の分析については後述する。

出土遺物 (第39~41図, 図版26-2・3, 28-1)

遺物は住居跡の西側部分を中心に出土している。

1~4は深鉢である。1は炉跡西側床面から出土し、胴部下半を欠損する。2, 3は覆土中からの出土である。2は胴部以下, 3は1/5の遺存である。4は炉跡西側の貝層中から出土し、2/5の遺存である。5は胴部のみの遺存で覆土中からの出土である。

5~11は深鉢の底部である。丸底(8), ややあげ底(9)以外は平底で、すべて覆土中から出



第39図 J 02号跡出土土器実測図(1/4)

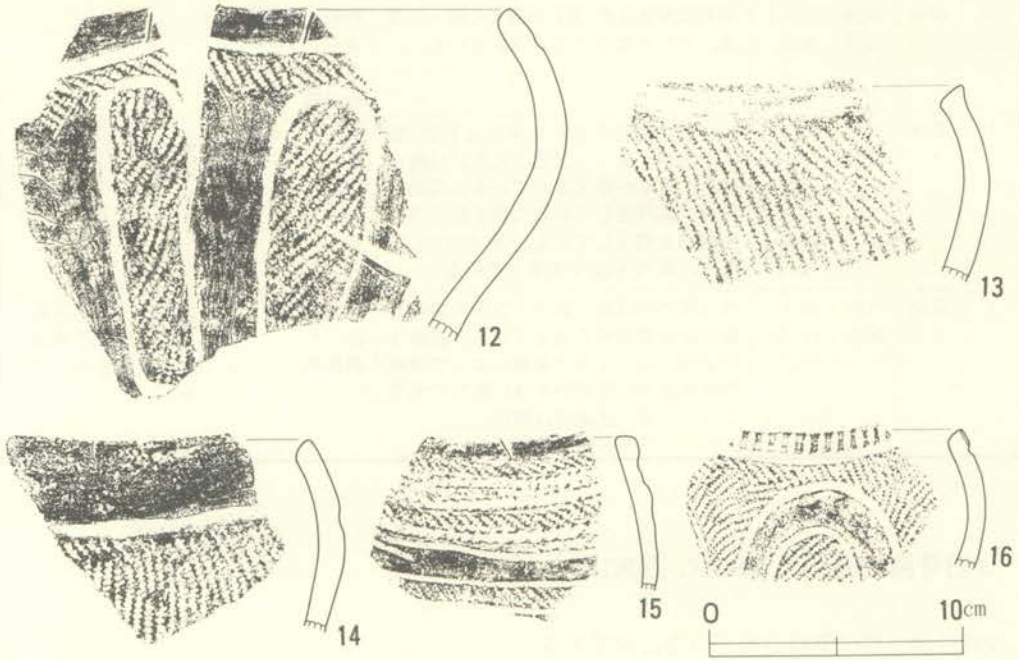
土している。

12~16は深鉢口縁部の破片である。12は貝層中、その他は覆土中からの出土である。

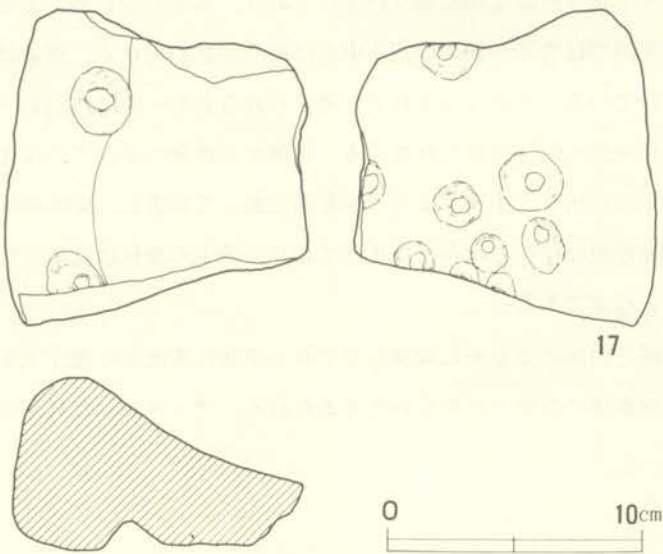
12は無文帯を有する口縁部を沈線で区画し、この沈線直下にRL縄文を施文している。胴部には逆U字状に沈線を垂下させ、その内側をLR縄文で充填させている。13は口縁部に無文帯を有し、胴部はRLの縄文を施文する。14は無文帯を有する口縁部を沈線で区画し、胴部の地文にはRL縄文が施文されている。15は口縁部にRLの縄文を施し、その直下に横走る半截竹管による刺突文帯、RL縄文が施文された微隆起帯が続いている。16は沈線で区画された口縁部に刻目を有し、胴部には2本の沈線で区画された懸垂文を施している。区画内は磨消、地

文は上半RL, 下半がLRの縄文を充填している。

17は石皿の破片である。表面を石皿として使用し、よく磨かれている。縁部が残る。凹石として二次的に使用され、表面縁部と裏面に凹みが認められる。最大長12.2cm, 最大幅11.8cm, 重量 970 g を測る。玄武岩製で床面からの出土である。



第40図 J02号跡出土土器拓影図(1/3)



第41図 J02号跡出土石器実測図(1/3)

J 02号跡出土土器一覧

単位はcm, ()推定値, []現存値

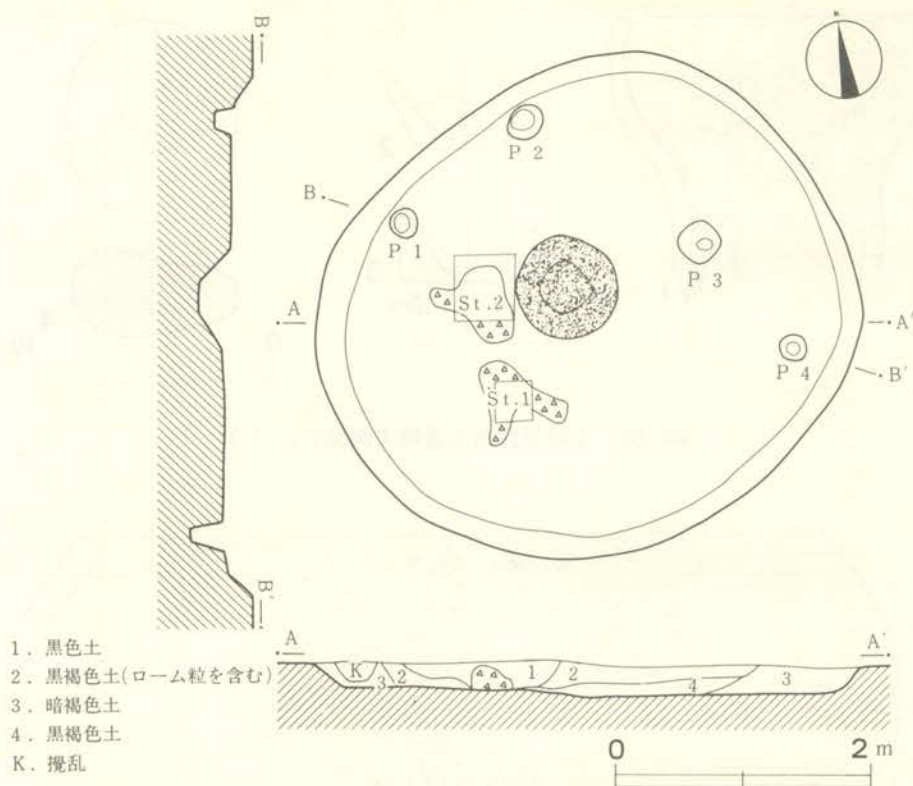
番号	器種	法 量	文 様	胎土・焼成・色調	備 考
1	深鉢	口径 26.4 器高 [20]	無文帯の口縁部を微隆起帯によって区画。器面には原体LRの縄文を全面に施文する。	砂粒、小石を含む。 良 暗褐色	器面の下部は二次的焼成を受け、上半には煤が付着する。
2	深鉢	器高 [15.5] 底径 6.8	器面は原体LR, RLの縄文を疎らに施文、それを処々ナデで消している。	砂粒、石英粒を含む 良 暗褐色	
3	深鉢	口径 (16.4) 器高 [13.7]	口縁部に突起を有する(単位は不明)。幅広の沈線によって区画された口縁部にはLR縄文が施文されている。器面は沈線により逆U字状の文様を垂下させ区画内を磨消している。地文はRLとLRの縄文を施文充填している。	砂粒を含む 良 暗褐色	
4	深鉢	口径 (13.4) 器高 [17.2]	無文帯の口縁部に斜め下方から半截竹管による刺穴文を加えている。器面はU字状、逆U字状の沈線によって連続的に区画され、区画内をRL縄文で充填させている。区画外は磨消し。	砂粒を含む 良 黒褐色	底部はややあげ底である。胴部下半は二次的焼成を受けている。

J 03号跡 [053] (第42図, 図版18-1)

坂崎谷津を西に望む台地平坦部に位置する。

平面プランは東西径4.3 m, 南北径3.9 mを測る不整形円プランを呈する。壁高は25cmを測り、全体に緩慢に掘り込まれている。特に南壁から西壁にかけては極めて緩やかに立ち上がっている。床面はソフト・ローム上面に掘り込まれており、部分的に軟弱であるほかは比較的堅緻である。また、平坦ではなく炉跡の周辺を中心に凹凸が認められる。壁溝は認められない。柱穴は4本検出されている。そのうち支柱穴と考えられるP2～P4はほぼ一直線上に並ぶ。それぞれ住居跡の中央部へ向って穿たれている。南側から西側へかけての床面には柱穴は検出されていない。炉跡は住居跡の中央部よりやや北西に偏って位置し、80×80cmの円形プランを呈する。火床までは中央部で約25cm掘り込まれており、焼土の堆積は認められず暗褐色土に焼土粒が混入している程度である。

貝層は炉跡の南側と西側の2か所に隣接してブロック状に床面から覆土上面にかけて堆積している。住居跡廃絶直後に投棄されたものと考えられる。サンプルした貝類の分析については後述する。



第42図 J 03号跡実測図(1/50)

出土遺物 (第43, 44図, 図版26-1, 29)

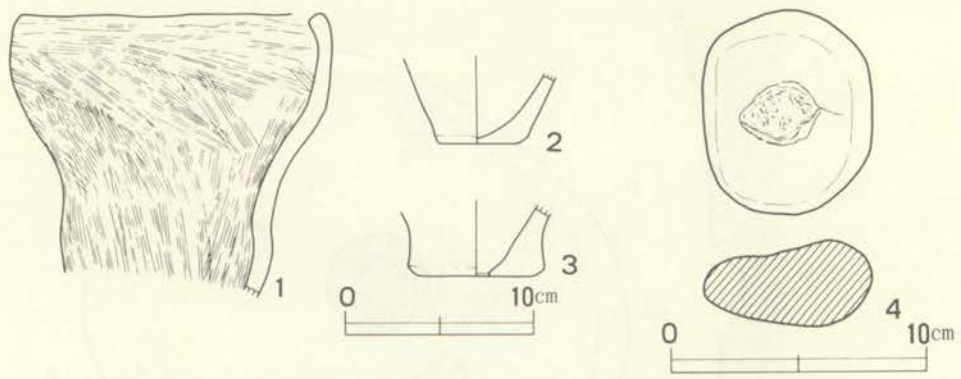
遺物は炉跡を中心に住居跡の西側から北側にかけて出土している。

1は粗製の深鉢で胴部下半を欠損する。炉跡北側の床面からの出土である。

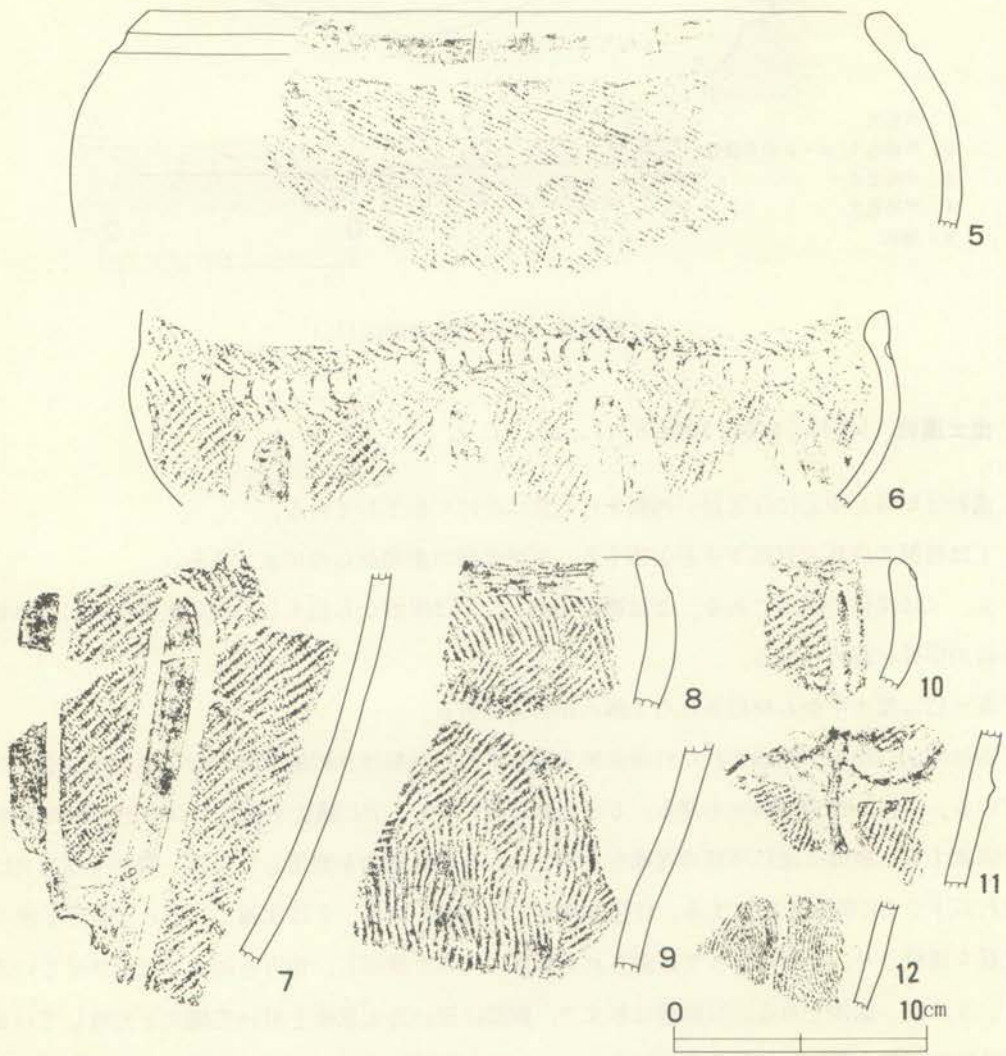
2, 3は深鉢の底部である。2は覆土中から, 3は床面から出土し, 3の底部中央には外側からの穿孔が認められる。

5~12は覆土中から検出された土器の拓影図である。

5は幅広の沈線で区画された口縁部無文帯を有し, 胴部は比較的原体の短い縄文を地文としている。口径は推定で29cmを測る。6は波状口縁を呈し, RL縄文を施した口縁部を刺突文帯で区画する。胴部は逆U字状の沈線を垂下させ, その区画内を磨消している。胴部上端をRL, それ以下をLR縄文で施文する。口径は推定で29.4cmを測る。7は沈線でU字状と逆U字状の文様を連続させ, これによって区画された胴部的一方を磨消し, 他方を縄文で充填させている。8, 9は同一個体である。口縁部は無文で, 胴部は短い施文原体を用いて縄文を充填している。10は口縁部無文帯に円形刺突文が加えられ, 口縁部上端から幅の狭い逆U字状の沈線を垂下さ



第43图 J03号跡出土遺物実測図(¼, ½)



第44图 J03号跡出土土器拓影图(¼)

せている。地文はLR縄文である。11は微隆起帯によって区画され、地文はLR縄文が施されている。12は条線文が施文される。

4は磨石である。表裏両面に磨痕が残る。表面中央に敲打による打痕が認められる。最大長8 cm, 最大幅6.6 cm, 重量280 gを測る。硬砂岩製で、炉跡覆土中からの出土である。

J 03号跡出土土器一覧

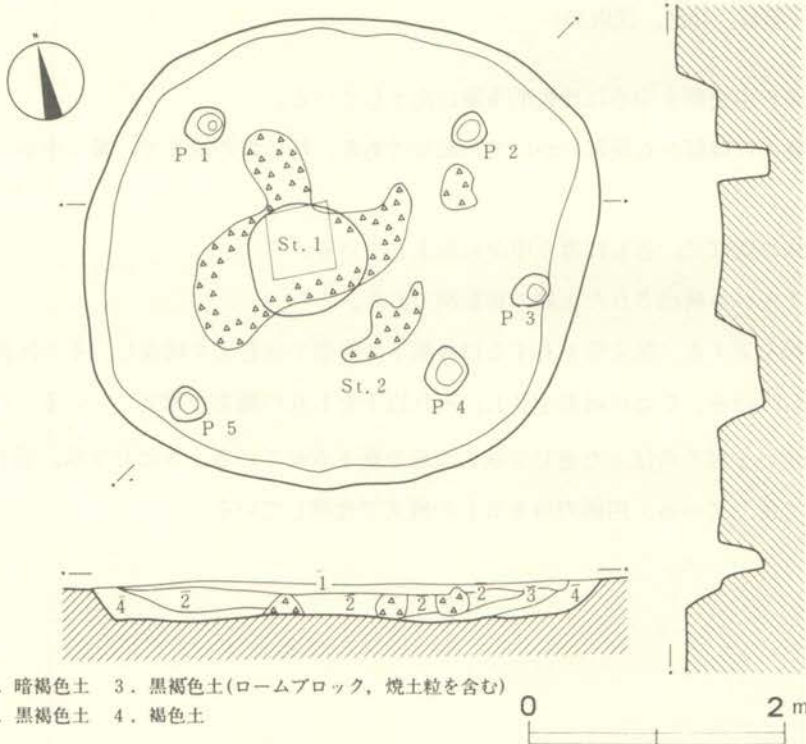
単位はcm, [] 現存値

番号	器種	法 量	文 様	胎土・焼成・色調	備 考
1	深鉢	口径 15.8 器高 [14.9]	全面に直線的な条線文が施文をされている。口縁部が横位、胴部上半が斜行、下半が縦位となる。	砂粒を含む 良 黒褐色	

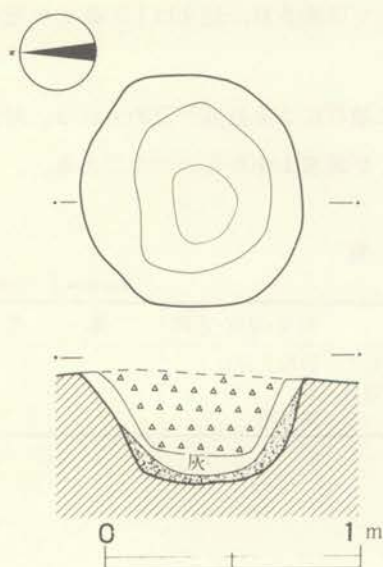
J 04号跡 [055] (第45図, 図版18-2)

J 03号跡の西26m, 坂崎谷津をすぐ西へ望む台地縁辺部に位置する。

平面プランは東西3.9 m, 南北3.6 mを測り、不整形を呈する。西壁部分は特に木根による攪乱が著しいため上辺は床面からの立ち上がりで推定した。壁への掘り込みは東壁の中央部分が緩慢なほかはほぼ一定の傾斜を保っている。壁高は30cmを測る。床面はソフト・ローム上



第45図 J 04号跡実測図(1/60)



第46図 J 04号跡炉実測図(1/30)

面に掘り込まれているため平坦ではあるが全体に軟弱である。壁溝は認められない。柱穴は5本検出されたが、このうち主柱穴と考えられるのはP1, P2, P4, P5, の4本で、P5がやや壁際に穿たれているほかはほぼ等距離で住居跡の直径上に位置している。P3は壁沿いに位置し、他の柱穴に比べ浅く穿たれ補助的柱穴と考えられる。炉跡(第46図)は住居跡の中央よりやや西に偏った位置にあり、90×90cmのほぼ円形プランを呈している。火床への掘り込みは中央部で44cmと深く、断面形はレンズ状を呈する。5cmほどの厚さの焼土層の上には厚い灰層が堆積し、さらにその上に中央部で30cmの厚さに貝層が充満している。この貝層は炉跡を大きく覆うような形で堆積している貝層の一部であるが、灰層との間には間層が認められず、住居跡の廃絶直後に投棄されたものと考えられる。サンプルした貝類の分析については後述する。

出土遺物 (第47, 48図, 図版30)

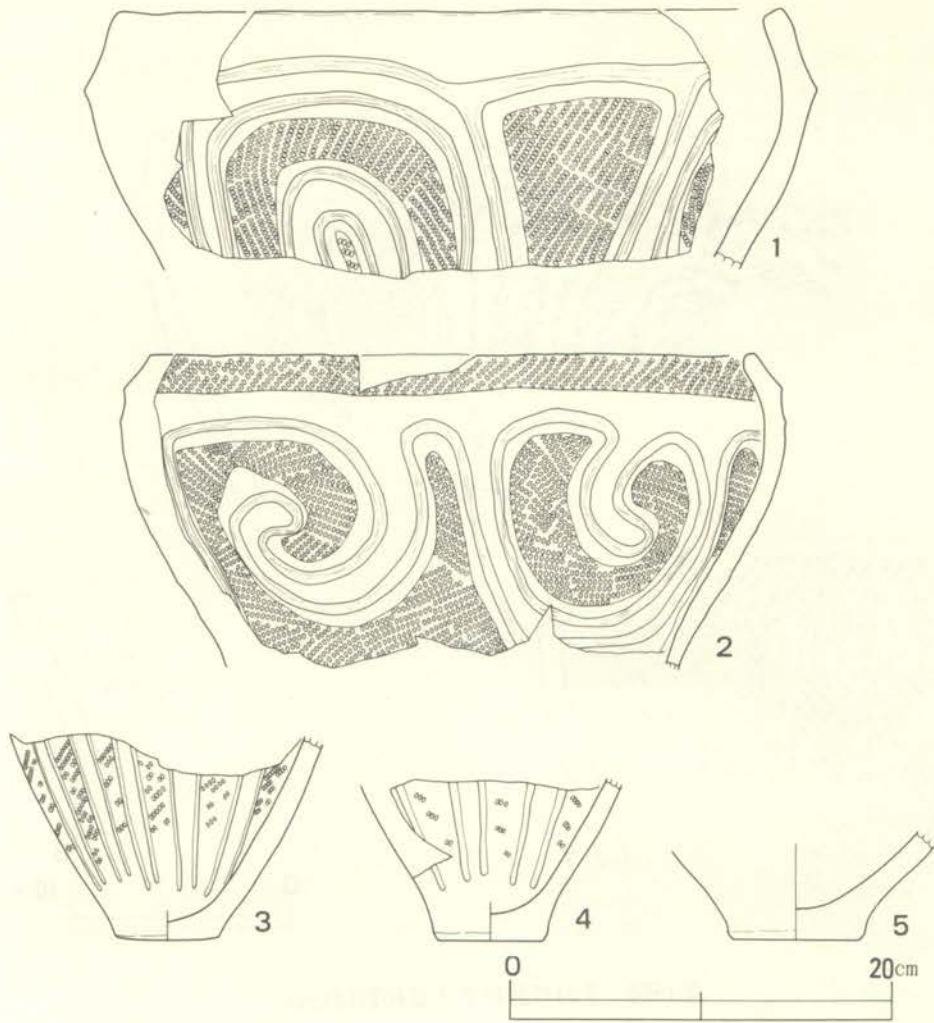
遺物は住居跡の中央部を中心に比較的多量に出土している。

1, 2は深鉢の口縁部から胴部にかけての破片である。約1/3周の遺存で、覆土中からの出土である。

3～5は深鉢の底部で、ともに覆土中から出土している。

6～8は覆土中から検出された土器の拓影図である。

6は波状口縁を呈する。無文帯を有する口縁部下に隆帯で渦巻文を構成し、その区画内にRL縄文を施文している。7は口縁部をRL, それ以下をLRの縄文で施文している。口縁部の上方から幅の狭い上部の角ばった逆U字状の沈線を垂下させている。8はU字状, 逆U字状の沈線を連続して配している。円画内外をRLの縄文で充填している。

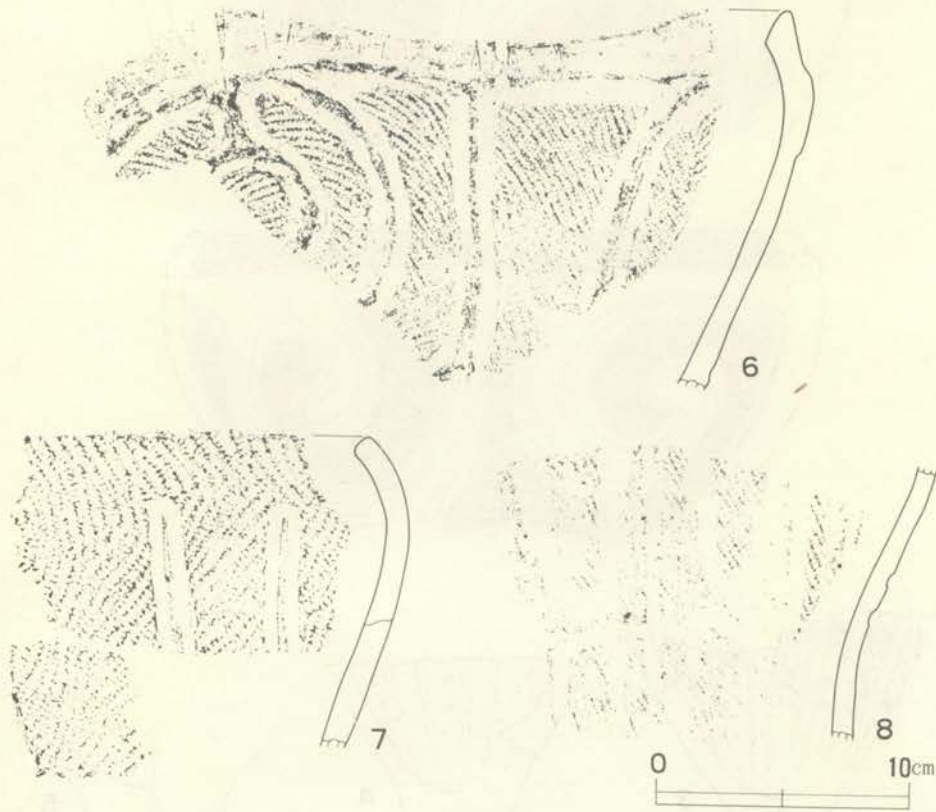


第47図 J 04号跡出土土器実測図(1/4)

J 04号跡出土土器一覧

単位はcm, ()推定値, []現存値

番号	器種	法 量	文 様	胎土・焼成・色調	備 考
1	深鉢	口径 (34.6) 器高 [13.6]	無文帯の口縁部を有する。2本の隆起帯により文様を構成する。欠損のため正確な文様は不明であるが、渦巻文か楕円文の連続になると考えられる。隆起帯の側面は沈線化された磨消部となっている。区画内を原体LRの縄文で充填している。	砂粒を含む 良 暗褐色	
2	深鉢	口径 (31.6) 器高 [16]	微隆起帯で区画された口縁部をRLの縄文で充填している。隆起帯で渦巻文を構成する。区画内に原体RLの縄文を充填させている。隆起帯の側面は幅広の沈線化された磨消部となっている。	砂粒を含む 良 暗褐色	

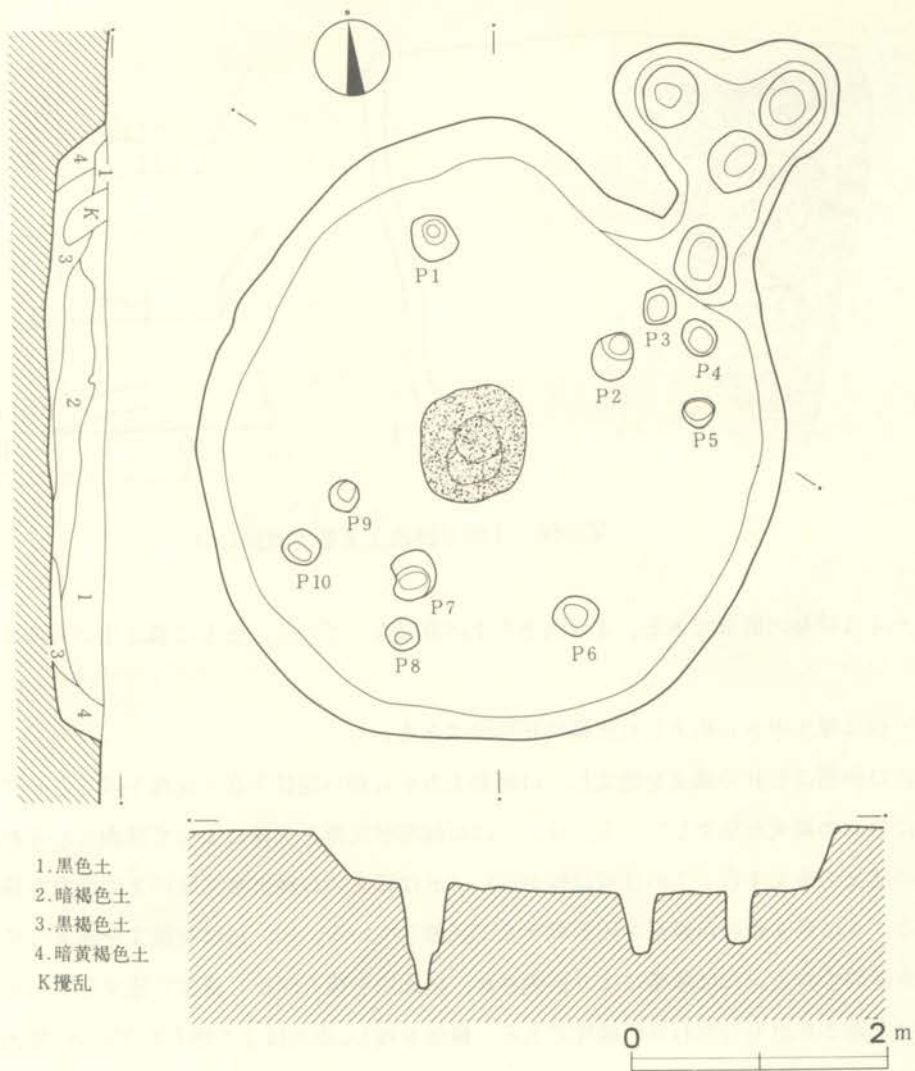


第48図 J04号跡出土土器拓影図(1/3)

J05号跡〔058〕 (第49図, 図版19-1)

J04号跡の南東6mの台地平坦部に位置する。F.P.01号跡の一部を切断して構築されている。

平面プランは東西径4.7m, 南北径4.9mを測る不整形円形を呈する。北東壁はほぼ直線的にやや内側へ張り出すような様相を呈している。壁への掘り込みは全体に緩慢で、壁高は約50cmを測る。住居跡の中央から西側を中心に床面全面にわたり焼土、炭化物の堆積が顕著に認められ、火災を受けていたことが想定できる。そのため床面はソフト・ルーム中に掘り込まれているが、焼けて極めて堅くなっている。壁溝は認められない。柱穴は10本が検出されている。このうち主柱穴はP1, P2, P5, P6, P7, P10の6本が該当すると考えられるが、P5



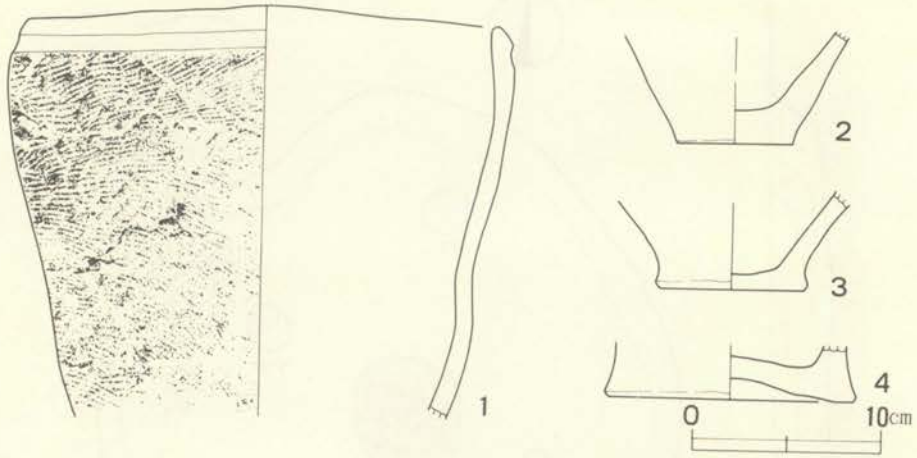
第49図 J05号跡実測図(1/50)

—P6間が1.9m, P1—P10間が2.7mと主柱穴の平面プランは台形を呈する。炉跡は住居跡のほぼ中央に位置し、100×90cmの不整形円形プランを呈する。深さは中央部で約20cmを測り、火床はほぼ平坦に掘り込まれている。良好な焼土層は遺存せず、暗褐色土中に焼土粒が混入する程度である。

出土遺物 (第50~52図, 図版28-2)

遺物は住居跡中央部よりやや東に偏った範囲から出土している。遺物数は比較的少ない。

1は深鉢である。胴部以下を欠損し、炉跡の東側の床面上から出土している。



第50図 J 05号跡出土土器実測図(1/4)

2～4は深鉢の底部である。4は大きく上げ底になっている。ともに覆土中からの出土である。

5～12は覆土中から出土した土器の拓影図である。

5は口縁部にLRの縄文を施文し、口縁部上方から細い逆U字状の沈線を垂下させている。地文はRLの縄文を施文している。6、7は口縁部無文帯を沈線によって区画し、それ以下をLRの縄文で施文する。7の沈線は幅が広い。8は幅広の口縁部無文帯の下に沈線を横走させている。9は無文帯の口縁部を円形刺突文で区画している。10、11は条線文を施文している。10は直線的である。12は隆帯により区画され、区画内を横方向から縄文で施文している。

13は床面より出土した石皿の破片である。縁部を残し、表面はよく磨られている。最大長22.5cm、最大幅12.2cm、重量720gを測る。安山岩製である。

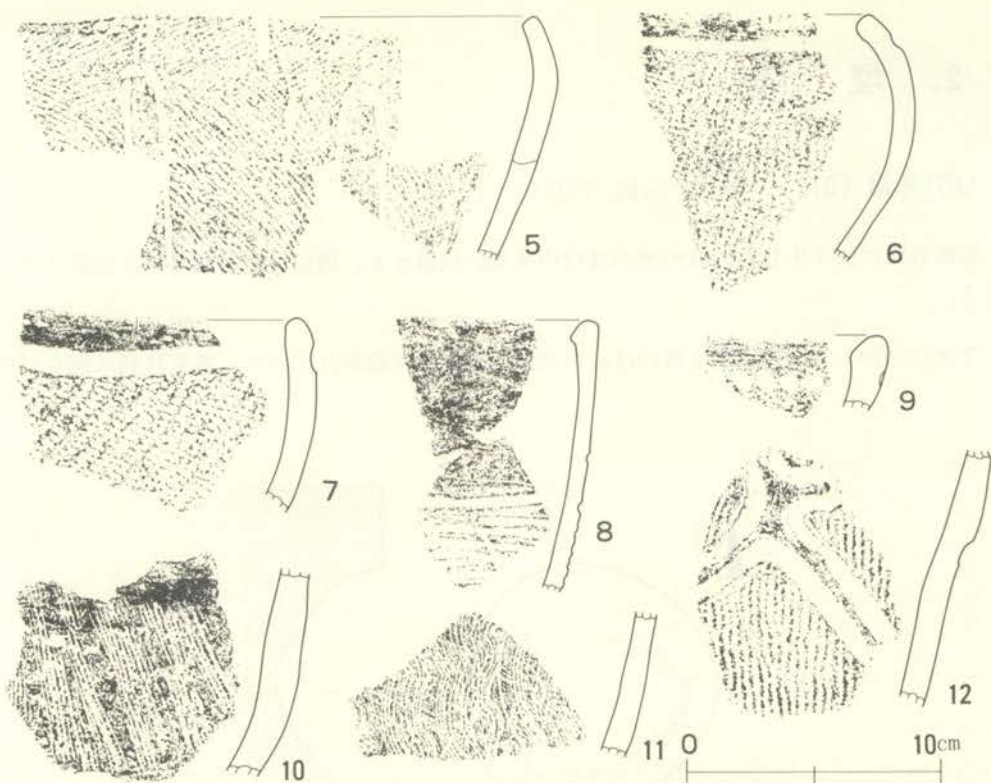
14は覆土中より検出された磨石である。表面2個所に磨痕を残す。最大長9.4cm、最大幅4.9cm、重量360gを測る。硬砂岩製。

15は土製円板である。表面中央が浅く穿孔されている。覆土中からの出土である。

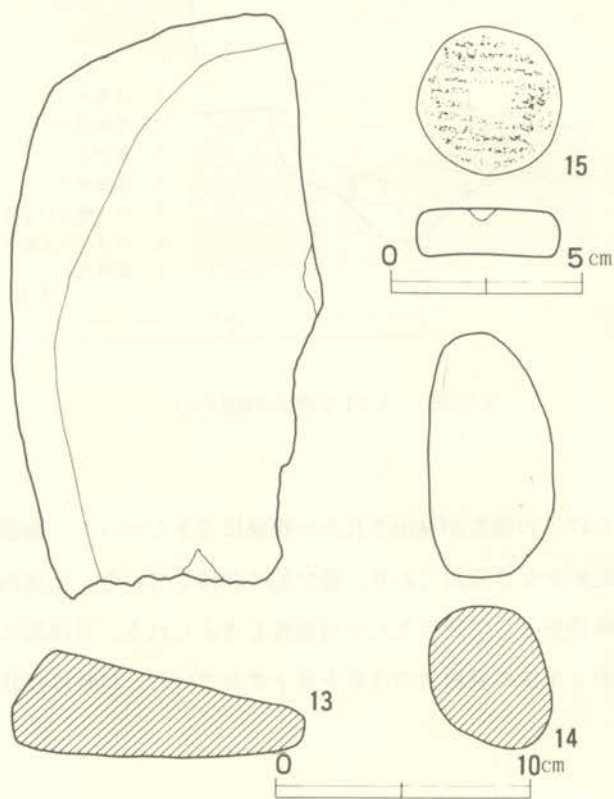
J 05号跡出土土器一覧

単位はcm, () 現存値

番号	器種	法 量	文 様	胎土・焼成・色調	備 考
1	深鉢	口径 24.7 器高 [21.6]	幅広の浅い沈線によって区画された口縁部は無文帯を有する。器面は短い施文原体を用いて施文され、同一原体方向の小さな区画によって構成されている。	砂粒を含む 良 暗褐色	器面は荒れている。 胴部下半は二次的焼成を受けている。



第51图 J05号跡出土土器拓影图(1/3)



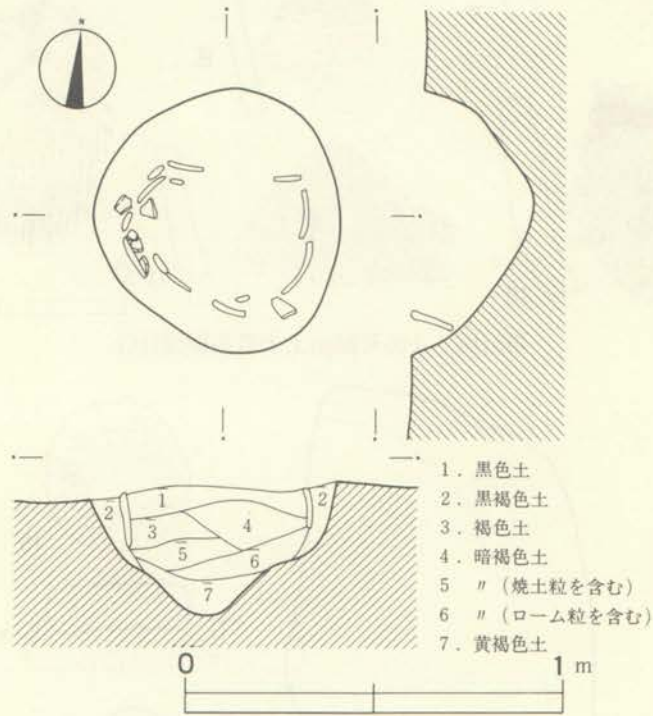
第52图 J05号跡出土遺物実測图(1/2, 1/3)

2. 埋 甕

U01号跡〔012〕（第53, 54図, 図版19-2, 31-3）

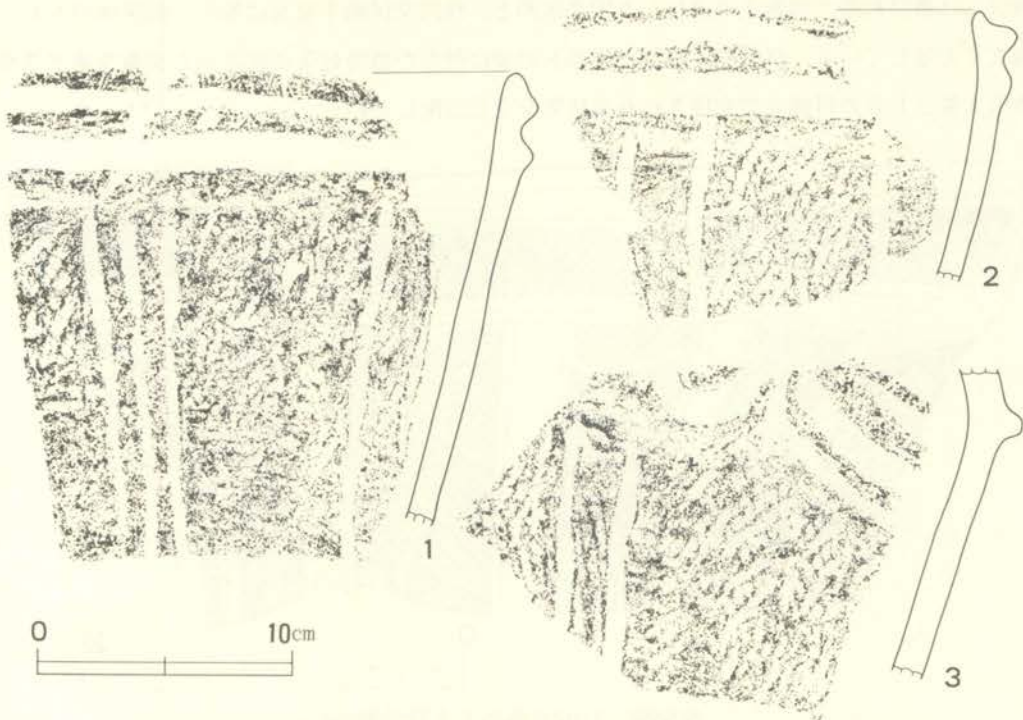
坂崎谷津に張り出した舌状台地のほぼ中央部に位置する。周辺に住居跡等の生活跡は認められない。

埋甕は径70×65cmの円形土壇のほぼ中央部に正位で埋設されていた。遺存状態は悪く、口縁



第53図 U01号跡実測図(1/20)

部から胴部上半にかけての破片が検出されたが復原はできなかった。胴部以下を欠損する。器面は二次的焼成のためかなり荒れており、部分的に剝落している。土壇内の覆土には焼土を含む層も認められ、埋甕炉として使用された可能性も考えられる。口縁部に2本の微隆起帯を巡らし、胴部に2及至3単位の直線状の沈線を垂下させている。口縁は波状を呈するようであるが、判然としない。



第54図 U01号跡出土土器拓影図(1/3)

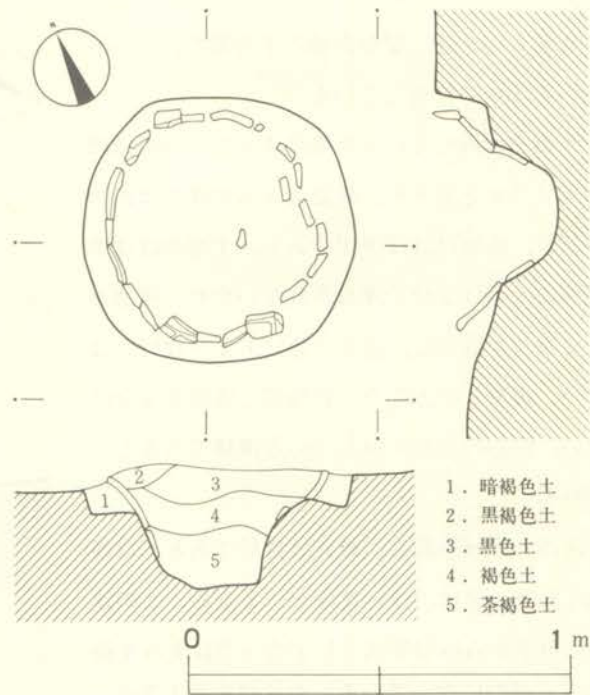
U02号跡〔028〕

(第55, 56図, 図版20-1, 31-1)

舌状台地の先端近くに位置する。

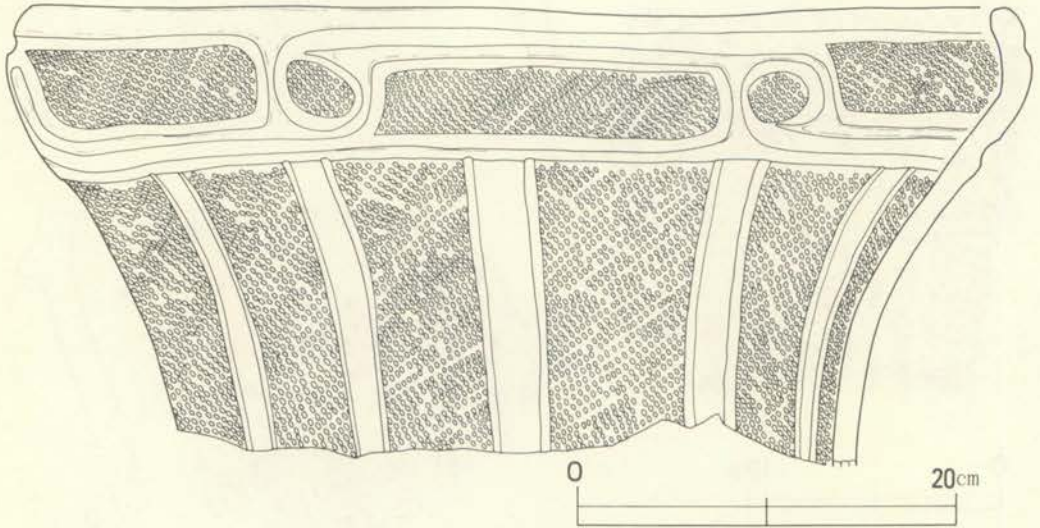
土器を埋設した土壌は径70cm円形プランを呈する。確認面からの深さは約30cmで、浅く掘り込まれ段を形成してから底部に至る。土壌の中央には胴部中位以下を欠損した大形の深鉢が正位で埋設されている。

本遺跡中、最大の土器である。口径51cm, 現高23.8cmを測る。現存部分の遺存状態は良い。口



第55図 U02号跡実測図(1/20)

縁部には微隆起帯で渦巻文の退化した円文区画と、楕円文区画を交互に配し、両区画内をLR縄文で充填している。口縁部区画文と胴部との境に付した微隆起帯の直下から沈線を垂下させ磨消文帯とLRの斜縄文で充填された文様帯を交互に配している。



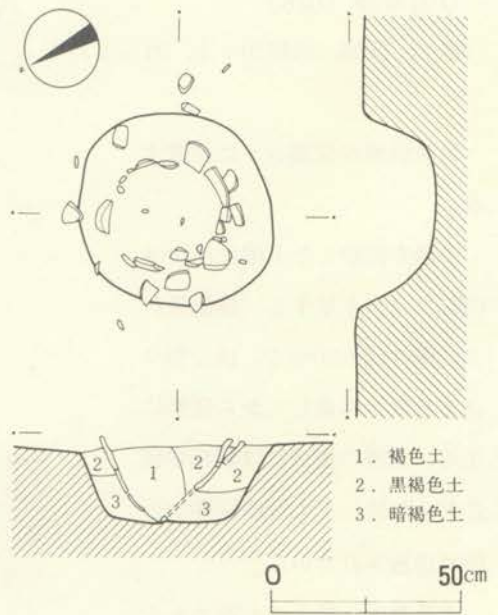
第56図 U02号跡出土土器実測図(1/4)

U03号跡〔060〕 (第57, 58図, 図版20-2, 31-2)

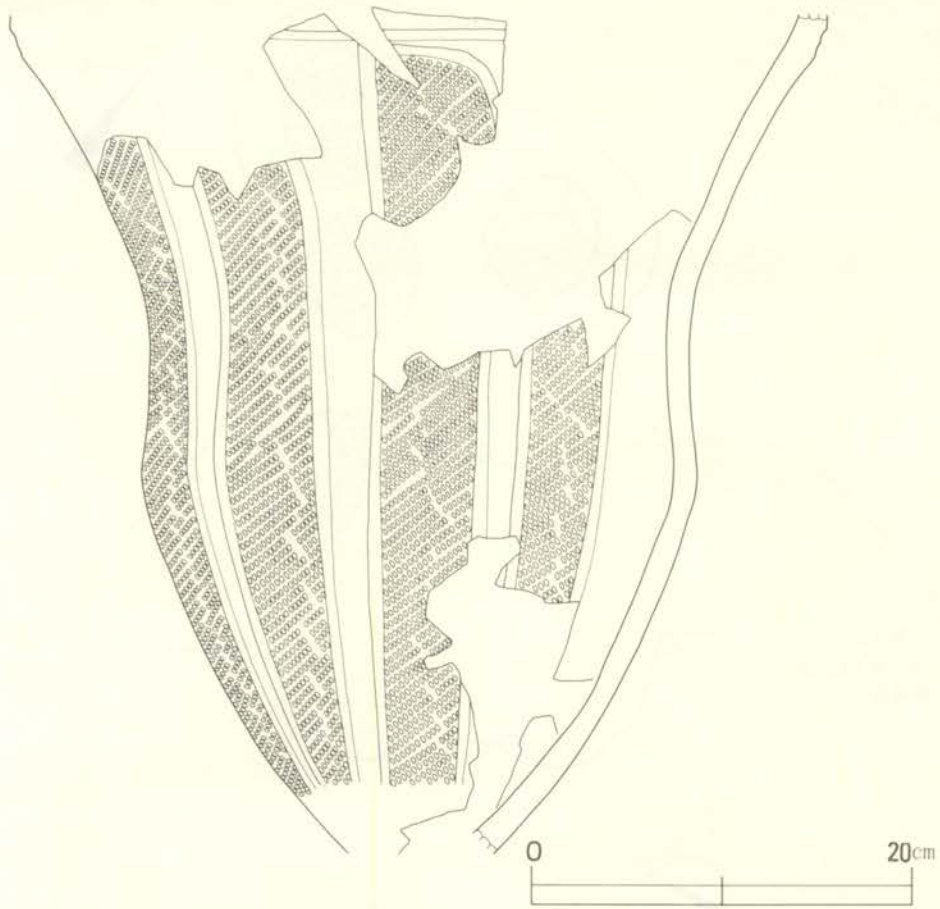
坂崎谷津を西に望む台地の中央部で、J05号跡の北20mに位置している。

土器を埋設している土壌は径50×55cmのほぼ円形プランを呈する。確認面からの深さは20cmを測り、底面はほぼ平坦である。土壌のほぼ中央部に土器は正位で埋設されていたが、確認面に土器片が散乱し、遺存状態はあまり良好ではない。復原したところ、口縁部と底部を完全に失い、胴部の2/3を欠損している深鉢であることが判明した。

現高43.3cmを測る。焼成は良好である。口縁部と胴部の境には浅い沈線が一条走る。この沈線の直下から逆U字状(U字の一方は丸みを持たず直線的になっている)の沈線を垂下させ、



第57図 U03号跡実測図(1/2)



第58図 U03号跡出土土器実測図(1/4)

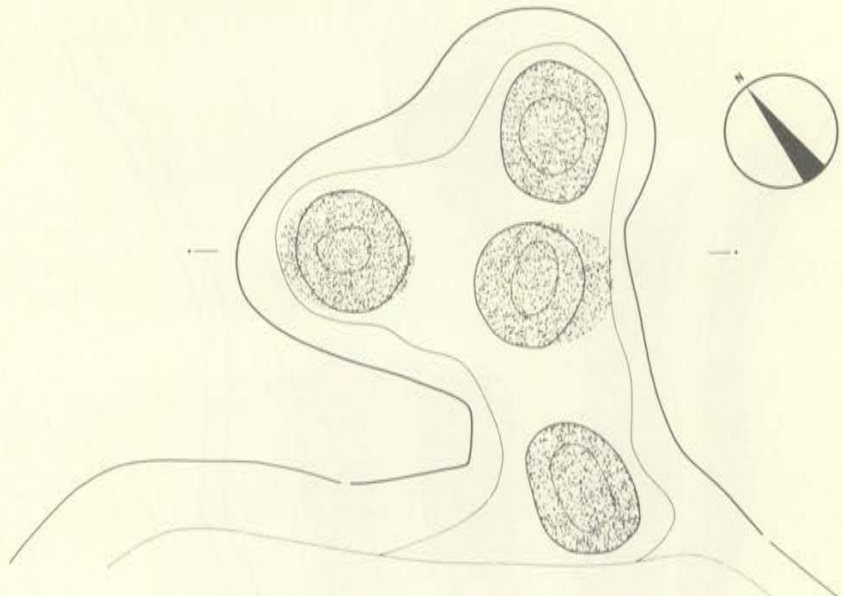
3 炉 穴

F.P.01号跡〔059〕（第59, 68図1、2, 図版21-1）

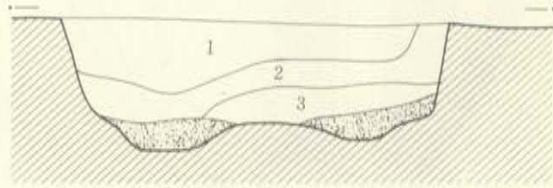
北側炉穴群の北端、台地平坦部に位置する。南西側をJ05号跡によって切断されている。J05号跡の壁面精査中に検出した遺構である。

現状での規模は東西長1.8m、南北長2.3m、深さ0.5mを測る不整形プランを呈する。炉床を4か所（A、B、C、D）有する複合した炉穴である。土層断面の観察からは炉床の新旧関係は明らかにできなかった。機能的な面からみれば、A→B、C→Dの順で設営されたと考えられるがB、Cの前後関係は判然としない。焼土はいずれも10cmほどの厚さで堆積し、炉床の底面はよく焼けている。

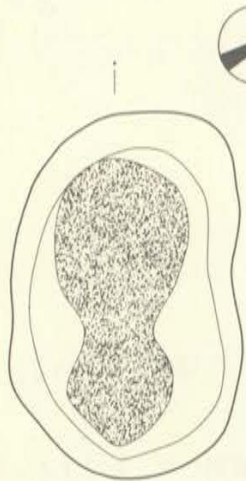
遺物は覆土中より土器片が検出されている。



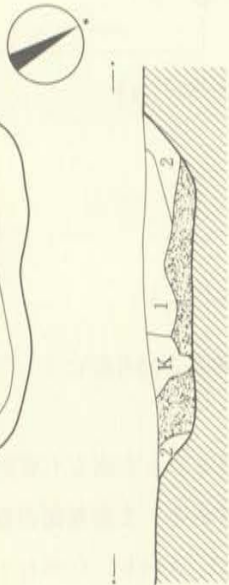
- 1. 黒褐色土
- 2. " (焼土粒を含む)
- 3. 暗褐色土



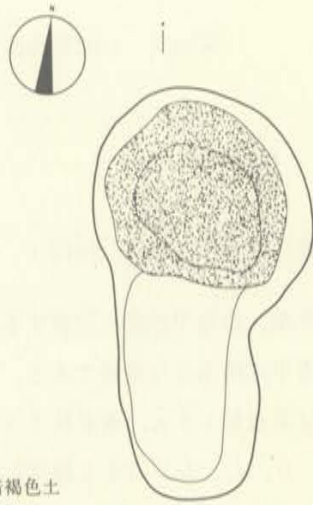
F. P. 01



F. P. 02



- 1. 黒褐色土
- 2. 暗褐色土
- K. 攪乱



F. P. 03



- 1. 暗褐色土
- 2. 褐色土
- 3. 黄褐色土
- 4. " (焼土粒を若干含む)
- K. 攪乱



第59図 F. P. 01, 02, 03号跡実測図(1/50)

F.P.02号跡〔069〕（第59, 68図3～6, 図版21-2）

F.P.01号跡の南東3mに位置する。

長軸長1.4m, 短軸長0.9m, 深さ0.2mを測る長楕円形プランを呈する。炉床底面はほぼ平坦に掘り込まれている。焼土は炉床の北西側を中心にほぼ全面に広がる。炉床の南東部では15cmの厚さに堆積し, 中央部では厚さ10cmを測る。

遺物は覆土中より土器片が検出されている。

F.P.03号跡〔068〕（第59図, 図版21-3）

F.P.02号跡の東4mに位置する。

長軸長1.6m, 最大幅0.9m, 深さ0.2mを測る不整長楕円形プランを呈する。北側に炉床を設け南側には足場と考えられるテラスを有している。足場の最大幅は0.6mを測り, 炉床は足場よりも広がっており, 若干窪んでいる。焼土の厚さは10cmを測る。

遺物の出土は認められない。

F.P.04号跡〔076〕（第60, 68図7～9, 図版22-1）

F.P.03号跡の南16mに位置する。

長軸長2.5m, 最大幅0.9mを測り, 2基の長楕円形プランを呈する炉穴が複合している。北側の旧炉穴(A)の足場を拡張し, 新しい炉穴(B)を形成している。Bは足場を持たず炉床から緩慢に立ち上がっている。焼土の厚さはAで10cm, Bでは20cmを測り, 掘り込みはBの方が15cmほど深くなっている。

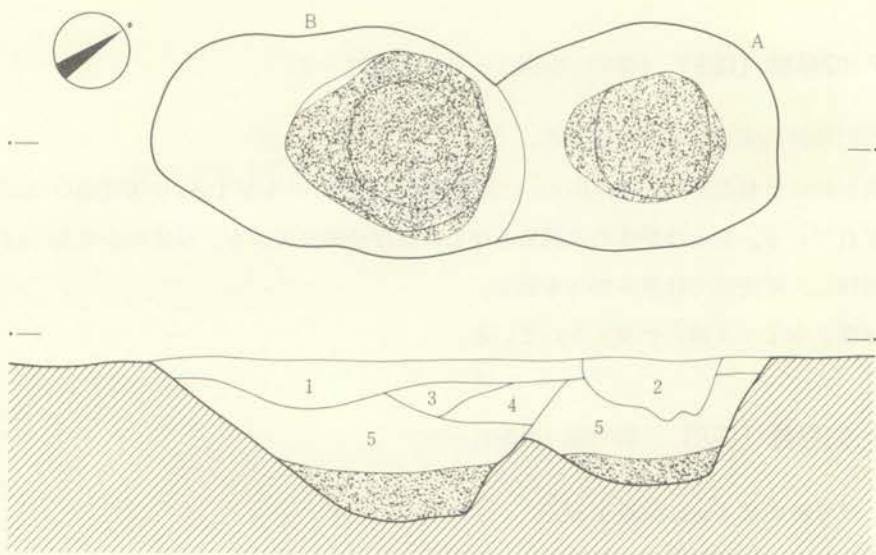
遺物はBの覆土から土器片が検出されている。

F.P.05号跡〔077〕（第60, 68図10～12, 図版22-1）

F.P.04号跡の南側に隣接している。

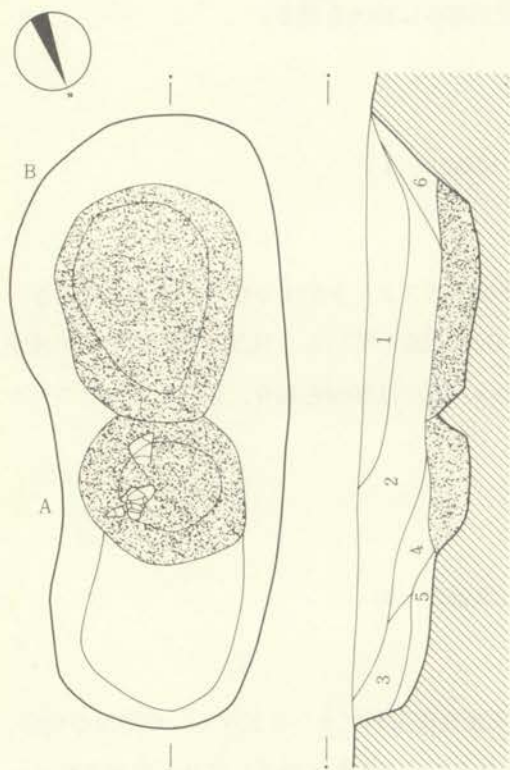
長軸長2.4m, 短軸長1.1m, 深さ0.5mを測る不整長楕円形プランを呈する。炉床は中央部(A)と南側(B)の2か所に検出され, Aが埋没したのち, これを足場としてBが形成されている。焼土の厚さはそれぞれ16cmほどを測る。

遺物はAの炉床より土器片が検出されている。



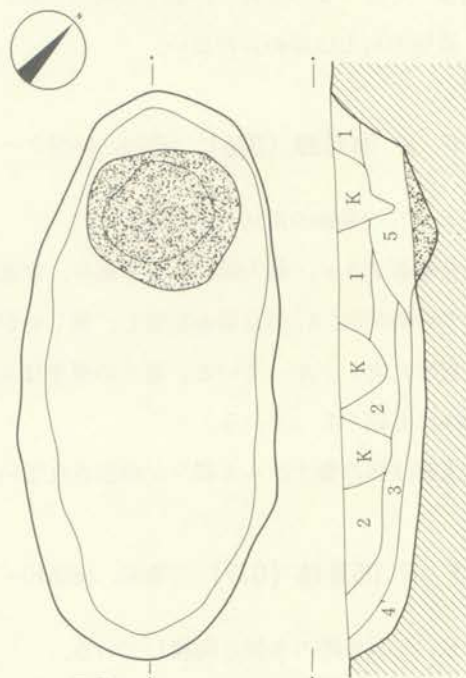
F. P. 04

- | | |
|---------|-----------------|
| 1. 黑褐色土 | 3. 黑褐色土 |
| 2. 黑色土 | 4. 暗褐色土 |
| | 5. 黑褐色土(烧土粒を含む) |



F. P. 05

- | | |
|---------|---------|
| 1. 暗褐色土 | 4. 黑褐色土 |
| 2. 黑褐色土 | 5. 赤褐色土 |
| 3. 暗褐色土 | 6. 黄褐色土 |



F. P. 10

- | | |
|---------|----------|
| 1. 黑色土 | 4. 明褐色土 |
| 2. 黑褐色土 | 5. 暗赤褐色土 |
| 3. 褐色土 | K. 攪乱 |



第60图 F. P. 04, 05, 10号迹实测图(1/30)

F.P.06号跡〔080〕（第61, 68図13~16, 図版22-2）

F.P.04, 05号跡の西1mに近接して位置する。

東西長1.9m, 南北長2.1m, 深さ0.5mを測る鍵状のプランを呈する。炉床は南北の長軸に沿って2か所(A, B), 東西の長軸に沿って1か所(C)の計3か所が検出され, 2基の炉穴が複合していることが判明した。まず, A, Bの炉床を有する炉穴が形成され, これが埋没したのち, この炉穴の足場を利用して旧炉穴と直交する形でCの炉床を有する新しい炉穴が形成されている。旧炉穴の炉床はまずAが, 次にBが設置され, Aは炉床面, 側壁ともよく焼けており, 焼土は壁沿いにも堆積しその厚さは中央部で約10cmを測る。Bの焼土の厚さは中央部で約15cmを測り, 断面形がレンズ状に堆積する。Cは壁沿いにも焼土が遺存し, 凹凸のある炉床面の上に約15cmの厚さで堆積している。

遺物はBの焼土上より土器片が検出されている。

F.P.07号跡〔078〕（第62, 69図18~20, 図版22-3）

F.P.06号跡の南西4mに位置する。

東西長2m, 南北長2.7mを測り, 3基の炉穴が複合している。土層断面から観察すると, 中央部の足場を基点にA→B→Cの順で炉床を設営していったと考えられる。Cの炉床を有する炉穴は, 長軸長2m, 短軸長1m, 深さ0.6mを測る長楕円形プランを呈している。A, Bの炉床を有する炉穴とも原形はこれに近い形態を持つものと考えられる。炉床はそれぞれの端部に設けられている。焼土の厚さはA, Bが26cm, Cが15cmを測り, 炉床面, 側壁ともよく焼けている。

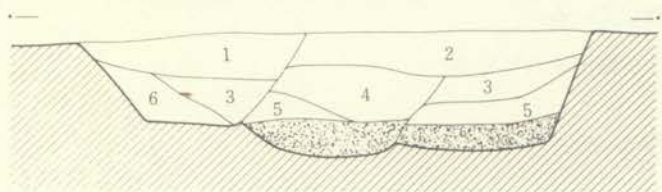
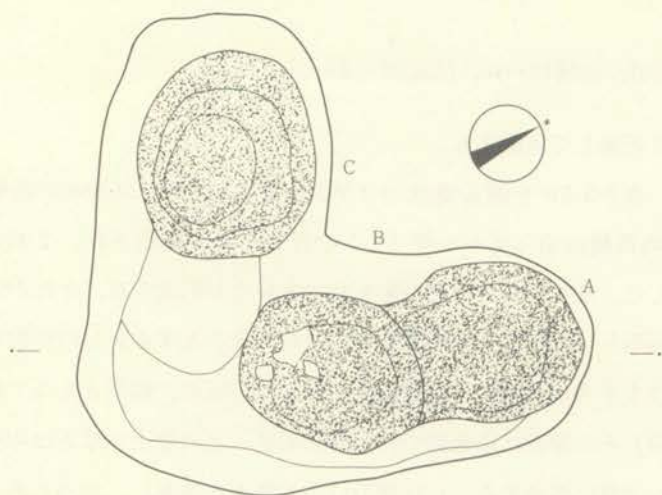
遺物はCの覆土から土器片が検出され, 本遺構に伴うものと考えられる。

F.P.08号跡〔079〕（第61図, 図版23-1）

F.P.07号跡の西6mに位置する。

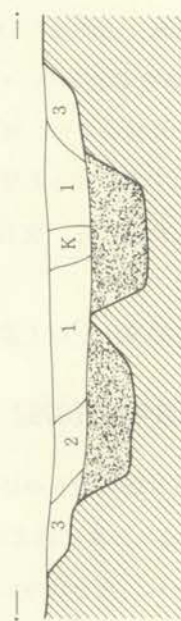
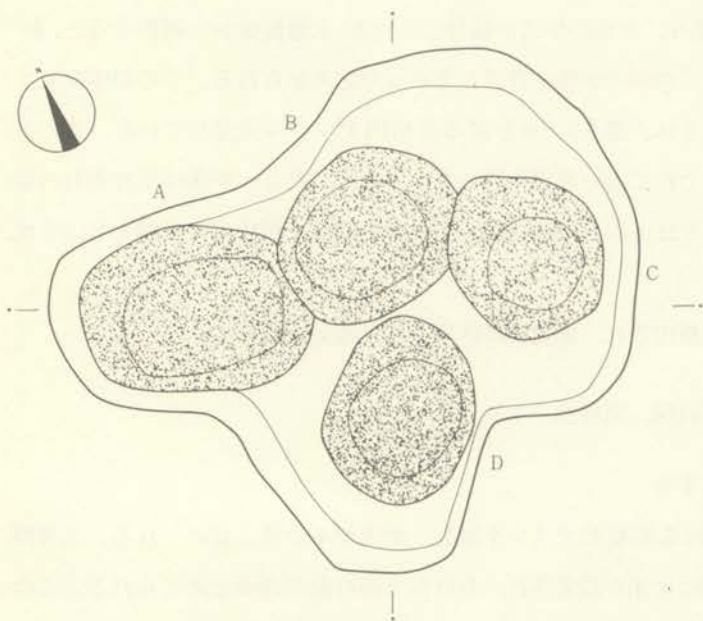
東西長2.3m, 南北長2mを測る不整形プランを呈し, 炉床が4か所に認められる。土層断面の観察から, A→B→Cの順に炉床が設営され, DはBと同時期の所産と考えられる。Aは壁沿いにも焼土が遺存し, 焼土の厚さ中央部で約20cmを測り, 炉床面, 側壁ともよく焼けている。Bの焼土の堆積は約22cm, Dは約18cmを測る。A, B, Dとも炉床面は平坦で, 比較的しっかり掘り込まれている。Cの焼土層は約15cmの厚さで断面形はレンズ状を呈している。いずれも旧炉床を足場として次々に利用しながら新たな炉床を設営している。

遺物の出土は認められない。

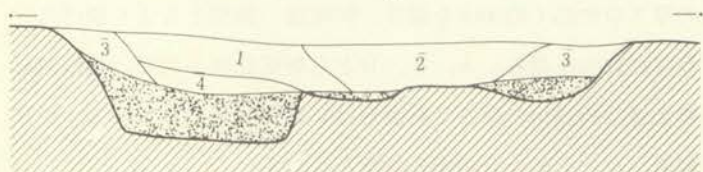


- 1. 黑色土
- 2. 暗褐色土
- 3. 黑褐色土
- 4. * (焼土粒を多量に含む)
- 5. 赤褐色土
- 6. 黄褐色土

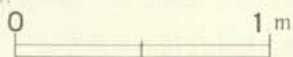
F. P. 06



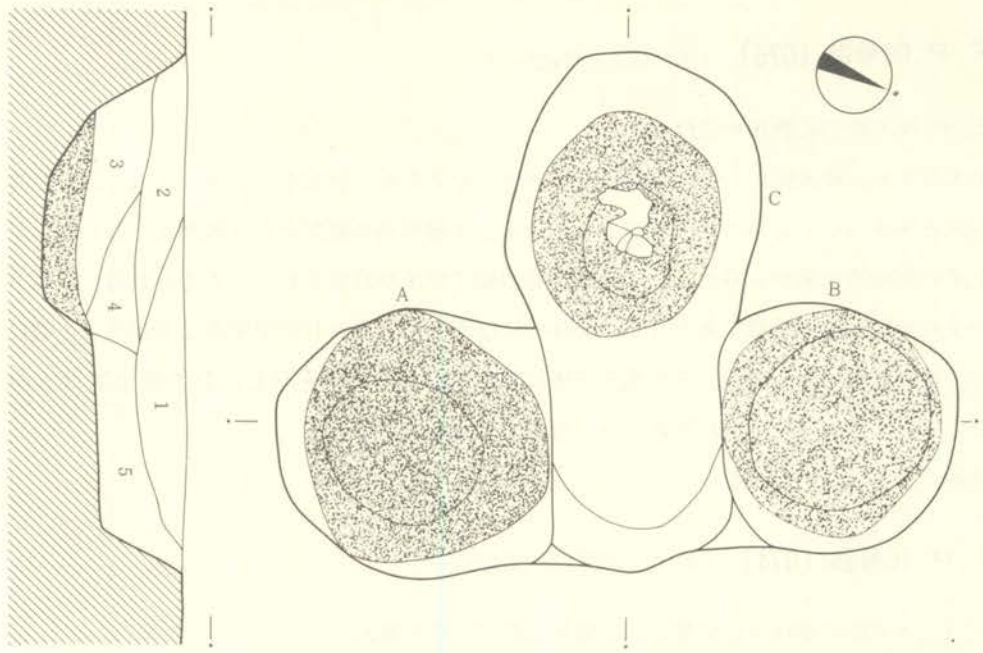
- 1. 黑色土
- 2. 黑褐色土
- 3. 暗褐色土
- 4. 黑褐色土(焼土粒を多量に含む)
- K. 攪乱



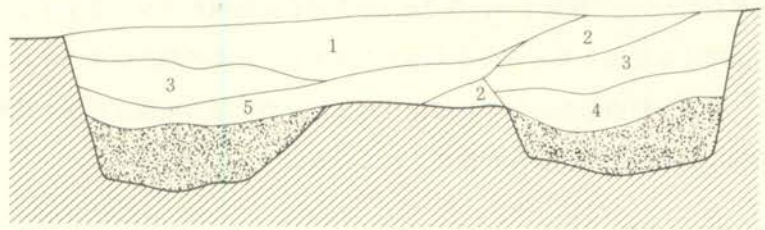
F. P. 08



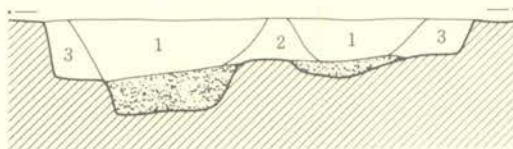
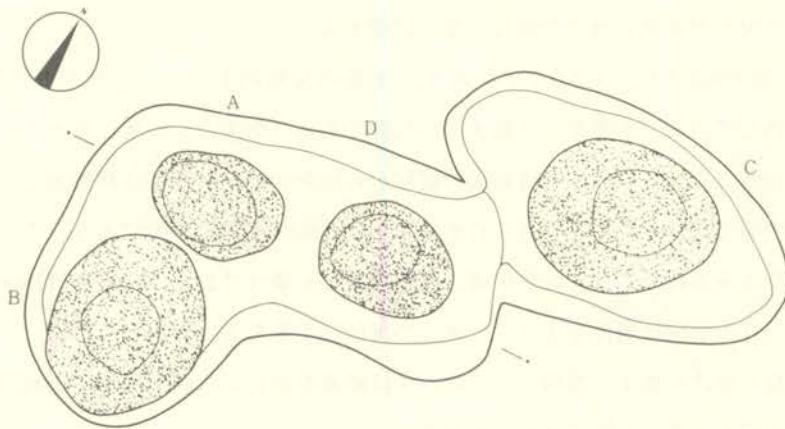
第61図 F. P. 06, 08号跡実測図(1/50)



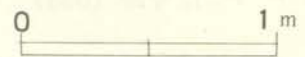
- 1. 黑褐色土
- 2. 黑色土
- 3. 黑褐色土
(焼土粒を多く含む)
- 4. 暗褐色土
- 5. 褐色土



F. P. 07



- 1. 黑褐色土
- 2. 暗褐色土
- 3. 褐色土



F. P. 09

第62図 F. P. 07, 09号跡実測図(1/30)

F.P.09号跡〔075〕（第62図，図版23—2）

F.P.08号跡の北西10mに位置する。

最大長3m，最大幅1.3mを測る不整形プランを呈する。炉床を3か所（A，B，D）に有する炉穴と炉床（C）を持つ炉穴が複合している。土層断面の観察からは判然としないが，炉穴としての機能的な面からみれば，A→B→Dの順で炉床が設営されたと考えられる。CはA，Bいずれかとほぼ同時期であろうが，具体的には不明である。Bの炉床面は平坦でよく焼けており，焼土層は15cmを測る。その他の炉床は断面形がレンズ状を呈し，Dの焼土層は6cmと少なく，B，Cのそれはそれぞれ20cmの厚さで堆積している。

遺物の出土は認められない。

F.P.10号跡〔074〕（第60，68図17，図版23—3）

F.P.09号跡の南14mに位置し，北側炉穴群からやや離れている。

長軸長2.2m，短軸長1m，深さ0.4mを測る長楕円形プランを呈する。炉床は北側に偏在し，その南側には足場と考えられるテラスを有する。足場の幅は炉床のそれよりもやや広がっている。炉床は断面形がレンズ状に掘り込まれ，焼土層の堆積は10cmと比較的少量である。

遺物は覆土中より土器片が検出されている。

F.P.11号跡〔031～034〕（第63，70図21～26，図版24—1）

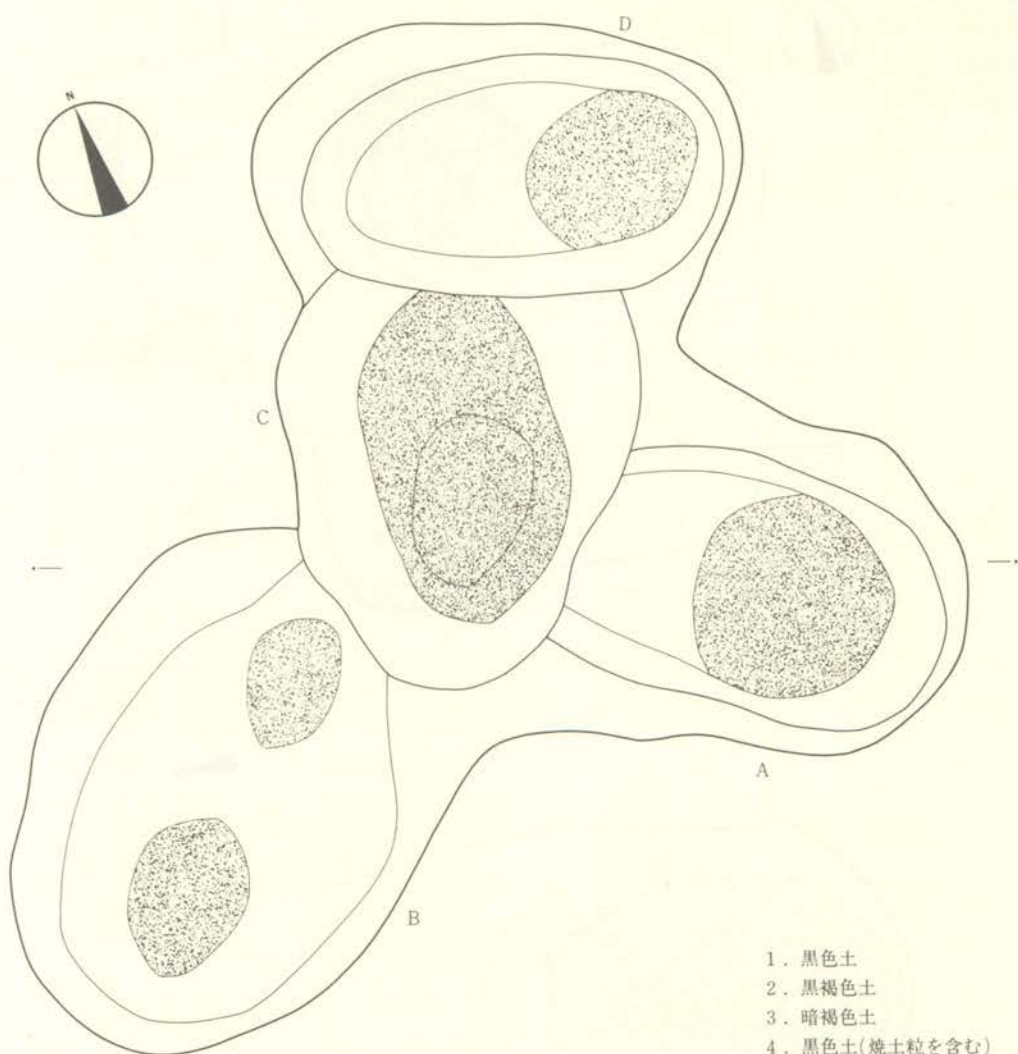
坂崎谷津に張り出した舌状台地の西側縁辺部に位置する。

最大長4.5m，最大幅3.5m，深さ0.7mを測り，4基の長楕円形プランを呈する炉穴（A，B，C，D）が複合している。本遺跡では最大の炉穴群である。炉床は5か所に検出され，Bの炉穴は炉床を2か所に有している。土層断面の観察からは炉穴の前後関係は判然としないが，A，B→C→Dの順で設営されたと考えられる。A，Bの前後関係は不明である。A，Bとも炉床としての掘り込みを持たず，Aは炉床面，側壁ともよく焼けており，焼土層は18cmの厚さで堆積している。Bの炉床は規模も小さく，焼土の堆積は少量であった。Cの炉床には，厚さ15cmにわたって良く焼けた焼土が堆積し，Dの炉床は断面形がレンズ状に掘り込まれ，炉床面，側壁ともよく焼けており焼土の厚さは20cmを測る。

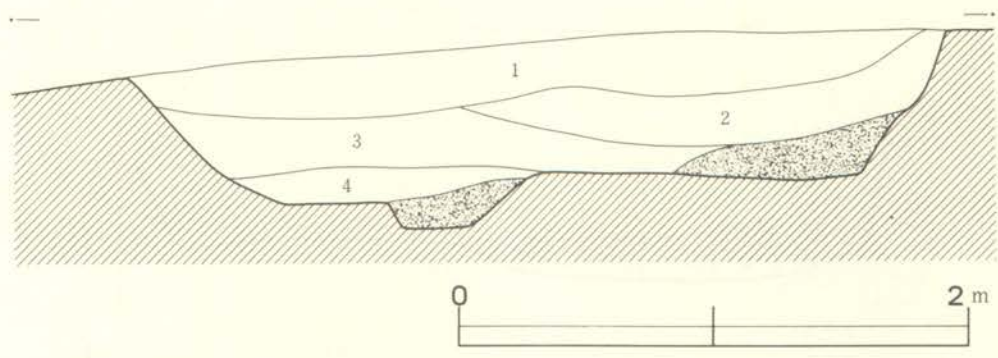
遺物は覆土中より土器片が検出されている。

F.P.12号跡〔038〕（第65図）

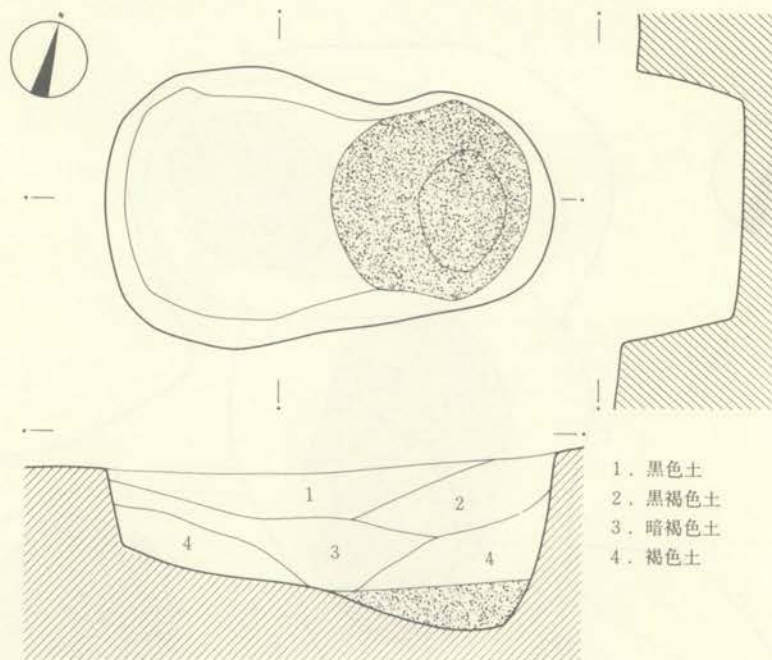
F.P.11号跡の東4mに位置する。



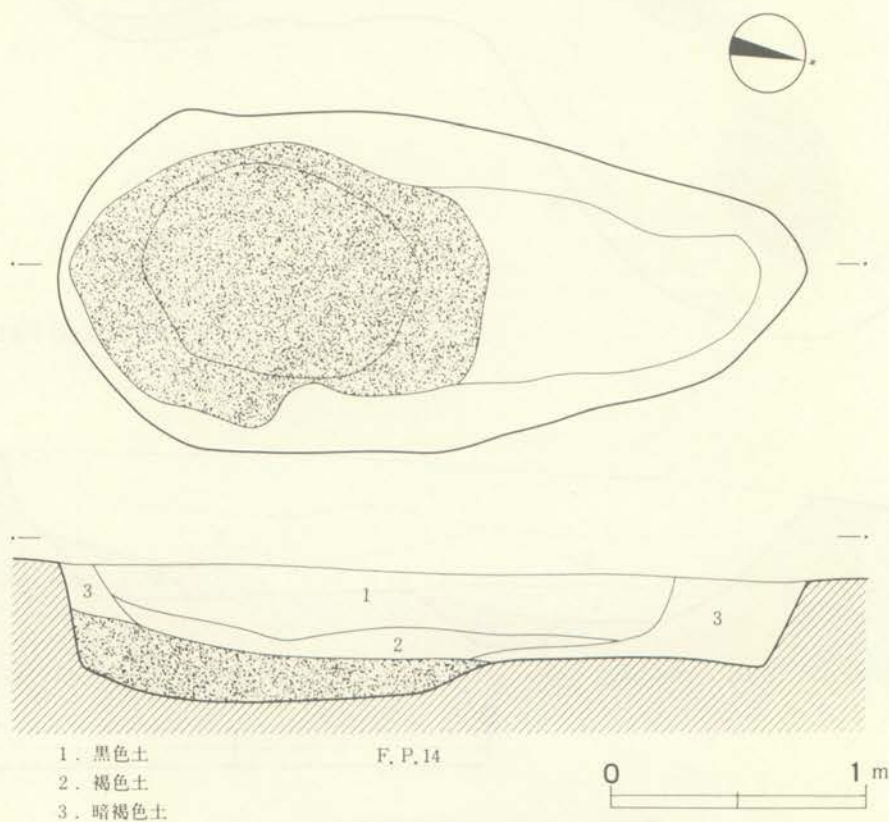
- 1. 黒色土
- 2. 黒褐色土
- 3. 暗褐色土
- 4. 黒色土(焼土粒を含む)



第63図 F. P. 11号跡実測図(1/50)



F. P. 13



F. P. 14

第64图 F. P. 13, 14号迹实测图(1/50)

2基の炉穴(A, B)からなり、BがAを切断して設営されている。Aは現状で75×65cmの不整円形プランを呈し、断面形がレンズ状の炉床には10cmの厚さで焼土が堆積している。Bは長軸長1.5m、短軸長0.8mの長楕円形プランを呈し、北側に偏在する炉床にはよく焼けた焼土が15cmほど遺存している。この炉床から浅い掘り込みの足場がなだらかに立ち上がっている。

遺物の出土は認められない。

F.P.13号跡〔029〕（第64図、図版24—2）

F.P.12号跡の南8mに位置する。

長軸長1.8m、短軸長1.1m、深さ0.65mを測る不整楕円形プランを呈する。炉床は東側に偏在し、断面形がレンズ状に掘り込まれ、よく焼けた焼土の厚さは20cmを測る。炉床の西側には足場と考えられるテラスが設けられている。炉床から足場までは緩やかに幅を広めながら立ち上がる。炉床、足場とも垂直に掘り込まれている。

遺物の出土は認められない。

F.P.14号跡〔043〕（第64図、図版24—3）

F.P.12号跡の東19mに位置する。

長軸長3m、短軸長1.3m、深さ0.5mを測る長楕円形プランを呈する。炉床は南側に偏在し、1.7×1.1mと規模は大きい。焼土の厚さは25cmを測り、炉床面、側壁ともよく焼けている。炉床の北側には足場と考えられるテラスが設けられている。炉床から平坦な足場までは緩やかに立ち上がり、幅は次第に狭くなっている。

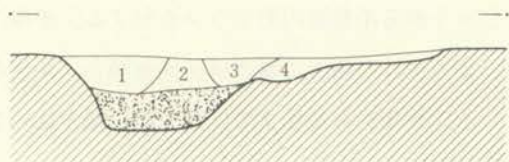
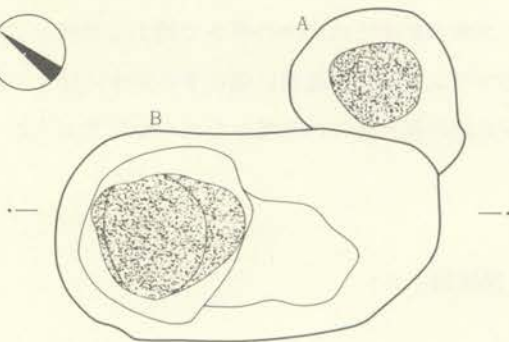
遺物の出土は認められない。

F.P.15号跡〔005〕（第65、70図27、71図28～30、図版25—1）

舌状台地の平坦な中央部に位置する。

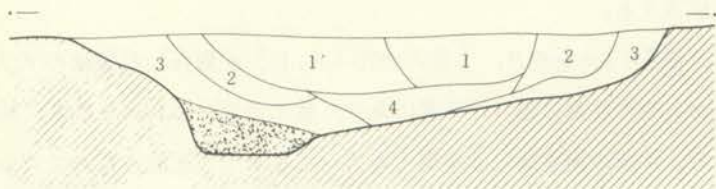
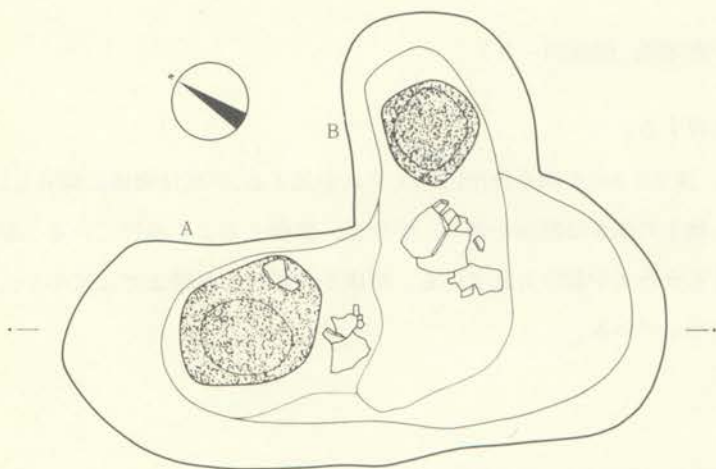
東西長1.7m、南北長2.4m、深さ0.5mを測り、2基の炉穴(A, B)が複合した鍵状のプランを呈する。Aの炉床は中央からやや北西に偏った位置にあり、焼土の厚さは18cmを測る。炉床面、側壁ともよく焼けている。炉床の南東側には足場と考えられるテラスが設けられている。炉床から足場へは緩やかに立ち上がっている。この足場を利用してAと直交する形でBの炉床が設営されている。Bの焼土は10cmほどの堆積である。

遺物は、4層上面より土器片が一括して出土している。



- 1. 黑色土
- 2. 赤褐色土
- 3. 黑褐色土
- 4. 暗褐色土

F. P. 12

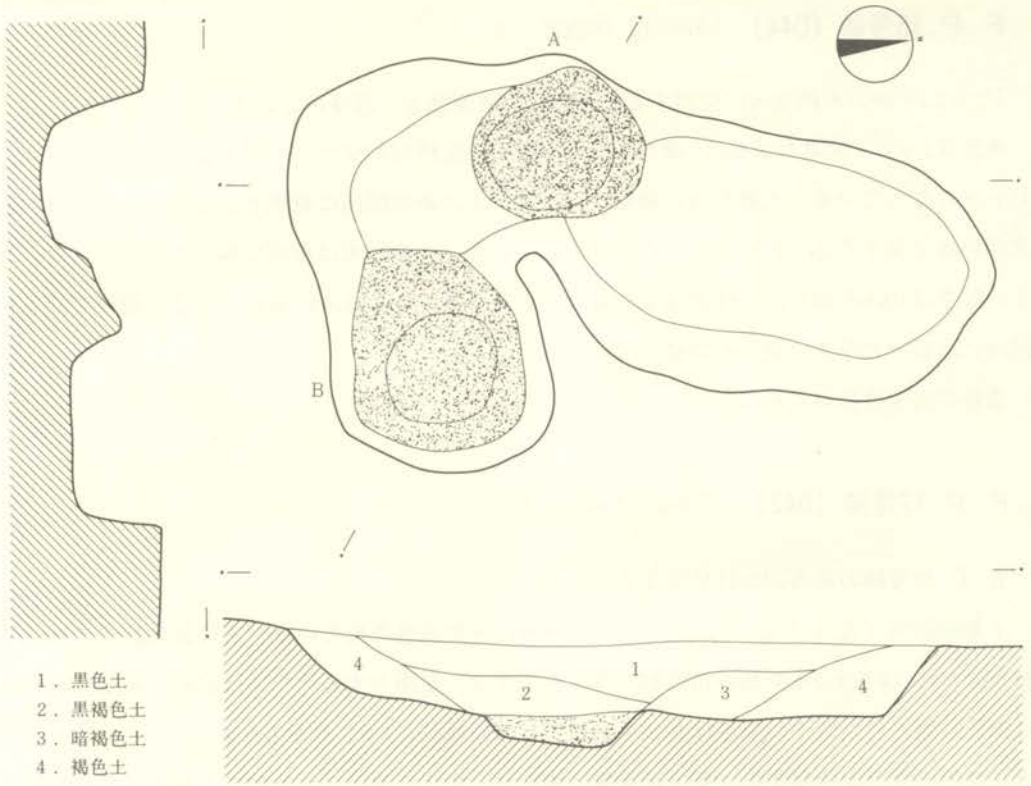


- 1. 黑色土
- 1'. * (ローム粒を多く含む)
- 2. 暗褐色土
- 3. 褐色土
- 4. 黒褐色土

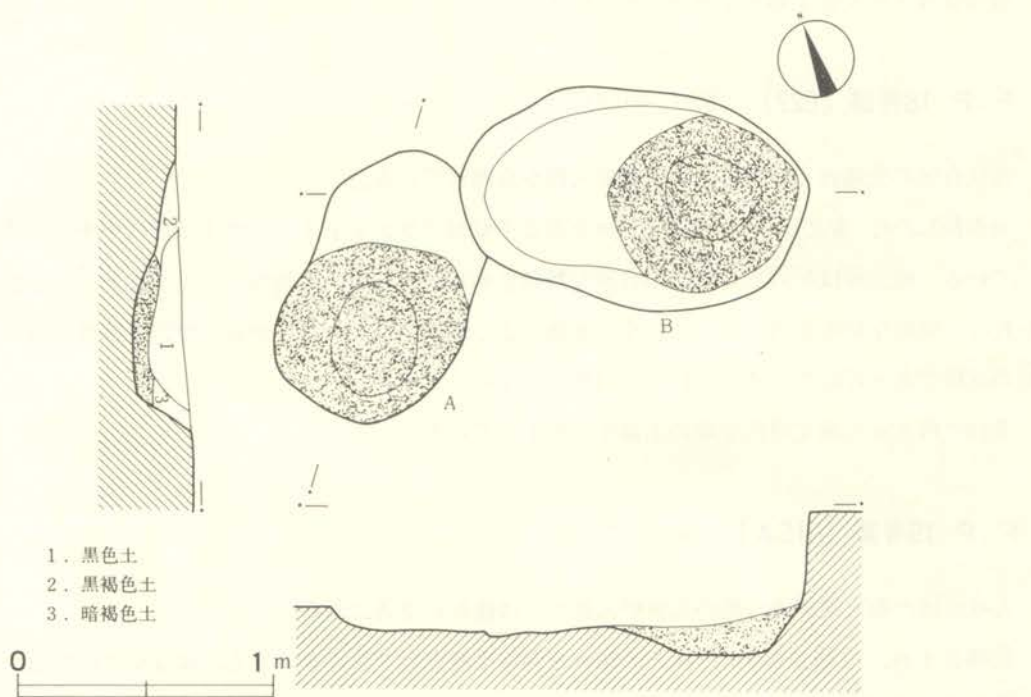
F. P. 15



第65図 F. P. 12, 15号跡実測図(1/30)



F. P. 16



F. P. 17

第66图 F. P. 16, 17号迹实测图(1/50)

F.P.16号跡〔044〕（第66図，図版25—2）

F.P.15号跡の南西9mに位置する。木根による攪乱を一部受けている。

東西長1.6m，南北長2.8m，深さ0.4mを測り，長楕円形プランを呈する2基の炉穴（A，B）からなっている。土層断面の観察からはA，Bの新旧関係は判然としない。Aの炉床の北東側には足場と考えられるテラスが設けられている。Aの炉床は南西に偏った位置にあり，焼土の厚さは10cmを測り，炉床面はよく焼けている。Bの炉床は東に偏在し，よく焼けている炉床面には15cmの厚さに焼土が堆積している。

遺物の出土は認められない。

F.P.17号跡〔042〕（第66，71図31，図版25—3）

F.P.16号跡の南西12mに位置する。

2基の炉穴（A，B）からなり，Aの廃絶後にBが設営されている。Aは長軸長1.1m，短軸長0.7m，深さ0.2mを測る楕円形プランを呈する。足場とするテラスは認められない。炉床は南側に偏在し，焼土の厚さは8cmを測る。Bは長軸長1.4m，短軸長0.8m，深さ0.55mを測る長楕円形プランを呈する。炉床は東側に偏在し，炉床の西側には比較的小規模の足場を有している。足場の幅はほぼ同じである。焼土は12cmの厚さに堆積している。

遺物は覆土中から土器片が検出されている。

F.P.18号跡〔022〕（第67，71図32）

舌状台地の先端近くに位置し，南側炉穴群から離れている。

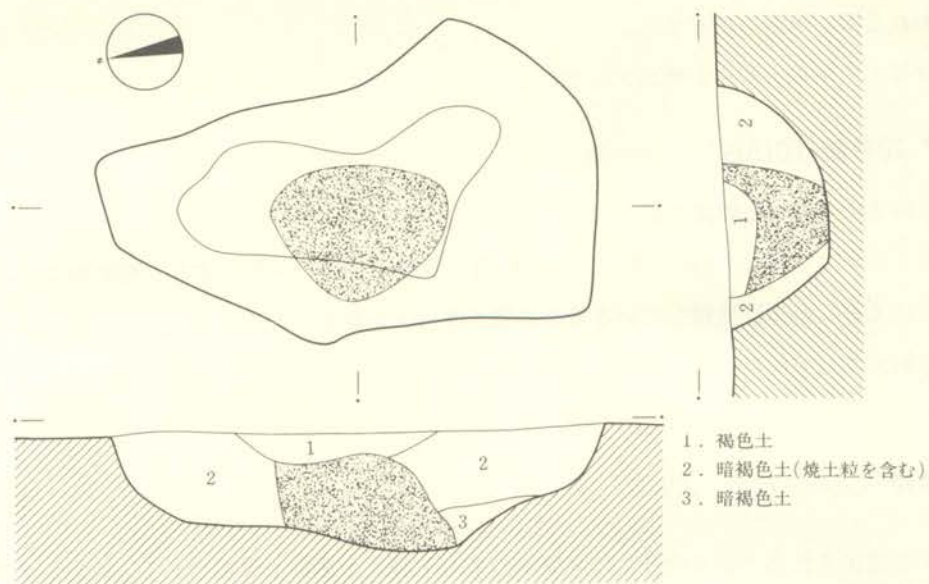
東西長1.2m，南北長2m，深さ0.5mを測る不整形プランを呈する。焼土はほぼ中央に位置している。焼土層は炉穴としては不自然な堆積を示し，何らかの人為的な作用が加わったと思われる。明確な炉床を持たないことや，底面がよく焼けていないことから，炉穴とは異なる性格の遺構である可能性も考えられるが判然としない。

遺物は覆土から縄文時代中期の土器片が出土している。

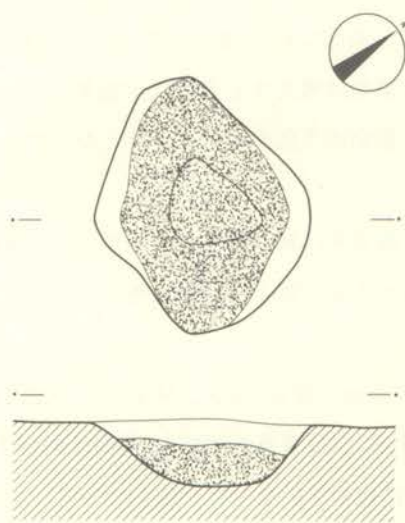
F.P.19号跡〔015A〕（第67，71図33）

舌状台地の最大端部で，他の北側炉穴群からは離れた位置にある。

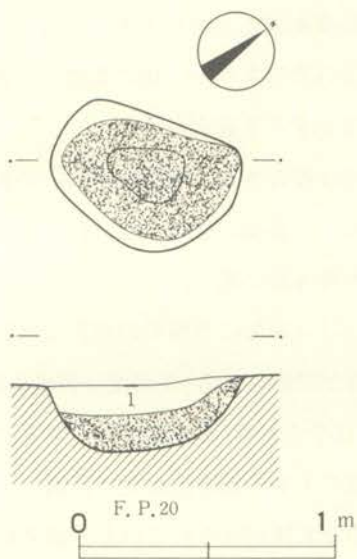
長軸長1m，短軸長0.9m，深さ0.26mを測る不整形プランを呈する。ほぼ全体に焼土が堆積する。断面形はレンズ状を呈し，焼土の厚さは中央部で16cmを測る。また，踏み固められ



F. P. 18



F. P. 19



第67図 F. P. 18, 19, 20号跡実測図(1/30)

たと思われる面が周囲に遺存する。

遺物は覆土中から土器片が検出されている。

F.P.20号跡〔015B〕（第67図）

F.P.19号跡の東側に隣接する

長軸長0.75m，短軸長0.5m，深さ0.26mを測る不整形プランを呈する。断面形はレンズ状に掘り込まれ，全体に堆積している焼土の厚さは14cmを測る。

遺物は検出されていない。

出土遺物（第68～71図，図版32，33）

炉穴より検出された土器片の多くは早期末の茅山下層式と茅山上層式である。胎土には黒色土状の混和材を含んでいる。

第68図1，2は細い縦位の条痕が走る。3，4はやや外反する口縁部で，文様は磨滅のため明瞭ではない。5～8，13は表裏両面に条痕文が施され，表面は斜行，裏面は横走する。14～16の条痕文は表裏両面とも斜行する。9，17は表面が斜行，裏面は横走する条痕文が施されている。9は平坦な口唇部をもつ。10の条痕文は表面が斜行，裏面の上部が縦走，斜行となっている。11，12は縦走する条痕文をもつ。

第69図18は接合されていないが同一の個体である。部分的に剥落し脆くなっている。条痕文は表面が斜行，裏面が横走する。19は表裏両面とも縦走する。20の口縁部は外反し，横走する条痕文を表裏両面に施す。

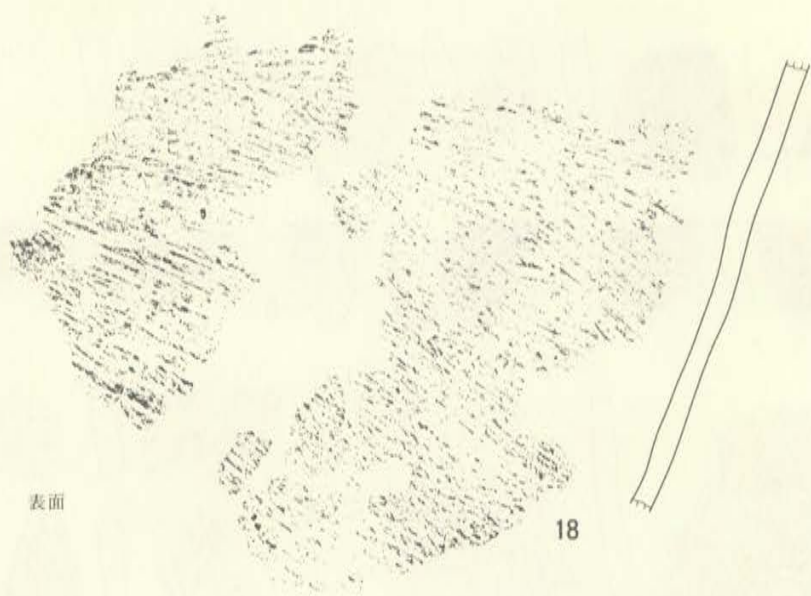
第70図21は口縁部に不整形の刺突文を施し，条痕文は表面が縦走，裏面が横走する。22は口縁部に小突起が認められる。条痕文は表裏両面とも横走する。24は表裏両面横走，裏面は斜行する。23，25は隆起帯をもち，条痕文は横走する。25，26は表面に幾何学的な文様が施されている。27は口縁部を縦位の4本の細隆起線文で区画し，区画内に円形の竹管刺突文を加えている。区画外には幾何学的な文様が施されている。細隆起線文は口唇部よりやや突起する。条痕文は表面が横走し，裏面は縦走する。21～27は茅山下層式まで遡る要素をもっている。

第71図28，29は口縁部に横走する条痕文を施してから幾何学的な文様を加えている。28は口縁部に円孔が穿たれている。30も口縁部に近い部位の破片で，28，29と同様の文様が施されている。裏面は29，30が横走するが，28は上半が横走，下半が斜行している。31は原体LRの縄文が施文されている。32は地文に原体LRの縄文を全面に施文充填している。中期の土器片である。33は表裏両面に横走する条痕文が施されている。



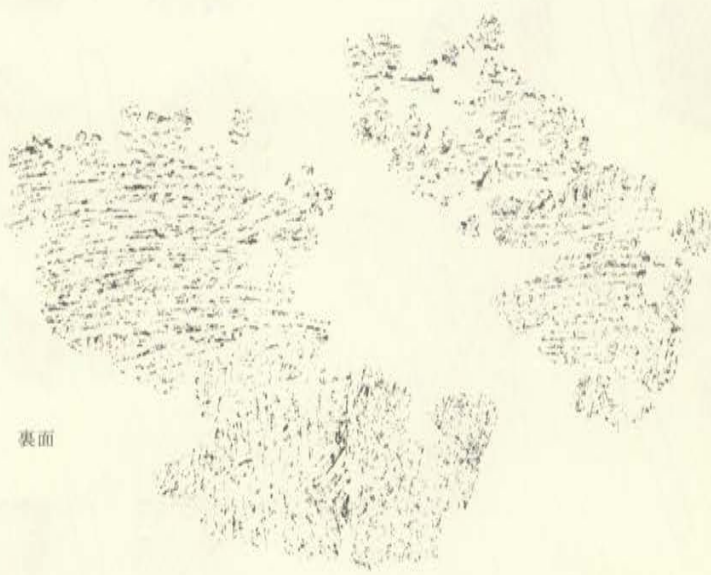
1,2-F.P.1 3-6-F.P.2 7-9-F.P.4
 10-12-F.P.5 13-16-F.P.6 17-F.P.10

第68图 炉穴内出土土器拓影图(1), (1/2)



表面

18



表面

19

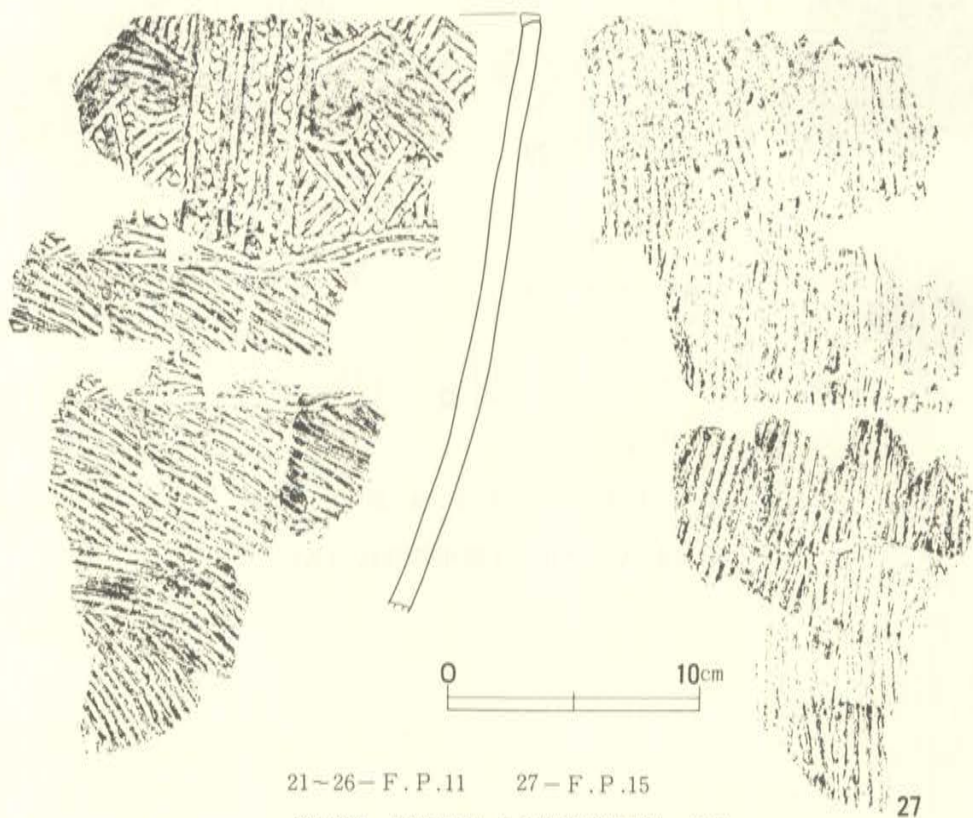
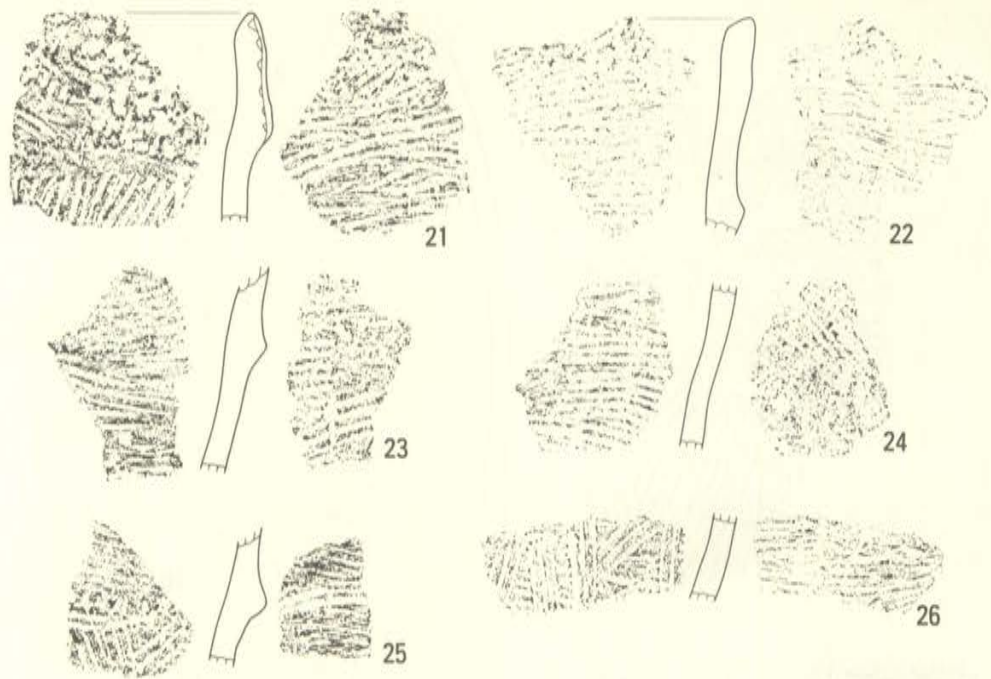


20

0 10cm

18~20-F.P.07

第69图 炉穴内出土土器拓影图(2), (1/3)



21-26 - F. P. 11 27 - F. P. 15

第70图 炉穴内出土土器拓影图(3), (1/3)



28~30 - F.P.15 31-F.P.17, 32-F.P.18 33-F.P.19

第71图 炉穴内出土土器拓影图(4), (1/3)

4. 住居跡出土の貝類等遺体について

貝層サンプルの採取と処理・集計方法

今回、分析した貝層サンプルは、縄文時代中期加曾利E式期のJ02,03,04号跡から採取されたもので、その方法は以下のとおりである。

i) 調査中に確認された貝層平面に50×50cmの正方形を任意に設定する。(St1, St2等)

ii) この正方形の下に存在する貝層を5cmごとの厚さに切り出していく。

iii) 切り出された貝層(50×50×5cm=12500cm³)をサンプルの一単位として、切り出し順に階層番号を与える。(St1-1, St2-3等)

iv) 十分に乾燥させたサンプル一単位の1/2(6250cm³)を9.52mm, 4mm, 2mm, 1mmのメッシュ寸法をもつ試験フルイを用いて水洗し、各メッシュ面上に分離したものを同定し集計した。

v) 二枚貝類は左右の貝殻のうち、数の多い方を集計した。

vi) イボキサゴは9.52mm, 1mmメッシュ面上で分離されたものの個体数を集計した。

vii) マイマイ科の一種の貝類遺体とフジツボは、2mm, 1mmメッシュ面の分離資料で種名までは同定できなかった。

なお、貝層サンプル中から魚類、哺乳類など脊椎動物の遺体は検出されなかった。

分析結果

1. J02号跡

J02号跡の貝層サンプル採取地点は第38図に示してある2地点で、切り出されたサンプルの単位数はそれぞれ5個である。結果は第1, 2表に示した。

15種の貝類とフジツボが同定された。St2から採取されたゴマガイ、マイマイ科の一種は陸産の貝類で個体数は少なく、2mm, 1mmメッシュ面上で分離されるほど微小なものである。また、セキモリガイ、キジビキガイも微小な貝である。マイマイ科の一種以外は食用にはならなかったと考えてよい。他の住居跡の貝層から比ベイボキサゴが圧倒的に多く、このことがJ02号跡貝層を特徴づけている。次いでウミニナ、アラムシロといった小形の巻貝類が得られている。

2. J03号跡

J03号跡の貝層サンプル採取地点は第42図に示してある2地点で、サンプルの単位数は貝層

第1表 J02号跡 St1 貝層サンプルにおける貝類等遺体の分析結果

		階 層				
		1	2	3	4	5
腹 足 綱	イボキサゴ <i>Umbonium (Suchium) moniliferum</i>	781	934	197	49	11
	ウミニナ <i>Batillaria</i> spp	6				
	アラムシロ <i>Hinia festiva</i>	23	17			
	マイマイ科の一種 <i>Helicidae</i> gen. et sp. indet	3				
斧	アサリ <i>Ruditapes philippinarum</i>	2	3	1		
	オキシジミ <i>Cyclina sinensis</i>		2			
足 綱	ハマグリ <i>Meretrix lusoria</i>	2		3		
	シオフキ <i>Mactra veneriformis</i>	4	6	2		
	マテガイ <i>Solen (S) strictus</i>		1			
	フジツボ <i>Balanidae</i> gen. et sp. indet	1	1	1		

第2表 J02号跡 St2 貝層サンプルにおける貝類等遺体の分析結果

		階 層				
		1	2	3	4	5
腹 足 綱	イボキサゴ <i>Umbonium (Suchium) moniliferum</i>	1943	3700	5998	4440	2146
	ウミニナ <i>Batillaria</i> spp	13	14	15	16	9
	アラムシロ <i>Hinia festiva</i>	16	34	46	26	4
	ゴマガイ <i>Diplommatina</i> sp.		1			
網	セキモリガイ <i>Papyriscala yokoyamai</i>		1			
	キジビキガイ <i>Punctateon fabraeus</i>					2
	マイマイ科の一種 <i>Helicidae</i> gen. et sp. indet	8	5	10	4	1
	イタボガキ <i>Ostrea denselamellosa</i>					1
斧	マガキ <i>Crassostrea gigas</i>		2	5	4	10
	アサリ <i>Ruditapes philippinarum</i>		3	5	6	5
足 綱	ハマグリ <i>Meretrix lusoria</i>	5	2	4	5	5
	シオフキ <i>Mactra veneriformis</i>	2	2	10	13	16
	マテガイ <i>Solen (S) strictus</i>					1
	オオノガイ <i>Mya (Arenomya) arenaria oonogai</i>			2	1	
フジツボ <i>Balanidae</i> gen. et sp. indet	3	6	3	17	19	

が薄いため、それぞれ4個である。結果は第3、4表に示した。

17種の貝類とフジツボが同定された。陸産の貝類はキセルガイ、オカチョウジガイ、マイマイ科の一種で、いずれも個体数は少なく微小貝類である。全体に採集頻度が高いのはイボキサゴとハマグリで、St1ではハマグリとマガキの採集頻度が比較的高くなっている。

第3表 J03号跡 St1 貝類サンプルにおける貝類等遺体の分析結果

		階 層	1	2	3	4
腹	ヨメガカサ	<i>Cellana toreuma</i>		2		
	イボキサゴ	<i>Umbonium (Suchium) moniliferum</i>		12	23	87
	ウミニナ	<i>Batillaria</i> spp.	5	6	4	1
	ゴマガイ	<i>Diplommatina</i> sp.		1	2	
足	ツメタガイ	<i>Neverita (Glossaulax) didyma</i>		3		1
	アカニシ	<i>Rapana thomasi</i>	2			
綱	トクサガイ	<i>Brevimyrella lischkeana</i>		1	2	
	キセルガイ	Clausiliidae gen. et sp. indet.		2		
	オカチョウジガイ	<i>Allopeas</i> sp.	1	3	3	2
	マイマイ科の一種	Helicidae gen. et sp. indet.	3	41	17	3
斧	マガキ	<i>Crassostrea gigas</i>	58	56	20	8
	アサリ	<i>Ruditapes philippinarum</i>	3	8	16	2
足	オキシジミ	<i>Cyclina sinensis</i>	3	2	5	1
	ハマグリ	<i>Meretrix lusoria</i>	83	147	110	
綱	シオフキ	<i>Mactra veneriformis</i>	9	15	38	6
	オオノガイ	<i>Mya (Arenomya) arenaria oonogai</i>		1		
	フジツボ	Balanidae gen. et sp. indet.	17	61	18	2

第4表 J03号跡 St2 貝層サンプルにおける貝類等遺体の分析結果

		階 層	1	2	3	4
腹	イボキサゴ	<i>Umbonium (Suchium) moniliferum</i>	10	61	2494	1687
	ウミニナ	<i>Batillaria</i> spp.	1	1	6	7
	ツメタガイ	<i>Neverita (Glossaulax) didyma</i>	1	2	2	
	アカニシ	<i>Rapana thomasi</i>	2			1
足	イボニシ	<i>Thais clavigera</i>	1			1
	アラムシロ	<i>Hinia festiva</i>		2	6	18
綱	オカチョウジガイ	<i>Allopeas</i> sp.		4	2	1
	マイマイ科の一種	Helicidae gen. et sp. indet.	8	10	9	9
斧	マガキ	<i>Crassostrea gigas</i>	1	9	6	3
	アサリ	<i>Ruditapes philippinarum</i>	1	6	5	1
足	オキシジミ	<i>Cyclina sinensis</i>		3	1	1
	ハマグリ	<i>Meretrix lusoria</i>	49	180	217	66
綱	シオフキ	<i>Mactra veneriformis</i>	3	19	10	
	マテガイ	<i>Solen (S) strictus</i>			1	
	フジツボ	Balanidae gen. et sp. indet.	4	10	7	3

3. J04号跡

J04号跡の貝層サンプル採集地点は第45図に示してある2地点で、切り出されたサンプルの個体数はそれぞれ4個であるが、貝層の薄いSt2ではSt2-3から採集個体数が急激に減り、St2-4ではイボキサゴがわずかに1点採集されたのみである。結果は第5、6表に示した。

17種の貝類とフジツボが同定された。ここでも、ゴマガイ、キセルガイ、オカチョウジガイ、マイマイ科の一種といった陸産の微小な貝類が採集されている。マイマイ科の一種を除いていずれも食用には適さない。全体にイボキサゴの採集頻度が高く、次いでSt1ではハマグリが多く採集されている。

第5表 J04号跡 St1 貝層サンプルにおける貝類等遺体の分析結果

		階 層			
		1	2	3	4
腹	イボキサゴ <i>Umbonium (Suchium) moniliferum</i>	157	198	499	972
	ウミニナ <i>Batillaria</i> spp.		1	7	12
	ゴマガイ <i>Diplommatina</i> sp.			3	
	ツメタガイ <i>Neverita (Glossaulax) didyma</i>		1	1	1
足	アカニシ <i>Rapana thomasi</i>				1
	アラムシロ <i>Hinia festiva</i>	2	1	7	18
綱	キセルガイ <i>Clausiliidae</i> gen. et sp. indet.		2	1	
	オカチョウジガイ <i>Allopeas</i> sp.	2	4	13	16
	マイマイ科の一種 <i>Helicidae</i> gen. et sp. indet.	4	19	25	32
斧	マガキ <i>Crassostrea gigas</i>			1	4
	アサリ <i>Ruditapes philippinarum</i>	2	6	17	36
	オキシジミ <i>Cyclina sinensis</i>		1	1	2
足	ハマグリ <i>Meretrix lusoria</i>	81	193	262	253
	シオフキ <i>Macra veneriformis</i>	5	17	46	81
綱	マテガイ <i>Solen (S) strictus</i>		2		
	フジツボ <i>Balanidae</i> gen. et sp. indet.			1	3

第6表 J04号跡 St2 貝層サンプルにおける貝類等遺体の分析結果

		階層	1	2	3	4
腹	イボキサゴ <i>Umbonium (Suchium) moniliferum</i>		816	637	57	1
	ウミニナ <i>Batillaria</i> spp.		18	10		
足	アラムシロ <i>Hinia festiva</i>		13	11	2	
綱	オカチョウジガイ <i>Allopeas</i> sp.		1	1		
	マイマイ科の一種 <i>Helicidae</i> gen. et sp. indet		15	7		
斧	マガキ <i>Crassostrea gigas</i>		1	4		
	アサリ <i>Ruditapes philippinarum</i>		3	3		
足	ハマグリ <i>Meretrix lvsoria</i>		5	3		
綱	バカガイ <i>Mactra chinensis</i>			1		
	シオフキ <i>Mactra veneriformis</i>		9	5	1	
	フジツボ <i>Balanidae</i> gen. et sp. indet			4		

V 古墳時代の遺構と遺物

1. 古墳

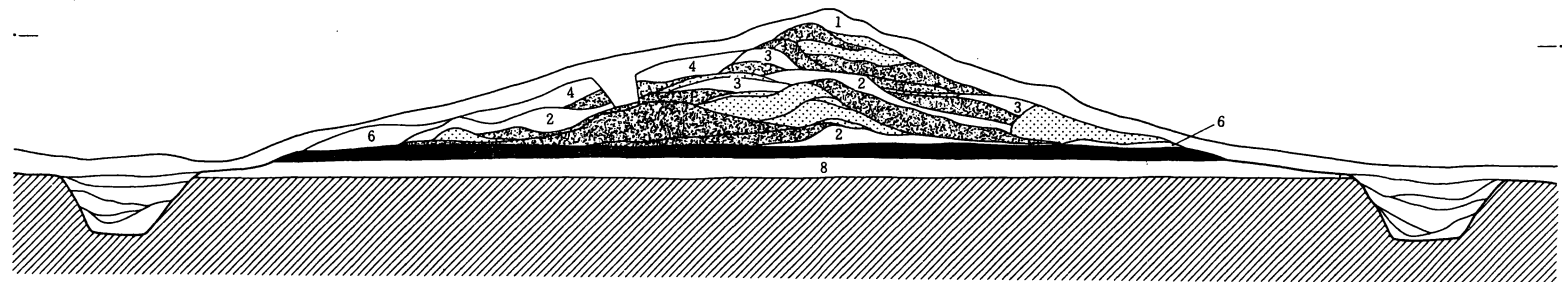
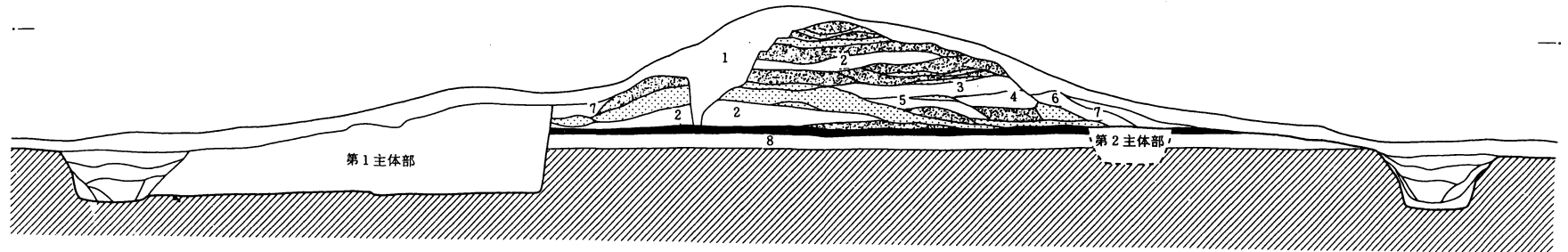
1号墳

位置と現況

坂崎谷津を東に望む台地の平坦部、標高は約48mでこの台地上では最高所に位置する。山林中に存在し、墳丘には大きな3か所の攪乱が認められたが、遺存状態は良好である。

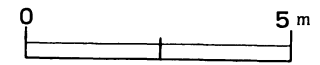


第72図 1号墳実測図(1/300)



- | | | |
|---------------------|---------------------|-------------------------|
| 1. 褐色土(表土層) | 4. 褐色土+ロームブロック(8:2) | 6. 暗褐色土(ローム粒+若干の黒色土を含む) |
| 2. ロームブロック+黒色土(5:5) | 5. 褐色土+ロームブロック(5:5) | 7. 黒褐色土(ローム粒を含む) |
| 3. 褐色土+ローム土(8:2) | 6. 暗褐色土(ローム粒を多量に含む) | 8. 褐色土(ローム漸移層) |

- ローム土・ロームブロックを主体とする土層
- 黒色土を主体とする土層
- 旧表土層



第73図 1号墳墳丘、周堀断面図(1/20)

墳丘と周堀 (第72, 73図, 図版36~38)

円墳である。山林中でしかも樹木で全面が覆われていたため、墳丘は良好に遺存し現地表面からの比高差は2.5mを測り、ほぼ旧状を保っていると考えられる。

墳丘は旧表土である黒色の腐蝕土上に盛土によって築造され、旧表土上面から墳頂までは2.5mを測る。旧表土層の厚さは東西30cm、南北10cmと異なるが、ほぼ水平に堆積している。

盛土はまず中央部から開始される。ローム土、ローム・ブロックを主体とする土層と黒色土を東西12.6m、南北8.8m、高さ0.6~0.8mの規模で積み上げる。さらに黒色土を主体とする土層を積み上げ、ある程度の高さに築いたのち、この中央部盛土の周囲に暗褐色土と黒色土を主体とする土層を墳丘裾部全体に環状に巡るように盛り上げ緩い半球状の墳丘を築造する。最後にローム土、ローム・ブロックを主体とする土層と、黒色土を主体とする土層をほぼ水平、交互に積み上げ、墳丘の築造を完了している。

墳丘と周堀の間は盛土は全く認められず、しかも旧表土及び褐色土(ローム漸移層)は削平され、墳丘側から周堀へ向って緩やかな傾斜をみせる。この部分は地点により多少の差はあるが、ほぼ2~3mの幅で環状に全体に巡っている。いわゆる「テラス」として意識的に形成されたものである。

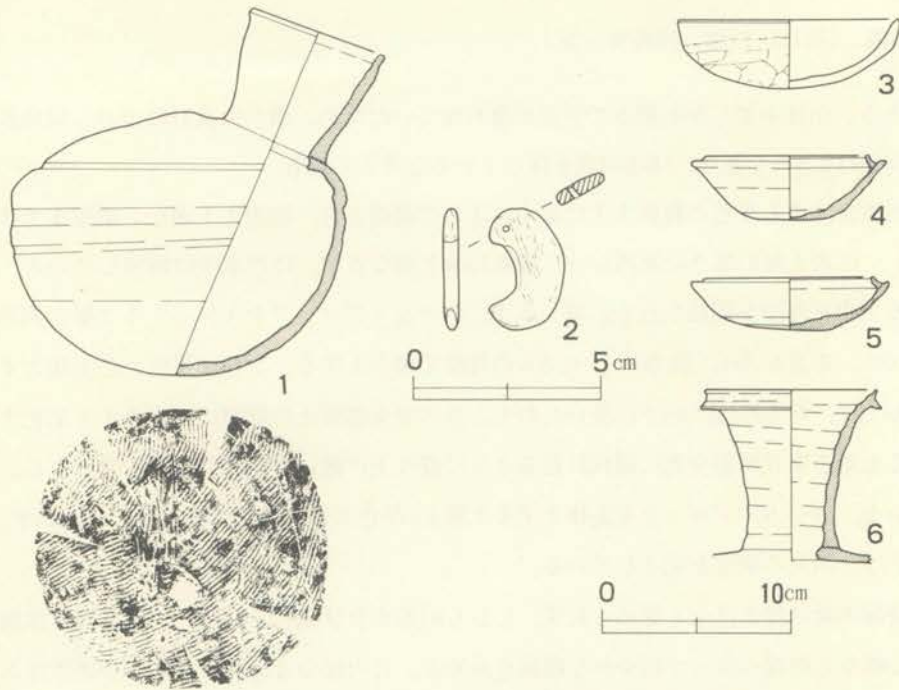
周堀は全周し、外縁径・内縁径はそれぞれ東西29m・23m、南北32m・26mを測り、南北にやや長いプランを呈する。上端幅はほぼ2.5m前後の一定の幅を保って巡るが、東側部分は最も広く3.1mで、西側部分は最も狭くなり2.1mを測る。掘り込みはハード・ローム層まで及び、深さは1~1.2mを測る。底面、側壁とも明瞭に検出することができた。堀底幅は0.5~0.9mを測る。底面は地点により5cmから10cmほどの若干の段差が認められる。断面は逆梯形を呈する。覆土は自然堆積の様相を示し、全体にほぼ同一の層序である。

墳丘と周堀からの出土遺物 (第74図, 図版65-2)

墳丘からは第1主体部掘り方北西コーナー上の墳丘盛土最上面より正位で須恵器平瓶(1)が完形で出土している。また、北西部旧表土上面より石製模造品の勾玉(2)が検出されているが、本古墳に伴うかどうかは判然としない。

周堀内からは第1主体部開口部正面で底面直上より正位で土師器杯(3)が検出され、またこの附近の覆土中より須恵器杯(4, 5)、須恵器長頸瓶の口頸部片(6)が出土している。

2は滑石製の勾玉で長径3.2cm、短径2cm、腹部長径1.3cm、同短径0.4cm、孔径0.15cmを測る。片面から穿孔されている。両面、腹部側縁とも研磨されている。



第74図 1号墳出土遺物実測図(1/2, 1/4)

墳丘と周堀からの出土土器一覧

単位はcm, []現存値

番号	器種	法量	器形の特徴	成形・調整技法	胎土・焼成・色調	備考
1	平瓶	口径 7.5 器高 19.1	丸底の底部から緩やかに内彎しながら立ち上がった体部は外面に凹凸をもち肩部に至る。肩部は一条の沈線を巡らし、やや丸味を帯び、頸部の直前で屈曲して頸部へと続く。斜上方に延びる口頸部は上半でやや外反し、口唇部をまるくおさめて終わる。	巻き上げ水挽き成形。まず底部から肩部までを成形し、肩部の開口部をふさいでから口頸部を取りつける個所を円形に切り取る。この個所に口頸部を接合する。底部と体部下半にタタキ目が残る。	砂粒を含む 良 灰色	須恵器
3	坏	口径 11.7 器高 3.5	丸底の底部から強く内彎しながら立ち上がる体部は口縁部との境に弱い稜を描出する。口頸部はやや厚みをもって外方に開く。	口縁部はヨコナデ、体部外面の上半は横位の(左→右)、下半は小単位のヘラ削りを施している。内面はヘラナデ。	砂粒を含む 良 褐色	
4	坏・身	口径 8.6 器高 3.4	たちあがりは形骸化して低く内傾し、口唇部は丸くおさめる。受部はやや上向きに外方へのびる。体部はやや直線的にはほぼ平坦な底部に向う。	巻き上げ水挽き成形。たちあがりを貼り付けている。体部下半は回転ヘラ削り。	砂粒を含む 良 灰色	須恵器

5	坏・身	口径 8.8 器高 2.7	たちあがりは形骸化して、低く内傾し口唇部は丸くおさめる。受部は体部の延長としてそのまま外方へのびている。体部は浅く、底部はやや平坦である。	巻き上げ水挽き成形。たちあがりを貼り付けている。体部下半は静止ヘラ削り。	破粒を含む 良 灰白色	須恵器
6	長頸瓶 (口頸部)	口径 9 器高 [8.9]	外反する口縁部の先端を折り曲げ下端を断面三角形に張り出している。口頸部は外反している。	轆轤水挽き成形。口頸部は粘土紐を右回りに巻きあげている。口頸部と肩部との接合痕が認められる。	精緻 良 暗赤褐色	須恵器 暗緑色の自然釉が全体に認められる。

主 体 部

本古墳では墳丘の南側裾部に位置する横穴式石室と、北側裾部に掘り込まれた土壌の2つの主体部が検出されている。石室の主軸線を延長すると墳丘の中心点を通り土壌に至る。墳丘の主軸線上にこの2つの主体部は位置している。横穴式石室を第1主体部、土壌を第2主体部とする。

第1主体部 (第75, 76図, 図版39~40)

南向きに開口する単室の横穴式石室である。表土層を除いた段階で検出され、粘土により上部が全面被覆されている。主軸方向をN-3°-Wとほぼ南北に置く。軟質砂岩の截石を用いて、墳丘の一部と「テラス」を掘り込んだ土壌の中央に構築されている。

土壌は上端で長さ6.5m、幅3~3.5mを測る長方形プランを呈し、奥壁側から羨門側に向かうに従いその幅を減じている。羨門側で一度すばまったのち、「ハ」の字に大きく開くように前庭部を形成している。掘り方は墳丘積土の第2段階が終了した時点で開始されている。奥壁側では一定の傾斜をもって断面が逆梯形に掘り込まれているが、前庭部に向かう部分ではほぼ垂直に掘り込まれてから、一旦緩い傾斜にかわり底面に至る。旧表土上面からの深さは1.5mを測る。底面は主軸線上が高く、截石を積む部分がやや低く掘り窪まれている。また、奥壁側から羨門側に向かうに従い次第に高くなり、その比高差は約30cmを測る。

前庭部は長さ2.5m、羨門側上端幅1.8m、下幅0.9m、開口部上端幅3.3m、下幅1.7mを測り、羨門部から開口部へ進むに従って広がる。開口部分は周堀底から若干掘り窪まれている。

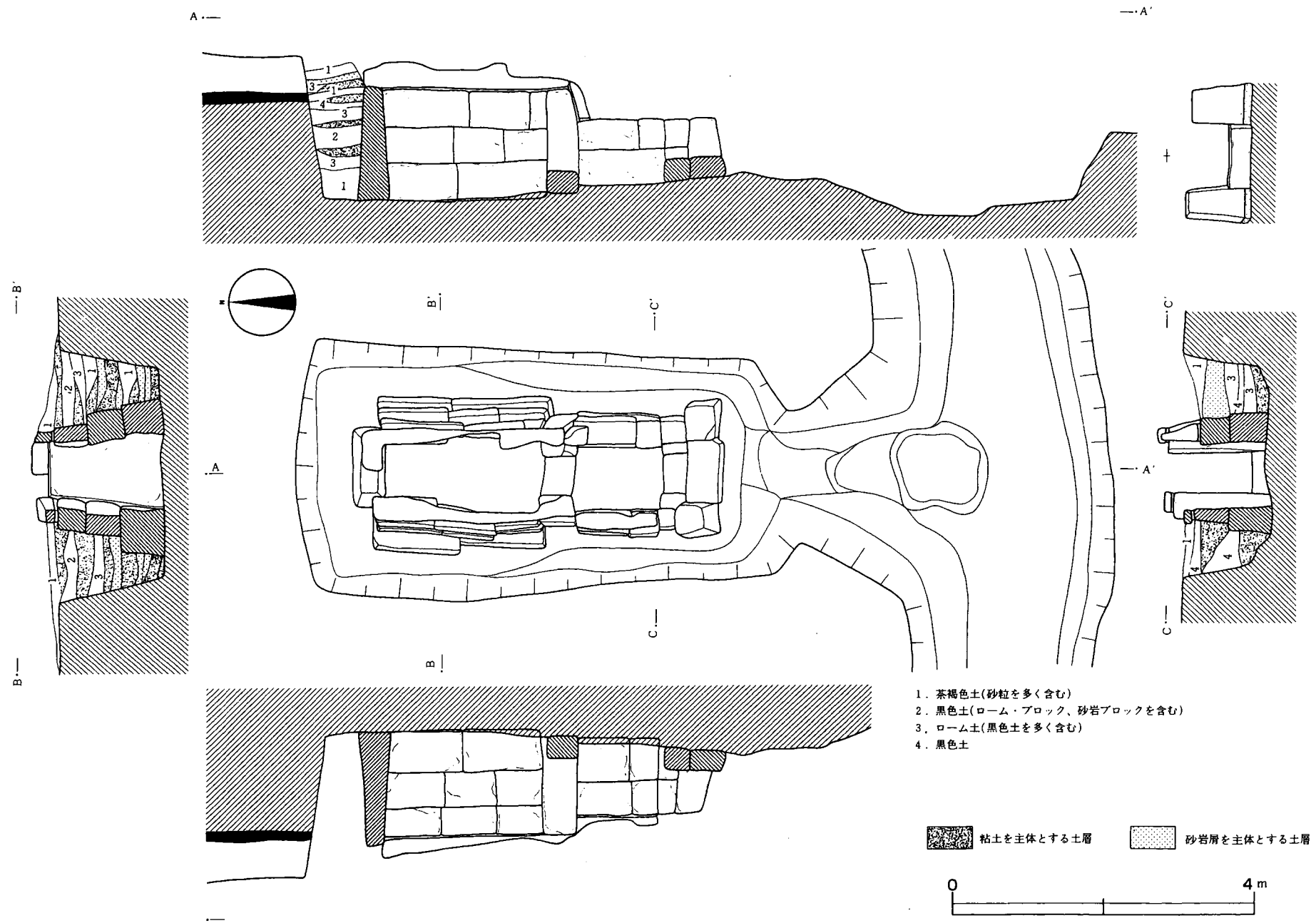
石室は両袖式の横穴式石室である。天井部は木根により破壊され石室内に崩落し、左右側壁の最上段の截石も一部破壊されているが、その他の截石の遺存度は比較的良好である。各截石とも土壌底面に直接積み上げられ、玄室、羨道部の床面も土壌の掘り方そのままハード・ローム中に置かれている。

玄室床面プランは長方形を呈し、長さは右側壁、主軸線上で2.1m、左側壁では2m、幅は奥壁下で0.9m、中央部、玄門袖石下では1.05mを測る。玄門側に比べ奥壁側が若干狭くなっている。胴張りは認められない。高さは右側壁で1.5m、左側壁では1.4mを測り、若干の段差が認められる。奥壁は一板石で完存している。高さ1.55m、上辺幅0.55m、下辺幅1.1mを測り、台形を呈する。左右の辺部には幅20cm、深さ5~20cmの切り込みが3段に施され、左右側壁の各段に対応している。この切り込みに埋め込む様にして左右側壁の截石が積まれる。左右側壁とも3段に積まれ、根石に2枚、その上部2段は3枚ずつの截石によって構築されている。截石の大きさは一定しないが、厚さはおおむね50cmを測る。両側壁間の床面での幅は0.9~1.05mであるが、天井部に積まれるに従い幅を減じ、側壁上部の幅は0.9mと狭くなる「持ち送り」が行われている。

玄室と羨道部間には方柱状の截石を左右に配して玄門とし、その間には框石を置いている。左右の袖石とも遺存は良好で、床面からの高さは1.3mを測り、玄室側壁と同じ高さである。両袖石間は框石上で50cmを測り、天井部に向かうに従ってやや狭くなる。また、左右袖石には玄室、羨道部の側壁との石組部分に切り込みが施されている。切り込みは右袖石の羨道部側で1段目、左袖石では玄室側で2、3段目にあり、それぞれの側壁と対応している。框石は厚さ30cmの截石で床面からの高さは玄室側で26cm、羨道部側では20cmを測る。

羨道部には左側壁に天井石の一部が残存しており、本来は天井部が架構していたが、その高さは玄室のそれよりは1段低くなると考えられる。左右側壁で1.1m、主軸線上で1.2m、幅は玄門側で0.85m、羨門側では0.9mを測る。高さは右側壁で0.85m、左側壁では1mを測り、若干の段差が認められる。左右側壁とも2段に積まれ、右側壁は根石が2枚、上段に3枚、左側壁は根石、上段とも3枚の截石は他のものよりやや内側に配され、その間には仕切石が置かれている。羨道部に使用された截石は玄室のそれよりも規模は小さく加工されている。床面は主軸線上が高く、左右側壁下に向かうに従って低くなり、玄室床面より15cmほど高い。羨門は玄門と同様に方柱状の立石を左右に配し、その間に仕切石とほぼ同じレベルで框石を置いている。左右袖石は砂岩層を主体とする土層を固めて基盤とし、その上に立てられている。基盤上面からの高さは右袖石で0.7m、左袖石では0.75mを測る。両袖石間は框石上で0.85mと玄門のそれよりは広くなっている。閉塞石は認められず、羨門及び羨道の仕切石の間を粘土、砂岩ブロック、黒色土などを積み閉塞している。閉塞は羨門から前庭部にかけて行われている。

石室と土壌の間は粘土や砂岩層を主体とする土層、黒色土、ロームなどによって裏込めが行われている。砂岩層を主体とする土層は截石の積み上げの際に細部の加工を行うことによってた石層であろう。各截石の積み上げに対応して、これらの土層が交互に入念に積み固められ、土壌の外にも及んでいる。また、各截石の間には目張りの粘土が玄填され、さらに天井石と奥

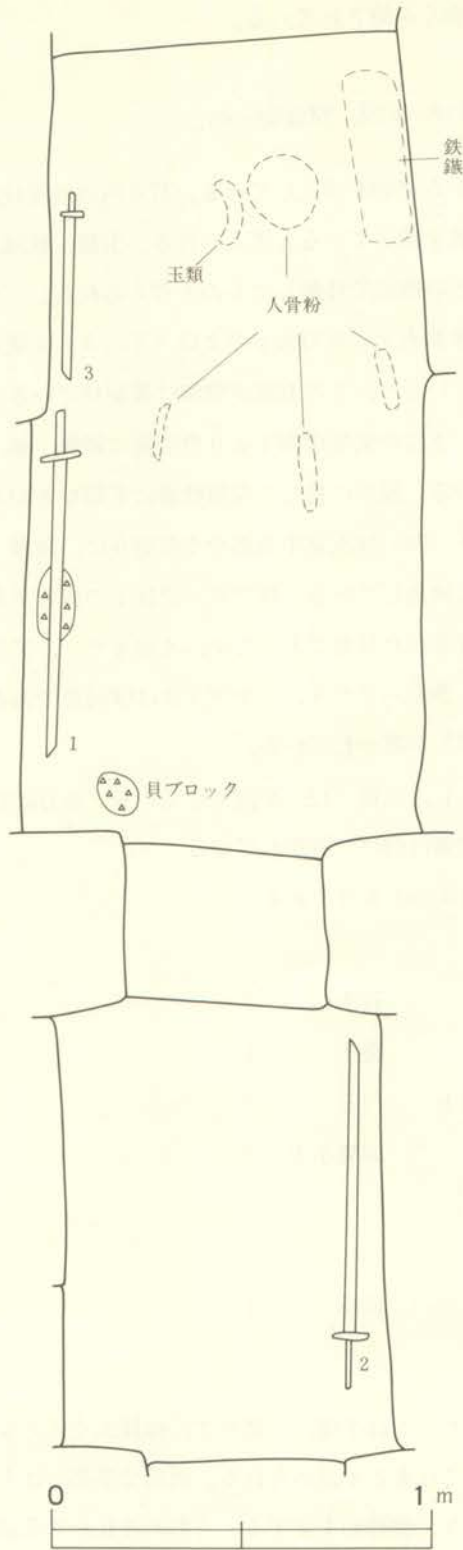


- 1. 茶褐色土(砂粒を多く含む)
- 2. 黒色土(ローム・ブロック、砂岩ブロックを含む)
- 3. ローム土(黒色土を多く含む)
- 4. 黒色土

粘土を主体とする土層
 砂岩層を主体とする土層

0 4 m

第75図 1号墳第1主体部実測図(1/60)



第76図 1号墳第1石室内遺物出土状況図(1/20)

壁、側壁間にも同様の目張りが施されている。

石室内の出土遺物（第77～80図，図版62～65）

石室では玄室、羨道部から遺物が出土している。石室内の埋没状況、遺物の出土状況より判断すれば遺物はほぼ原位置を保っていると扱えられる。玉類、鉄鏃の一部が散在するが、これは天井石の崩落や木根などの攪乱で移動したものと考えられる。

玄室では左側壁に沿い床面直上に直刀大小の2口（1，3）が置かれている。ともに鋒を玄門側、柄を奥壁側に向けているが、3の刃部が壁側に置かれているのに対し、1の刃部は玄室の内側に向けられている。玄室中央部床面上より奥壁側に頭骨、歯、玄門側に大腿骨と判断される人骨片が検出されている。頭骨に接して左側壁側に玉類などが半円状にまとまって床面直上より出土している。刀子（38）は玄室中央部やや左寄りに、鉄鏃（4～11，13～35）は奥壁側に向けた状態で一括して検出している。貝ブロックは1の直刀下及び玄門左側壁側の2か所から検出され、細かく破砕された状態であったが、イボキサゴ、アサリ、ハマグリと判明した。量的にはイボキサゴが最も多く、アサリ、ハマグリはほぼ同量である。玄門附近の貝ブロック上には2本の鉄鏃（36，37）が置かれている。

羨道部内からは直刀（2），鉄鏃（12）が出土している。直刀は右側壁に沿い鋒を玄門側、茎部を羨門側、刀身部は壁側に向けて置かれている。

石室内からの出土遺物は次のとおりである。

玄 室

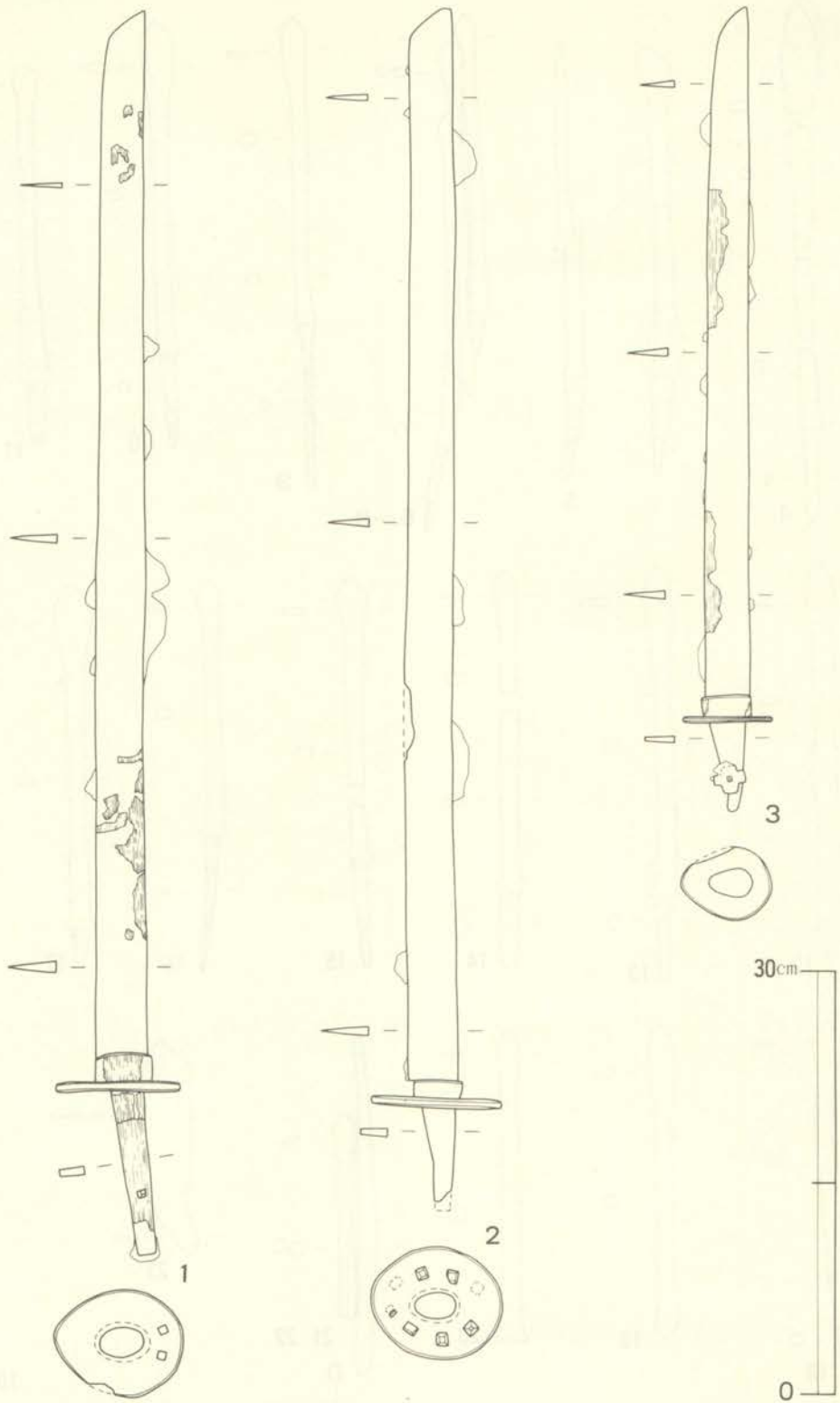
直刀	2	管玉	2
刀子	1	囊玉	1
鉄鏃	41以上	白玉	7
耳環	2	銅製小玉	3
勾玉	1		

羨 道 部

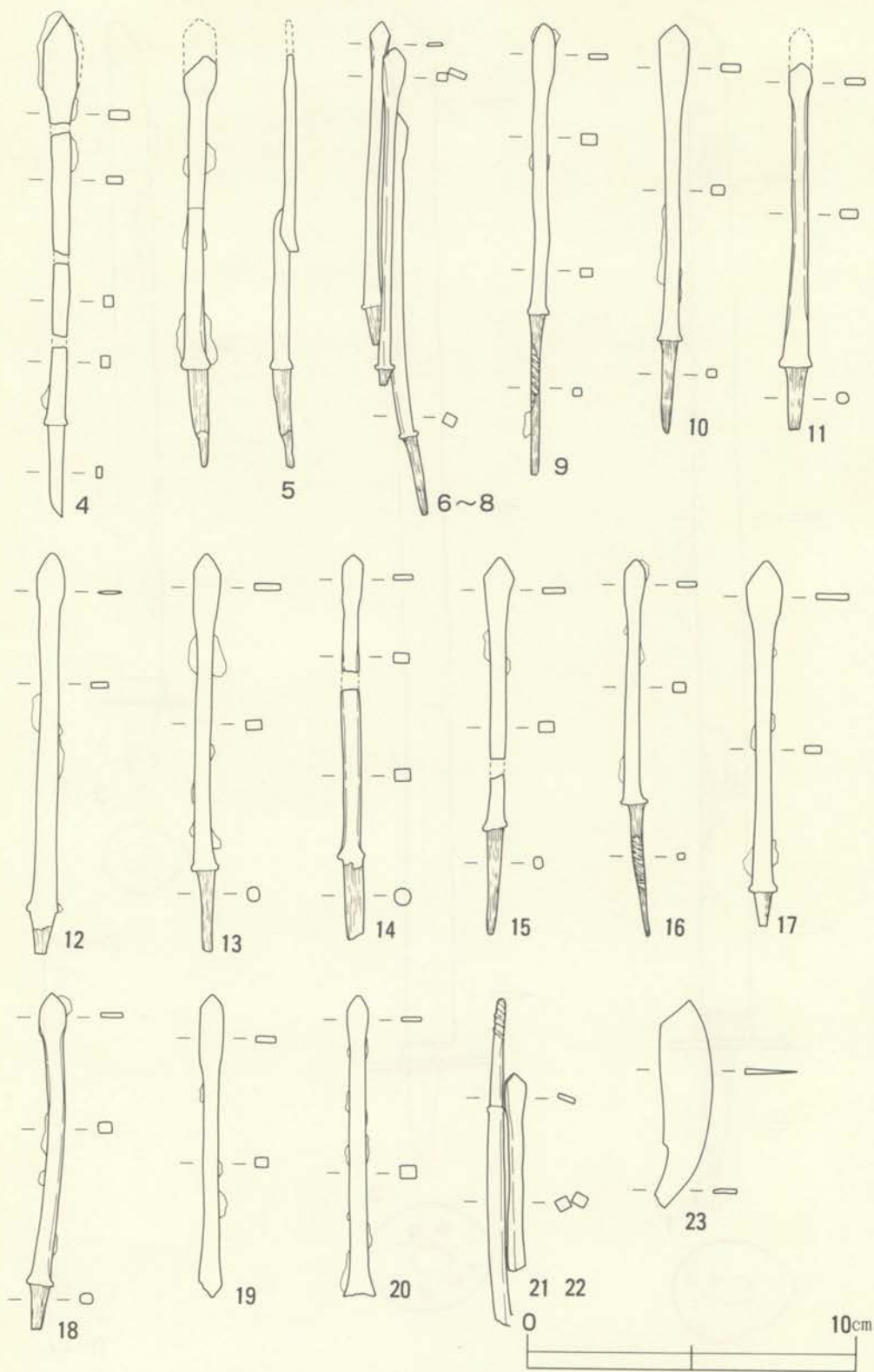
直刀	1	鉄鏃	1
----	---	----	---

直 刀（1～3）

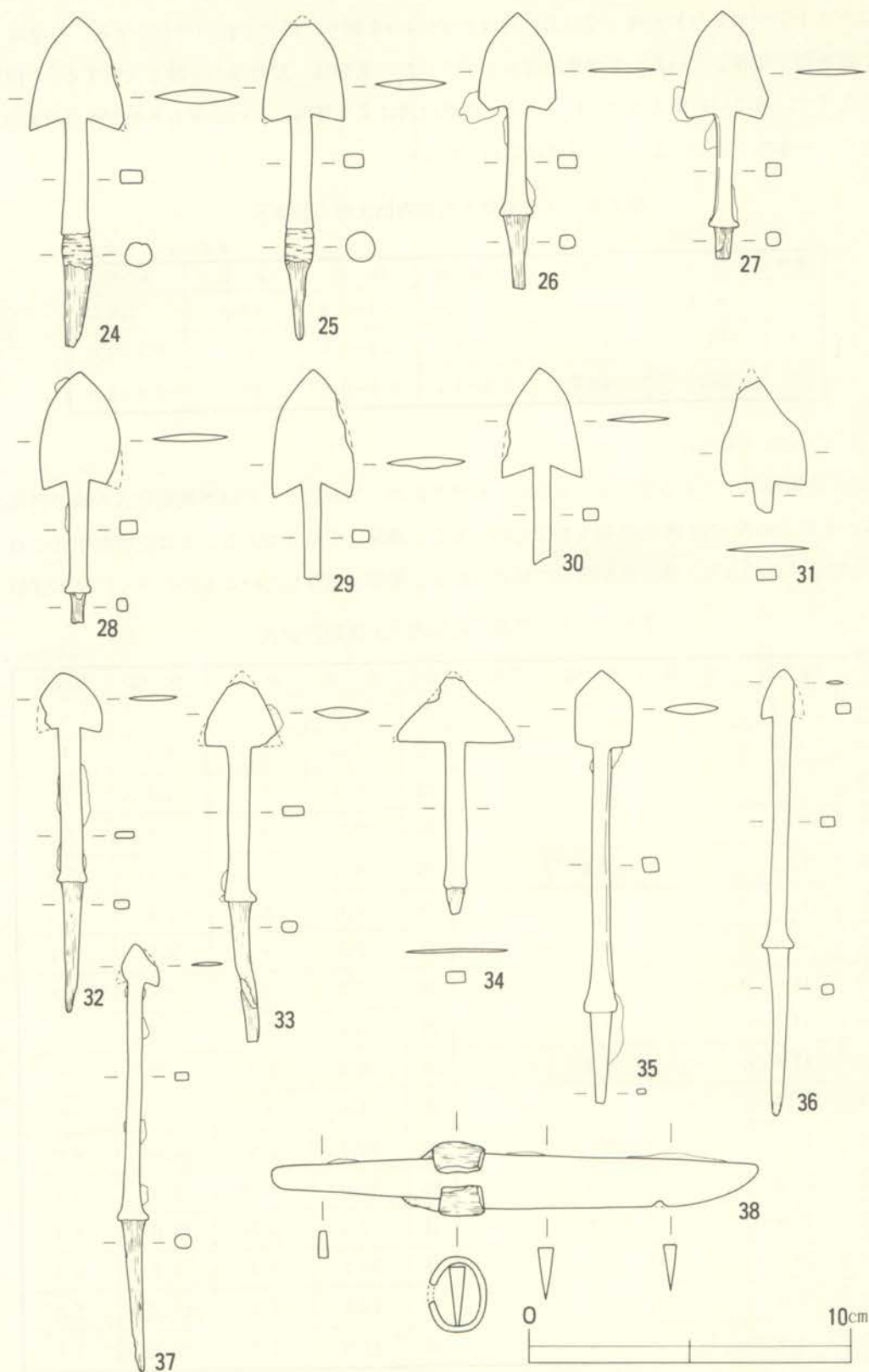
1，3は玄室より出土した。1は平棟、平造りで、鋒はふくらのない、いわゆるカマス鋒である。外への反りが緩やかではあるが認められる。両関で茎部には方形の目釘が1個所残っている。鏢は7.4×9.2cmを測り、倒卵形を呈する。方形の透孔が2孔認められる。刀身部、茎部には木質が付着し遺存している。3は小形の直刀である。平棟、平造りで、茎部には方形の目



第77图 1号墳第1石室内出土直刀实测图(1/2)



第78图 1号墳第1石室内出土鉄鏃実測図(1), (1/2)



第79图 1号墳第1石室内出土鉄鏃，刀子実測図(2)，(1/2)

釘上に十字形の留金具が残っている。鏝は5×6.4cmを測り、無窓で倒卵形を呈する。刀身部には木質が遺存している。2は羨道部から出土した。茎部端、刀身部の一部を欠損する。平棟、平造りで、鋒はいわゆるカマス鋒である。透孔は錆により判明しない箇所もあるが8孔認められる。刀身部、茎部には木質の付着は認められない。

第7表 1号墳第1石室内出土直刀計測表

単位はcm, () 推定値

番号	全長	刀身長	刀身幅	棟幅	茎長	茎幅
1	87.8	74	3~3.6	0.4~0.9	13.8	2.4
2	(84)	75.5	3.1~3.6	0.4~0.6	8.5	0.5~0.6
3	56.7	48.7	2.9~3.1	0.4~0.6	18	0.8~2.6

鉄 鏃 (4~37)

12が羨道部出土である他は全て玄室から検出された。第78図1~22は無関鑿箭式の鏃で篋被部と茎部との境には棘状突起をもつものである。鏃身は平造りである。5は篋被部中央において接合されており、接合痕が明瞭に認められる。茎部を残存しているものの多くには木質が

第8表 1号墳第1石室内出土鉄鏃計測表

単位はcm

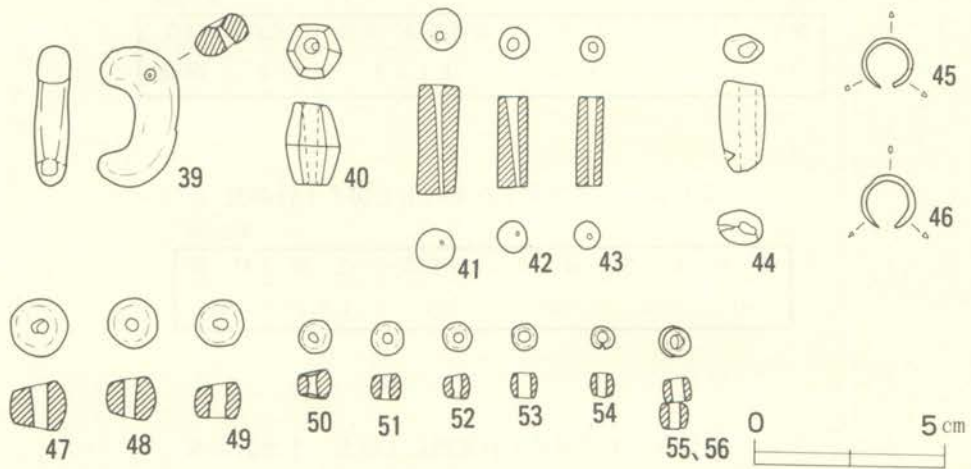
番号	全長	身長	身幅	篋被長	番号	全長	身長	身幅	篋被長
4	15.1	—	1.0	—	21	9.8	—	—	—
5	12.4	—	0.9	—	22	5.9	—	0.7	—
6	9.8	—	0.6	—	23	6.3	—	1.6	—
7	10.2	—	0.7	—	24	10.2	3.5	(3.0)	3.3
8	12.2	—	0.6	—	25	9.8	(3.1)	(2.6)	3.3
9	13.7	—	0.7	—	26	8.6	3.1	2.4	3.3
10	12.4	—	0.9	—	27	7.7	3.3	2.7	3.4
11	11.1	—	0.7	—	28	7.7	3.5	2.4	3.2
12	11.9	—	0.8	—	29	6.4	3.9	2.5	—
13	11.8	—	0.8	—	30	6.0	3.3	2.5	—
14	11.4	—	0.6	—	31	4.0	(3.2)	2.7	—
15	11.2	—	0.9	—	32	10.4	1.8	(2.0)	4.6
16	11.2	—	0.6	—	33	11.0	(2.0)	(2.5)	4.7
17	10.9	—	1.1	—	34	7.3	(2.0)	(4.8)	4.4
18	10.0	—	0.8	—	35	13.2	2.4	1.8	8.0
19	9.0	—	0.7	—	36	13.6	1.5	(1.3)	7.0
20	9.0	—	0.6	—	37	13.0	1.2	(1.3)	7.1

註) 全長は現存値を示す。() 推定値

付着している。また、9、16には桜皮巻きの痕跡が認められる。23は鎌身から筥被部の一部にかけて残存する片刀箭式有茎鎌で、鎌身が比較的大きい。第79図24～37は三角形式棘筥被鎌である。35の鎌身は五角形に近い形をしており、五角形式に含まれることも考えられる。鎌身は両丸造りである。26、27は逆刺の部分がカットされている。33、34は鎌身がほぼ正三角形を呈している。33は茎部で接合されており、接合痕が明瞭に認められる。36、37は鎌身が比較的小さく類似した形態である。

刀 子 (38)

全長15.1cm、刀身長8.5cm、刀身幅1.6cm、棟幅0.6cm、茎長5.1cmを測り、縁金具が残存している。茎部に木質が付着している。



第80図 1号墳第1石室内出土玉類実測図(1/2)

耳 環 (45, 46)

遺存状態が悪く、耳環であるか否かは判然としない。検出時にわずかであるが金箔が付着しており、金銅製である。45は外径1.3cm、内径1.1cm、46は外径1.4cm、内径1.1cmを測る。

玉 類 (39~44, 47~56)

39は勾玉で片面から穿孔され、終孔部には漏斗状の剝離痕が認められる。瑪瑙製で淡赤褐色を呈する。

40は水晶製の切子玉である。片面穿孔で終孔部には漏斗状の剝離痕が残る。

41~43は管玉である。ともに片面穿孔で、全面を研磨されている。碧玉質で暗緑色を呈する。長さ2.4cm、最大幅1.2cmを測る。

44は琥珀製の棗玉で両面から穿孔されている。

47~52は蛇紋岩製の白玉である。49・52は両面より穿孔されている。

53~56は銅製の小玉である。遺存状態はあまり良好ではない。53の孔中には紐と考えられる繊維が遺存している。54の側面には縦に走る接合線が認められる。細い銅板を管状にまらめて製作したことが推定される。55, 56は腐蝕のためか癒着している。

第9表 1号墳第1石室内出土勾玉計測表

単位はmm

番号	長径 × 短径	腹部長径 × 短径	孔径	材質
39	36 × 20	11 × 9	3	瑪瑙

第10表 1号墳第1石室内出土切子玉計測表

単位はmm

番号	長さ	最大径	頭部径	孔径	材質
40	21	14	10	4 × 2	水晶

第11表 1号墳第1石室内出土白玉・小玉計測表

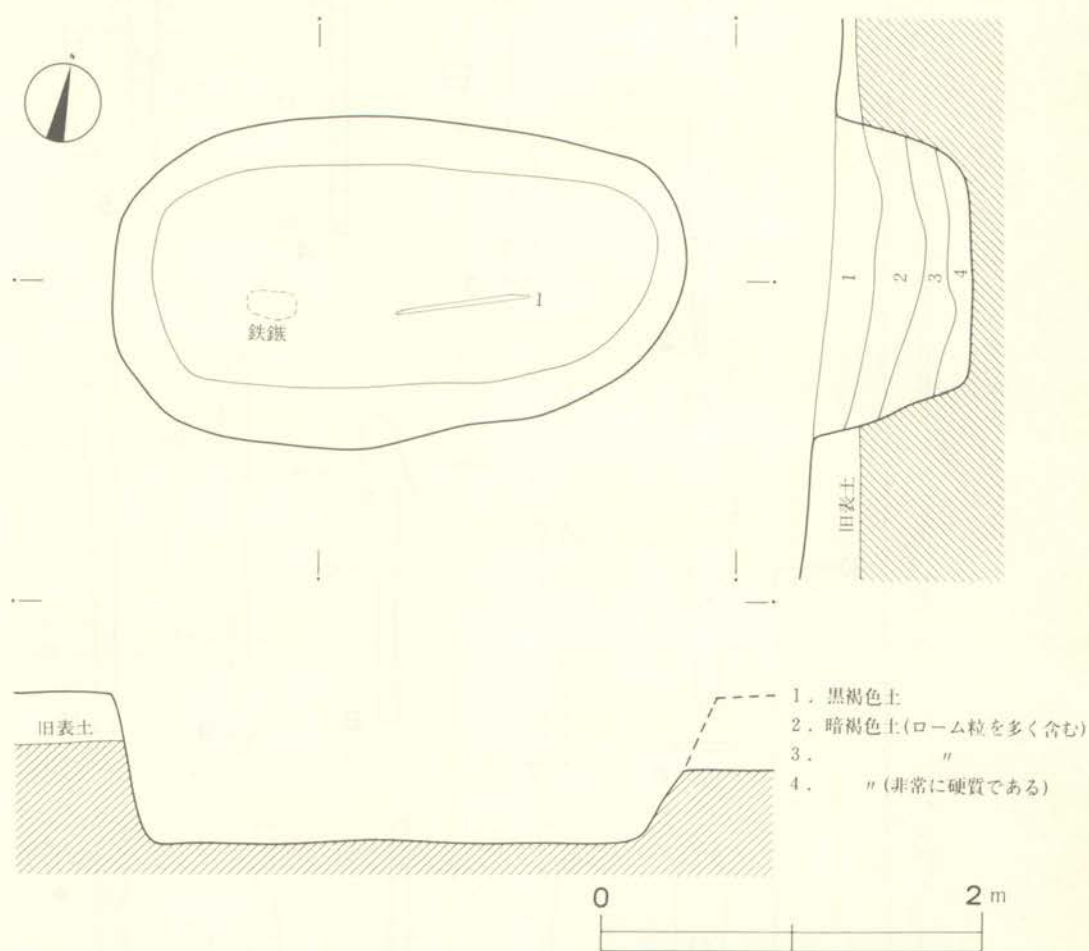
単位はmm

番号	最大径	最大厚	孔径	材質	番号	最大径	最大厚	孔径	材質
47	15	13	4	蛇紋岩	52	7	6	2	蛇紋岩
48	13	11	3	"	53	7	6	3	銅
49	12	9	4	"	54	6	6	2	"
50	9	7	3	"	55	7	6	3	"
51	8	7	2	"	56	7	7	3	"

第2主体部 (第81図, 図版42)

墳丘, 周堀, 第1主体部調査終了後, 墳丘下の遺構確認の際に検出された。「テラス」上ではなく, 墳丘裾部に位置し, 墳丘築造前に掘り込まれている。第1主体部とはほぼ同時期と捉えられるが, 前後関係は判然としない。

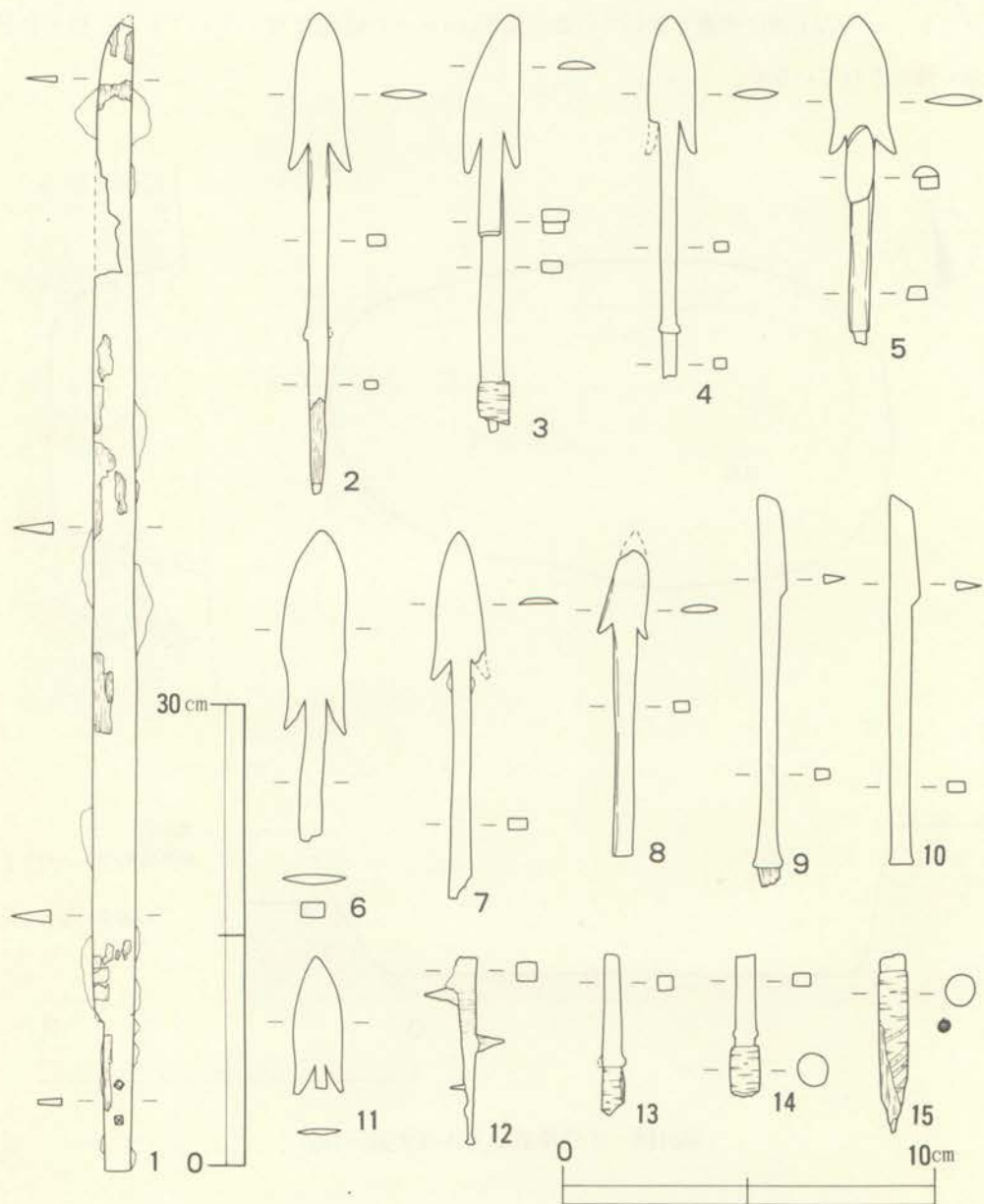
土壌である。主軸方向をN-80°-Wとほぼ東西に置いている。平面プランは長楕円形を呈し, 長径3m, 短径1.7m, 底面では長径2.7m, 短径1.2mを測る。旧表土上面から掘り込まれソフト・ローム上面に底面を置いている。深さは0.8mで底面は堅く平坦である。粘土などは全く検出されていない。



第81図 1号墳第2主体部実測図(1/50)

土壌内の出土遺物 (第82, 83図, 図版66)

土壌内からは直刀, 鉄鏃, 鉄釘, 須恵器環身・蓋が出土している。遺物は南側に偏った部分に集中している。直刀(1)はやや東寄りの南側部分で鋒を西側, 刀身部を北側に向けて床面直上に置かれている。鉄鏃(2~11), (13~15)は西寄りの南側部分で床面直上より一括して出土し, 一部は覆土第4層中から検出されている。また, これらの鉄鏃とともに鉄釘の半欠品(12)を



第82図 1号墳第2主体部内出土鉄製品実測図(1/2, 1/5)

検出した。木質部も付着しており木棺直葬を示唆する遺物であるが、わずか一本のみの出土であるため判然としない。須恵器坏身・蓋（16, 17）はやや壁寄りの南側部分で覆土第2層中からの出土である。

土壌内からの出土遺物は次のとおりである。

直刀	1	須恵器坏	1
鉄鏃	12以上	〃身	1
鉄釘	1		

直 刀（1）

鋒、刀身部の一部を欠損する。平棟、平造りで、関は片関で刃関となる。茎部には方形の目釘が2個所に残存している。刀身部、茎部には木質が付着し遺存している。

第12表 1号墳第2主体部内出土直刀計測表

単位はcm、〔 〕現存値

番号	全長	刀身長	刀身幅	棟幅	茎長	茎幅
1	〔73.1〕	64.6	2.1~2.8	0.4~0.8	10.0	0.5

鉄 鏃（2~11, 13~15）

2~8, 11は柳葉式の鏃で棘状突起を有するものと欠損のため判明しないものもある。鏃身は3, 7が片丸造りである他は平造りに近い両丸造りである。3, 5は筥被部において接合されている。9, 10は片刃箭式の鏃で棘状突起を有し、ともに鏃身は平造りでわずかに関をもつ。13~15は筥被部から茎部にかけての部分で、桜皮を巻きつけた痕跡が明瞭に認められる。いずれも棘状突起を有する。

第13表 1号墳第2主体部内出土鉄鏃計測表

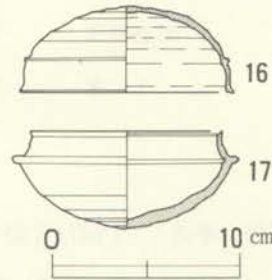
単位はcm

番号	全長	身長	身幅	筥被長	番号	全長	身長	身幅	筥被長
2	12.6	4.1	1.7	4.5	9	10.3	2.6	0.7	7.1
3	10.9	4.1	1.5	5.5	10	9.7	2.9	0.8	6.8
4	9.5	3.6	(1.4)	4.7	11	—	3.6	1.3	—
5	8.6	3.6	1.8	4.6	13	4.3	—	—	〔3.0〕
6	8.1	5.3	1.7	—	14	3.8	—	—	〔2.2〕
7	9.5	3.8	(1.6)	—	15	4.8	—	—	〔0.5〕
8	8.0	(2.3)	1.4	—					

註) 全長は現存値を示す。() 推定値、〔 〕現存値

鉄 釘 (12)

体部下半のみの遺存で、棘状の木質が横目に付着している。比較的小形の釘であったと思われる。



第83図 1号墳第2主体部内出土須恵器実測図(1/4)

第2主体部出土土器一覧

単位はcm

番号	器種	法量	器形の特徴	成形・調整技法	胎土・焼成・色調	備考
16	坏・蓋	口径 11.8 器高 4.5	口縁部はややふくらみながら外反して下り、端部はやや内傾する段をもつ。稜は断面三角形で短い。天井部は高く丸い。	巻き上げ水挽き成形。天井部上半は回転ヘラ削り。他は回転ナデ調整が施されている。	精緻 良 青灰色	須恵器
17	坏・身	口径 10.2 器高 5	たちあがりは比較的高く内傾してから、やや直立して上方にのびる。口唇部は丸くおさめる。受部はほぼ水平にのび、端部を丸味におさめる。底部は深く丸い。	巻き上げ水挽き成形。たちあがりを貼り付けている。体部下半は回転ヘラ削り。	精緻 良 青灰色	須恵器

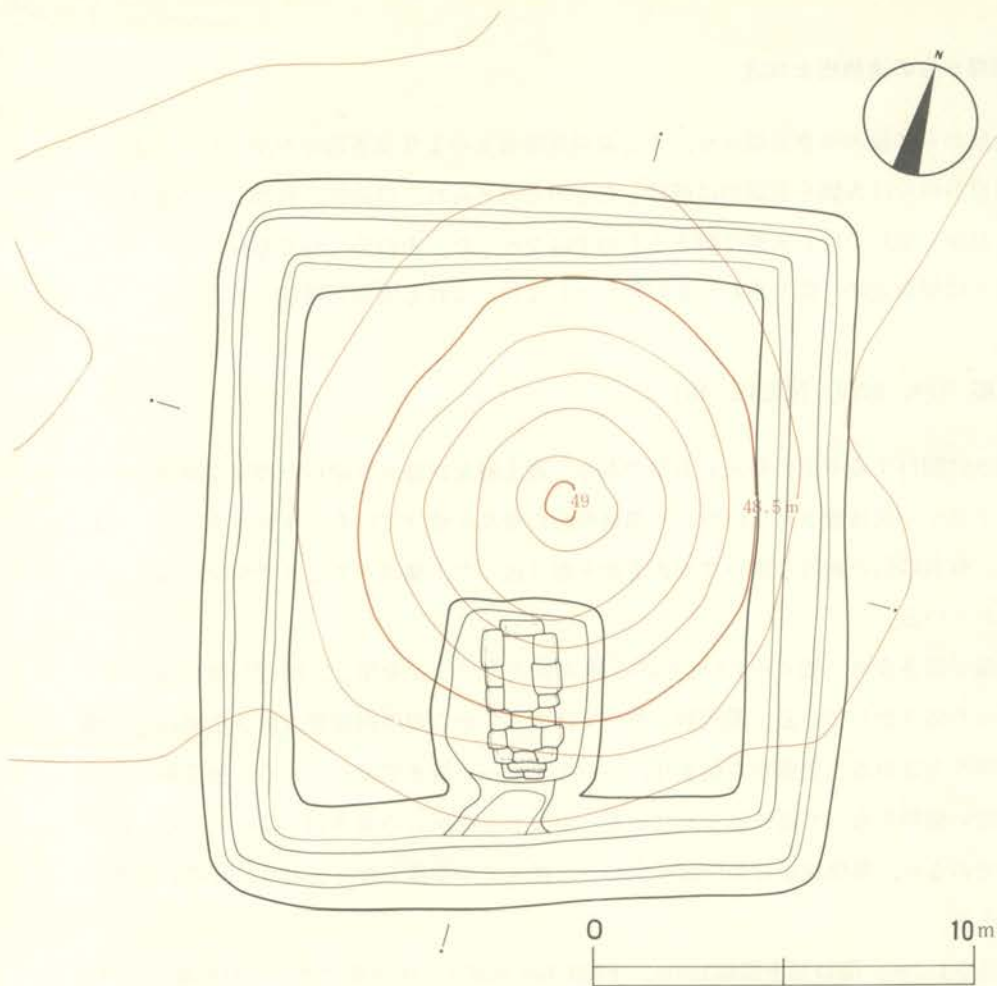
2号墳

位置と現況

1号墳の北東30m、標高48mの台地平坦部に位置する。畑地中に存在するため墳丘の大部分はすでに削平されており、若干の高まりが認められる程度で遺存状態は極めて悪い。

墳丘と周堀 (第84、85図、図版43、44)

方墳である。墳丘測量を行った時点においては現地表面より約50cmの高さをみせる。やや南北に長い円形を呈していたので当初円墳と考えられていたが、発掘調査結果、比較的整った形態の方墳であることが判明した。



第84図 2号墳実測図(1/200)

墳丘は旧表土である黒色の腐蝕土上に盛土によって築造され、旧表土上面より40~50cm程度残存するのみである。旧表土層の厚さは20~40cmでほぼ水平に堆積している。墳丘の築造工程について1号墳と比較するだけの証左は得られていないが、残存する土層断面の観察ではほぼ同じような盛土の積み方を行っていたと考えられる。墳丘と周堀の間には「テラス」が形成され、幅0.8~1.5mで旧表土が比較的急傾斜をもって削平されている。一部攪乱により全体には確認できなかったが、ほぼ環状に巡っていると考えられる。

周堀は全周する。外縁径・内縁径はそれぞれ東西17m・12m、南北19m・13.5mを測り、やや南北に長い。上端幅は南側で2.8mを測る他はほぼ2.5m前後の一定の幅で巡っている。ハード・ローム層まで掘り込まれ、深さは1~1.3mを測る。底面、側壁とも明瞭に検出され、底面はほぼ平坦である。断面は逆梯形を呈している。覆土は自然堆積の様相を示し、全体にはほぼ同一の層序である。

墳丘と周堀からの遺物出土状況

旧表土上面から多量の須恵器細片が、また南側周堀覆土中より須恵器片が出土している。

多量の須恵器細片は大甕を意識的に破砕したものと考えられ、口縁部、底部などの各部位までは判明したが、細片のため実測に耐えるものではなかった。その他に坏片も検出されている。周堀内の破片は短頸壺の一部と思われるが判然としない。これも実測不可能である。

主 体 部 (86, 87図, 図版45, 46)

ほぼ南向きに開口する単室の横穴式石室である。表土層及び盛土を除いた段階で検出された。粘土により上面が全面被覆されていたが一部耕作時の攪乱を受けている。主軸方向はN-14°-Wである。軟質砂岩の截石を用いて旧表土面を掘り込んだ土壌の中央よりやや東に偏った位置に構築されている。

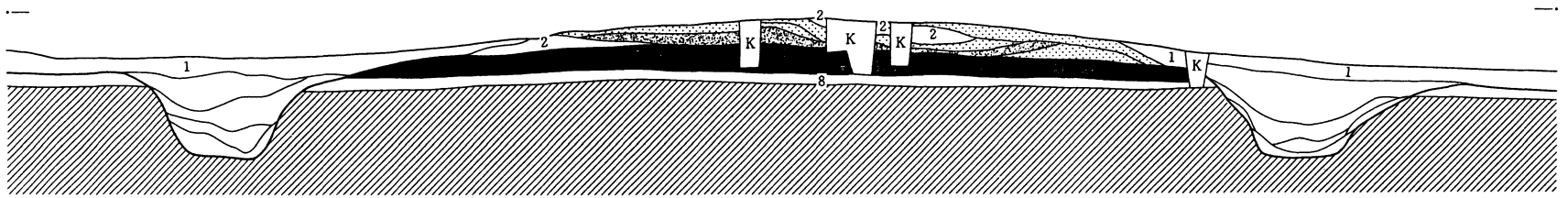
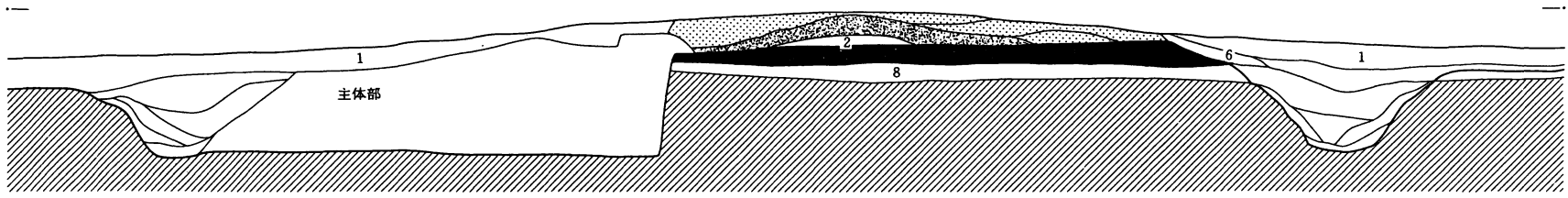
土壌は上端で長さ5m、幅4~4.5mを測る隅丸長方形プランを呈し、西辺が開口部へ延びるに従ってやや張り出している。羨門側でややすぼまってから周堀内縁壁に続き前庭部を形成している。掘り方は旧表土上面から始まり、ハード・ローム層まで及んでいる。奥壁側に比べ東・西壁は緩い傾斜をもって掘り込まれている。旧表土上面からの深さは1.3mを測る。底面はほぼ平坦であるが、奥壁側から羨門側へ向かうに従ってやや高くなっており、その比高差は10cmほどである。

前庭部は長さ1.3m、開口部上端幅3.5m、下幅1.6mを測り、中央部でややくびれ緩かに傾斜しながら周堀底面よりわずかに高い位置で開口する。

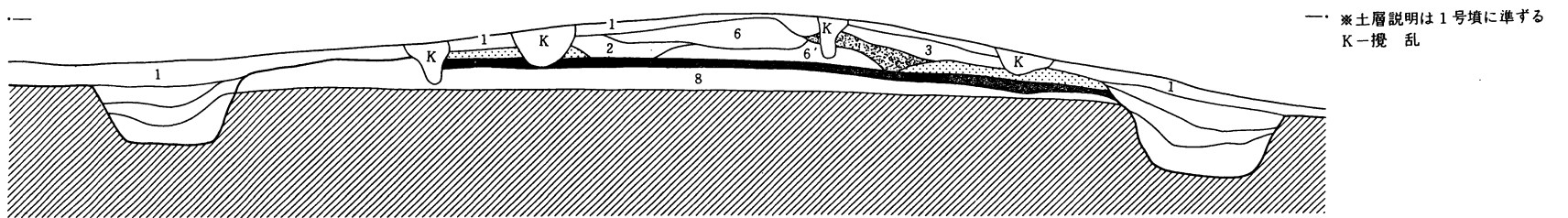
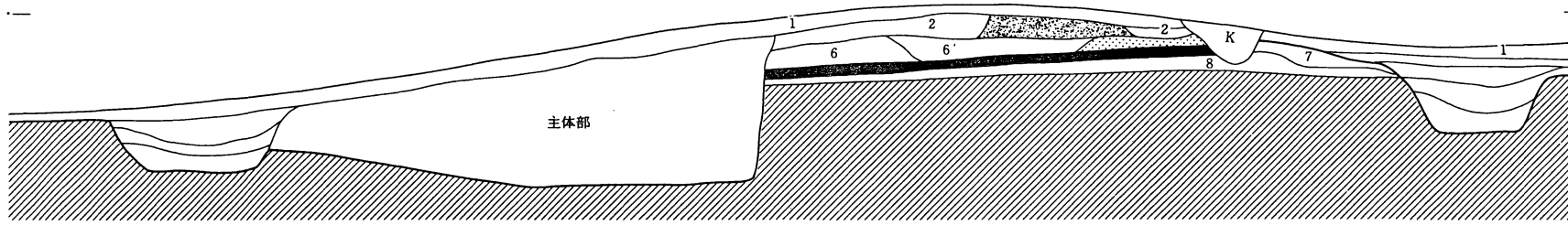
石室は両袖式の横穴式石室である。天井部と側壁の一部が攪乱により破壊されているが概して遺存状態は良好である。土壌底面には砂岩屑を主体に黒色土、ローム・ブロックを混入した土層を敷き敲きしめ、その上に截石を据えている。

玄室床面プランは長方形を呈し、長さは左右側壁で1.8m、主軸線上で1.9m、幅は奥壁下で1.1m、中央部で1.05m、玄門袖石下では1mを測る。奥壁側に比べ玄門側がやや幅狭くなっている。胴張りは認められない。高さは右側壁1.2m、左側壁1.25mを測る。奥壁は右側部分が一部欠損する一枚石で、高さ1.1m、上辺幅0.75m、下辺幅1.1mを測り、台形を呈する。各辺には面取りが施されている。1号墳の奥壁に認められたような切り込みはなく、側壁の截石を奥壁にもたせかけるように積み上げている。側壁は左右とも3枚の截石を3段に積んで構築されている。両側壁間は床面で1~1.1mを測るのに対して側壁上段で0.75mと狭くなる「持ち送り」が行われ、特に右側壁の「持ち送り」の度合が著しい。

玄室と羨道部間には方柱状を左右に立て玄門とし、その間に框石を置いている。右袖石の一

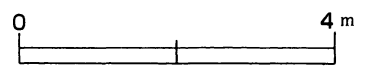


2号墳断面図

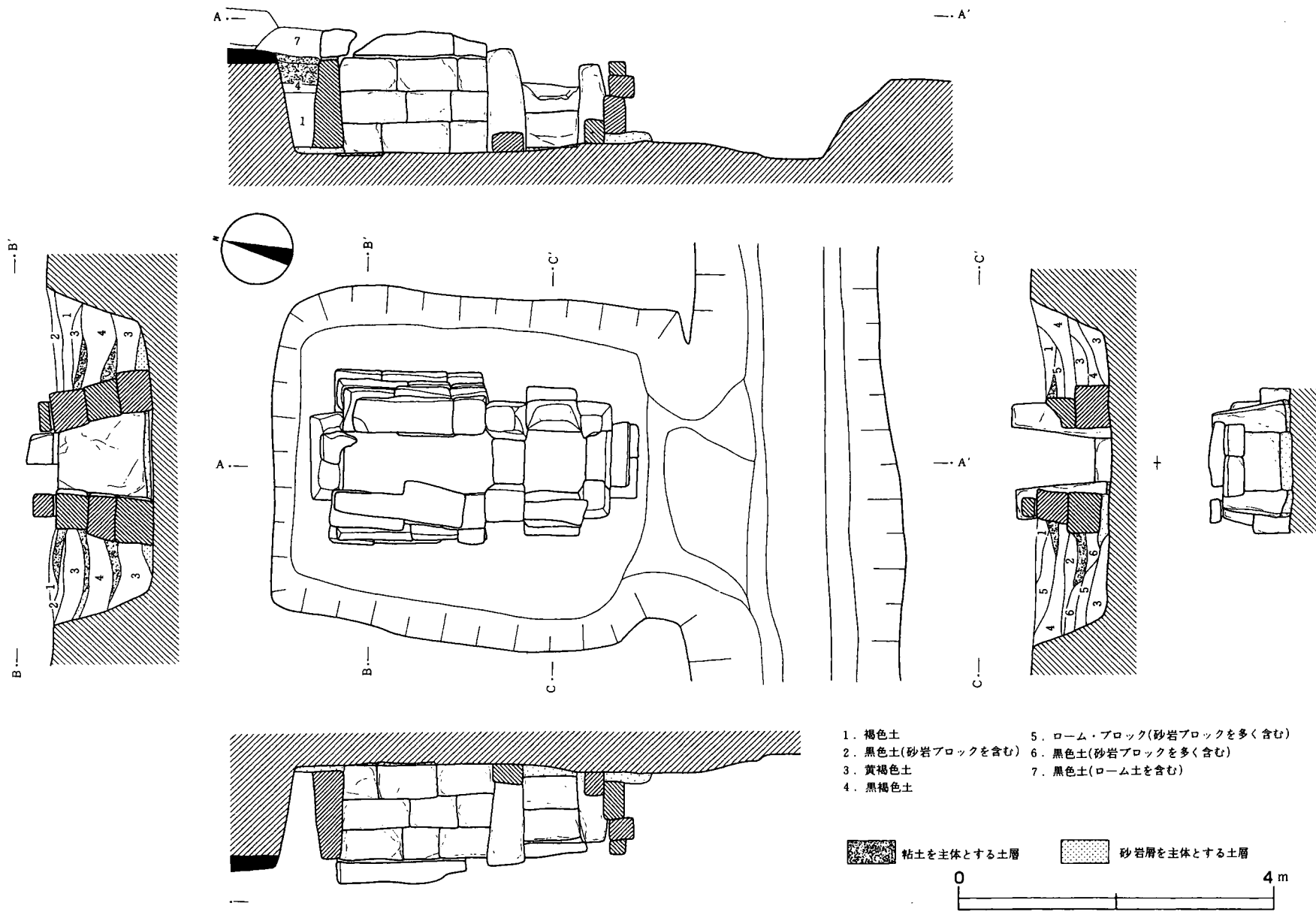


※土層説明は1号墳に準ずる
K-攪乱

3号墳断面図

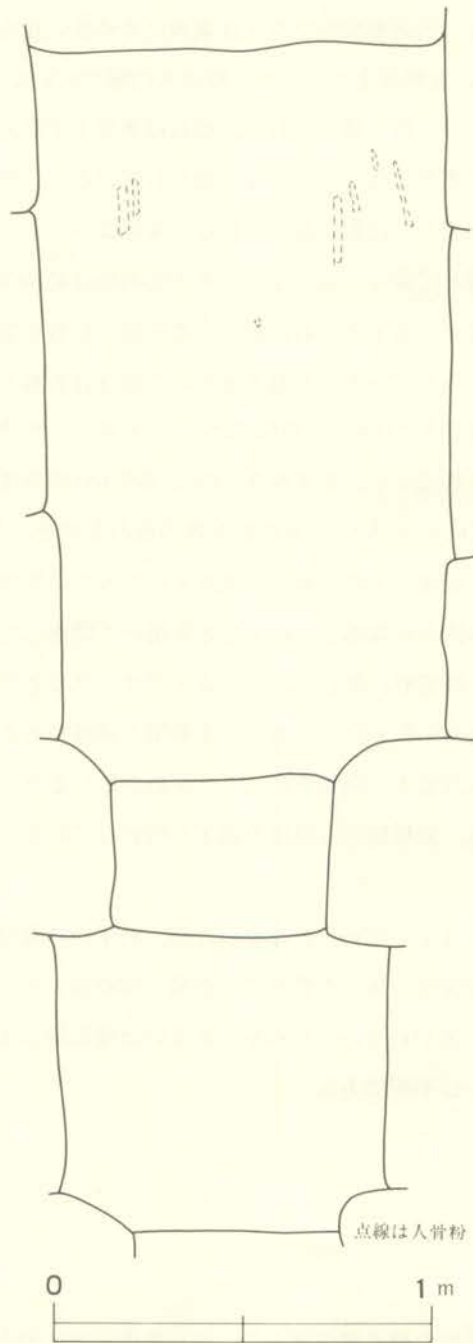


第85図 2号墳, 3号墳墳丘、周堀断面図(1/50)



第86図 2号墳主体部実測図(1/50)

部が欠損している他は良好な遺存である。右袖石は床面上に立てられ、高さは1.3mの玄室側壁上面より10cmほど高い。左袖石は床面につき固められた砂岩屑を主体とする土層を基盤としてその上に据えられ、高さは基盤上面から1.2m、床面から1.3mを測り、玄室側壁よりは5cm



第87図 2号墳石室内遺物出土状況図(1/20)

高くなっている。両袖石間は框石上で0.55mを測るが、頂部間は0.8mを外傾している。切り込みは認められず、玄室、羨道部の側壁がもたせかけるように積まれている。框石には厚さ25cmほどの截石を使用している。

羨道部では左側壁上に天井石が残存しているが、右側壁は天井石と側壁上段の截石の一部が攪乱により破壊されている。羨道部床面プランは東西にやや長い長方形を呈し、長さは右側壁で0.6m、左側壁で0.65m、主軸線上で0.75m、幅は玄門側で0.9m、羨門側では0.85mを測る。左右側壁とも截石を1枚ずつ2段に積んでおり、根石は奥壁下で認められたような基盤の上に据えられている。基盤は左側壁の根石の方が厚く敷かれている。床面からの高さは右側壁で0.9m、左側壁では1mを測り、段差が認められる。床面はハード・ローム上に置かれ堅緻で、玄門から羨門へ向かうに従って除々に高くなり、その比高差は約10cmである。

羨門は玄門と同様に方柱状の截石を左右に配し、その間に框石を置いている。袖石は前述の厚さ5cmの基盤の上に据えられている。基盤上面からの高さは右袖石で0.95m、左袖石では0.85mを測る。両袖石間は框石上で0.6m、頂部では0.5mを測り、やや内傾している。閉塞には3段、4枚の截石が使用されている。まず長さ0.6m、幅0.6mに前述の基盤を框石の前面に敷いて敲きしめる。その上に0.8×0.5×0.3mの直方体の截石をのせ、さらにやや前庭部へ張り出すように2枚の截石を、最後に1枚の截石を積み上げて入念に閉塞させ、右袖石とほぼ同じ高さにしていく。さらに外側を前庭部まで粘土などを用いて閉塞している。

石室と土壌の間は粘土、砂岩屑、黒色土、ローム・ブロックなどで裏込めされている。截石の積み上げと並行して裏込めが行われているのは1号墳と同様である。奥壁背後の土層断面の観察から石室構築後に墳丘の盛土が開始されたことがわかる。また、各截石間は粘土によって目張りされ、天井石と奥壁、側壁間にも同様の施工が行われている。

石室内からは遺物の出土は全く認められなかったが、わずかに骨粉が玄室床面の中央部より左側壁に寄った部分と、右側壁に偏った部分の2か所(第87図)から検出されている。これは追葬により2体が石室内に置かれていたためか、あるいは攪乱等による1体分の人骨の一部が移動したためによるものかは不明である。

3号墳

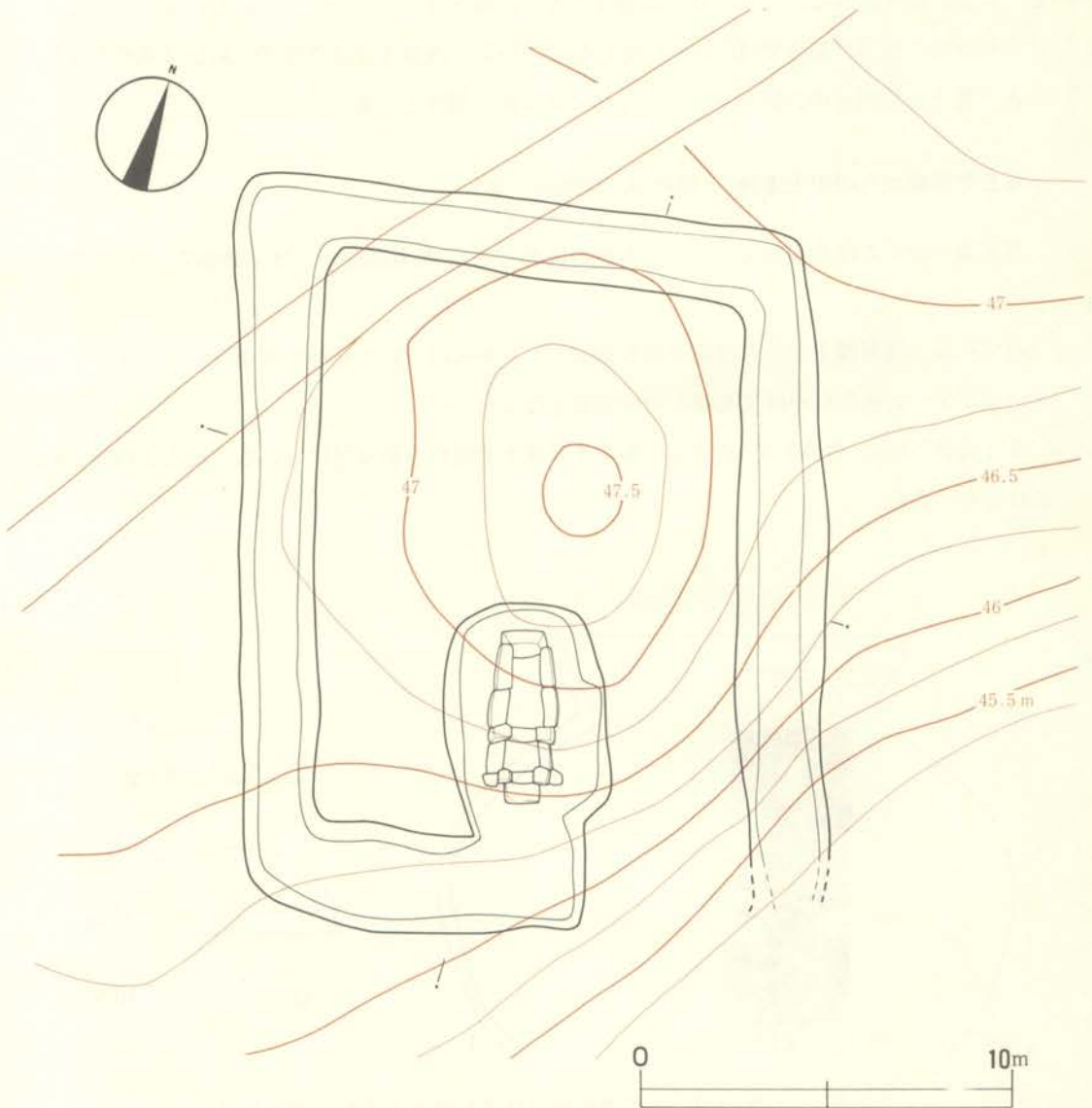
位置と現況

坂崎谷津に張り出した舌状台地の緩斜面上で、本古墳群中では最南端に位置している。山林中に存在していたが墳丘は農道の敷設時にすでに大部分が削平されており、遺存状態は悪い。

墳丘と周堀 (第88, 89図, 図版47, 48)

方墳である。墳丘測量からは方墳か円墳かは判断しかねたが、発掘調査の結果、特異な形態の周堀が巡る方墳であることが判明した。

墳丘は旧表土である黒色腐蝕土上に築造され、旧表土上面より70~80cm程度残存するのみである。旧表土層は10~20cmの厚さで堆積しているが、緩斜面上に占地しているため北から南へ、また西から東へ傾斜している。墳丘の築造工程は1, 2号墳とは異なっている。まず、墳丘裾部に沿って環状に黒色土を主体とする土層を積んだのち、中央部に暗褐色土層を盛り上げ環の内部を次第に埋めていくような方法がとられている。その後の施工については不明であるが、



第88図 3号墳実測図(1/200)

1, 2号墳とほぼ同じ工程であったと考えられる。墳丘と周堀の間には「テラス」が東側部分を除いて形成され、幅2~2.6mにわたって旧表土が削平されている。

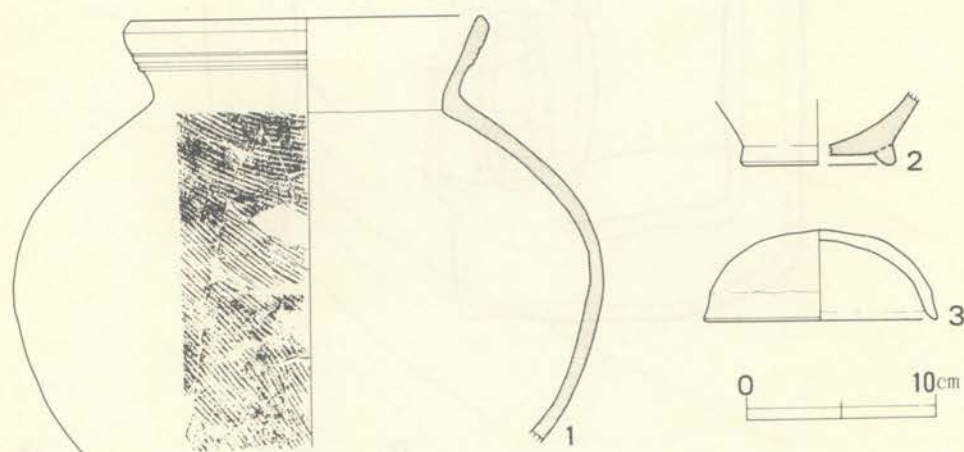
周堀は全周せず、南側周堀の石室東側では全く掘り込みが認められない。また、東側周堀は南側へ直線的に延びるに従って次第にその深さを減じ、そのまま消滅してしまう。南側周堀へ向かうコーナーを形成していないことから、当初からこのような周堀の形態を呈するように計画されていたものと考えられる。周堀各辺の外縁径・内縁径はそれぞれ南側9m・4.5m、西側19m・15m、北側15m・11m、東側は明瞭に検出し得た位置まで16.5m・14.5mを測る。南北にやや長い不整形である。上端幅は南側で3m、東側で2.5mを測る他は2mとほぼ一定している。掘り込みはハード・ローム層まで及び、深さは0.8~1mを測るが、前述したように東側周堀の南寄り部分では0.3mと浅くなっている。底面はほぼ平坦で、断面は逆梯形を呈する。覆土は自然堆積の様相を示し、全体にほぼ同一層序となる。

墳丘と周堀からの出土遺物 (第89図, 図版67-2)

墳丘盛土中からは北西部分より須恵器瓶の底部(2)、北東部分からは土師器蓋(3)が出土している。

石室正面の周堀覆土中からは須恵器短頸壺(1)が破碎された状態で検出された。復原すると体部下半から底部にかけて欠損した短頸壺となった。

2は底径7.8cm、現高3.4cmを測る。巻き上げ成形で高台を貼り付けている。胎土は精緻で焼成は良好である。



第89図 3号墳周堀及び墳丘内出土土器実測図(1/4)

墳丘と周堀からの出土土器一覧

単位はcm、〔 〕現存値

番号	器種	法量	器形の特徴	成形・調整技法	胎土・焼成・色調	備考
1	短頸壺	口径 18.4 器高 [22]	口縁部は面取りが施され、その下に形骸化した突帯の段を有している。体部はよく張りながら丸味をもって最大径へ向かう。	巻き上げ成形。口縁部はナデ。体部外面は斜めにタキを施す。内面はヘラ削りののちナデで調整する。	砂粒を含む、堅緻良 灰色	須恵器
3	蓋	口径 12.2 器高 4.6	口縁部は外反して下り、端部を丸くおさめる。緩い稜をもち、天井部は丸く高い。	口縁部外面はヨコナデ。天井部はヘラ削りのちナデ。内面は黒色処理が施され、よく研磨されている。	砂粒を含む良 茶褐色	

主 体 部 (第90, 91図, 図版49)

ほぼ南向きに開口する単室の横穴式石室である。表土層を除いた段階で検出された。遺存状態は良好である。主軸方向をN-32°-Wに置き、軟質砂岩を用いて旧表土層を掘り込んだ土壇の中央に構築されている。また、古墳築造前に位置していた鬼高期の住居跡を破壊して主体部開口部および南側周堀が形成されている。

土壇は上端で長さ6m、幅4~4.4mを測る隅丸不整長方形プランを呈する。東辺は開口部で一旦ややくびれてから直線的に南へ約3m延び、そこから直角に西方へ曲折して周堀の外縁となる。掘り方は墳丘の盛土がある程度進んだ段階で開始し、ハード・ローム層まで掘り込んでいる。東壁の一部は底面から緩やかに立ち上がってからはほぼ垂直に土壇上端部まで続いている。その他はほぼ同じ傾斜で掘り込まれている。旧表土上面からの深さは1.65mを測る。底面は奥壁から羨門框石下までは平坦であるが、框石下から垂直に約30cm立ち上がってから前庭部、周堀へ続いている。

前庭部は開口部上端幅3mを測り、周堀底面よりやや高くなっている。また、前述したような周堀の形態をとるため前庭部と周堀の始まりとの識別は判然としない。

石室は両袖式の横穴式石室である。側壁や天井石の一部が石室内に崩落している他は、全体に遺存状態は良好である。石室床面は土壇底面をそのまま利用しているが、截石を据える位置に部分的に砂岩屑を主体とする土層を敷いて敲きしめ基盤としている。

玄室床面プランは長方形を呈する。長さは右側壁で2.05m、左側壁、主軸線上で2m、幅は奥壁下、中央部で1.1m、玄門袖石下では1mを測る。胴張りは認められない。高さは右側壁で1.4~1.45m、左側壁では1.25~1.35mと段差が認められる。奥壁は腰石の上に截石が1枚積み上げられ、2枚とも各辺に面取りが施されている。腰石は高さ1.2m、上辺幅0.75m、下辺幅1.1m、上部の截石は高さ0.65m、上辺幅0.5m、下辺幅0.75mを測り、2枚とも台形を呈する。腰石の上辺と上部の截石の下辺は平坦に加工されている。床面から奥壁頂部までは1.85m

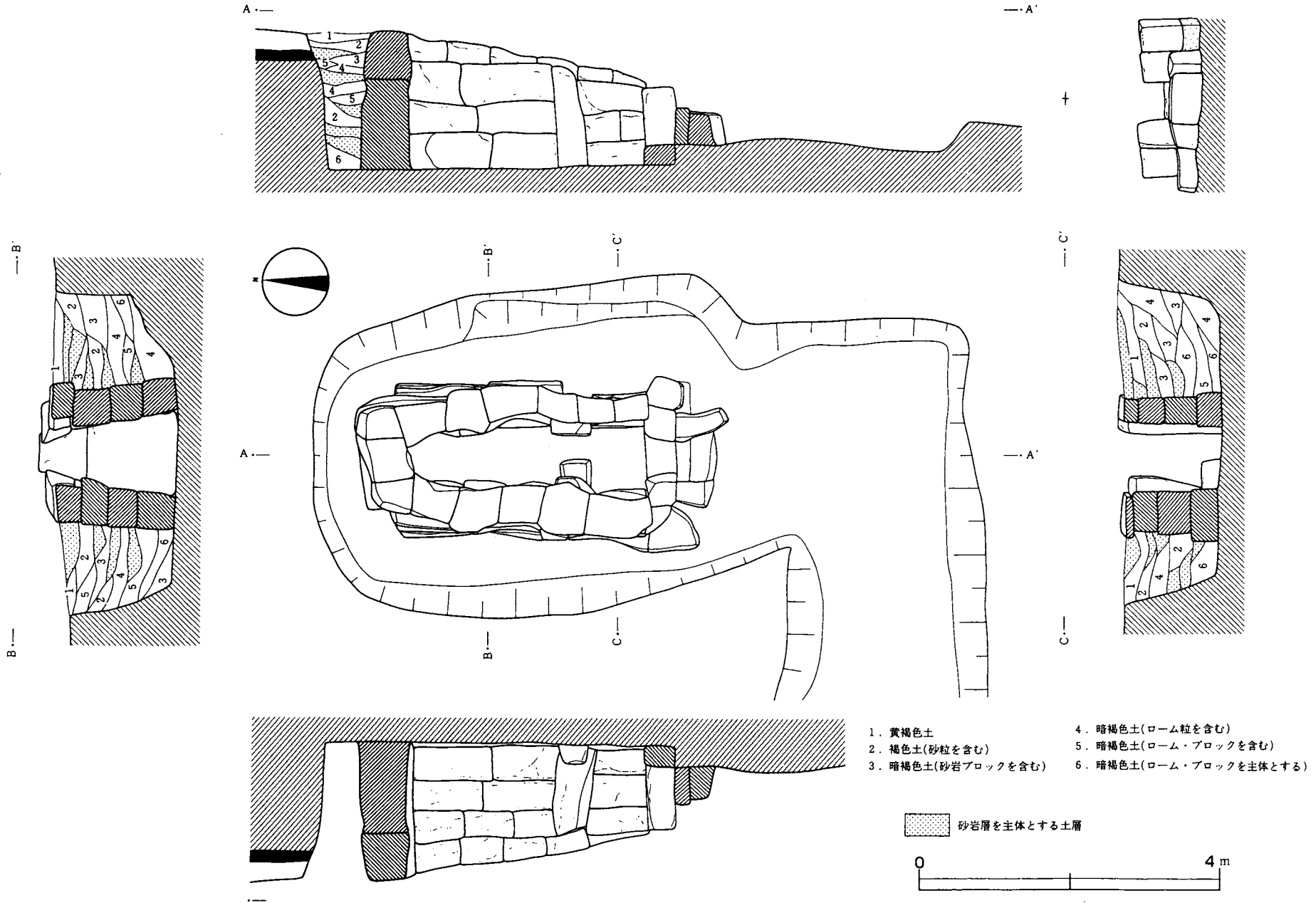
を測り、天井石を被覆した高さと同じである。側辺には切り込みはなく、両側壁の截石を2枚の奥壁にもたせかけるように積み上げている。右側壁3段目の截石は奥壁を大きく挟み込んでいる。右側壁は2枚の截石を3段に、左側壁は1、2段目が2枚、3段目が3枚の截石を積んで構築されている。両側壁間は床面で1.2m、側壁上部では0.7mと次第に狭くなる「持ち送り」が行われている。

玄室と羨道部間には方柱状の截石を左右に配して玄門としている。両袖石間には框石が左袖石側にのみ置かれており、欠損している様相も認められないので、当初からこの企画であったと考えられる。框石と右袖石間は床面で0.3mを測り、玄室と羨道部の空間を形成する。左右の袖石とも遺存状態は良好であるが、やや奥壁側に傾いている。床面上に立てられ、右袖石の高さは1.4m、左袖石は1.25mと玄室側壁と同じ高さに加工されている。左袖石は右袖石との幅が床面上で0.8mを測るが、頂部間では0.6mと内側へ大きく傾いている。また、その基部は右袖石のように玄室、羨道部の側壁より内側へ張り出さずにはほぼ並行に置かれている。左右袖石とも切り込みはなく、玄室、羨道部の各側壁の截石がもたせかけるように積まれている。また、右袖石の外側には10cmほどの厚さで砂岩屑を主体とする土を貼りつけた痕跡が認められる。框石は左袖石の基部に接して置かれ、幅50cm、長さ40cm、厚さ25cmを測る。

羨道部の両側壁上には天井石が比較的良好に遺存している。羨道部床面プランは東西にやや長い長方形を呈し、長さは右側壁、主軸線上で0.7m、左側壁で0.8m、幅は玄門側、羨門側とも0.9mを測る。左側壁は1枚石を3段に積んでいるが、右側壁では1、3段目が1枚、2段目には2枚の截石を使用している。また、床面からの高さは右側壁で1.05~1.15m、左側壁では1.15~1.20mを測り、羨門に向かうに従って高さを減じている。右側壁は玄室右側壁と20cmほどの段差が認められるが、左側壁では玄室左側壁とほぼ同じ高さである。床面はハード・ローム上に置かれ堅緻で、玄室床面とのレベル差はほとんど認められない。

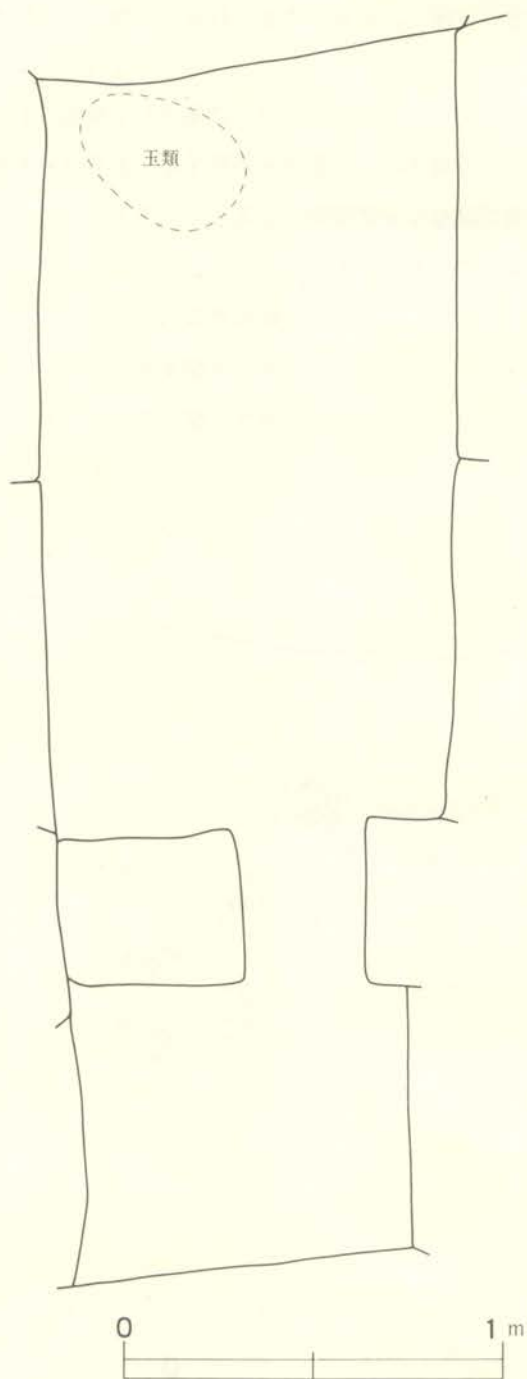
羨門は玄門と同様に袖石として方柱状の截石を左右に立て、その間に框石を置いている。左右の袖石とも床面に直接据えられ、高さは右袖石で1.05m、左袖石では1.15mを測り、羨道部側壁とほぼ同じ高さである。左袖石はやや外傾し、両袖石間は頂部で0.55mを測る。また、左右袖石を押えるように截石をその外側に羨道部側壁に並べて立てている。右側の截石は砂岩屑を主体とする暗褐色土の基盤の上に積まれている。また、左右袖石から前庭部へ向かって1枚ずつの截石が置かれ、その間には挟み込まれるように2枚の截石が仕切石として据えられている。この4枚の截石が閉塞的な役割を果たしていたと考えられる。

石室と土壌の間は砂岩屑、暗褐色土、ローム・ブロックなどで裏込めされている。1、2号墳で認められた粘土は使用されていない。截石の積み上げと並行して裏込めが行われている。また、奥壁背後の土層断面の観察からある程度墳丘の盛土が行われてから石室の構築が開始さ



第90図 3号墳主体部実測図(1/60)

れたことがわかる。截石間の目張りにはハード・ローンを充填させた個所が認められたが、これが全体にわたっていたかどうかは不明である。



第91図 3号墳石室内遺物出土状況図(1/50)

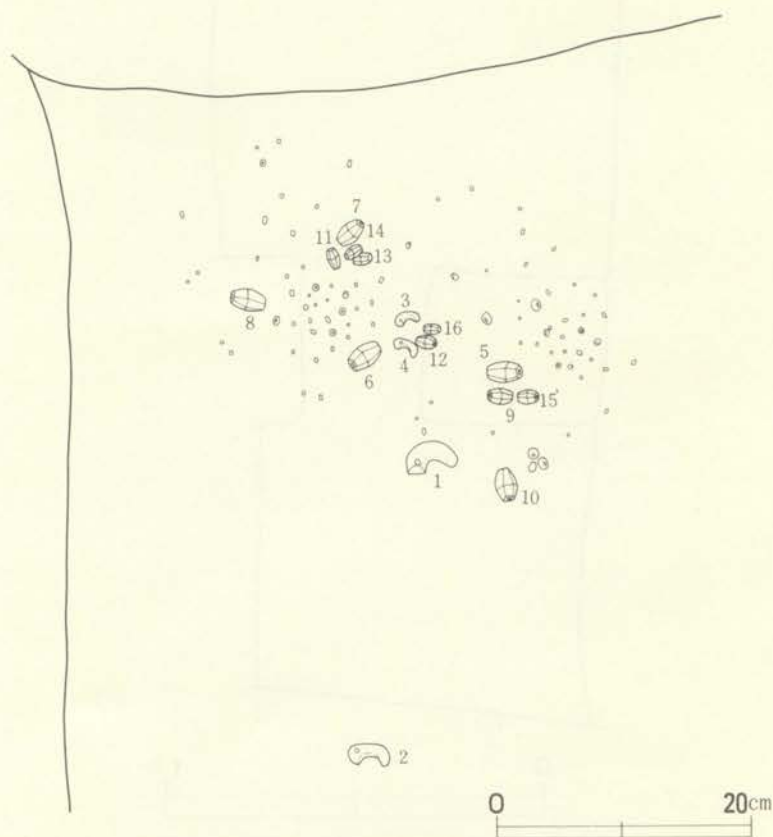
石室内の出土遺物 (第93図, 図版67-1)

石室では玄室からのみ遺物が出土している。すべて玉類である。盗掘を受けている様相も認められず、埋葬時の状態をほぼ保っていると考えられる。玉類のみの副葬は5号墳第1石室でも認められている。

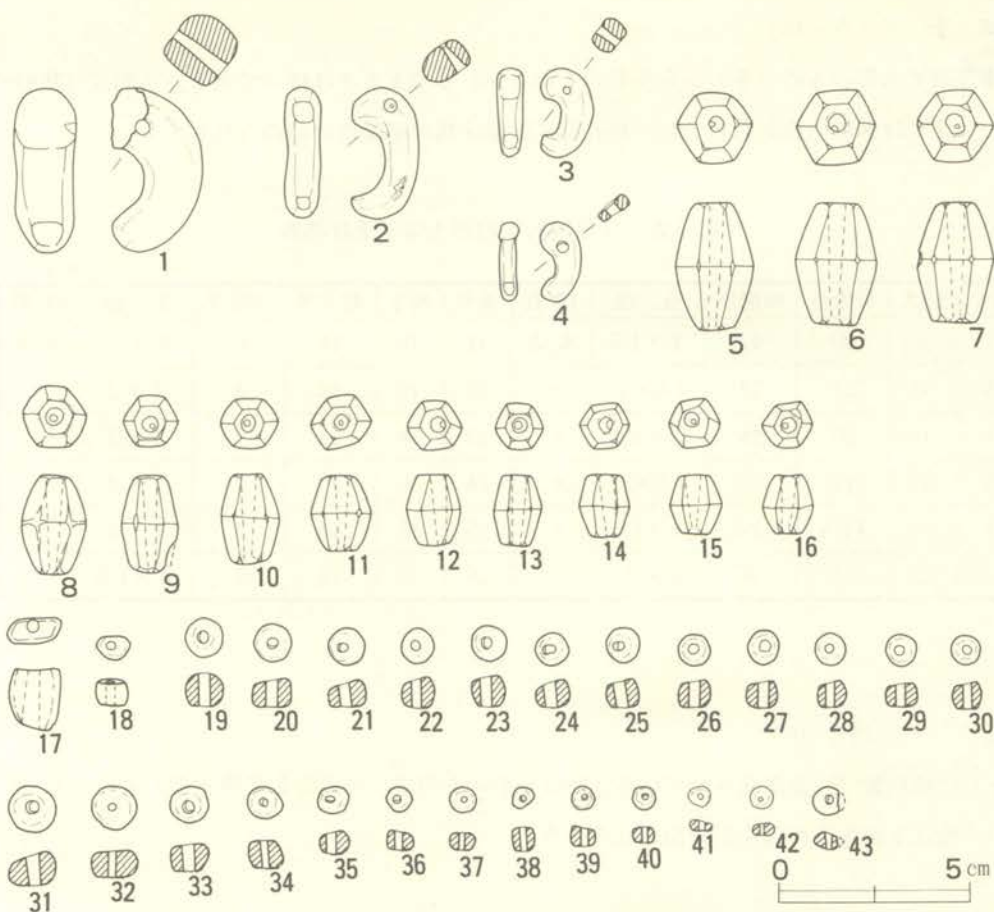
玉類は奥壁と左側壁のコーナーから石室中央寄りに集中して検出された。被葬者の頭部をこの位置におき左側壁に沿って伸展された可能性を示唆する。追葬された様相も認められないので、当初から被葬者を中央ではなく左側壁際に安置したと考えられる。

石室内からの出土遺物は次のとおりである。

勾玉	4	蛇紋岩製白玉	12
切子玉	12	ガラス製丸玉	6
棗玉	3	ガラス製白玉	244



第92図 3号墳石室内玉類出土状況図(1/6)



第93図 3号墳石室内出土玉類実測図(1/2)

勾 玉 (1~4)

1は頭部を欠損する。比較的大形で片面穿孔されている。軟玉製で青白色を呈する。2, 3は瑪瑙製, 4は蛇紋岩製である。穿孔はいずれも片面から行われている。2, 3は淡赤褐色, 4は淡白緑色を呈する。

第14表 3号墳石室内出土勾玉計測表

単位はmm、〔 〕現存値

番号	長径×短径	腹部長径×短径	孔径	材質	番号	長径×短径	腹部長径×短径	孔径	材質
1	〔43〕×24	15×14	4	軟玉	3	23×13.5	8.5×6.5	2	瑪瑙
2	34×18	9×8	3	瑪瑙	4	21×10.5	7×4	3	蛇紋岩

切子玉 (5~16)

水晶製で大形のもの(5)から小形のもの(16)まで大きさは様々である。透明度は比較的低い。穿孔は図の上面から行われ、終孔部には漏斗状の剥離痕が認められる。

第15表 3号墳石室内出土切子玉計測表

単位はmm											
番号	長さ	最大径	頭部径	孔径	材質	番号	長さ	最大径	頭部径	孔径	材質
5	33	20	12	4×1.5	水晶	11	19	16	10	4×1.5	水晶
6	32	21	12	4.5×2	"	12	18	14	8	4×2	"
7	31	20	16	5×1.5	"	13	18	13	8	4×2	"
8	25	17	9	4.5×2	"	14	16	13	10	4×2	"
9	25	14.5	8	4×1.5	"	15	15	13	9	4×1	"
10	23	15	8	5×2	"	16	15	13	7	4×1.5	"

棗玉 (17, 18)

ともに琥珀製で片面穿孔されている。18は小形のもので、小玉として扱ってもよいかもしれない。他に1個体分の破片が検出されている。

第16表 3号墳石室内出土棗玉計測表

単位はmm					
番号	長さ	最大幅	厚さ	孔径	材質
17	16	14	7	3	琥珀
18	6	8.5	6	2	"

ガラス製丸玉 (31~33)

鉛ガラス製である。風化のため表面は白色を呈し、貝殻状に剥離しているが、もとは破片から推して緑色を呈していたと考えられる。製作技法は不明であるが巻き付け法によるものと推察する。他に3個体の破片がある。

白玉 (19~30, 34~43)

蛇紋岩製のもの(19~30)とガラス製のもの(34~43)がある。蛇紋岩製のものはすべて片

面より穿孔され、大きさは多少のばらつきはあるが、径9mm、厚さ8mm前後とほぼ一定している。濃灰色である。ガラス製のものは総数244個検出されている。色調は青緑色系116、濃紺色系94、淡青色系31、緑色系3に分けられる。大きさは径2～4mm、厚さ3mm前後のものも多く、図示したものは比較的大きかったものである。糸穴に平行して細長い気泡が認められるものもあることから、管状に伸ばしたガラスを切断して製作したことが考えられる。43は白玉というより算盤玉に近い形状である。

第17表 3号墳石室内出土白玉計測表

単位はmm

番号	最大径	最大厚	孔径	材質	番号	最大径	最大厚	孔径	材質
19	10	8.5	3	蛇紋岩	32	12	6.5	2	ガラス
20	10	7.5	3	"	33	10	7	3	"
21	10	7	3	"	34	9	7	2	"
22	8.5	8	2.5	"	35	8	6	2.5	"
23	10	8.5	3	"	36	7	5	2	"
24	9	7	3	"	37	7	4.5	1.5	"
25	9	7.5	3	"	38	6	6	1.5	"
26	8	7	3	"	39	6	5.5	2	"
27	8	7	3	"	40	6	4	1.5	"
28	8	7	2.5	"	41	6	3.5	1	"
29	8	6	2.5	"	42	6	3	1.5	"
30	7.8	7	2.5	"	43	8	4.5	2	"
31	12	8.5	3.5	ガラス					

4号墳

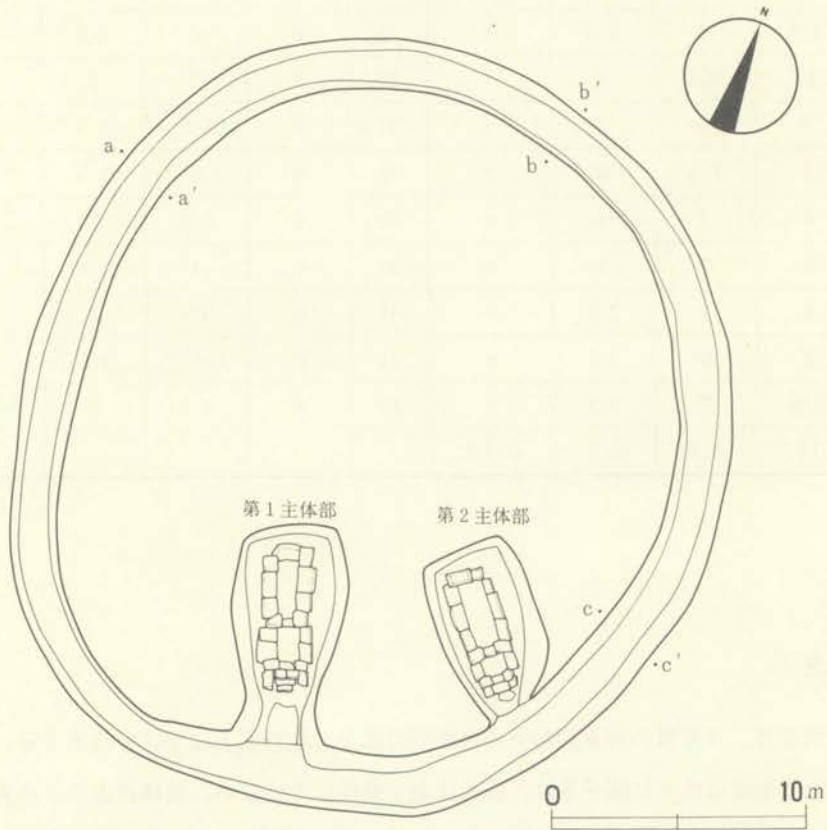
位置と現況

舌状台地の東端、3号墳の南東約30mの台地平坦部から緩斜面上にかけて位置する。畑地中に存在するため墳丘はすでに削平され、盛土は全く遺存していない。遺構検出のため表土を除去した段階で南東側裾部に「ハ」の字状に並行して石室の被覆粘土と円形に巡る周堀が検出され、本古墳の存在を確認した。

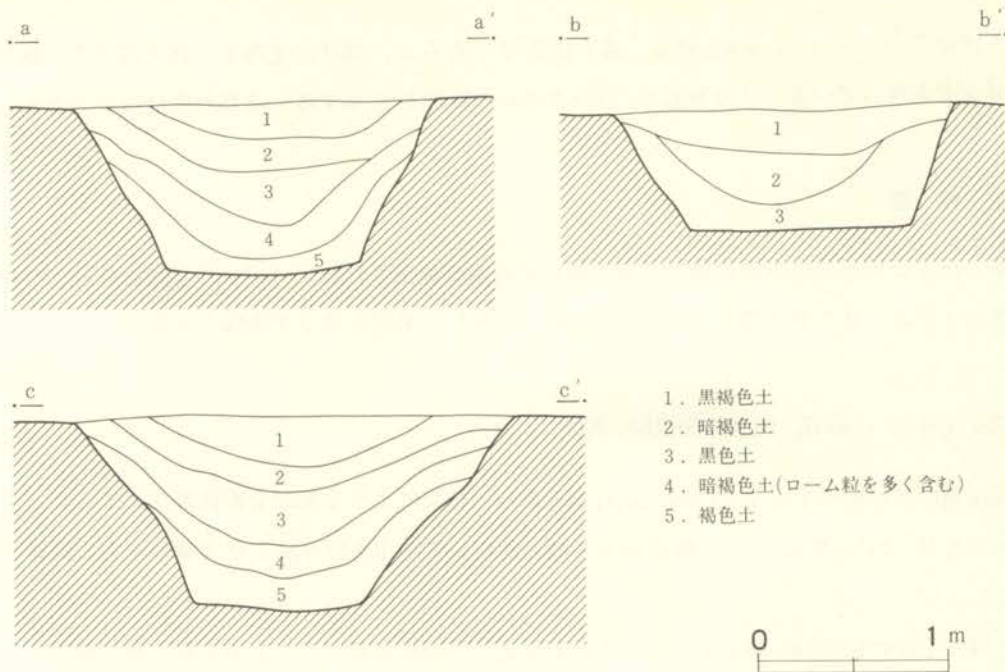
墳丘と周堀 (第94, 95図, 図版50, 51)

前述したように墳丘盛土は全く残存していない。そのため墳丘の築造方法については不明であるが、1～3号墳とほぼ同様の方法がとられていたと考えられる。

周堀が円形に全周することにより円墳であることが判明した。周堀の外縁径・内縁径はそれぞれ東西28m・24m、南北30m・26mを測り、南北にやや長いプランを呈する。上端幅は2m前後とほぼ一定して巡るが、南側部分が最も狭く1.4mで、東側部分は最も広くなり2.5mを測る。ハード・ローム層まで掘り込まれ、深さは0.6～1mを測る。北側部分が浅く南側へ向かうに従って次第に深くなる。断面は逆梯形を呈し、底面、側壁とも明瞭に検出され、底面はほぼ平坦である。覆土は自然堆積の様相を示し、全体に同一層序となる。



第94図 4号墳実測図(1/300)

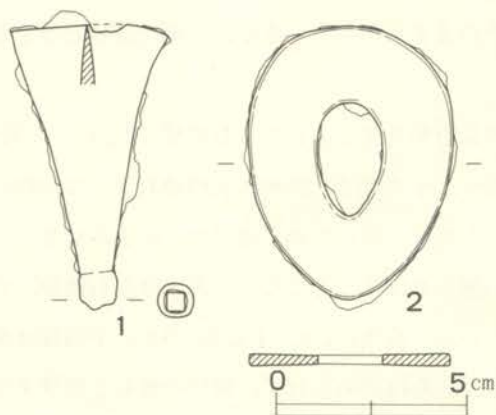


第95図 4号墳周堀土層断面図(1/40)

周堀内の出土遺物 (第96図, 図版68-2)

周堀内からは土器片などの他に鉄鏃, 直刀の鏢が出土している。

鉄鏃(1)は周堀の北側部分の覆土中からの出土である。この形式のものは本古墳群はもとより東南部地区の古墳からの出土例を現在のところみないものである。鏢(2)は第2主体部開口部前面の周堀覆土からの出土である。



第96図 4号墳周堀内出土鉄製品実測図(1/2)

1は斧箭式で現存長7.3cmを測る。遺存は良好であるが、鎌身の先端を一部欠損する。鉄製のリングを巻いている。2は無窓で、7×5.3cmの倒卵形を呈する。遺存状態は良好である。

主 体 部

本古墳では墳丘の南東側裾部に2基の横穴式石室が検出された。「ハ」の字状に並行して構築されている2基の主体部のうち、南側を第1主体部、東側を第2主体部とする。

第1主体部（第97、98図、図版52、53）

ほぼ南向きに開口する単室の横穴式石室である。粘土により上部が全面被覆されていた。主軸方向をN-21°-Wに置く。軟質砂岩の截石を用いて地山を掘り込んだ土壇の中央に構築されている。

土壇は上端で長さ7m、幅3.5~4.2mを測る隅丸の不整長方形プランを呈する。東・西辺ともやや張り出しているため胴張りを呈するが、前庭部と接する部分へ向かって次第にすぼまっていき前庭部へと続いている。墳丘が残存しないため掘り方の開始は不明であるが、掘り込みは全体にはほぼ同じ傾斜でハード・ローム層に及んでいる。深さは奥壁側から玄門までは1.15mを測り、底面はほぼ平坦である。底面は玄門根石附近から次第に高くなり、玄室床面との比高差は羨道部で25cm、羨門下で60cmを測り、大きな段差が認められる。羨門下より除々にその高さを減じ前庭部、周堀へと至る。また、石室にあたる部分は周囲よりやや深く掘り込まれている。

前庭部は長さ1.5m、羨門側上端幅2.7m、開口部上端幅3.9mを測り、羨門部から開口部へ向かうに従って広がる。

石室は両袖式の横穴式石室である。天井石は残存せず、側壁截石の一部も欠損していたが、比較的良好な遺存状態である。截石には大きく分けて灰褐色と黄褐色の石材が使用されている。石室床面は土壇底面をそのまま利用しているが、一部では砂岩層を敷き敷きしめた個所が認められている。

玄室床面プランは不整長方形を呈し、長さは右側壁で2.2m、左側壁で2.4m、主軸線上で2.35m、幅は奥壁下で1.45m、中央部で1.25m、玄門袖石下では1.2mを測る。胴張りは認められない。右側壁に比べて左側壁が長いこと平面プランに歪みが生じ、この差が玄門袖石の配置や羨道部の企画にまで影響を及ぼすことになる。高さは左右側壁とも1.1mを測る。奥側は一枚石で右下端が欠損している。高さ1.1m、上辺幅0.9m、下辺幅は現存で1.15mを測り、台形を呈する。左右側壁に切り込みは認められず、側壁の截石で奥壁を挟み込むようにして積み上げている。左右側壁とも根石に2枚、上段に3枚の截石を積んで構築されている。右側壁根石

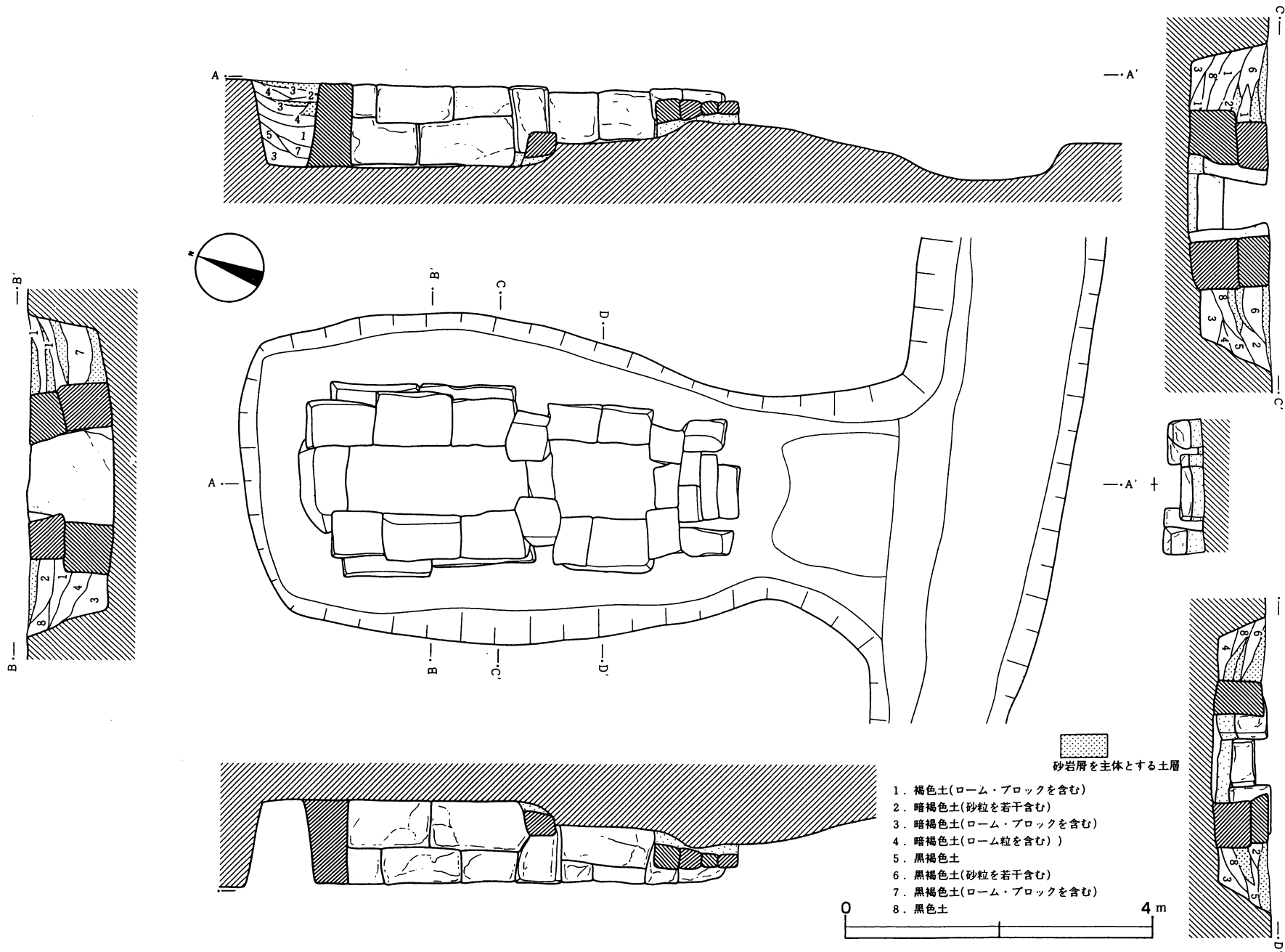
の奥壁寄りの截石は、上段の截石に対応して上辺の一部が加工される切り組みが認められる。両側壁間は床面上で1.2~1.3mを測るが、側壁上部では0.85~0.9mと次第に狭くなる「持ち送り」が行われている。

玄室と羨道部間には方柱状の截石を左右に配して玄門としている。前述のように玄室左右側壁の長さが異なっているため、袖石の位置も側壁に沿ってずれている。両袖石間にはやや斜めに框石を置いている。袖石の遺存状態は良好である。右袖石と框石は土壌底面に敲きしめられた砂岩層を主体とする暗褐色土上に据えられている。右袖石のこの基盤からの高さは0.9m、底面からは1.1mを測る。左袖石は床面に直接据えられ、高さは1.1mを測り、左右袖石とも側壁と同じ高さに整えられている。両袖石間は框石上で0.65m、頂部で0.5mとやや内傾している。切り込みは認められず、玄室、羨道部の各側壁の截石をもたせかけるようにして積み上げている。框石には厚さ35cmほどの截石を使用し、床面からの高さは玄室側で45cm、羨道部側で15mを測る。

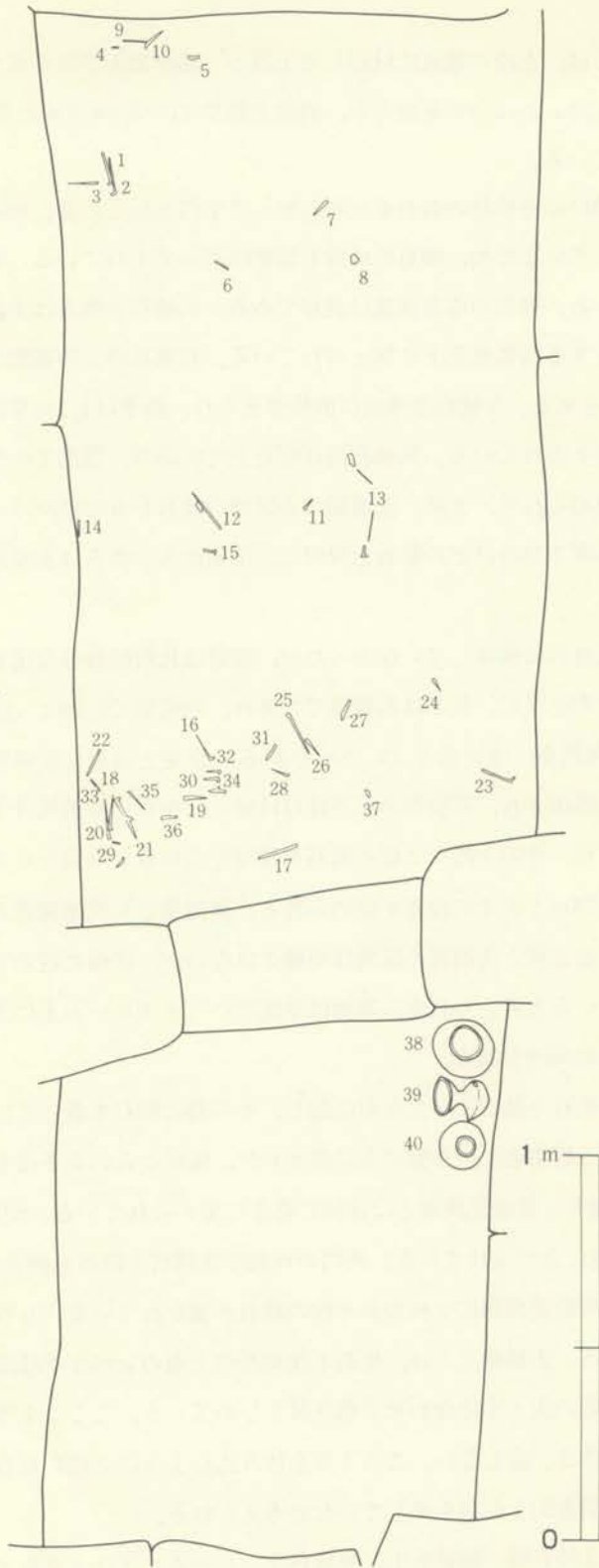
羨道部ともに天井石は残存していなかったが、側壁は比較的良好な遺存である。羨道部床面プランは不整長方形を呈し、長さは右側壁で1.35m、左側壁で1.2m、主軸線上で1.4m、幅は玄門側で1.2m、羨門側、中央部では1.15mを測る。玄室とは逆に右側壁の方が長くなるため、これまでの格差は解消され、石室内の長さはほぼ同じになる。右側壁は2枚の截石を1段に、左側壁は根石に1枚、その上段に2枚の截石を使用している。床面からの高さは右側壁で0.7m、左側壁では0.75mと若干の段差が認められる。両側壁とも玄室側壁の高さとほぼ同じであり、側壁に関しては玄室と羨道部の区別は明確ではないが、床面に段差をつけることにより両者の区別を表していると考えられる。床面は平坦でハード・ローム上に置かれ、堅緻である。玄室との比高差は約30cmを測る。

羨門は直方体の截石を袖石として左右に配し、その間に框石を置いている。左右の袖石とも砂岩層を主体とする暗褐色土の基盤の上に据えられ、床面からの高さは右袖石での0.65m、左袖石では0.7mを測り、羨道部側壁とほぼ同じ高さに整えられている。両被石間は框石上、頂部とも0.6mと垂直に立てられている。羨門の外側には袖石と框石を押さえるような形で主軸線上に4枚、袖石の前庭部側に2枚の計6枚の截石が置かれている。6枚とも前述のような基盤の上に据えられる。主軸線上では、框石と仕切石の上面のレベルがほぼ同じになるように、基盤の暗褐色土を截石の大・小に合わせて敷き敲きしめている。ここは土壌底面のレベル差が大きいため基盤の厚さは一定しない。この4枚を挟み込むように2枚の截石が並行して置かれる。この6枚の截石が閉塞的な役割を果たしていたと考えられる。

石室と土壌の間は砂岩層、暗褐色土、黒褐色土、ローム・ブロックなどで裏込めされている。3号墳と同様に粘土は使われていない。截石の積み上げと並行して裏込めが行われている。



第97図 4号墳第1主体部実測図(1/60)



第98図 4号墳第1石室内遺物出土状況図(1/5)

また、石材と同様に灰褐色と黄褐色の砂岩層が使用されているが、これは接する截石の石材とは異なっており両者を混成したものが多く認められている。

石室内の出土遺物 (第99~101図, 図版68—1, 69, 70)

石室内では玄室、羨道部から遺物が出土している。玄室内床面上から検出された鉄釘(1~37)は天井石の崩落などにより一部散在しているが、これらが使用されたと思われる木棺の位置はほぼ復原できる。ただし、鉄釘の正確な使用位置については推測の域を出ない。鉄釘の多くは中央から左側壁にかけての出土であり、おそらく木棺も左側壁に沿って安置されたと考えられる。玄門側に鉄釘(16~37)が偏在しているが、これは木棺のこの部分にのみ多く使用されていたというよりは、天井石の崩落などより移動したものと捉えたい。玄室内からは、他に遺物は検出されず盗掘や追葬の痕跡も認められないことから、当初から遺物の副葬は行われていなかったと考えるのが妥当であろう。

羨道部からは須恵器の台付長頸瓶(38)、甗(39)、平瓶(40)を検出している。3点とも右側壁と玄門右袖石のコーナーから側壁に沿って前記の順で並べられている。甗が横転し口縁の一部が破損している他は完形で、しかも原位置を保っていると考えられる。

石室内からの出土遺物は次のとおりである。

玄室

鉄釘 30以上

羨道部

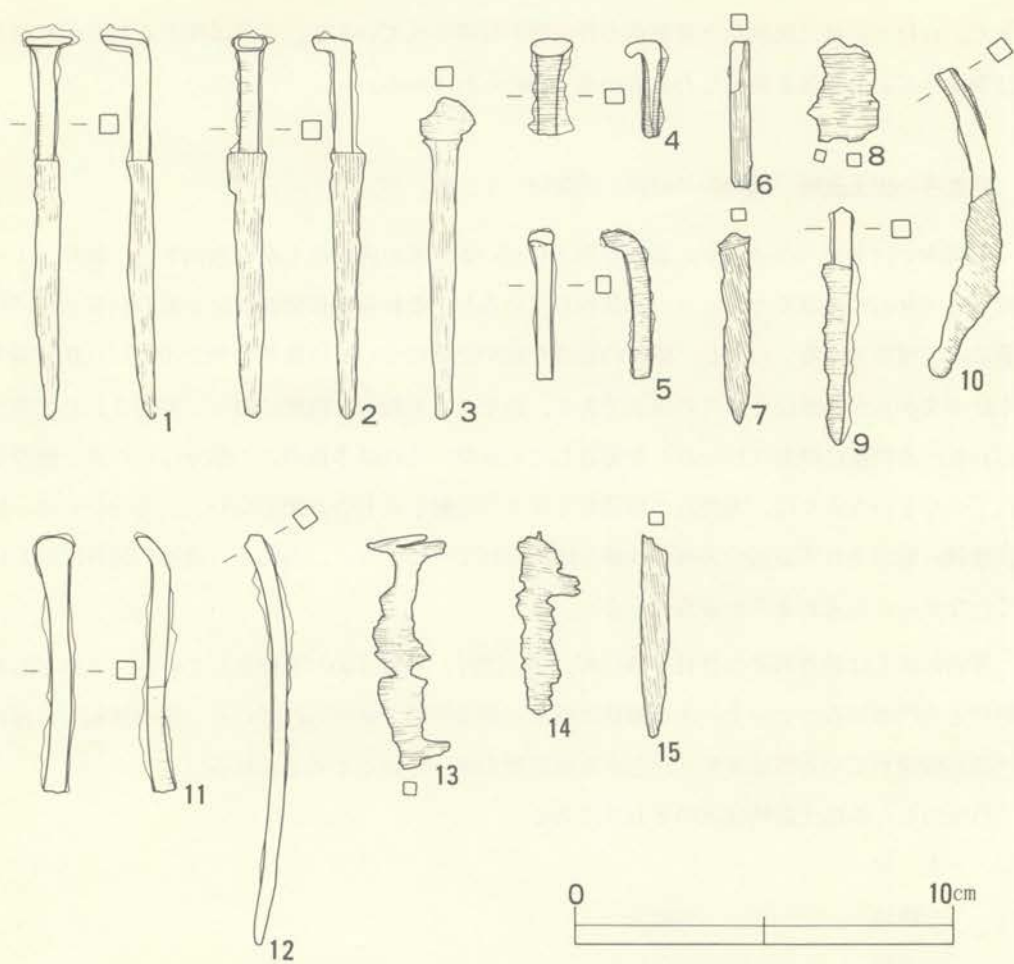
須恵器台付長頸瓶 1

〃 甗 1

〃 平瓶 1

鉄釘(1~37)

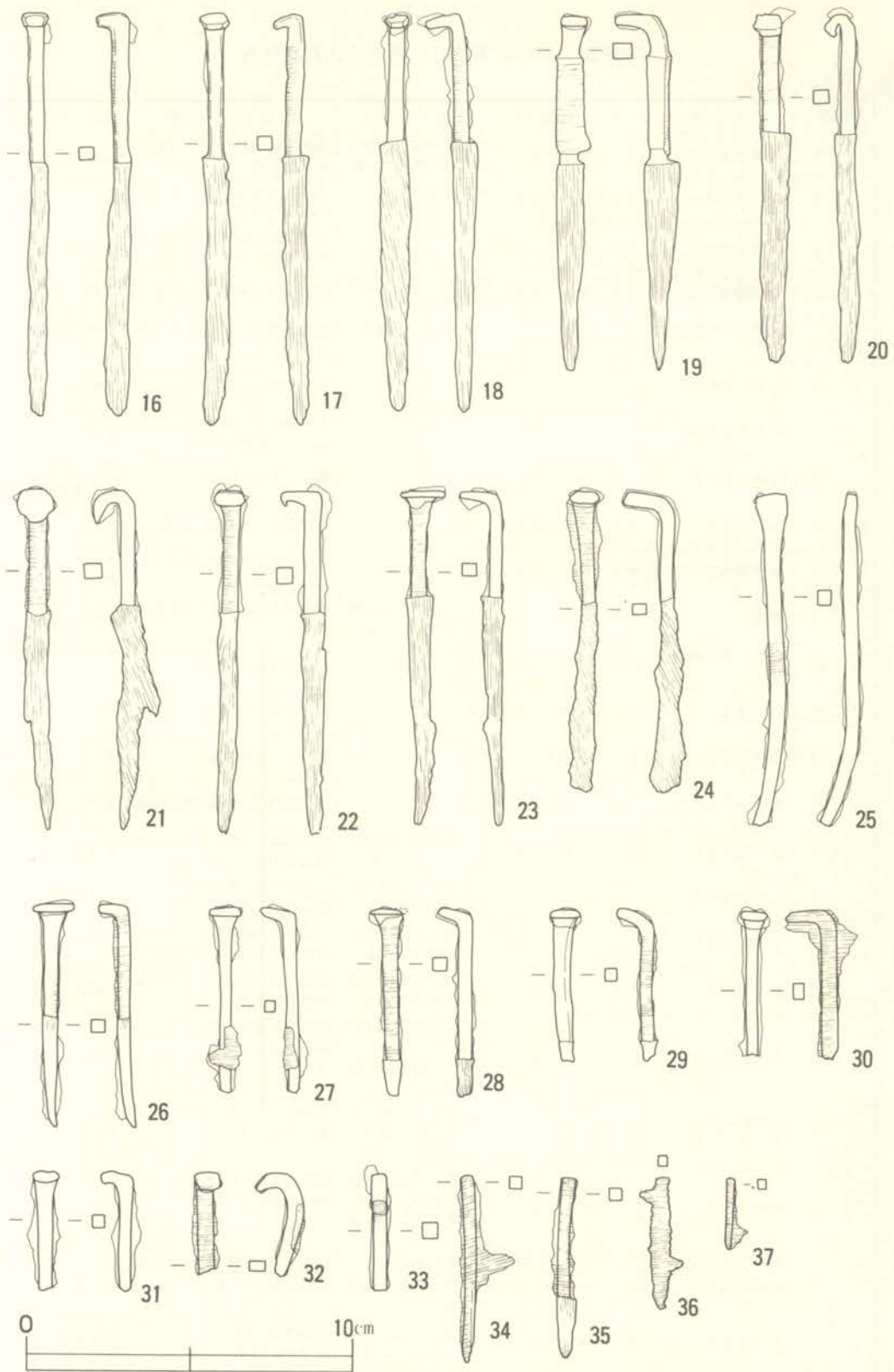
長さ、体部の厚さから大・小2種類に分けられる。比較的大形で遺存がよく、木質の付着状態も良好で同じ様相を示すもの(第99図1, 2, 第100図16~24)は長さ12m前後、体部の厚さ0.5×0.45cm前後と大きさもほぼ一定している。木質の付着状態から推して長側板から小口板へ打ち込まれたものであろう。3も頭部を欠損しているが同じように用いられたと考えられる。体部下半の木質が斜行して付着しているもの(24)もあるが、これは斜めから打ち込ん



第99図 4号墳第1石室内出土鉄釘実測図(1), (1/2)

だためであろう。

第100図26～39は比較的小形で、長さ7cm前後、体部の厚さ0.4×0.35cm前後である。木質は大形のものに比べてあまり付着していない。付着状態は大形のものと同様に体部上半が横目、下半が縦目の釘が多いが、下半は横目のものもある。これらは底板あるいは、蓋板から小口板または長側板に打ち込まれたものと考えられる。第99図8は2本の小形の釘に木質が付着している。使用位置は不明である。



第100图 4号墳第1石室内出土鉄釘実測図(2), (1/2)

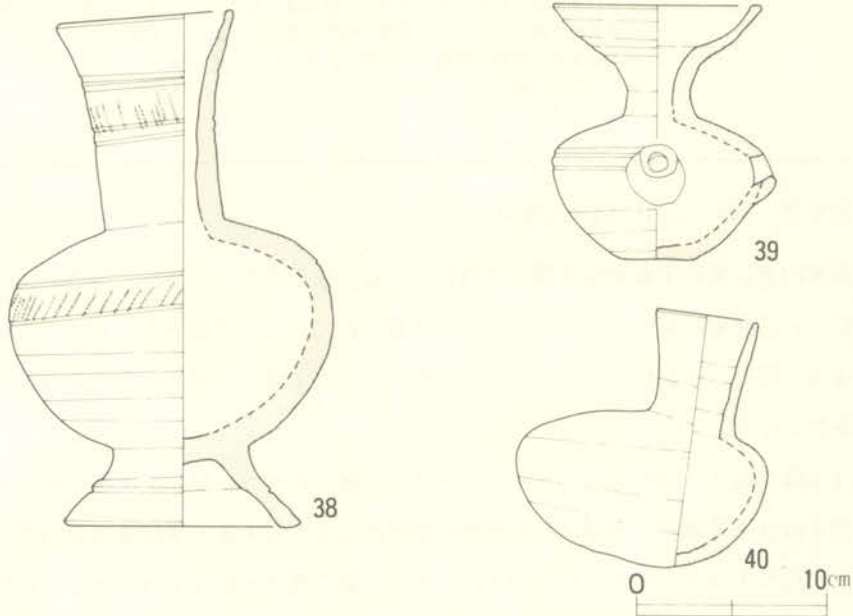
第18表 4号墳第1石室内出土鉄釘観察表

単位はcm

挿図番号	出土位置	全長	体部厚	頭部の形状	木質付着状態	推定使用位置
99-1	西壁際奥壁寄り	10	0.5 × 0.5	鍛えて大きく広げてから打ち曲げている	頭部下3cm横目に、下半部は縦目に付着	長側板
2	西壁際奥壁寄り	9.9	0.5 × 0.5	そのまま折り曲げている	頭部下2.4cm横目に、下半部は縦目に付着	長側板
3	西壁際奥壁寄り	8.4	0.5 × 0.5	欠損	上半部1.1cm横目に、下半部は縦目に付着	長側板
4	奥壁際西寄り	2.5	0.5 × 0.4	鍛えて広げてから折り曲げている	頭部下2.1cm横目に付着	不明
5	奥壁際やや西寄り	3.9	0.4 × 0.45	そのまま打ち曲げている	頭部を含み3.9cm横目に付着	不明(頭部まで打ち込まれている)
6	中央・奥壁寄り	3.9	0.45 × 0.4	欠損	3.9cm縦目に付着	不明
7	中央・奥壁寄り	5	0.4 × 0.35	欠損	上半部0.3cm横目に、下半部4.7cm斜めに付着	不明
8	中央・奥壁寄り	2.7	0.4 × 0.35 0.3 × 0.3	欠損	横目に2.3cm付着	不明(中・小の釘2本が遺存)
9	奥壁際西寄り	6.1	0.5 × 0.5	欠損	下半部4.7cm横目に付着	不明
10	奥壁際西寄り	8.1	0.5 × 0.5	欠損	上半部3.4cm横目に、下半部は斜めに付着	不明(全体に彎曲している)
11	中央	6.5	0.5 × 0.45	鍛えて広げてから軽く折り曲げている	頭部の3.8cm下から横目に付着	不明
12	中央・やや西寄り	10.5	0.5 × 0.45	欠損	ごくわずかに付着	不明(やや彎曲している)
13	中央附近	6	0.35 × 0.35	欠損	横目に6cm付着	不明
14	西壁際中央	4.7	計測不可	欠損	横目に4.5cm付着	不明
15	中央やや西寄り	5.2	0.4 × 0.35	欠損	下半部のみ5.2cm斜めに付着	不明
100-16	玄門側西寄り	12.3	0.4 × 0.45	そのまま打ち曲げている	頭部下3.7cm横目に、下半部は縦目に付着	長側板
17	玄門寄り中央	12.5	0.4 × 0.45	やや鍛えて広げてから折り曲げている	頭部下3.3cm横目に、下半部は縦目に付着	長側板
18	玄門側西寄り	12	0.4 × 0.45	やや鍛えて広げてから折り曲げている	頭部下3cm横目に、下半部は縦目に付着	長側板
19	玄門側西寄り	10.8	0.6 × 0.55	やや鍛えて広げてから折り曲げている	頭部下3cm横目に、下半部は縦目に付着	長側板
20	玄門側西寄り	10.5	0.5 × 0.4	鍛えてやや広げ先端を内側に折りながら、下方へ全体を強く折り曲げている	頭部下3.2cm横目に、下半部は縦目に付着	長側板
21	玄門側南西コーナー寄り	10.2	0.55 × 0.45	鍛えて広げてから下方へ強く折り曲げている	頭部下2.9cm横目に、下半部は斜めに付着	長側板
22	玄門側西寄り	10.3	0.5 × 0.5	やや鍛えて広げてから折り曲げ、さらに先端を下方に折り曲げている	頭部下3.3cm横目に、下半部は縦目に付着	長側板
23	東壁際南寄り	10	0.45 × 0.4	鍛えて台形に大きく広げてから折り曲げている	頭部下2.6cm横目に、下半部は縦目に付着	長側板
24	玄門側東寄り	9	0.45 × 0.45	やや鍛えて広げてから折り曲げている	頭部下3cm横目に、下半部は斜めに付着	長側板
25	玄門側中央	9.9	0.45 × 0.45	鍛えて広げている	頭部の4.5cm下から横目に若干遺存	不明

挿図番号	出土位置	全長	体部厚	頭部の形状	木質付着状態	推定使用位置
26	玄門側中央	6.7 (完形)	0.45×0.4	鍛えて広げてから折り曲げている	頭部下3.2cm横目に、下半部はごく一部縦目に付着	不明
27	玄門側中央	5.6	0.35×0.35	鍛えて広げてから折り曲げている	頭部の5.4cm下に横目に付着	底板
28	玄門側中央	5.6	0.45×0.4	鍛えて広げてから折り曲げている	頭部下4cm横目に、下半部は縦目に付着	底板
29	南コーナー附近	4.5	0.4×0.4	やや鍛えて広げてから折り曲げている	頭部下3.1cm横目に、下半部は不明	底板
30	玄門側やや西寄り	4.5	0.35×0.5	やや鍛えて広げてから折り曲げている	頭部を含み、4.5cm横目に付着	不明(頭部まで打ち込まれている)
31	玄門側中央	3.6	0.4×0.4	やや鍛えて広げてから折り曲げている	不明(錆化が著しい)	不明
32	玄門側やや西寄り	3.1	0.5×0.35	そのまま折り曲げている	頭部を含み、3.1cm横目に付着	不明(頭部まで打ち込まれている)
33	西壁際玄門寄り	3.5	0.5×0.5	欠損	一部横目に付着	不明
34	玄門側やや西寄り	5.6	0.4×0.4	欠損	下半部のみ5.6cm横目に付着	底板
35	玄門側西寄り	5.4	0.4×0.4	欠損	上半部3.6cm横目に、下半部1.8cm縦目に付着	不明
36	玄門側西寄り	3.9	0.3×0.35	欠損	下半部のみ3.9cm横目に付着	底板
37	玄門附近中央	2.1	0.3×0.3	欠損	横目に2.1cm付着	底板

全長は26を除いて現存値を示す



第101図 4号墳第1石室羨道部内出土須恵器実測図(1/4)

第1石室内出土土器一覧

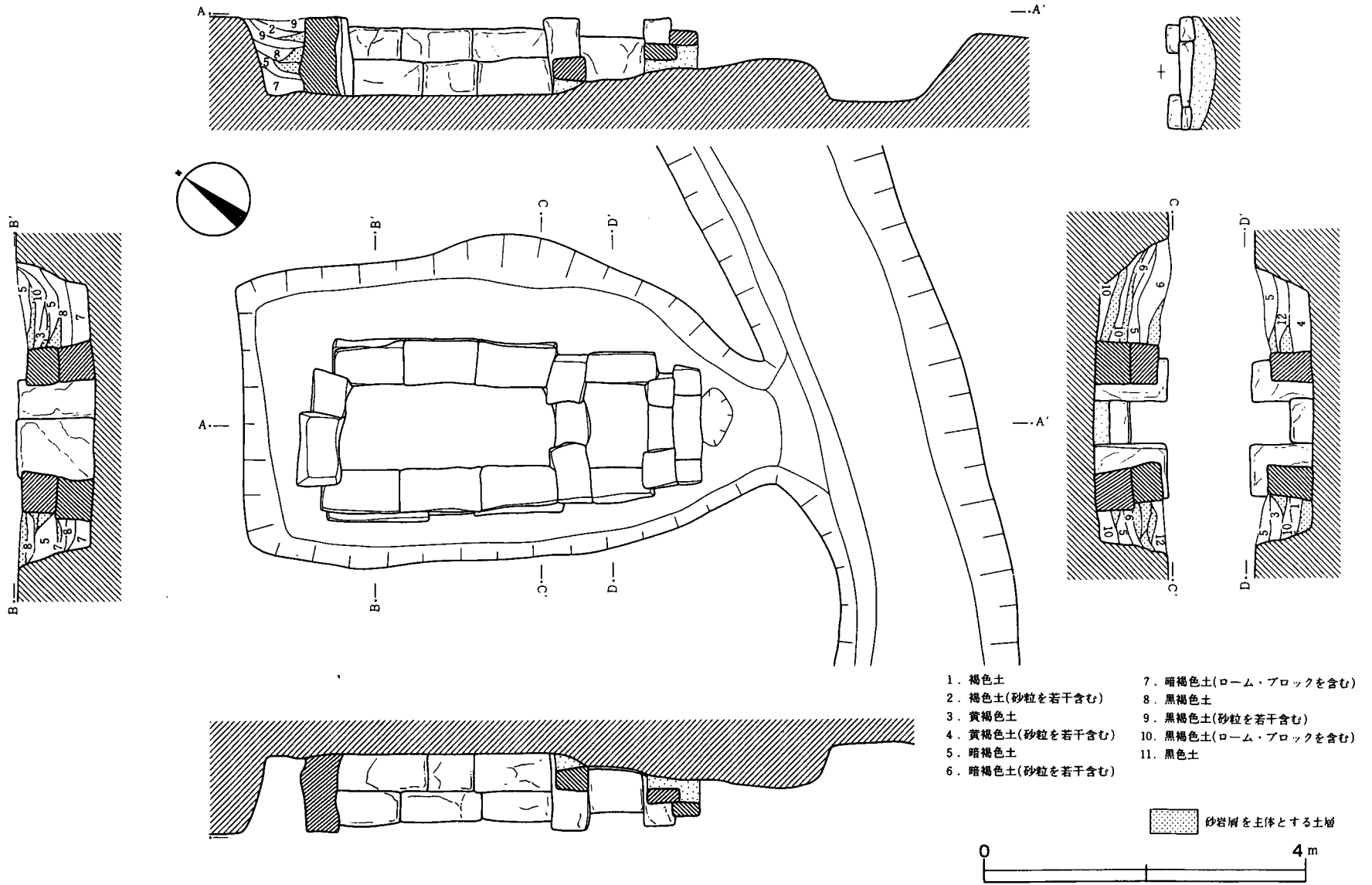
単位はcm

番号	器種	法量	器形の特徴	成形・調整技法	胎土・焼成・色調	備考
38	台付長頸瓶	口径 8.8 器高 26.5 台部径12.4	直立気味に立ち上がる口頸部は上半で外反し、口唇部を丸くおさめる。肩部からなだらかに下がる体部は球形を呈し、台脚部に至る。外彎しながら下がる台脚部の中位には凹線を一条巡らし、段を形成している。	巻き上げ水挽き成形。瓶と台脚部とは別々に製作してから接合している。口頸部と体部には浅い沈線が巡る。沈線は瓶を左回りに回転させながら施され、その始まりと終りが一致しない箇所が明瞭に観察される。沈線で区画された部分に瓶を左回りに回転させながら右上方から楕目列点文を施文している。体部下半は回転ヘラ削り。	砂粒・長石粒を含むが精緻である。良明灰色	須恵器 左側に大きく傾むいている 肩部と口頸部内外面には黄緑色の自然釉が残る。
39	甌	口径 9.8 器高 13.1 底径 3.7	やや外反しながら立ち上がる細い頸部は大きく外反しつつ広がり、口縁部に続く。口縁部と頸部の境にはやや強いロクロ目が認められるが、稜を形成するまでには至らない。口唇部は平坦である。やや張った肩部から体部はなだらかに底部に至る。底部は平坦ではない。また体部中央に貼り付けの注口部が突出する。	巻き上げ水挽き成形。肩部と体部との境には浅い沈線が2条巡る。体部下半は甌を倒立させ左回りに回転させヘラ削りを施している。	砂粒・石英粒を含むが精緻である。良明灰色	須恵器 口縁部内面と肩部には黄緑色の自然釉が残る。
40	平瓶	口径 5.2 器高 13.1	やや外反しながら立ち上がる口頸部は口唇部を丸くまとめて終わる。なだらかに下がる肩部は体部との境にごく緩い稜を形成する。底部は平坦でなくやや凹凸している。	巻き上げ水挽き成形。ロクロ目は全体に弱い。底部は粘土を部分的に成形後新たに貼り足したようである。	砂粒、小石を含み38、39の胎土とは異なる。良暗灰色	須恵器 口頸部と肩部には自然釉が残る。

第2主体部 (第102, 103図, 図版54~55)

ほぼ南東向きに開口する単室の横穴式石室である。第1主体部の東側に位置し土壌間の最短距離は約3mを測る。粘土により上部が全面被覆されていた。主軸方向はN-36°-Wである。第1主体部と同様、軟質砂岩を用いて地山を掘り込んだ土壌の中央よりやや南西に偏った位置に構築されている。

土壌は上端で長さ6.5m、幅2.5~4mを測り、周堀へ向かうに従って次第にすばまっていく不整の羽子板状を呈する。東辺はやや外側へ張り出してから大きくすばまり周堀壁へ続く。西辺は周堀附近ですばまってからやや開き、前庭部と開口部の区別は明確ではない。掘り方の開始は不明であるが、ハード・ローム層まで掘り込んでいる。東壁の一部が緩慢である他はほぼ同じ傾斜である。確認面からの深さは奥壁側から玄門までは0.95mを測る。底面は羨道部から



第102図 4号墳第2主体部実測図(1/50)

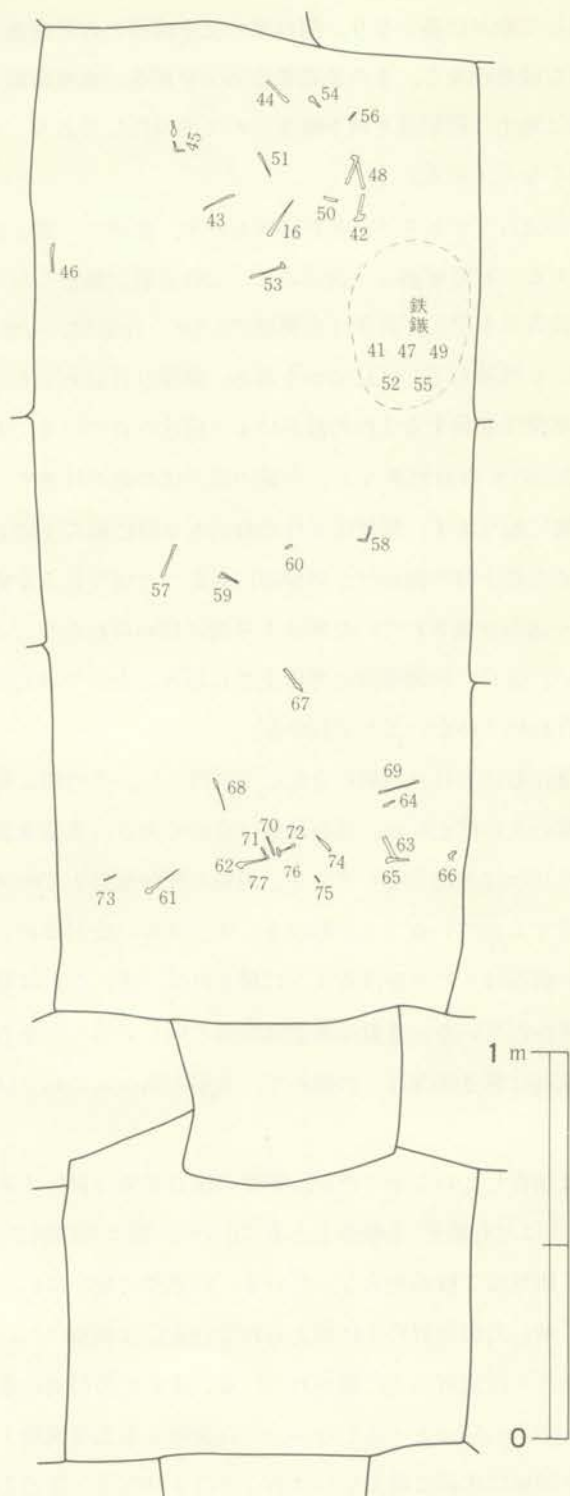
開口部へ向かうに従って徐々に高くなり、開口部と玄室床面との比高差は45cmを測る。開口部から周堀底面へは急な段差が生じ、その比高差は50cmを測る。玄室床面と周堀底面はほぼ同じレベルである。底面は地山に砂岩屑を敷き敲きしめて平坦にしており、石室にあたる部分はその周囲よりもやや低くなっている。

石室は両袖式の横穴式石室である。天井石は残存せず、側壁の一部が破損していたが、全体に遺存状態は良好である。石室床面には前述のような砂岩屑が敷きつめてある。

玄室床面プランは長方形を呈し、長さは右側壁で2.5m、左側壁、主軸線上で2.6m、幅は奥壁下、中央部で1.5m、玄門袖右下では1.05mを測る。胴張りは認められない。高さは左右側壁とも0.85mを測る。奥壁は並列する2枚の截石により構成されている。左側の截石は高さ1m、上辺幅0.7m、下辺幅0.85mの台形を呈し、右側の直方体の截石は高さ1m、幅0.5m、厚さ0.4mを測り、やや内側に迫り出す。側壁は3枚の截石を2段に積み上げることにより構築されている。奥壁に接する左右上段の截石は、奥壁辺に対応した切り込みが施され奥壁に埋め込まれている。奥壁に切り込みが施されていた例は1号墳に認められたが、このような類例は本古墳群では見あたらない。また、両側壁間は床面上で1.15m、上部では1.05~1.1mを測り、「持ち送り」はほとんど行われていないことがわかる。

玄室と羨道部間には左右に方柱状の截石を配して玄門とし、その間に框石を置いている。袖石は薄く敷いた砂岩屑の上に据えられ、遺存状態は良好である。玄室床面からの高さは0.95mと整えられ、側壁より10cmほど高くなっている。両袖石間は框石上で0.55m、頂部では0.5mを測り、ほぼ垂直に立てられていることがわかる。切り込みは左右袖石ともに認められず、玄室、羨道部の各側壁の截石はもたせかけるように積まれている。框石は砂岩屑を主体とする暗褐色土の基盤の上に置かれている。基盤は羨道部床面と同じレベルになるように玄室床面に敲きしめられている。框石は厚さ30cmほどの截石で、玄室床面からの高さは45cm、羨道部側では30cmを測る。

羨道部にも天井石は遺存していなかったが、側壁の遺存状態は良好である。羨道部床面プランは長方形を呈し、長さは左右側壁、主軸線上ともに0.7m、幅は玄門側で1.1m、羨門側、中央部では1.05mを測る。側壁は1枚石からなっている。右側壁の截石は0.9×0.5×0.45mの大きさで、土壌底面に薄く敷いた砂岩屑の上に据えられている。左側壁は0.75×0.55×0.4mの大きさの截石を用いてやはり砂岩屑の上に置かれている。床面が羨門側に進むに従って次第に高くなるため、高さは0.45~0.55mと一定しない。左右側壁とも玄室側壁との比高差は10cmほどであり、第1主体部と同様に床面に段差をつけることにより玄室と羨道部の区別をつけていると考えられる。床面は砂岩屑が敷きつめてあるが、やや凹凸が認められる。玄室床面との比高差は約20cmを測る。



第103図 4号墳第2石室内遺物出土状況図(1/20)

羨門は玄門と同様に袖石として方柱状に截石を左右に配し、その間に框石を置いている。袖石、框石とも前述したような基盤の上に据えられている。床面からの高さは右袖石で0.6 m、左袖石では0.7 mを測り、玄門袖石とはほぼ同じ高さになっている。また、羨道部の側壁の一部を切り込んで置かれている。両袖石間は框石上、頂部でそれぞれ0.5 mと垂直に据えられている。框石と羨門の3枚の仕切石は前述の基盤の上に置かれ、中央の仕切石は框石の端にかぶさるように1段高く置かれた偏平な截石で厚さはわずかに15 cmである。その左右には幅25~30 cmの小形の截石を配しているが、第1主体部で認められたような袖石の押えとしての役割を果たしているとは考えられない。羨門前面の底面はレンズ状に浅く掘り窪みされている。

石室と土壌の間は砂岩層、暗褐色土、黒褐色土、ローム・ブロックなどで裏込めが施されている。3号墳や第1主体部と同様に粘土は使われていない。裏込めは截石の積み上げと並行して行われている。また、各截石間は黒褐色土を充填した目張りが施されている。

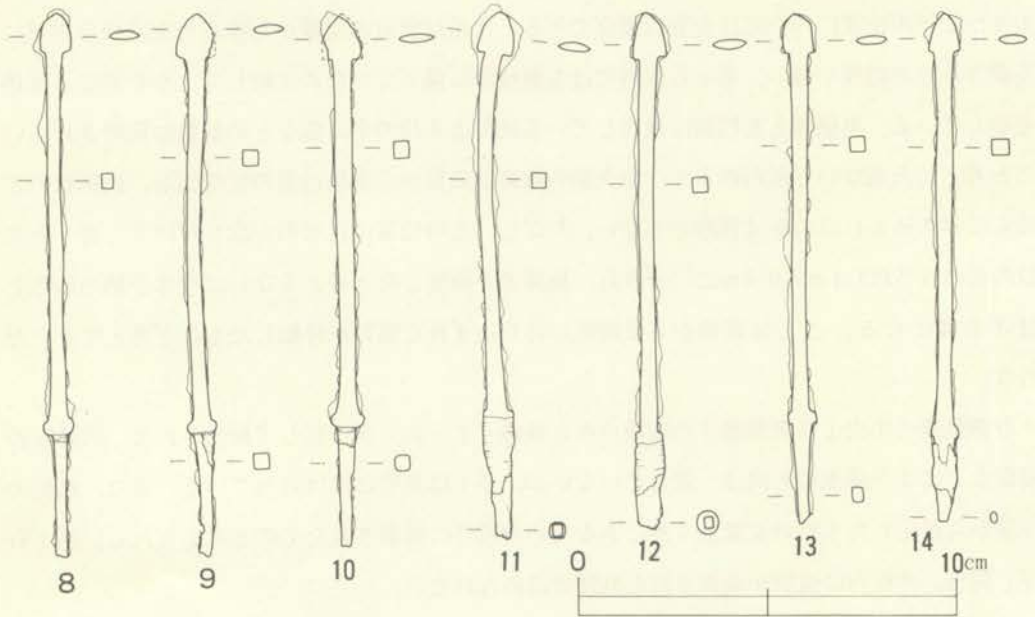
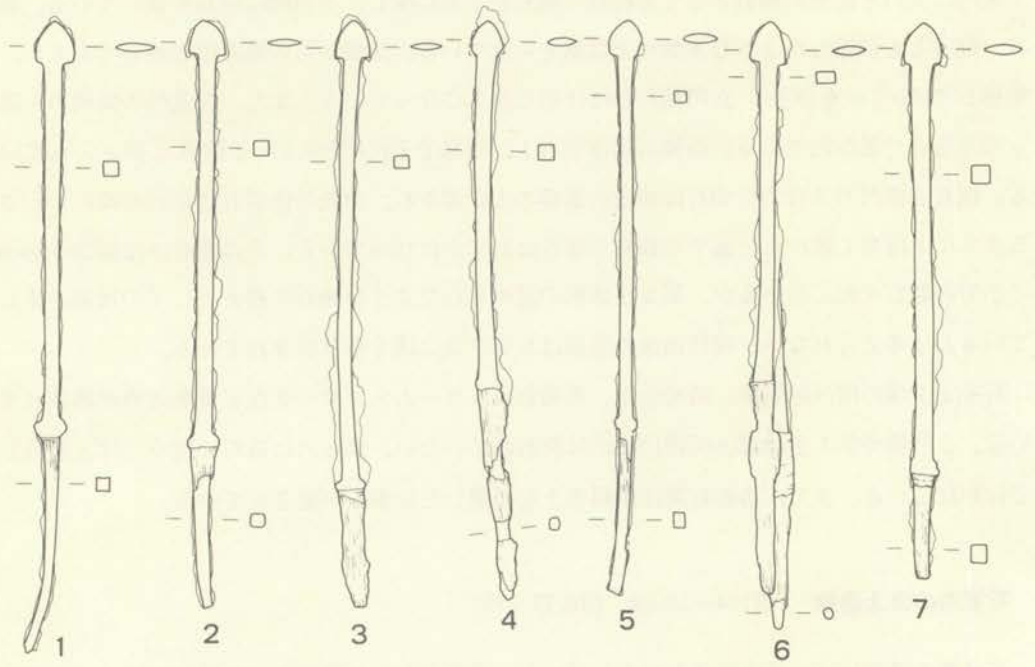
石室内の出土遺物（第104~108図、図版71~75）

石室内の遺物はすべて玄室より出土している。床面全面から検出された鉄釘の散布は大別して奥壁側(41~56)、中央部(57~60)、玄門側(61~77)の3か所に分けられる。天井石の崩落により原位置は留めていないものの、これらの鉄釘が使用されたであろう木棺の位置と鉄釘のたまかな使用位置については十分に推察できる。木棺は鉄釘の位置から推して玄室の中央部に安置された可能性が強い。第1石室内では左側壁際に偏っていたのに対して、やや異なる様相を示している。奥壁側と玄門側に散在している鉄釘は木棺の小口部などの緊結に使用されていたと考えて大過ないと思われるが、中央部の鉄釘は底板から木棺内部の仕切板か、長側板のどちらに打ち込まれたのかは判然としない。ただし、この位置に仕切板を取り付けてしまうと木棺内部の長さは1.1 mと0.8 mに二分され、被葬者を伸展したと考えるならば遺体を納めることは不可能になる。ここは底板から長側板に打ち込まれた鉄釘が移動したものと考えてよいだろう。

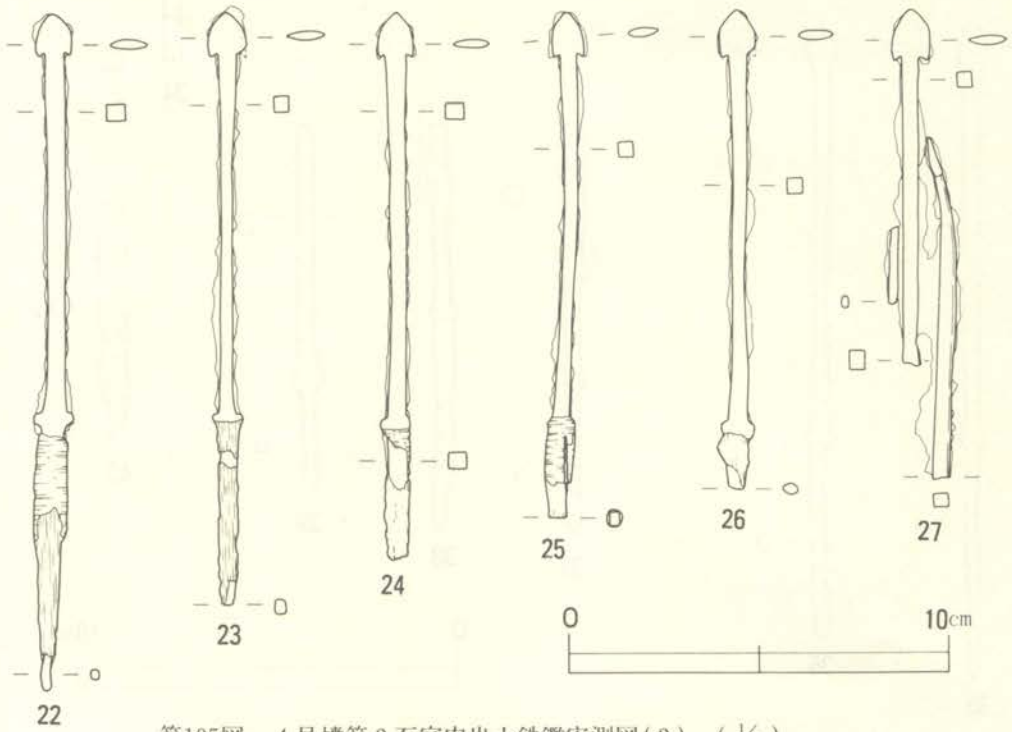
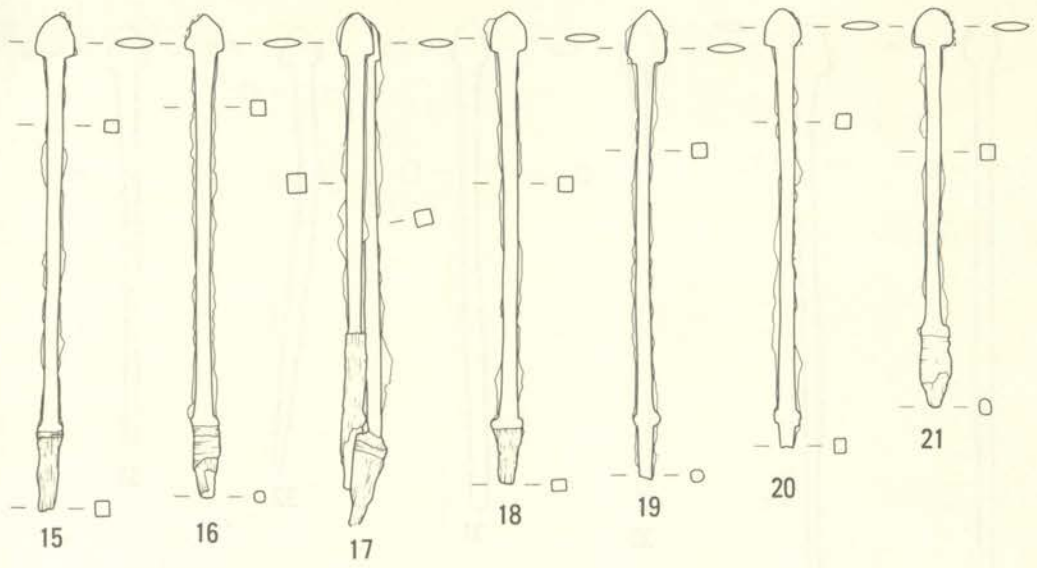
右側壁際の中央より奥壁寄りの床面上から鉄鏃(1~40)が一括して検出された。天井石の崩落などにより鋒先の方角は一定していないが、多くは奥壁に向けられている。また、鉄釘の位置から推定した木棺の位置より外にあるため木棺外に副葬されたものと考えられる。第1石室と同様、木棺内に遺物が副葬された痕跡は認められない。

石室内からの出土遺物は次のとおりである。

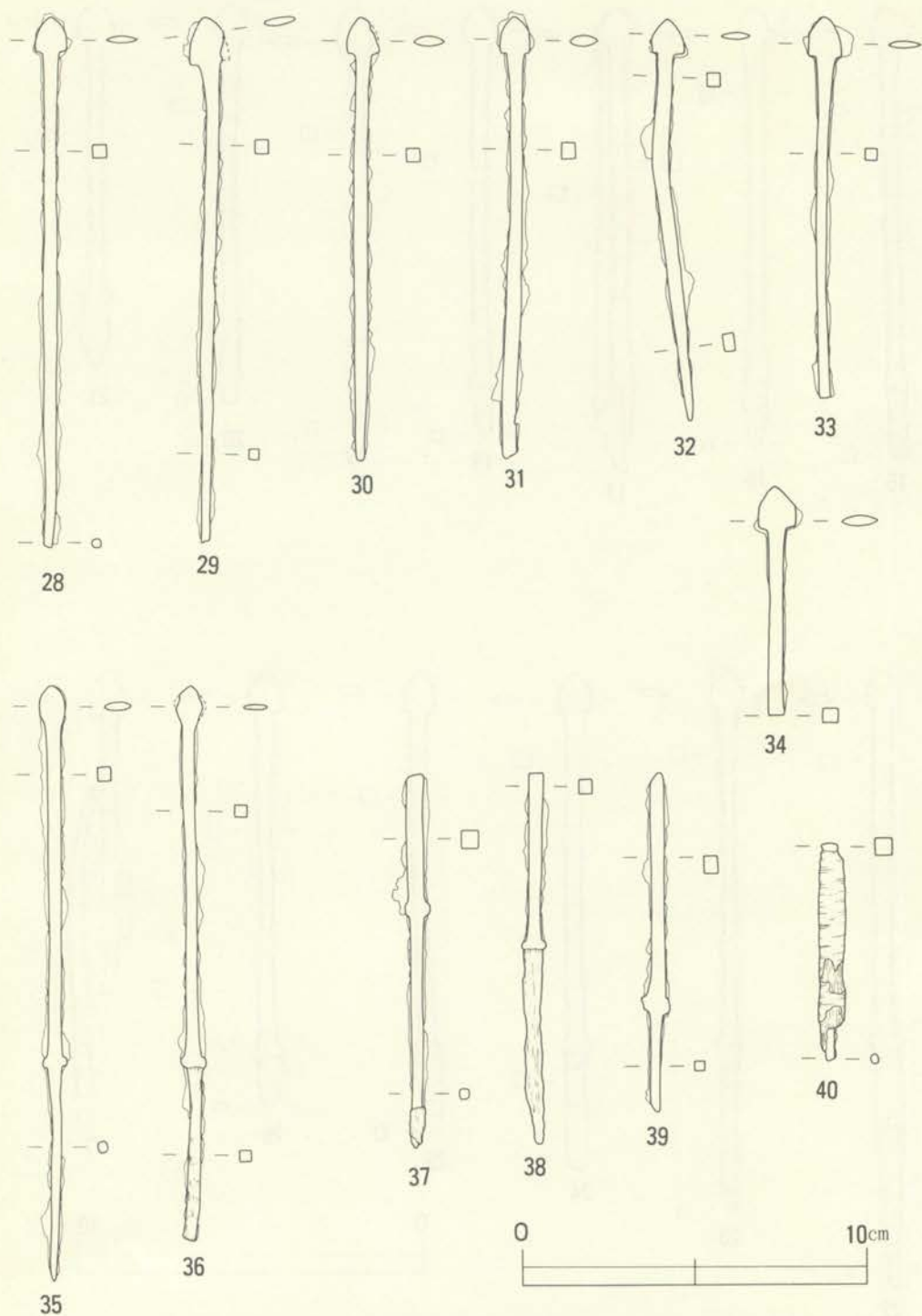
鉄鏃	40以上
鉄釘	28以上



第104图 4号墳2石室内出土鉄鏃実測図(1), ($\frac{1}{2}$)



第105图 4号墳第2石室内出土鉄鑑实测图(2), (1/2)



第106図 4号墳第2石室内出土鉄鏃実測図(3), (1/2)

鉄 鏃 (1~40)

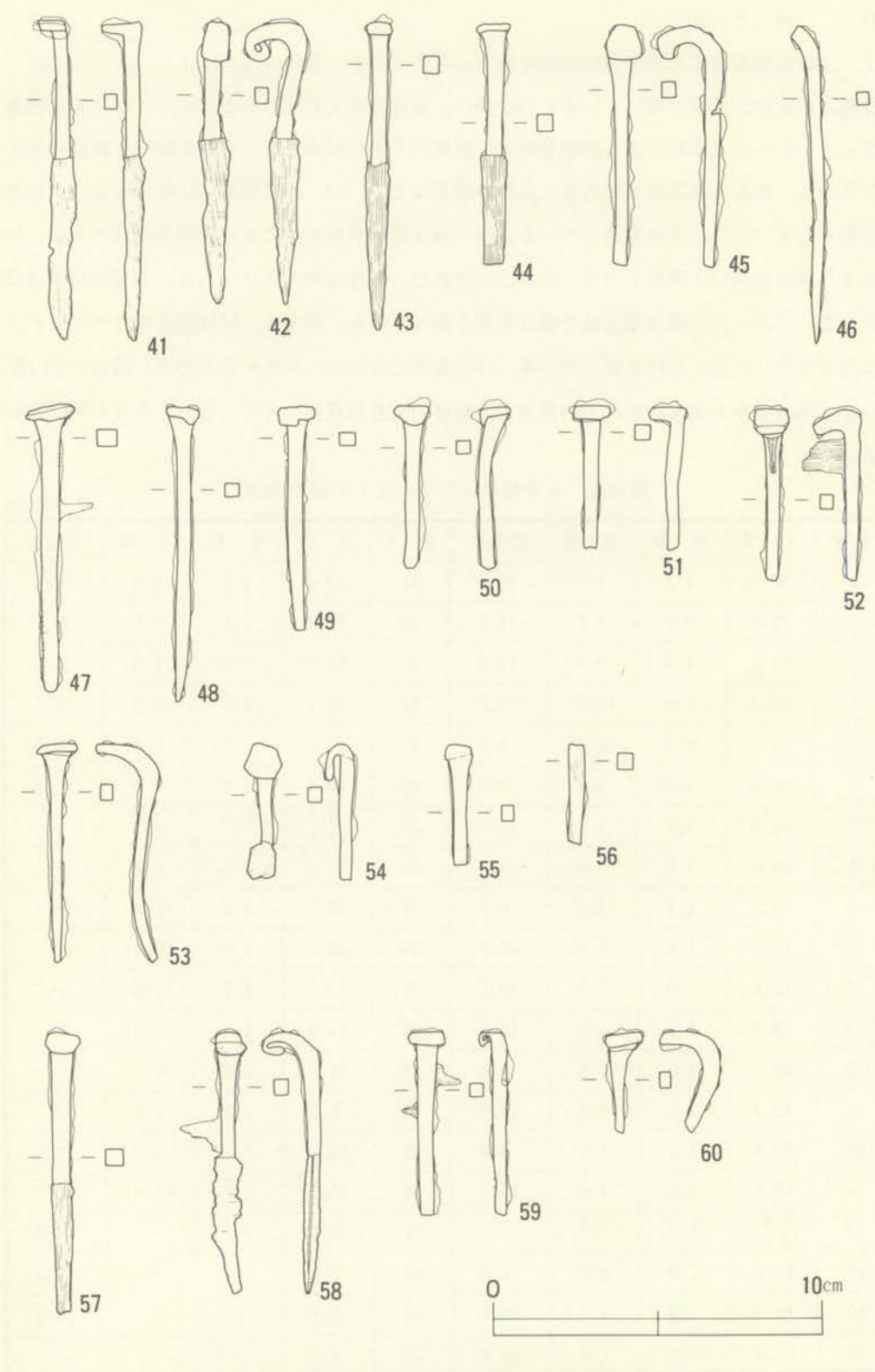
1~21は両関鑿箭式の鏃で棘状突起を有するものである。全体に遺存はよく、矢柄の木質や桜皮巻きの痕跡が明瞭に残っているものが多い。鏃身は両丸造りである。6, 17は2本が癒着している。22~27は腸袂のある両関鑿箭式で箆被の下半が欠損している27を除いて棘状突起を有している。鏃身は両丸造りである。矢柄の遺存はよく、22, 25は明瞭に桜皮を巻いた痕跡が認められる。27は3本が癒着している。28~34は棘状突起を持たない両関鑿箭式である。欠損により棘状突起が不明なものも一応ここに含めた。鏃身は両丸造りである。木質の付着は認められない。35~36は両丸鑿箭式で棘状突起を持っている。鏃身は、35は両丸造りであるが、36はやや平造りに近い形状を呈している。36の基部には矢柄の木質が若干付着し遺存している。37~40は箆被部から基部にかけての部分で、桜皮の遺存が良好なもの(40)もある。棘状突起を有している。

第19表 4号墳第2石室内出土鉄鏃計測表

単位はcm

番号	全長	身長	身幅	箆被長	番号	全長	身長	身幅	箆被長
1	16.4	1.1	1.0	9.8	21	10.4	1.0	1.0	7.6
2	15.3	0.9	0.7	11.2	22	17.4	1.1	1.0	10.6
3	15.2	1.0	0.7	12.3	23	15.3	1.2	1.0	10.6
4	15.1	0.9	(0.9)	9.7	24	14.1	1.1	0.9	9.6
5	15.0	0.9	(0.9)	9.8	25	13.0	1.1	0.8	9.5
6	14.9	1.2	0.9	9.5	26	12.3	1.2	0.9	9.7
7	14.5	1.1	1.0	10.7	27	9.1 8.8	1.3	1.0	—
8	14.0	1.0	0.8	9.8	28	15.2	1.0	0.9	—
9	13.9	1.1	(1.0)	9.7	29	15.0	1.3	(1.2)	—
10	13.7	(1.2)	(1.0)	10.7	30	12.7	1.0	(0.9)	—
11	13.8	1.0	0.9	10.7	31	12.7	1.1	0.8	—
12	13.3	1.2	0.9	11.1	32	11.5	1.0	(1.0)	—
13	13.1	1.0	0.8	9.6	33	11.0	1.2	0.9	—
14	13.1	1.0	0.8	10.0	34	6.5	1.2	1.1	—
15	12.8	1.1	1.0	9.8	35	16.9	1.1	0.8	10.8
16	12.6	1.0	1.0	10.8	36	15.7	1.1	(0.9)	9.7
17	12.4 13.1	1.1	0.9	—	37	10.6	—	—	[4.0]
18	12.3	1.0	0.9	9.9	38	10.5	—	—	[5.0]
19	12.2	1.4	1.0	10.8	39	9.6	—	—	[6.9]
20	11.4	0.9	1.0	10.8	40	6.2	—	—	—

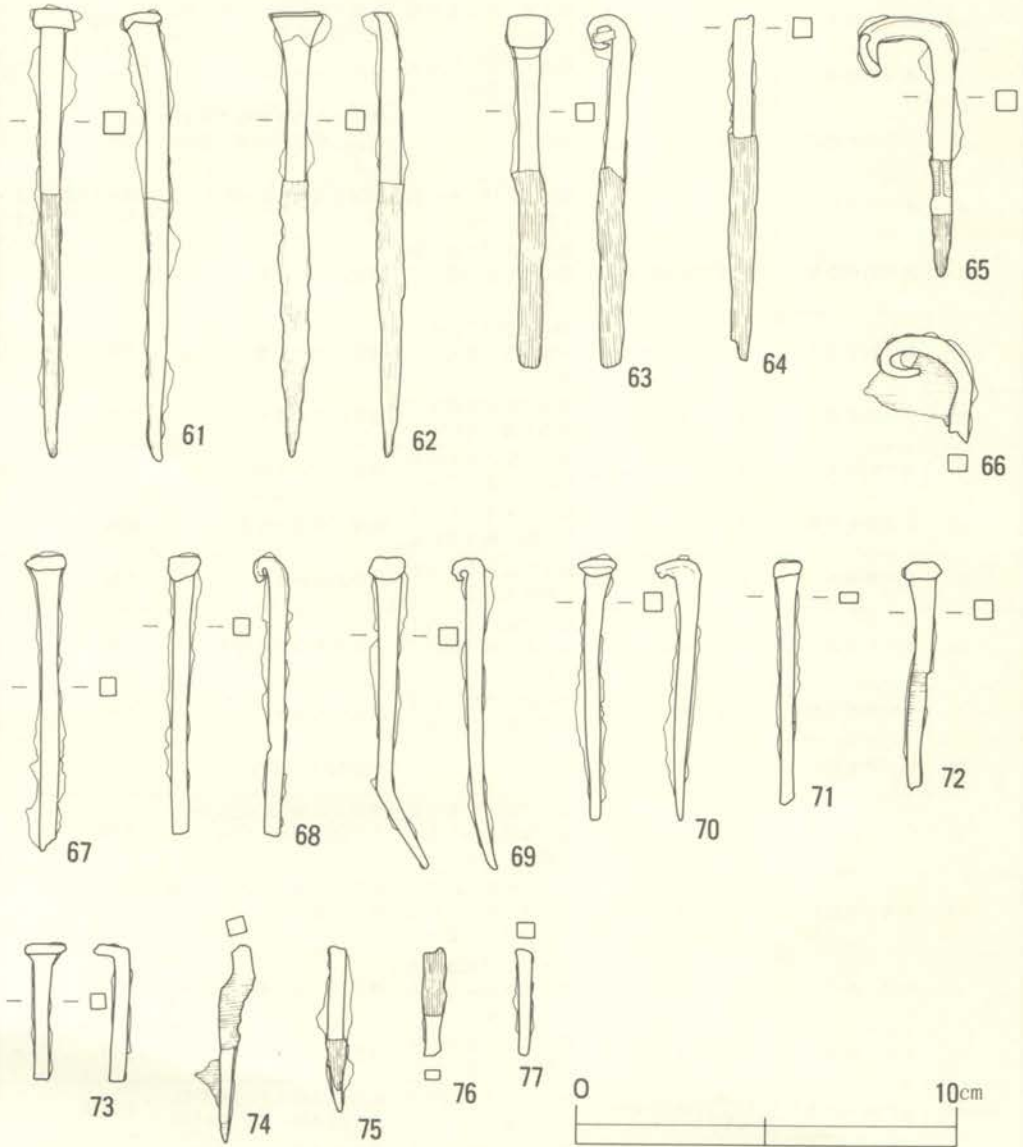
註) 全長は現存値を示す。() 推定値, [] 現存値



第107图 4号墳第2石室内出土鉄釘実測図(1), (1/2)

鉄 釘 (41~77)

第1石室の鉄釘に比べると全体に小形のものが多い。相対的に大形品（長さ11cm前後，体部の厚さ0.6×0.5cm前後），中形品（9cm前後，0.5×0.4cm前後），小形品（7cm前後，0.5×0.4cm前後）の3種類に分けられる。大形品と中形品の一部は木質の付着状態から推して長側板から小口板へ打ち込んだものと考えられる。また，中形品の一部と小形のものには蓋板あるいは底板から長側板や小口板への緊結に使用されたと推定できる。



第108図 4号墳第2石室内出土鉄釘実測図(2)，(1/2)

第20表 4号墳第2石室内出土鉄釘観察表

単位はcm

挿図番号	出土位置	全長	体部厚	頭部の形状	木質付着状態	推定使用位置
107-41	東壁際奥壁寄り	9.6	0.4 × 0.45	鍛えて左側へ広げてから折り曲げている	頭部下は錆化のため不明、下半部5.6cm斜めに付着	長側板
42	奥壁側東寄り	8.5 (定形)	0.45 × 0.5	鍛えてやや広げてから先端を巻き込みながら折り込んで曲げている	頭部下は錆化のため不明、下半部5cm縦目に付着	長側板
43	奥壁側中央	9.3 (完形)	0.5 × 0.55	鍛えて広げてから先端が体部につくまで曲げている	頭部下は錆化のため不明、下半部5cm縦目に付着	長側板
44	奥壁側中央	7.3	0.5 × 0.55	鍛えて二方に張り出している	頭部下は錆化のため不明、下半部は縦目に3.3cm付着	長側板
45	奥壁側西寄り	7.3	0.45 × 0.5	鍛えて広げてから大きく折り曲げている	錆化のため不明	不明
46	西壁側奥壁寄り	9.6	0.4 × 0.4	欠損	錆化のため不明瞭であるが、一部に横目の付着が認められる。	不明
47	東壁際奥壁寄り	8.5	0.6 × 0.55	鍛えて広げてから若干曲げている	頭部を含め8.5cm横目に付着	底板(頭部まで打ち込んでいる)
48	奥壁側東寄り	8.7	0.45 × 0.4	鍛えて広げてから体部につくまで曲げている	錆化のため不明	不明
49	奥壁側東寄り	6.6	0.5 × 0.4	鍛えて広げてから、内側へ折り込んでいる	錆化のため不明	不明
50	奥壁側東寄り	4.8	0.45 × 0.4	鍛えて広げた部分で頭部を覆っている	錆化のため不明	不明
51	奥壁側中央	4.2	0.5 × 0.45	鍛えて広げてから直角に折り曲げている	錆化のため不明	不明
52	東壁際奥壁寄り	5	0.4 × 0.4	鍛えて大きく広げてから折り曲げている	頭部下横目に付着	底板
53	奥壁際中央	6.5	0.4 × 0.45	鍛えて広げてから折り曲げている	錆化のため不明	不明
54	奥壁際東寄り	4	0.45 × 0.45	鍛えて広げてから下方へ強く折り曲げている	一部やや斜めに付着	底板
55	東壁際奥壁寄り	3.5	0.4 × 0.5	やや鍛えて厚く二方に張り出している	錆化のため不明	不明
56	奥壁際東寄り	2.9	0.5 × 0.5	欠損	一部縦目に付着	不明
57	中央・西寄り	8.3	0.55 × 0.5	鍛えて広げてから先端が体部につくように曲げている	頭部下は錆化のため不明、下半部は縦目に付着	不明
58	中央・東寄り	7.7	0.45 × 0.5	鍛えてやや広げてから内側へ折り込むように曲げている	頭部の一部を含め7.4cm横目に付着	底板
59	中央・西寄り	5.4	0.45 × 0.4	鍛えて上げ先端を内側へ巻き込みながら曲げている	横目に一部付着している。	底板
60	中央・東寄り	3.1	0.35 × 0.5	鍛えて広げてから折り曲げている	錆化のため不明	不明
108-61	玄門側・西寄り	11.6 (定形)	0.55 × 0.6	平たく二方に張り出している	頭部下は錆化のため不明、下半部は縦目に6.8cm付着	長側板
62	玄門側中央	11.5 (定形)	0.5 × 0.55	鍛えて広げてから先端を若干曲げている	頭部下は錆化のため不明、下半部は縦目に7cm付着	長側板
63	玄門側東寄り	9.1	0.5 × 0.5	鍛えてやや広げてから内側へ巻き込むように曲げている	頭部側面に横目に付着、頭部下は錆化のため不明、下半部は縦目に付着	長側板

挿図番号	出土位置	全長	体部厚	頭部の形状	木質付着状態	推定使用位置
64	玄門側東寄り	8.9	0.5 × 0.5	欠損	上半部は錆化のため不明、下半部は縦目に5.8cm付着	長側板
65	玄門側東寄り	8	0.55 × 0.55	鍛えてやや広げてから先端を若干曲げている	頭部下は錆化のため不明、下半部の上部は0.9cm横目に、下部は1.6cm縦目に付着	不明(上半部は大きく彎曲している)
66	東壁際玄門寄り	2.7	0.55 × 0.45	鍛えて広げてから大きく折り曲げている	頭部の一部を含み、横目に広く付着している	不明
67	中央・玄門寄り	7.6	0.45 × 0.5	鍛えて二方に厚く張り出している	錆化のため不明であるが、横目らしい痕跡が一部残る	不明
68	玄門側中央	7.1	0.45 × 0.45	鍛えてやや広げてから内側へ折り込んでいる	錆化のため不明であるが、横目らしい痕跡が一部残る	底板
69	玄門側東寄り	8	0.5 × 0.45	鍛えて広げてから内側へ折り込んでいる	頭部下に一部横目に付着している	底板
70	玄門側中央	6.7 (完形)	0.5 × 0.5	鍛えて広げてから折り曲げている	錆化のため不明であるが横目らしい痕跡が一部に残る	底板
71	玄門側中央	6.3	0.55 × 0.3	やや鍛えて広げてから先端を直角に曲げている	錆化のため不明	不明
72	玄門側中央	5.9	0.5 × 0.5	鍛えて厚く二方に張り出している	部分的に横目に付着している	底板
73	玄門側西寄り	3.5	0.4 × 0.4	鍛えて広げてから直角に折り曲げている	錆化のため不明	不明
74	玄門側やや東寄り	5.1	0.5 × 0.45	欠損	下半部横目に付着する	底板(上半部はやや彎曲している)
75	東壁際玄門寄り	4.3	0.4 × 不明	欠損	縦目に一部付着している	不明
76	玄門側中央	2.8	0.4 × 0.25	欠損	一部縦目に付着する	不明
77	玄門側中央	2.8	0.5 × 0.4	欠損	錆化のため不明	不明

全長は完形品を除いて、現存値を示す

5号墳

位置と現況

舌状台地東端の台地平坦部から緩斜面上に位置し、4号墳の東4mに隣接する。畑地中に存在するため墳丘は4号墳と同様すでに削平され盛土は全く残存していない。表土除去後の遺構精査の段階で主体部の軟質砂岩と方形に巡る周堀を検出した。主体部は南側裾部に並列する2基が確認され、西側を第1主体部、東側を第2主体部とした。

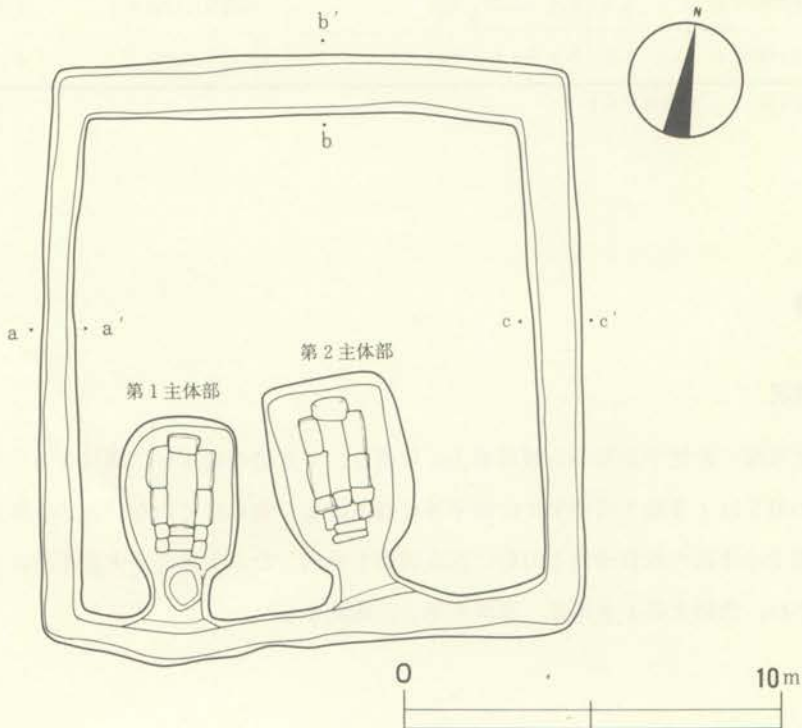
墳丘と周堀 (第109, 110図, 図版56, 57)

前述のように墳丘盛土は全く残存していないので、墳丘の築造方法については不明であるが、1～3号墳に類似した方法であったと考えられる。

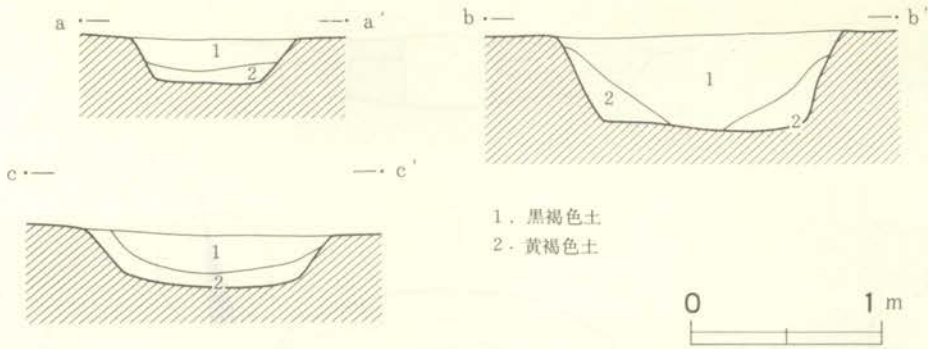
周堀が方形に全周することにより方墳であることを確認した。外縁径・内縁径はそれぞれ東西14.5m・12m, 南北14.5m・13mを測り、平面プランはほぼ正方形を呈する。上端幅は比較的狭く東側で1.2m前後、最も広い北側で1.5mを測るのに対し、西側では0.8～1m, 南側でも0.9mほどの狭さである。掘り込みは北側ではハード・ローム層まで及んでいるが、その他はソフト・ローム中に底面を置いている。深さは北側で50cm, 東・西側では20～30cmと比較的浅く、底面は平坦で断面は逆梯形を呈する。覆土は自然堆積の様相を示し、全体にほぼ同一層序となる。

周堀内の遺物出土状況

周堀内からは須恵器片, 土師器片が出土している。第2主体部の開口部から周堀へかけて意識的に破碎されたように一括して検出された須恵器片は第2石室の玄室内で出土した破片と接



第109図 5号墳実測図(1/200)



第110図 5号墳周堀土層断面図(1/40)

合し、長頸瓶口頸部と蓋の2個体に復原された。第2石室奥壁には盗掘坑と思われる貫通坑が認められ、これらの須恵器片は盗掘の際に破碎され投棄されたものと考えられ、葬送儀礼時の所産などではないと考えられる。これは第2主体部の項で遺物説明を行う。土師器は南東コーナー附近の墳丘側の壁に接して検出された。底部から胴部にかけての破片のみで壺か甕かは判然としない。墳丘上に置かれていたものかどうかは不明である。

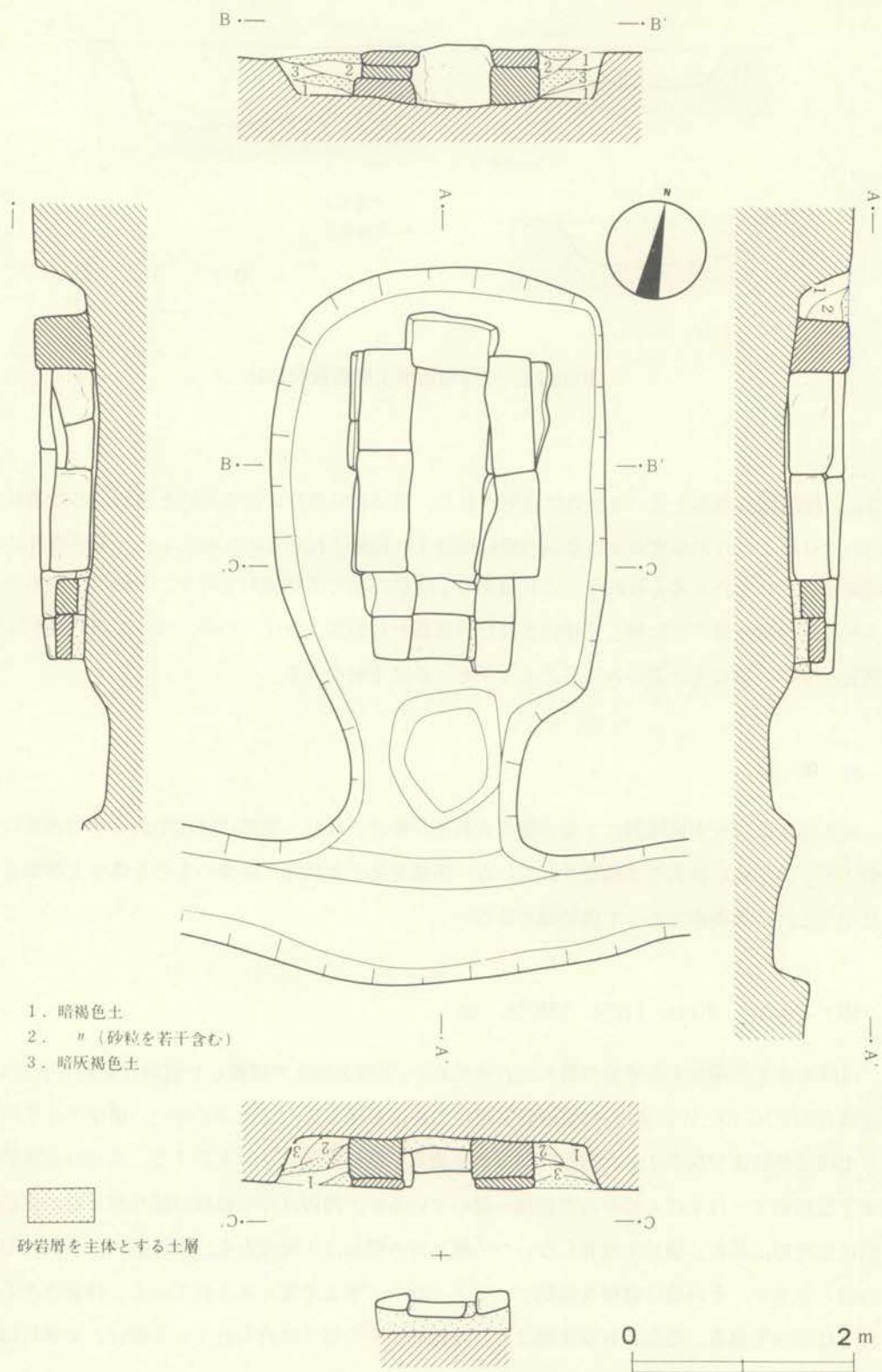
主体部

本古墳では墳丘南側裾部に2基の横穴式石室が検出された。裾部のほぼ中央とその西側にやや「ハ」の字状に並列して構築されている。西側を第1主体部、中央のものを第2主体部としたが、これは調査順であって構築順ではない。

第1主体部 (第111, 112図, 図版58, 59)

ほぼ南向きに開口する単室の横穴式石室である。上部を粘土で被覆した痕跡は認められない。主軸方向をN-10°-Wに置く。軟質砂岩を用いて地山を掘り込んだ土壌の中央に構築されている。

土壌は確認面で長さ4m、幅2.5~3.1mを測る不整長方形プランを呈する。東辺は直線的に走り周堀側で一旦すばんでから前庭部へ続いているが、西辺はやや弧状に張り出しながら曲線的に前庭部に至る。墳丘が残存しないため掘り方の開始は不明である。掘り込みは東側で垂直に近くなるが、その他は緩慢な傾斜でハード・ローム層まで掘り込まれている。確認面からの深さは55cmを測る。底面は石室床面にあたる範囲がやや掘り窪められている他は、全体にほぼ平坦である。

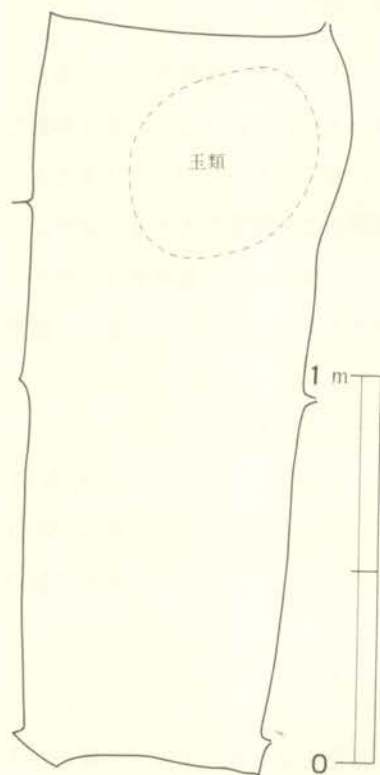


第111図 5号墳第1主体部実測図(1/60)

前庭部は長さ1.2m、羨門側上端幅2m、開口部上端幅2.5mを測る。前庭部の底面には長径1.1m、短径1m、深さ0.25mを測る不整形の浅いピットが穿たれ、その底面は周堀底面よりやや深くなっている。このため開口部分が土手状にやや高い盛り上がりを見せる。

石室は両袖石の横穴式石室である。羨道部は持たない。天井部は側壁上に比較的良好に遺存していたが、右側壁の截石の一部に欠損が認められた。石室床面は土壙底面をそのまま利用している。

玄室床面プランは長方形を呈し、長さは右側壁で1.95m、左側壁、主軸線上で1.9m、幅は奥壁下、中央部で0.75m、玄門袖石下では0.6mを測る。高さは0.4mと極めて低い。奥壁は一枚石からなり、高さ0.55m、上辺幅0.7m、下辺幅0.75mを測り、台形というよりは直方体に近い。側面に切り込みは施されておらず、側壁の截石をもたせかけるように置いている。ただし、左側の天井石は奥壁との接合部に奥壁の形に対応した加工が施されている。天井石には厚さ10~15cmほどの偏平な截石を使用している。右側壁は1段で2枚の直方体の截石を直列に並べている。左側壁も同様に截石を並べているが、奥壁寄りの部分に特殊な加工が施されている。すなわち、2枚の大・小の不整形の石材を置いたのち上辺の一部に別の砂岩を継ぎ足し、計3



第112図 5号墳第1石室内遺物出土状況図(1/20)

枚の石材で1つの直方体の截石を構成している。両側壁間は床面上、上部とも0.7～0.75 mとほとんど変化はない。

玄門は左右に配置された2枚の截石からなり、両袖石間には框石が置かれている。右袖石は砂岩層を主体とする黒褐色土の基盤の上に置かれている。床面からの高さは0.45mを測り、天井石を架構した玄室と同じ高さになる。左袖石はやや内側へ張り出しているが、右袖石は玄室側壁と並行に置かれている。切り込みは右袖石とも認められず、側壁の截石はもたせかけるように据えられている。両袖石間は框石上、頂部で0.5mを測り、垂直に立てられることがわかる。框石は厚さ20cmほどの截石で前述の基盤の上に置かれている。玄門の外側にはさらに3枚の截石を配して仕切石としている。3枚とも基盤の上に据えられ、框石に接する截石は厚さ15cmほどである。上面の高さは框石と同じに整えられている。この中央の仕切石の左右には2枚の扁平な截石が位置し、中央と左側の石の隙間には前述の黒褐色土が詰め込まれている。

石室と土壌の間は砂岩層、暗褐色土、暗灰褐色土で裏込めが施されている。3、4号墳と同様に粘土は使用されていない。裏込めは截石の積み上げと並行して行われている。また、各截石間には黒色土が充填され目張りが施されている。

石室内の出土遺物（第114図、図版76）

玄室内からは玉類がまとまって出土した。奥壁寄り、南東コーナーから中央部にかけての範囲に集中的に認められ、一部が天井石の崩落などにより移動している。玉の連ね方までは復原できないが、勾玉10個が1列に並んでおり、勾玉だけまとまって連ねられていた部分が存在したと考えられる。被葬者の頭部がこの位置だとすると身長は1.5m以下ではないと玄室内に納まりきれなくなり、埋葬位置から推定すると被葬者は女性か子供である可能性が考えられるが、装身具が多いことから女性である可能性が強い。また、被葬者は中央よりやや右側壁に偏した位置に安置されたと考えられる。

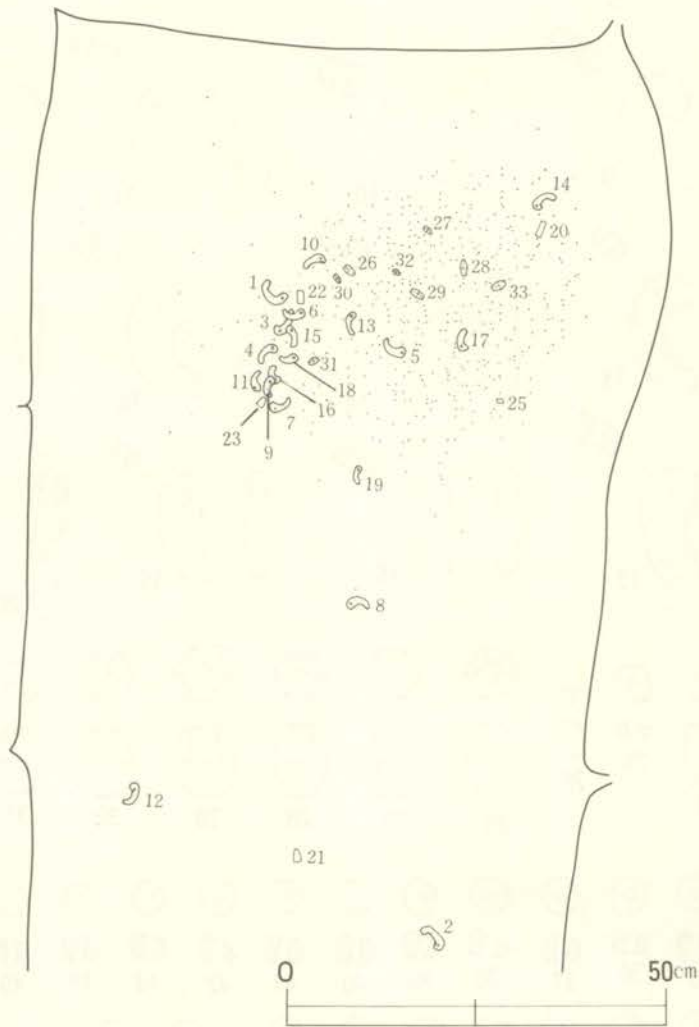
石室から出土した遺物は次のとおりである。

勾玉	19	滑石製白玉	14
管玉	1	頁岩製白玉	8
棗玉	4	ガラス製白玉	628
切子玉	8		

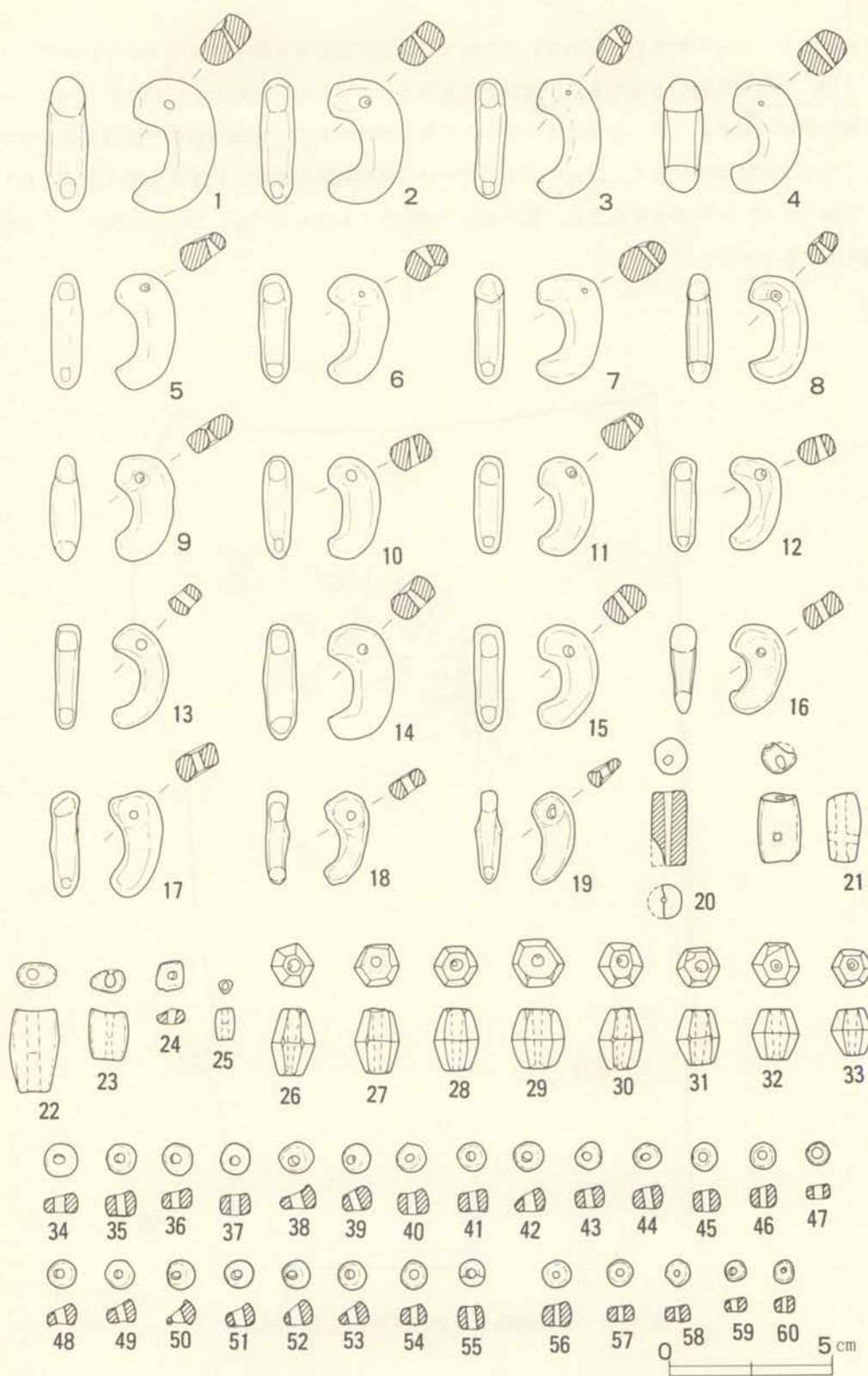
勾玉（1～19）

1～12は瑪瑙製である。淡赤褐色を呈する。すべて片面から穿孔され、終孔部が漏斗状に剝離しているものもある。4は入念に作られている。13はガラス製である。半透明の淡緑色を呈

する。また、成分分析を行っていないので鉛ガラスかアルカリ石灰ガラスであるかは不明である。14、15は碧玉質のものである。濃緑色を呈する。いずれも片面穿孔で、14の終孔部には漏斗状の剥離が認められる。全体によく磨かれ丁寧な作りである。16は滑石製で淡白緑色を呈する。孔のまわりはやや丸くくぼんでいる。17～19は蛇紋岩製である。いずれも形が悪く、作りも粗雑である。片面より穿孔され、孔のまわりは大きくくぼんでいる。19の孔は丸くなくやや隅丸三角形を呈する。



第113図 5号墳第1石室内玉類出土状況図(1/10)



第114图 5号墳第1石室内出土玉類実測图(1/2)

第21表 5号墳第1石室内出土勾玉計測表

単位はmm

番号	長径×短径	腹部長径 ×短径	孔径	材質	番号	長径×短径	腹部長径 ×短径	孔径	材質
1	41×25	15×12	3	瑪瑙	11	29×17	11×9	3	〃
2	39×23	13×10	3	〃	12	28×15.5	9×8	3	〃
3	37×19.5	11×9	3.5	〃	13	31×17	8×7	4	ガラス
4	35×21	12.5×12	3	〃	14	35×20	13×10	3	碧玉質
5	35×18	11×9	3	〃	15	32×18.5	11×9	3	〃
6	33×19	12×9	4	〃	16	27×17	11×7	3	滑石
7	33×20	11×9	3	〃	17	32×16.5	11×9	3	蛇紋岩
8	32.5×18	10×8	3	〃	18	28×13.5	8×7	3	〃
9	31.5×18	12×9	2.5	〃	19	28×13	10×18	4	〃
10	30.5×16	11×9	3	〃					

管 玉 (20)

碧玉質で濃緑色を呈する。下面と側面の一部を欠損する。長さ2.2cm、上面外径1.05cm、孔径は上面0.3cm、下面0.15cmを測る。上面より穿孔されている。

棗 玉 (21~25)

21~24は琥珀製、25は黒色の頁岩製である。25が完形である他はいずれも一部を欠損している。21は両面から穿孔され、さらに側面からも穿たれている。側面の孔径は0.25cmを測る。22、23は両面から穿孔されている。24は形態的には棗玉の範疇に入らないかもしれないが、適当な呼称もないので一応ここで扱うことにした。側面から穿孔されている。25は小形の棗玉で、この1点だけ他のものとは材質が異なる。両面から穿孔され、断面は隅丸三角形を呈する。

第22表 5号墳第1石室内出土棗玉計測表

単位はmm

番号	長さ	最大幅	厚さ	孔径	材質	番号	長さ	最大幅	厚さ	孔径	材質
21	15	13	9	4.25	琥珀	24	9	8	4.5	3	〃
22	25	14	7	4	〃	25	9.5	6	4	2	頁岩
23	15	12	6.5	4	〃						

切子玉 (26~33)

不透明な水晶製である。27が頭部を欠損、31、32も頭部の一部を欠損している。大きさはほぼ一定しているが概して小形である。片面穿孔で、終孔部に漏斗状の剝離痕が認められる。

第23表 5号墳第1石室内出土切子玉計測表

単位はmm。〔 〕は現在地

番号	長さ	最大径	頭部径	孔径	材質	番号	長さ	最大径	頭部径	孔径	材質
26	20	13	7	4×1.5	水晶	30	18	13	9	3.5×1.5	〃
27	〔20〕	13	不明	3×1.5	〃	31	16	13	9	4×2	〃
28	18.5	13.5	8	4×2	〃	32	15	14	10	3×2	〃
29	18	16	12	3.5×1.5	〃	33	14	12	8	3.5×1.5	〃

白玉 (34~60)

滑石製 (34~47)、頁岩製 (48~55)、ガラス製 (56~60) の3種の材質から成っている。滑石製は最大径9mm前後、最大厚7mm前後のものが一番多い。38、42のようにやや粗雑な作りのものもある。濃灰色を呈し、片面穿孔である。頁岩製白玉の大きさも滑石製のものとほぼ同

第24表 5号墳第1石室内出土白玉計測表

単位はmm

番号	最大径	最大厚	孔径	材質	番号	最大径	最大厚	孔径	材質
34	10	6	3.5	滑石	48	9	6.5	3	頁岩
35	9	7.5	3	〃	49	9	7	3	〃
36	9	6	3	〃	50	9	7.5	4	〃
37	9	6.5	3.5	〃	51	9	7	3.5	〃
38	11	7	4	〃	52	9	7.5	4	〃
39	9	7	3	〃	53	9	7	3	〃
40	9.5	7.5	3	〃	54	8	6	3	〃
41	9	7	3	〃	55	8	7	3	〃
42	9.5	7	3	〃	56	9	7.5	2	ガラス
43	8.5	6.5	3	〃	57	8	5	2.5	〃
44	9	7	3	〃	58	7.5	5	2	〃
45	8	7	2.5	〃	59	7	4.5	2	〃
46	8	7	2.5	〃	60	6	5	2	〃
47	7	4.5	3	〃					

じ平均値がでている。やや粗雑な作りのものが多い。25の裏玉と同じ材質で黒色を呈し、片面から穿孔されている。ガラス製のものは総数628個が検出された。色調でこれらを分けると、青緑色系370、濃紺色系243、淡青色系9、緑色系4、黄色系2となる。大きさは径2～4mm、厚さ3mm前後のものが多い。実測可能なものの中から5個だけを図示した。製作技法は気泡などの観察から管切りによるものが多数を占めている。

第2主体部（第115、116図、図版60、61）

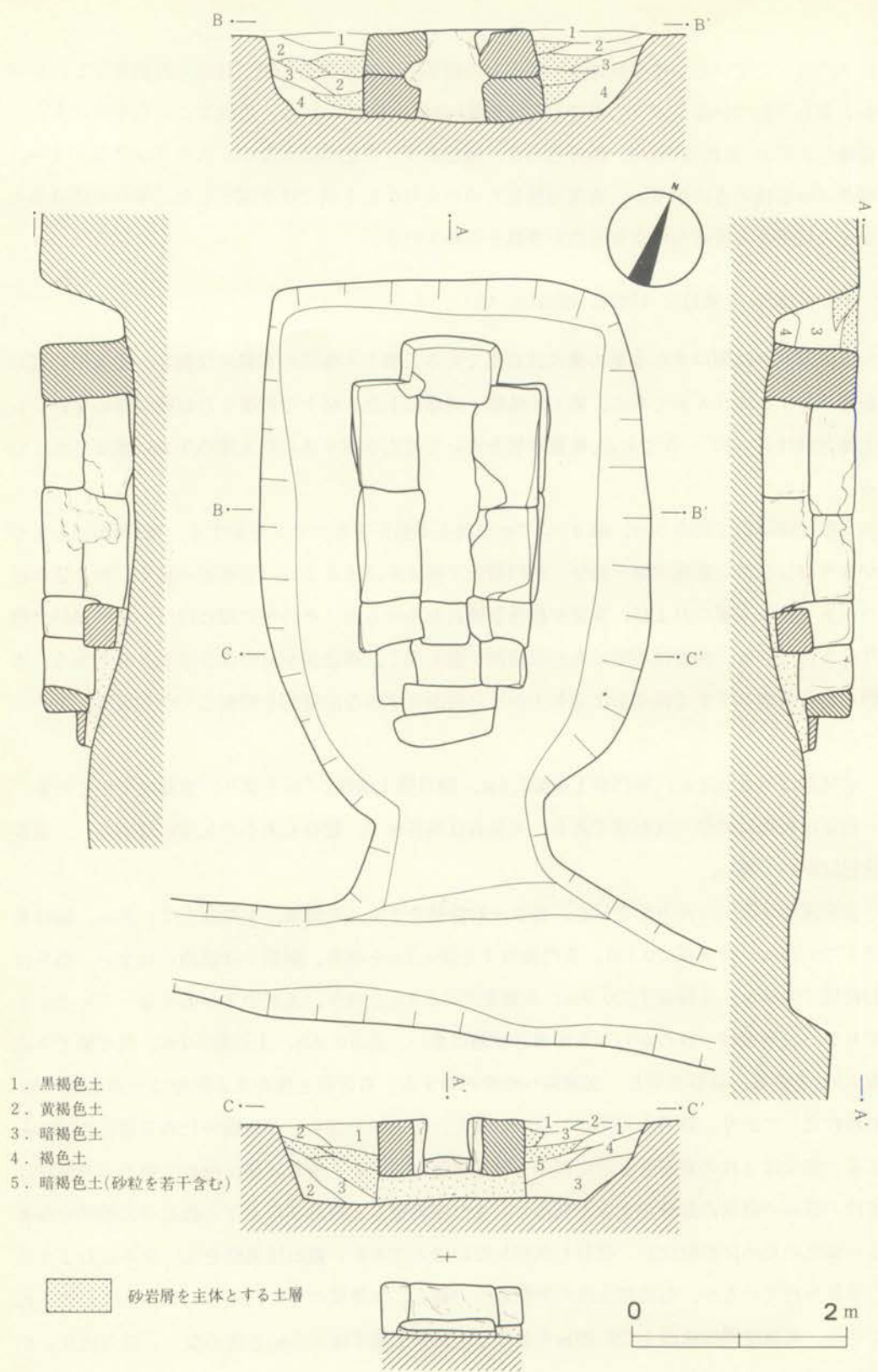
ほぼ南向きに開口する単室の横穴式石室である。第1主体部の東側に位置し、土壌間の最短距離はわずかに0.8mである。第1主体部と同様に上部を粘土で被覆した痕跡は認められない。主軸方向はN-19°-Wである。軟質砂岩を用いて地山を掘り込んだ土壌の中央に構築されている。

土壌は確認面で長さ5m、幅3～3.7mを測る不整長方形プランを呈する。東・西両辺ともやや張り出しながら前庭部側へ延び、羨門付近で緩くすばまるように前庭部へ続く。掘り込みはハード・ローム層におよび、東側が緩慢な傾斜をみせるが、その他の壁はほぼ一定の傾斜で掘り込まれている。底面は石室にあたる範囲が最も深く、確認面からの深さは0.9mを測る。玄門下から閉塞石下まで緩やかに立ち上がった底面は平坦な前庭部を形成してから周堀へ下がっていく。

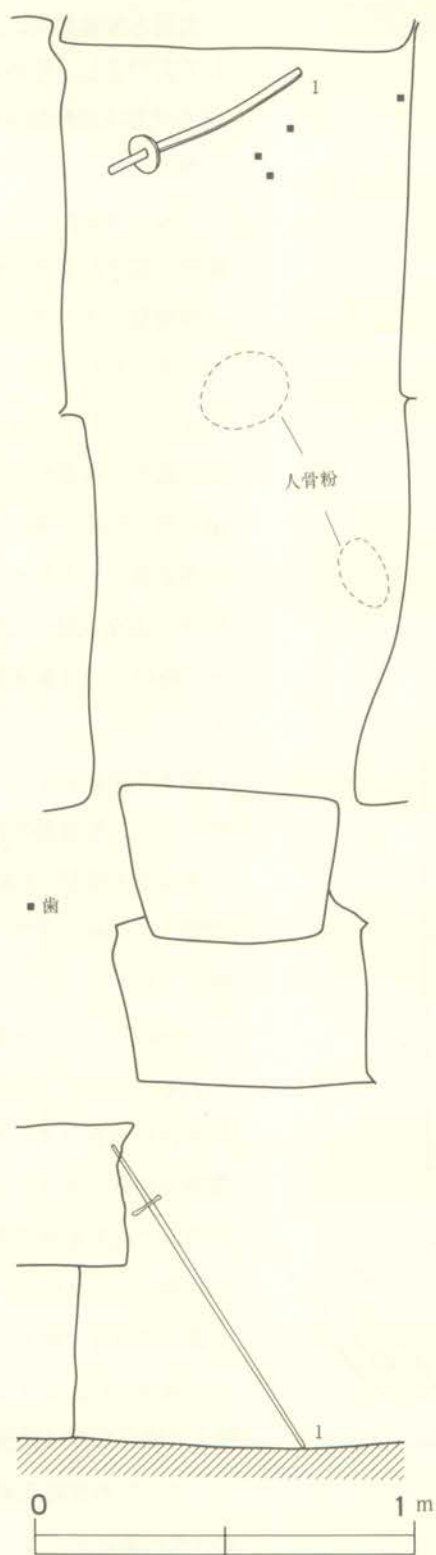
前庭部は長さ0.8m、羨門側上端幅1.6m、開口部上端幅2.5mを測り、底面は平坦である。

石室は両袖式の横穴式石室である。天井石は残存せず、截石も大小の欠損が認められ、遺存状態は極めて悪い。

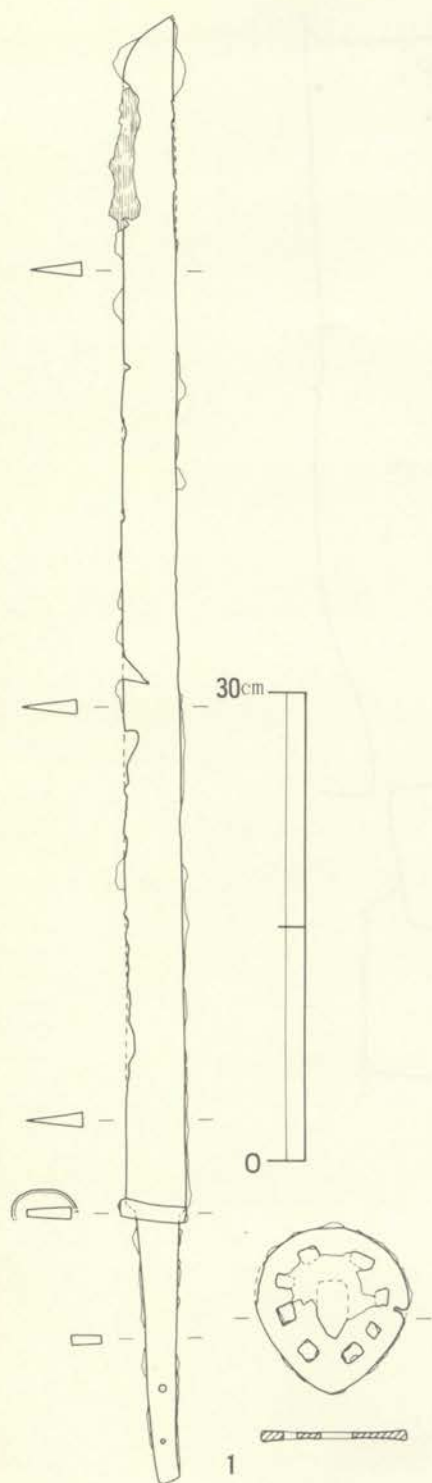
玄室床面プランは長方形を呈し、長さは右側壁で2m、左側壁、主軸線上で1.95m、幅は奥壁下で0.95m、中央部で0.9m、玄門袖石下では0.7mを測る。胴張りは認められない。高さは右側壁で0.85m、主軸線上で0.9m、左側壁では0.8mを測り、玄室中央が低くなっていることがわかる。奥壁は一枚石からなるが遺存状態は悪い。高さ0.9m、上辺幅0.7m、現存値で下辺幅0.9mを測る。台形を呈し、玄室側へやや内傾する。右側壁と接合する部分は一部風化のため砂粒化しており、継目も判然としない。また、下辺の左端も一部盗掘のため貫通孔が認められる。側壁は2枚の截石を2段に積み上げて構築している。遺存状態は極めて悪く、右側壁は上段の截石の継目の部分が大きく剥落し、また左側壁も玄門寄りの上下の截石の欠損部分が著しい風化のために砂粒化し、継目も判明しないほどである。截石は奥壁を主に挟み込むようにして置かれているが、右側壁上段の奥壁寄りの截石には奥壁の形に対応した切り込みが施されている。両側壁間は床面上で0.85mを測るが、側壁上部では0.5mと狭くなり「持ち送り」が行われていたことがわかる。



第115図 5号墳第2主体部実測図(1/60)



第116図 5号墳第2石室内遺物出土状況図(1/50)



第117図 5号墳第2石室内出土直刀実測図(1/5)

玄室と羨道部間には方柱状の截石を左右に配して玄門とし、その間に框石を置いている。遺存状態は比較的良好である。袖石、框石は砂岩屑を主体とする暗褐色土の基盤の上に置かれている。床面からの高さは0.8mを測り、玄室側壁の高さに整えられている。切り込みはなく玄室側壁にもたせかけるように据えている。両袖石間は框石上で0.55mを測るが、頂部では0.4mとわずかに内傾する。框石は厚さ30cmほどの截石で床面からの高さは玄室側で40cm、羨道部側で15cmを測る。

羨道部にも天井石は残存していなかったが、側壁の遺存状態は比較的良好である。羨道部床面と側壁下には前述の暗褐色土の基盤が敷き詰められている。この暗褐色土は玄門框石から始まり閉塞石下に至る長さ1.3mの範囲に認められる。羨道部床面プランは長方形を呈し、長さは左右側壁、主軸線上とも0.4m、幅は玄門側で0.65m、閉塞石側では0.6mを測る。側壁は左右とも1枚石で、基盤からの高さはともに0.5mを測り、玄室側壁、玄門袖石と同じ高さである。

羨門は存在せず、羨道部は2枚の板石により閉塞される。前述の基盤の上に $0.9 \times 0.45 \times 0.25$ mの板石を立て閉塞し、さらにこの石の基部に押えとして $0.95 \times 0.1 \times 0.3$ mの板状の截石を置いている。板石は羨道部右側壁に対しては、もたせかけるように据えられているが、左側壁との接合部分は側壁を切り込む形になっている。このため前庭部側から観察すると羨道部側壁は羨門袖石のようにも認められ、また羨道部床面は玄室床面とは異なり暗褐色土を厚く敷き

敲きしめている点からみても、羨門的な機能も有していたことが考えられる。

石室と土壌の間は砂岩屑、暗褐色土、褐色土、黄褐色土などで裏込めされている。粘土は使用されていない。裏込めは石室の積み上げと並行して行われている。また、これまでの古墳で認められたような各截石間に目張りのための粘土などが充填されていたのかどうかは遺存が悪いために判然としない。

石室内の出土遺物 (第117, 118図, 図版77)

石室内からは玄室からのみ遺物が出土している。前述したように盗掘を受けたと考えられ、遺物はわずかに直刀1口、須恵器片、歯、人骨粉が検出されたのみである。直刀の他は床面上に散在し、歯と人骨粉が原位置に近い位置を保っていると考えられる。直刀(1)は左側壁の奥壁寄りに立て懸けられ、刀身部は奥壁に向けられている。鏝の一部から茎にかけては側壁の截石に食い込んで検出されたが、これは当初側壁に沿うように接していたこの部分が、側壁の何回かの崩落のためにこのような様相を呈していると考えられる。直刀の鋒先周辺の床面上から歯が4本検出され、位置は中央部から右側壁にかけての奥壁寄りである。また、人骨粉が右側壁際の中央部から玄門にかけて散布し、被葬者は頭部を奥壁近くに置き、右側壁に沿って安置されたと考えられる。須恵器片は中央部から玄門にかけて散乱する。前述したように、開口部周堀覆土内より検出された破片と接合し、長頸瓶口頸部(2)と坏蓋(3)の2個体に復原された。

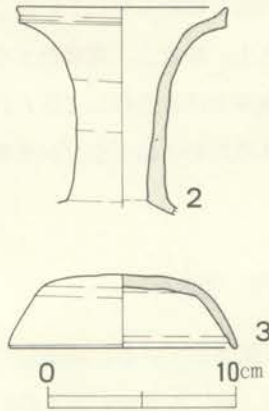
直刀(1)

全体に遺存が悪く、銹化の著しい個所が認められる。鋒先と刀身部の一部を欠損する。平棟、平造りで鋒はふくらを有している。両関で、茎部には目釘が2個所に遺存しているが、銹化のため形状が円形か方形かは判然としない。また、茎部は外側に緩やかに反っている。鏝は検出時には直刀に装着されていたが、取り上げる際にはずれ、その後は銹のため元通りにすることはできなかった。11×10cmを測り、いわゆる宝珠形の大形品である。透孔は銹により判然としないうが8孔認められる。また、縁金具が $\frac{1}{2}$ ほど遺存している。刀身部の一部に木質が付着する。

第25表 5号墳第2石室内出土直刀計測表

単位はcm、〔 〕現存値

番号	全長	刀身長	刀身幅	棟幅	茎長	茎幅
1	[94.7]	[77.5]	3.5~3.9	0.9~1.0	17.2	1.5~2.9



第118図 5号墳第2主体部出土須恵器実測図(1/4)

第2石室内出土土器一覧

単位はcm. ()現存値

番号	器種	法量	器形の特徴	成形・調整技法	胎土・焼成・色調	備考
2	長頸瓶 (口頸部)	口径 11 器高 (10.6)	やや直立気味に立ち上がった口頸部は上半で大きく外反し、口唇部を直立させて終わる。口唇部の外面は口頸部との境に稜を形成し、内面は凹面となる。	巻き上げ水挽き成形。口頸部は粘土紐をしほり上げるように巻き上げている。	砂粒を含むが精緻である。 良 暗灰色	須恵器 口頸部内外面に黄緑色の自然釉が残る。
3	坏・蓋	口径 12 器高 3.8	口縁部は外方へ直線的に下がり、天井部との境は明瞭ではなく後は認められない。口縁部内側に浅い凹線が一条巡る。	巻き上げ水挽き成形。内外面とも回転によるナデが残る。	砂粒を含むが精緻である。 良 明灰色	須恵器

2. 住居跡

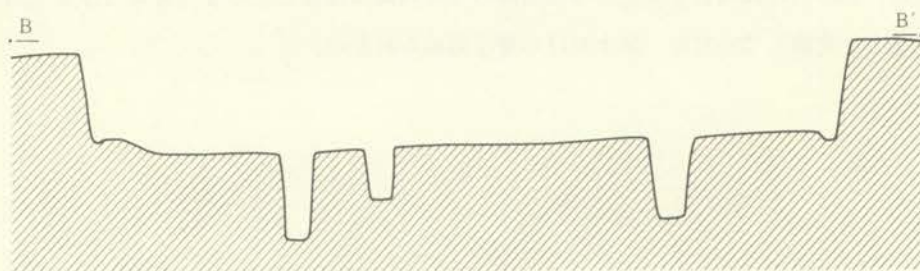
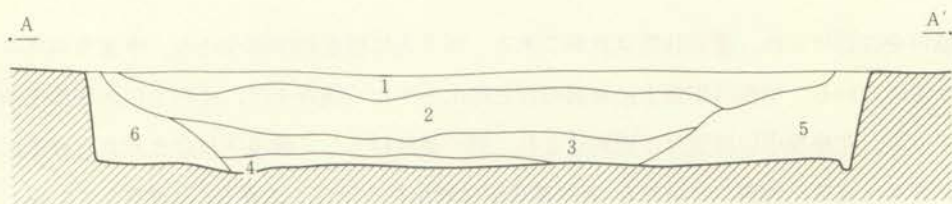
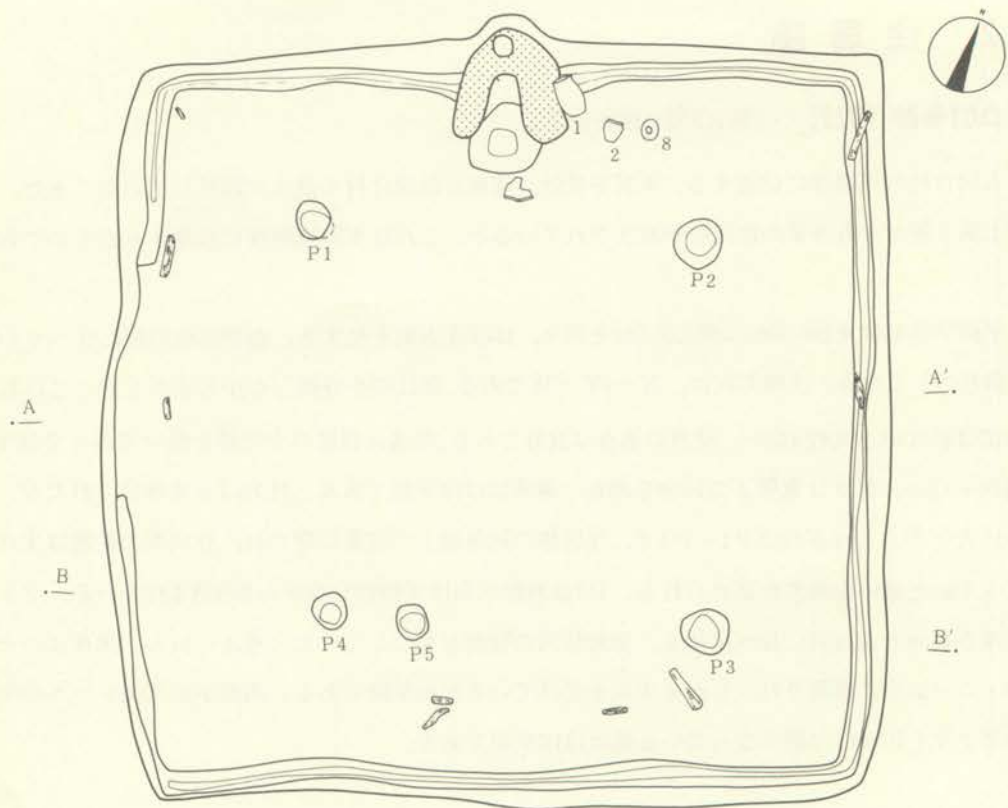
001号跡〔023〕（第119図，図版78—1）

舌状台地の先端部に位置する。火災を受け、床面には炭化材や焼土が散乱していた。また、覆土第2層からも多量の炭化物が検出されているが、これは本跡廃絶後に投棄されたものである。

平面プランは東西5.8m，南北5.7mを測り、ほぼ正方形を呈する。西壁は他の壁に比べてやや張り出している。主軸方向は、 $N-20^{\circ}-W$ である。壁はやや外傾しながら立ち上がっている。壁高は約70cmと比較的深く、壁面の遺存は良好である。壁溝は西壁の中央部を除いて巡っており、幅10~15cm，深さは東壁下で10cmを測る。溝底はほぼ平坦である。柱穴は5本検出されたが、主柱穴と考えられるのはP1~P4で、住居跡の対角線上の位置に穿たれ、柱穴間の距離はすべて3.1mと強い企画性が認められる。P1は西壁へ向けて傾斜しながら掘り込まれている。P5は深さ40cmと主柱穴に比べて浅く、補助柱穴の役割を果たしていたと考えられる。床面はハード・ルーム上に構築され、しかも火災を受けているため堅緻である。西壁下の床面レベルの中央部よりも10cmほど高くなっている他はほぼ平坦である。

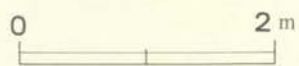
カマド（第120図，図版78—2）

北壁中央に設けられ、遺存状態は良好である。掘り方は壁を20cm掘り込み、床面を皿状に12cm掘り窪めている。袖部は床面上に良質の白色粘土をかたく積み上げ、その上に天井部を架構させている。左袖部中には甕片が埋め込まれ、袖の補強材として使用されたと考えられる。天井部の前面は崩落し流出していたが、天井部後面は煙出口を一部ふさぎながら遺存している。煙出口は16×18cmのほぼ円形を呈し、本住居跡のやや内側に位置している。焚口には焼土層を含む赤褐色土が充満していたが、焼土だけの層は認められない。

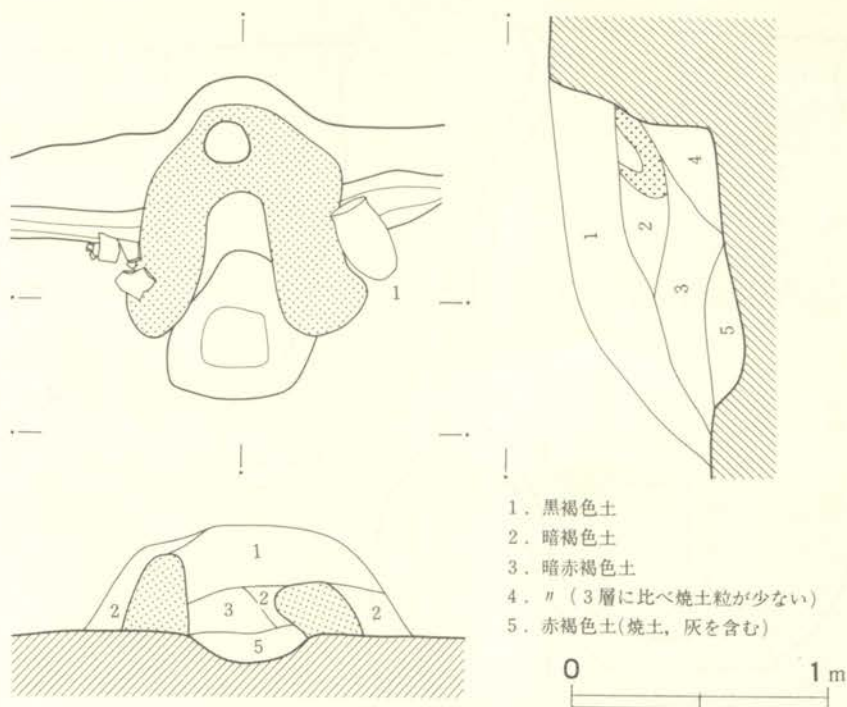


1. 黒褐色土
2. 炭化物を多く含む
3. 黒色土

4. 黒褐色土(焼土粒を含む)
5. 褐色土
6. 暗褐色土



第119図 O01号跡実測図(1/60)



第120図 O01号跡カマド実測図(1/30)

遺物 (第121図, 図版80)

遺物は、カマドとその東側を中心に壁際の床面、覆土から検出されている。

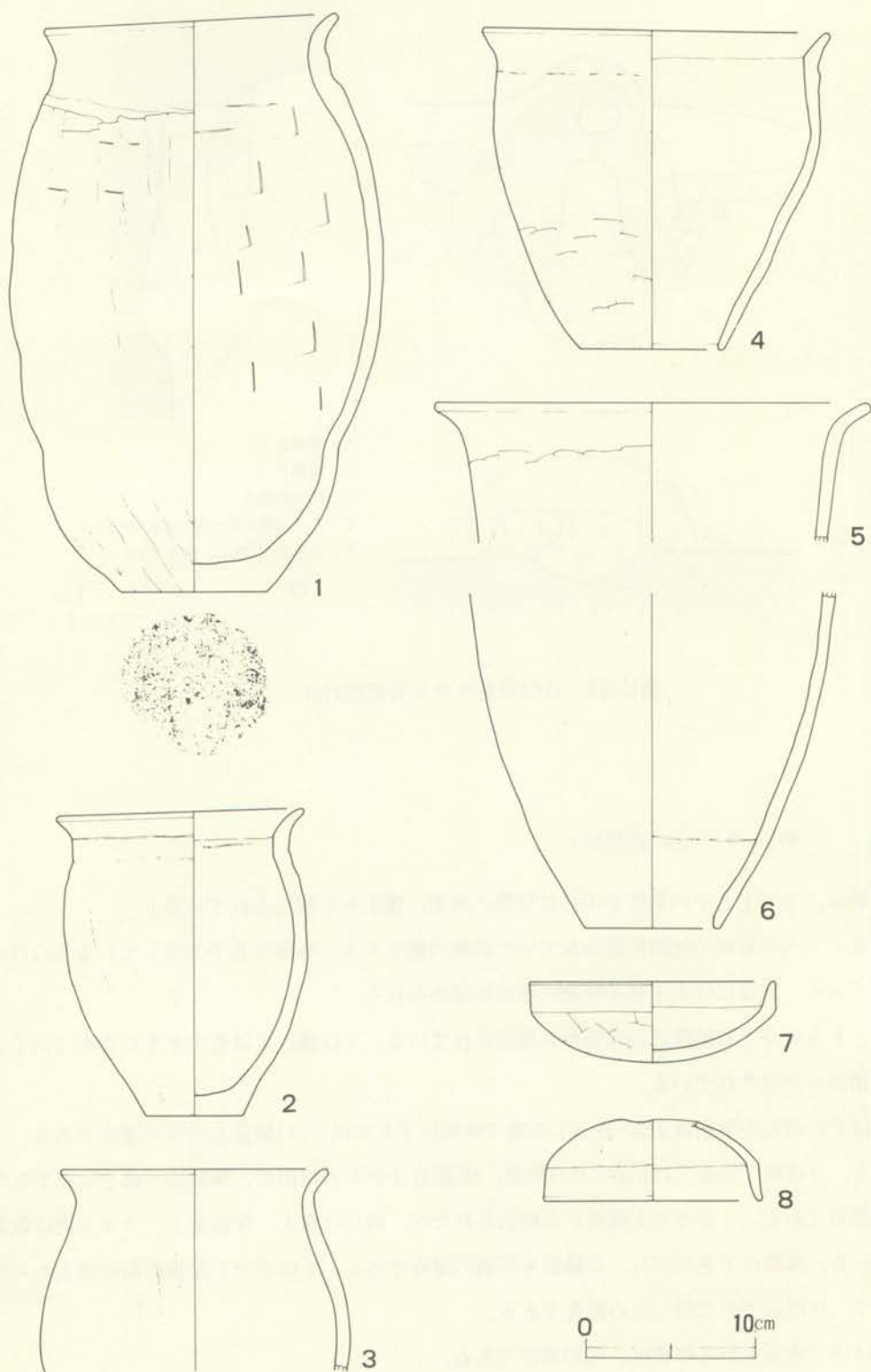
1はカマドの右袖の外側に置かれていた長胴の甕である。体部を若干欠損している他はほぼ完形である。底部には禾本科系植物の圧痕が認められる。

2, 8もカマド右袖附近の床面から検出されている。2は甕, 8は蓋でともに完形である。8は頂部が穿孔されている。

3はP2 附近の床面直上より検出した甕で体部以下を欠損し、口縁部も $\frac{1}{2}$ 周の遺存である。

4, 5, 6は甑である。4はカマドの前面, 床面直上からの検出で、体部の一部を欠損するがほぼ完形である。5もカマド前面から検出されたが、破片は覆土, 床面直上, カマド内に散布している。体部以下を欠損し、口縁部も $\frac{1}{2}$ 周の遺存である。6はカマド左袖前面の床上からの検出で、体部以下を欠損し $\frac{1}{2}$ の遺存である。

7は坏で床面上からの検出。 $\frac{1}{2}$ の遺存である。



第121图 O01号迹出土土器实测图(1/4)

001号跡出土土器一覧

単位はcm, () 推定値, () 現存値

番号	器種	法量	器形の特徴	成形・調整技法	胎土・焼成・色調	備考
1	甕	口径 16.8 器高 32.9 底径 8.4	口縁部はやや肥厚した頸部から外反して立ち上がり、丸味をもつ口唇部で終る。やや長胴の体部は中位で最大径を持ち、下半部で成形時の大きなゆがみを残しながら底部に至る。	輪積み成形。頸部から口縁部にかけてはヨコナデ。体部外面は縦位のヘラケズリ(上→下)を施したのち、中位よりやや下の部位にナデを加えている。内面は横位のヘラケズリ(右→左)を施している。一部に輪積み痕を残す。	砂粒・小石を含む 良 明褐色～暗褐色	底部に植物(禾本科系か)の圧痕を残す。
2	甕	口径 14.1 器高 17.3 底径 5.6	肥厚して直立した頸部から外反しながら口縁部は立ち上がっている。体部はあまり張らずに底部に至る。最大径は口縁部にある。	輪積み成形。輪積み痕を残す頸部から口縁部にかけてはヨコナデ。体部外面は縦位のヘラケズリ(上→下)を施しているが器面が荒れて砂質粘土が付着しているため詳細な観察は不可能であるが全体に粗雑な作りである。内面も白灰色の付着物のため調整法は不明。	砂粒・小石を比較的多く含む 良 明灰褐色	
3	甕	口径(15.4) 器高(11.6)	頸部から緩やかに外反して立ち上がる口縁部は丸味をもつ口唇部で終わる。体部は一定の厚さを保ちながら緩やかに内彎する。	輪積み成形。頸部から口縁部にかけてはヨコナデ。体部外面は縦位のヘラケズリ(上→下)を施したのち全面にナデを加えている。内面は縦位(上→下)のナデ。	砂粒を含む 良 明褐色	
4	甕	口径 20 器高 18.5 孔径 8.4	肥厚してやや直立する頸部から口縁部は緩やかに外反する。体部はほとんど張らずに中位に至ってから大きくやや直線的にすぼみながら孔部に達する。孔部は単孔で、焼成前に穿たれている。	輪積み成形。頸部から口縁部にかけてはヨコナデ。体部外面は横位のヘラケズリ(左→右)を中位に、下半は縦位のヘラケズリ(上→下)を施している。内面はやや粗いナデ。	砂粒で含む 良 明褐色～ 暗灰褐色	
5	甕	口径(25.2) 器高(8)	口縁部は頸部で大きくやや直線的に外反しながら立ち上る。体部は一定の厚さを保ちながらほぼ直線的に下がっていく。	輪積み成形。頸部から口縁部にかけてはヨコナデ。体部外面は縦位のヘラケズリ(上→下)を施し、内面はナデ。	砂粒を含む 良 明褐色	孔部はないが、口縁部の形態から甕と判断した。
6	甕	孔径(7.8) 器高(19.2)	孔部は単孔で焼成前に穿たれている。孔部からほぼ直線的に立ち上がった体部は緩やかに内彎し、上半へ向う。	輪積み成形。体部外面は縦位のヘラケズリ(上→下)を施したのち同方向のナデを加えている。内面は縦位のヘラケズリ(上→下)を施してから一部斜方向のヘラケズリ(右上→左下)を加えている。孔部付近は横位のヘラケズリ(右→左)。	砂粒を含む 良 褐色	

番号	器種	法量	器形の特徴	成形・調整技法	胎土・焼成・色調	備考
7	坏	口径 14.2 器高 4.5	やや平底に近い丸底の底部から緩やかに丸味をもって立ち上がる体部は口縁部との境に緩い稜を形成する。その稜から口縁部は直立しながらやや外反する。	口縁部から体部内面にかけてへラミガキ。体部外面には細かいへラケズリが施されている。	砂粒を含む 良 明褐色	
8	蓋	口径 12.4 器高 4.7	天井部の形状は穿孔のため不明である。体部は丸味をもって口縁部との境である稜に向かう。稜は緩く、口縁部はやや外方に開いてる。	口縁部はヨコナデ。体部内面は丁寧なへラミガキが施されている。外面は斜位のへラケズリ（左上→右下）ののちに部分的にナデを加えている。	砂粒を含む 良 暗褐色	天井部は焼成後に内面より穿孔。内面は部分的に剥落している。

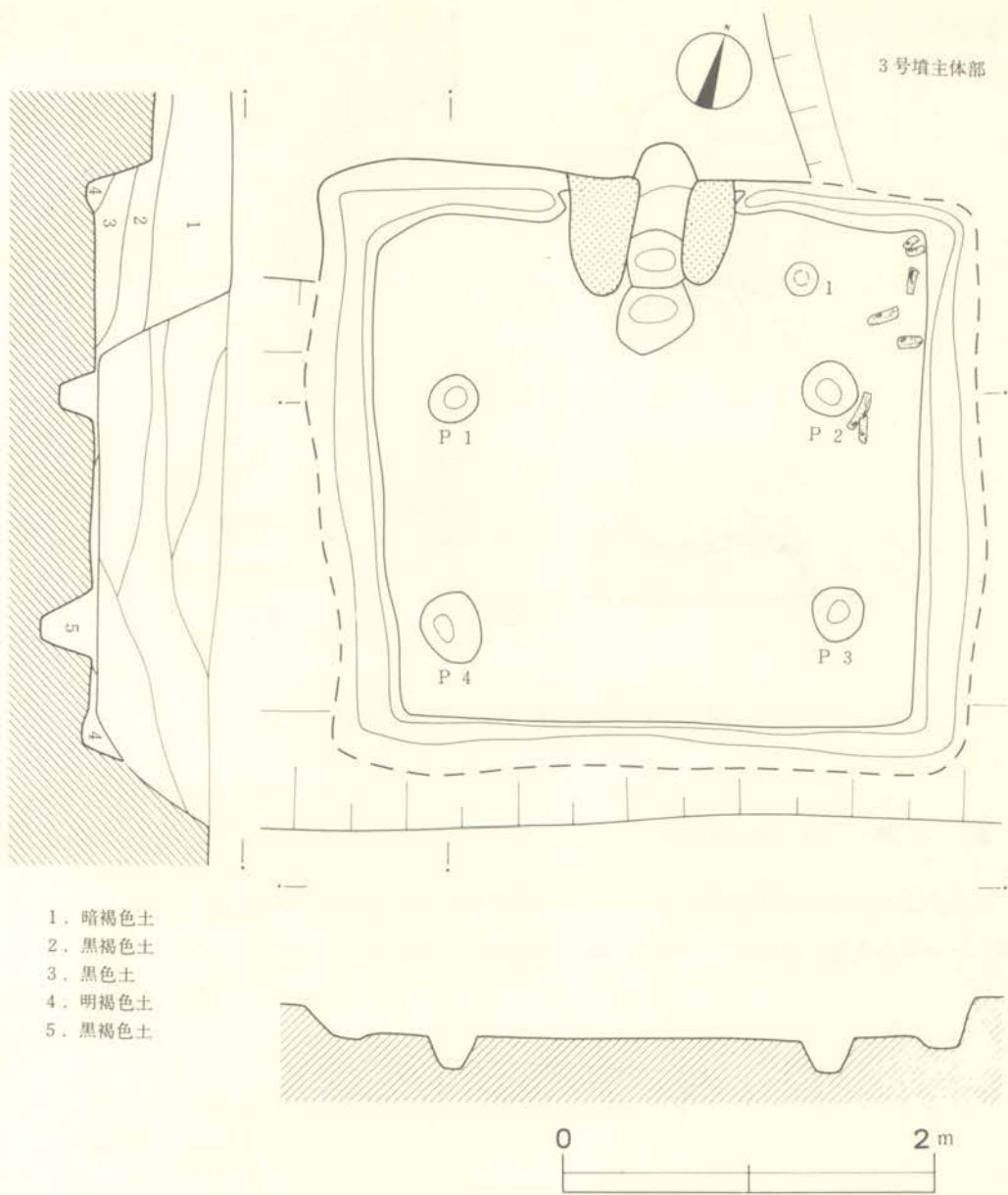
〇〇2号跡〔013〕（第122図，図版79—1）

〇〇1号跡の東26m，3号墳周堀下に位置している。周堀と主体部の開口部によってカマドの周辺を除いて削平されているが，床面はかろうじて遺存している。

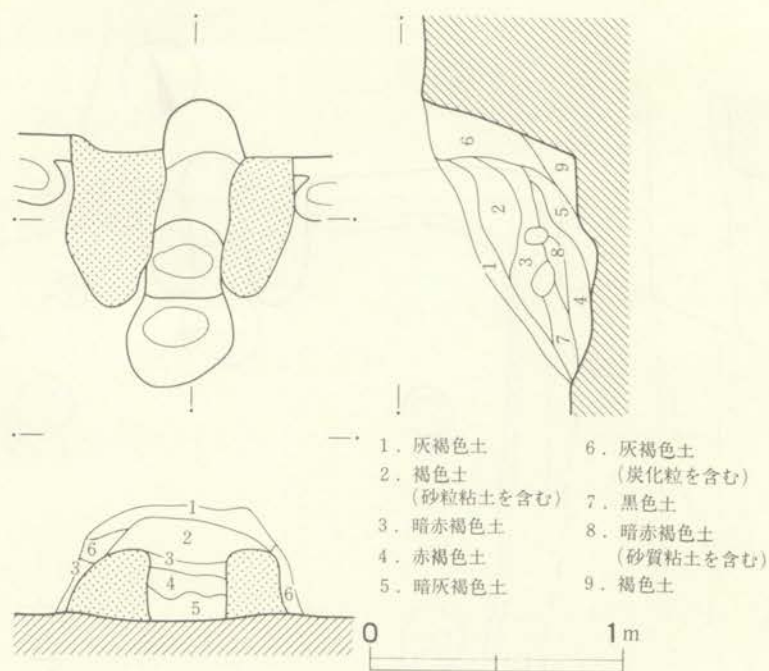
推定規模で東西3.6m，南北3.2mを測る方形プランを呈し，主軸方向はN-16°-Wである。壁はほとんど削平されていたが，北壁の西側から北西コーナー附近にかけての部分にだけ遺存していた。遺存部分によると，壁はやや外傾しながら立ち上がり，壁高は30cmを測る。壁溝はカマドの部分を除いて全周し，幅25cm，深さ5cmと深さの割には幅が広い。溝底はほぼ平坦で，東西壁下は比較的幅が広がっている。柱穴は4本検出され，これが支柱穴を構成すると考えられる。各柱穴とも対角線上からはずれ，P1・P2間は約2m，P2・P3間は約1.2mと柱穴間のプランは長方形を呈する。また，柱穴は全体に南側に偏在し，〇〇1号跡で認められたような強い企画性はない。床面にはカマドの前面から北東コーナー附近にかけての範囲に炭化材，焼土が散乱し，火災住居であることがわかる。そのためこの附近の床面は堅緻であるが，全体的には軟弱である。また，東側から西側へかけてわずかに傾斜している。

カマド（第123図，図版78—2）

北壁中央に設けられている。袖部のみ良好に遺存している。壁を20cmほど半円状に70°の傾斜で掘り込み，煙道を形成している。床面は南北に2か所続けて皿状に掘り窪められている。袖部は床面上に質の悪い砂質粘土を用いて構築され，壁から直角に60cmほど張り出している。天井部は残存しない。焚口は幅30cmを測り，火床は焚口附近に形成されている。



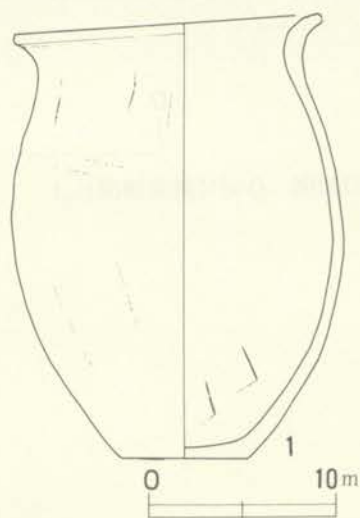
第122图 O02号跡実測图(1/40)



第123図 O02号跡カマド実測図(1/50)

遺物 (第124図, 図版80)

前述のように3号墳の周堀によって大きく削平されているため、遺物はわずかに1の完形の甕がカマドの東側の床面上から倒位で検出されたのみである。



第124図 O02号跡出土土器実測図(1/4)

002 号跡出土土器一覧

単位はcm

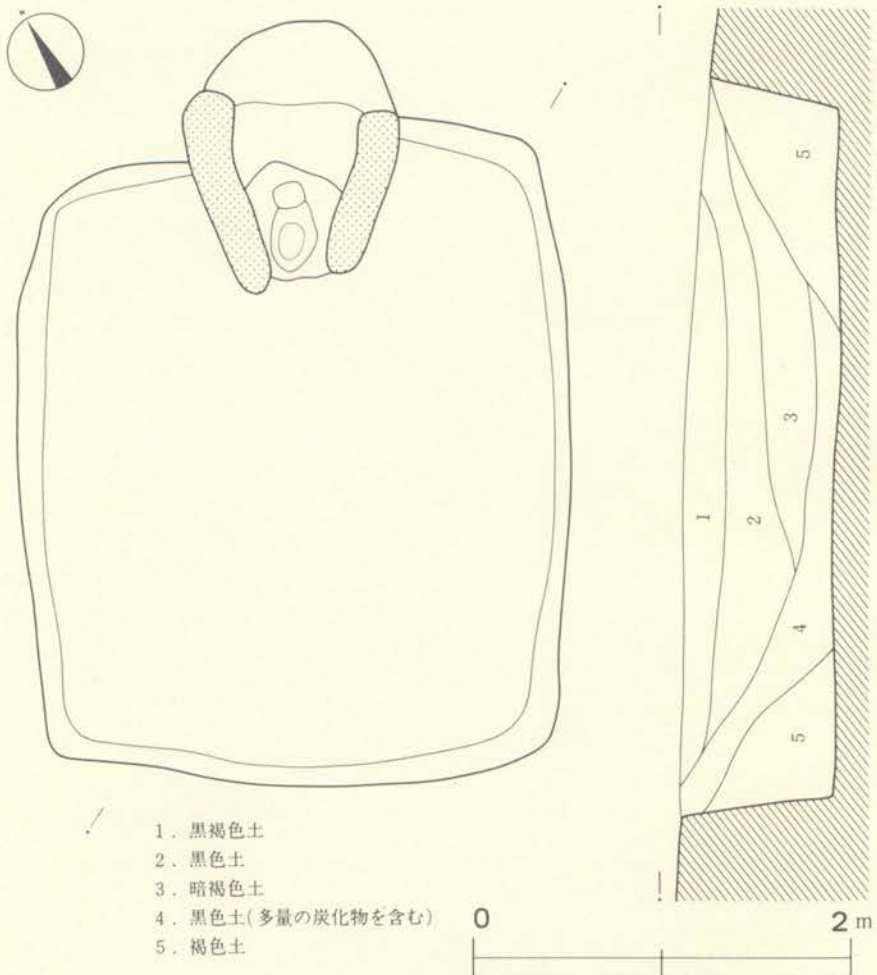
番号	器種	法量	器形の特徴	成形・調整技法	胎土・焼成・色調	備考
1	甕	口径 16.2 器高 22.2 底径 6.6	肥厚した頸部から外反しながら立ち上がった口縁部は口唇部でやや丸味をもって終る。体部は頸部から器厚を減じてやや張り、内彎しながら一定した器厚で底部に至る。最大径を体部中位に持つ。	輪積み成形。形頸部から口縁部にかけてはヨコナデ。体部外面は上位と下半は縦位のヘラケズリ(上→下)、中位は横位のヘラケズリ(左→右)を施してから縦位のナデ(上→下)を加えヘラケズリ痕をよく消している。内面は斜位のヘラケズリ(右上→左下)を施したのちナデ。	砂粒、小石を含む 良 茶褐色 ～明赤褐色	頸部から口縁部にかけて処々に山砂が付着。内面には灰白色の付着物が認められる。外面は部分的に剝離している。

VI 歴史時代の遺構と遺物

K01号跡〔020〕（第125図，図版81-1）

舌状台地の最先端部に位置している。

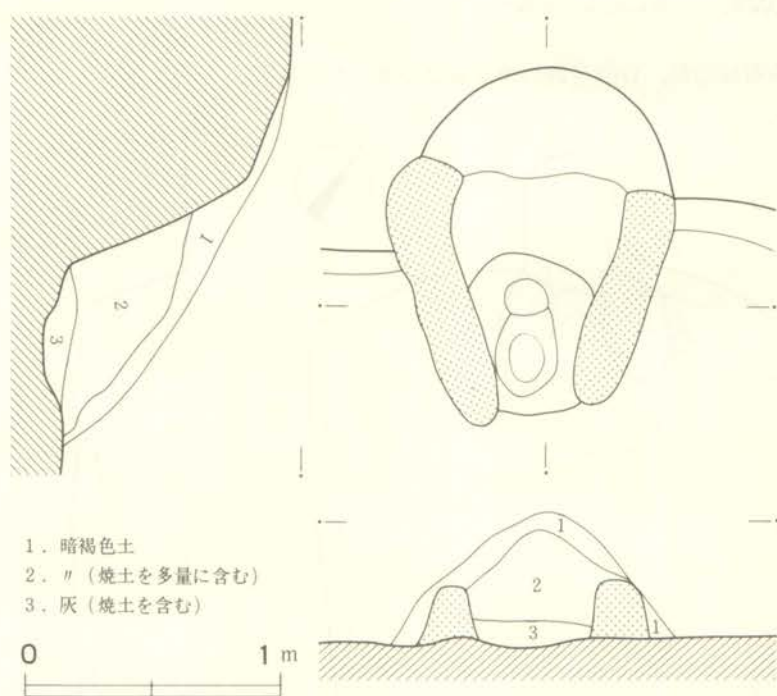
平面プランは南・北壁2.6m，東壁3.2m，西壁2.8mと北壁がカマドの左右で大きな食い違いをみせる不整形を呈する。主軸方向はN-33°-Eである。壁はほぼ垂直に掘り込まれ，壁高は70~80cmを測る。壁溝および柱穴は検出されていない。床面はソフト・ローム中に掘り込まれているため軟弱で，住居跡の中央部がやや高くなっている他はほぼ平坦である。



第125図 K01号跡実測図(1/40)

カマド (第126図)

北壁中央に設けられている。壁高が高いわりには遺存状態は悪い。壁は幅1.1m、壁外に0.6mの半円状に大きく掘り込まれ、床面は皿状に10cm掘り窪められている。袖部はロームに砂質粘土を混入した軟弱な用材で構築され、やや内湾しながら壁から約1m張り出している。このため焚口部は30cmとせまい。天井部は完全に崩落している。火床には焼土を含む灰が充満していた。煙道は70°の傾斜で立ち上がり、壁外へ出る直前で緩い傾斜で延びていく。

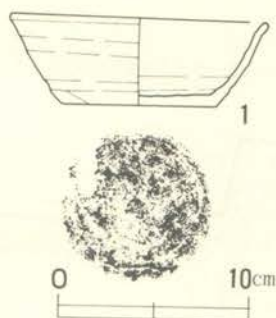


第126図 K01号跡カマド実測図(1/50)

遺物 (第130図, 図版81-2)

カマド附近と南壁沿いに甕片等の遺物の検出をみたが、いずれも覆土中の破片の状態であり、投棄されたものであろう。

1は南西コーナーの覆土中より検出された坏である。口縁部、底部の一部を欠損するがほぼ完形である。



第127図 K01号跡出土土器実測図(1/4)

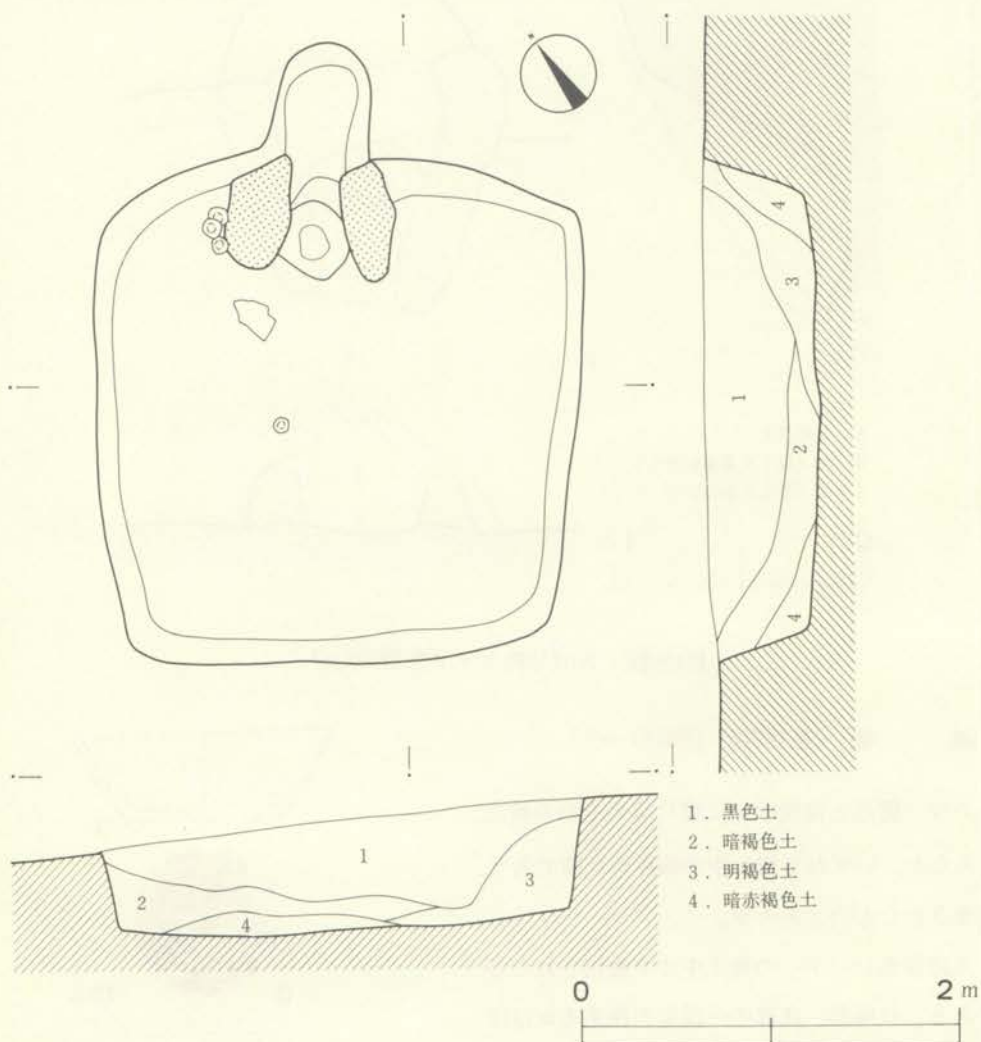
K01号跡出土土器一覽

単位はcm

番号	器種	法量	器形の特徴	成形・調整技法	胎土・焼成・色調	備考
1	坏	口径 13.2 器高 4.5 底径 8	ほぼ一定した器厚をもつ底部から緩やかに内彎しながら立ち上がる体部は内外面に緩い凹凸をもち、上半でやや外反して口縁部に至る。	轆轤水挽き成形。底部は回転篋切りを行ってから、全面に手持ちのへらケズリを施している。体部下半は手持ちのへらケズリ（幅は狭く、単位は一定していない。左→右）	砂粒、小石、雲母片を含む 良（比較的堅緻） 暗褐色	

K02号跡〔025〕（第128図、図版82）

舌状台地の西側縁辺部、001号跡の南5mに位置している。

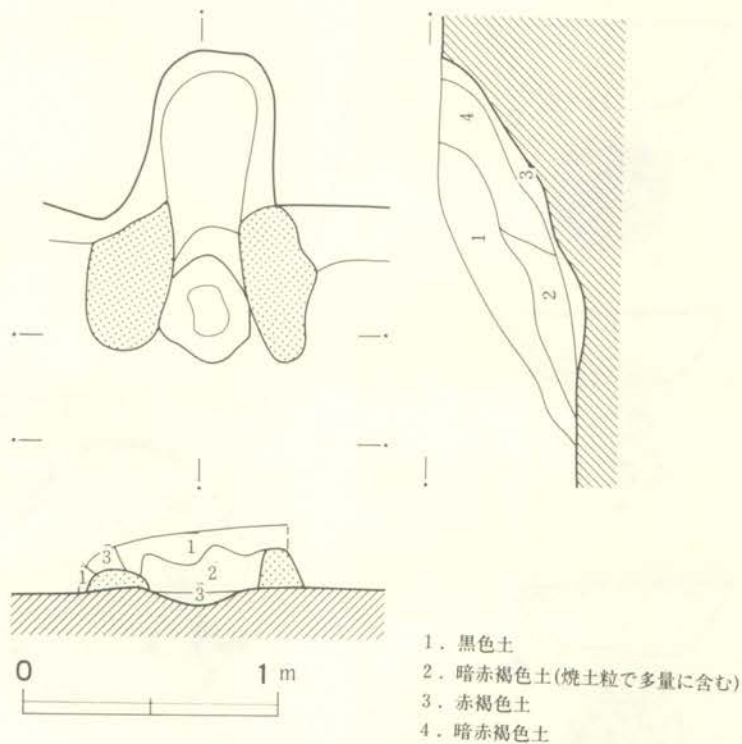


第128図 K02号跡実測図(1/40)

平面プランは北壁2.6m、その他の壁2.2mの不整隅丸方形を呈し、北西コーナーは強い丸味を帯びている。主軸方向はN-37°-Eである。壁は緩慢に立ち上がり、壁高は西壁で40m、その他の壁では60cmを測る。床面はソフト・ローム中に掘り込まれているため全体的に軟弱である。壁溝、柱穴は検出されていない。

カマド (第129図)

北壁中央よりやや西に偏って位置する。遺存状態は悪く、袖部が一部残存するだけである。掘り方は壁を60cmほど長楕円形に大きく掘り込み、床面は皿状にわずかに6cm掘り窪めているだけである。袖部は壁から直角に60cm張り出し、床面上に砂質粘土を積み上げて構築されている。天井部は崩落しすでに流出している。火床部には焼土、灰を多く含む赤褐色土が堆積し、これが煙道部にも充満している。煙道は45°の傾斜で壁外へ延びている。



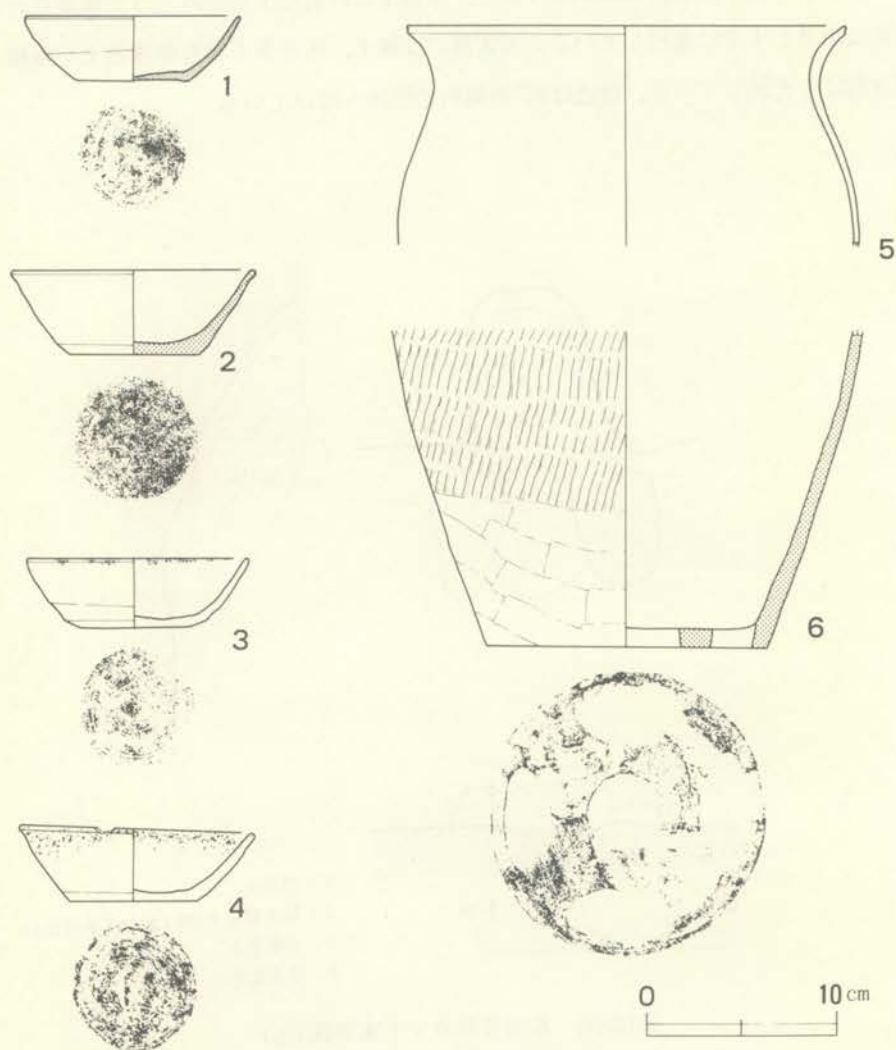
第129図 K02号跡カマド実測図(1/30)

遺物 (第130図, 図版83)

遺物はカマドの周囲を中心に、坏、甑、甕などが検出されている。

1～4は完形の坏で、2が住居跡中央附近の床面直上から検出している他は、カマド左袖部の外側床面上からの出土である。

5、6はカマド前面の覆土中から検出されている。5は甕で、体部以下を欠損し、口縁部 $\frac{1}{4}$ 周の遺存である。6は甑で、体部以上と底部の一部を欠損している。



第130図 K02号跡出土土器実測図(1/4)

K02号跡出土土器一覽

単位はcm, ()推定値, []現存値

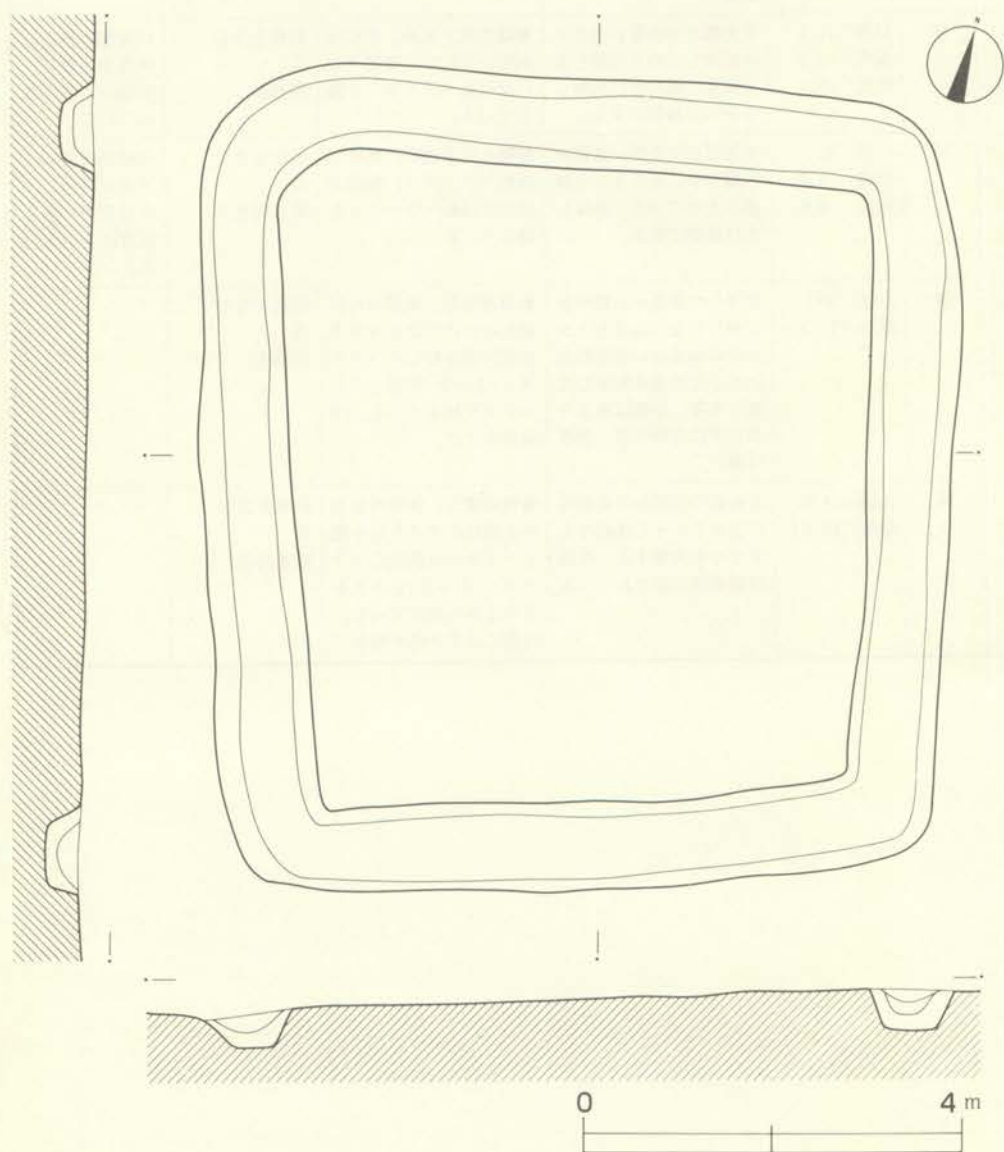
番品	器種	法量	器形の特徴	成形・調整技法	胎土・焼成・色調	備考
1	坏	口径 11.1 器高 3.4 底径 5.7	中央部が薄い底部から、緩やかに立ち上がる体部は上半で内彎して口縁部に至る。轆轤目は弱い。	轆轤水挽き成形。底部は回転糸切りのままである。体部に調整は認められない。	砂粒・小石を含む 良 灰色	須恵器
2	坏	口径 12.5 器高 4.3 底径 6.6	やや厚めの底部から緩やかに内彎して立ち上がる体部は上半で小さく外反し、口縁部はやや肥厚して終わる。	轆轤水挽き成形。底部は回転ヘラケズリ、体部下位には回転ヘラケズリを施している。	砂粒を含む 良(堅緻である) 黒褐色	中間焼成の土器。
3	坏	口径 11.4 器高 3.6 底径 5.7	中央部がやや厚い底部から屈曲してから凹面をもつ体部は緩やかに内彎しながら口縁部に至る。	轆轤水挽き成形。底部は回転ヘラケズリ、体部下位には回転ヘラケズリを施している。	砂粒を含む 良 明褐色	口縁部内外面に油煙が付着し、内面は一部剥落している。
4	坏	口径 12 器高 3.7 底径 6.6	中央部がやや厚い底部から緩やかに立ち上がる体部は上半で小さく外反して口縁部に至る。	轆轤水挽き成形。底部は回転ヘラケズリ、体部下位には回転ヘラケズリを施している。	砂粒を含む 良 明赤褐色	口縁部内外面に油煙が付着し、口唇部の一部を故意に欠いている。
5	甗	口径 (23) 器高 [11.3]	肥厚した頸部から緩やかに外反しながら立ち上がった口縁部は口唇部外面に小さな凹面を形成して直立する。体部はあまり張らずに内彎する。器厚は薄い。	輪積み成形。頸部から口縁部にかけてはヨコナデ。体部外面は縦位のヘラケズリ(上→下)を施してからナデを加えている。内面はナデ。	砂粒を含む 良 明褐色	
6	甗	孔径 14.8 器高 [16.2]	5孔式の孔部から直線的に立ち上がった体部は上半でやや内彎する。孔部は焼成前に穿たれている。	輪積み成形。体部外面上半を縦位のタタキ目を施し、下半には横位のヘラケズリ(左→右)をタタキ目の上から加えている。内面にはアテ目が残る。	砂粒を含む 良 暗茶褐色	

Ⅶ 時代不詳の遺構と遺物

1. 周溝遺構

M01号跡〔002〕（第131図，図版84-1）

舌状台地の平坦部，4号墳の西7mに隣接して位置する方形周溝遺構である。



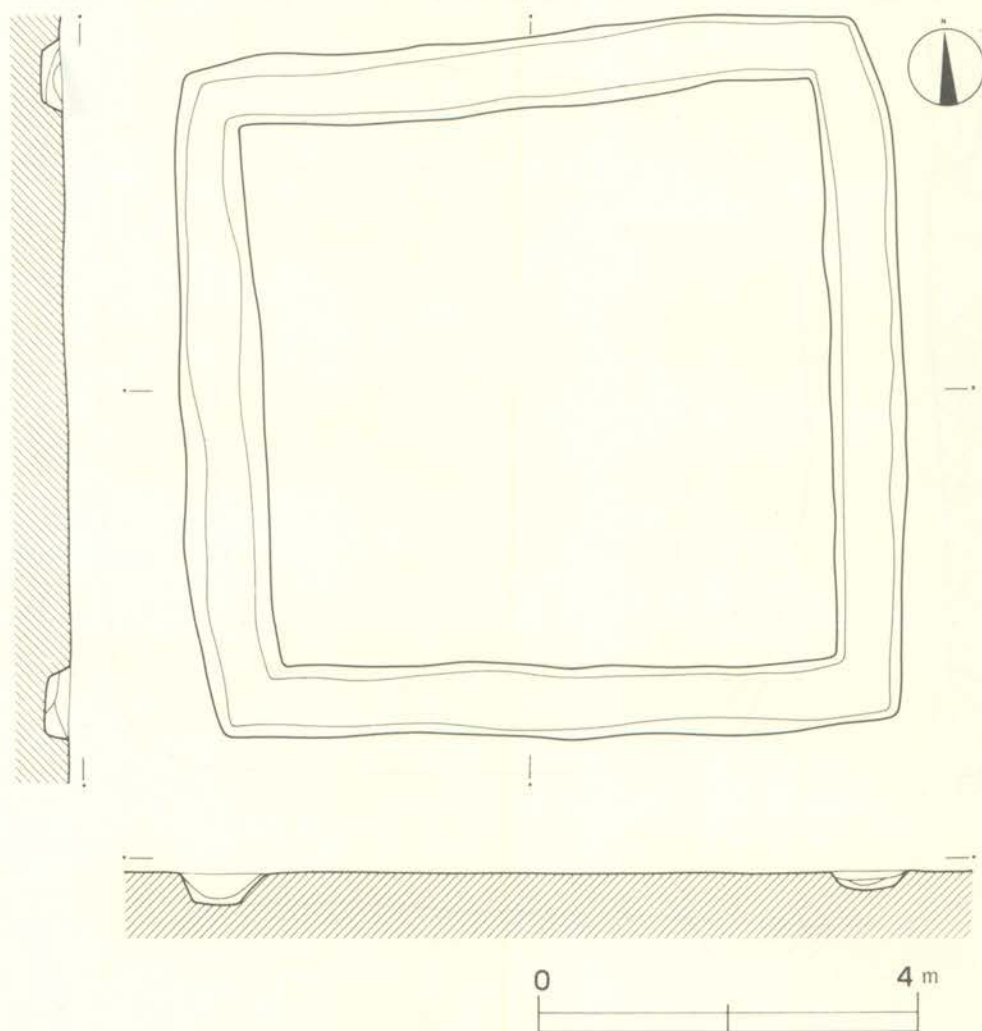
第131図 M01号跡実測図(1/60)

平面プランはほぼ正方形を呈するが、東辺が西辺よりやや長いため、北辺が若干歪んでいる。外縁径・内縁径はそれぞれ東西7.6m・6m、南北7.2m・5.8mを測る。周溝の上端幅は65~90cm、溝底幅は40~60cmで、ソフト・ローム中に掘り込まれており側壁、底面とも軟弱である。深さは20~32cmを測り、東側周溝は特に浅くなっている。断面は底面が平坦な逆梯形を呈し、覆土は自然堆積の様相を示す。埋葬施設などは検出されていない。

遺物は周溝の覆土から土器片が数片出土したのみである。

M02号跡 [018] (第132図, 図版84-2)

舌状台地の先端部, 3号墳の西8mに隣接して位置する方形周溝遺構である。埋葬施設など



第132図 M02号跡実測図(1/50)

は検出されていない。

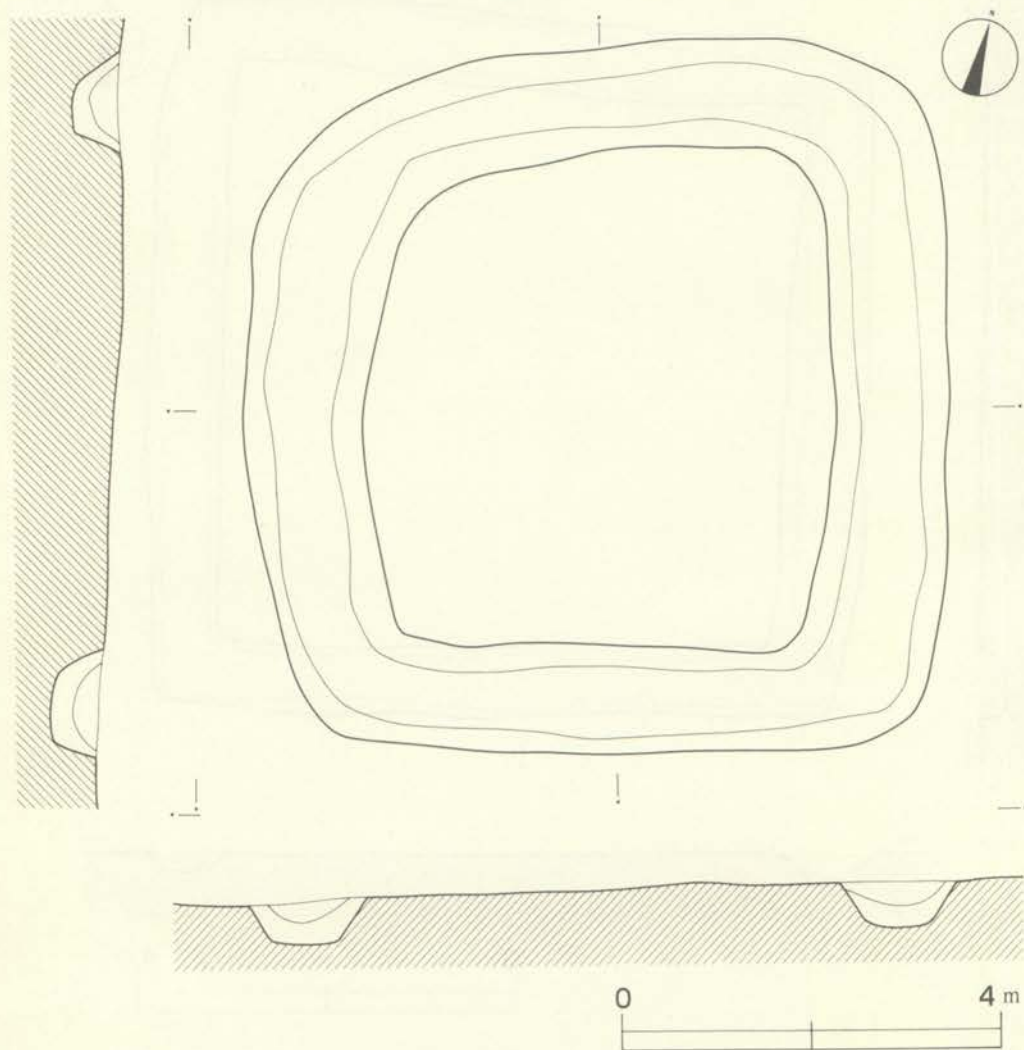
平面プランは不整形方形を呈し、北西コーナーはやや丸味をもっている。外縁径・内縁径はそれぞれ東西8m・6m、南北8.4m・6.5mを測る。周溝の上端幅は80~100cm、溝底幅は50~60cmで、ソフト・ローム中に掘り込まれ、深さは約40cmとほぼ一定している。断面は底面が平坦な逆梯形を呈し、覆土は自然堆積の様相を示す。

遺物は周溝の覆土中から土師器の坏片が数片出土したが、実測は不可能であった。

M03号跡〔001〕（第133図、図版85-1）

M02号跡の南東2m、3号墳の西2mに近接して位置する方形周溝遺構である。

平面プランは隅丸の不整形方形を呈する。西側周溝は張り出し、北西コーナーは強い丸味をも



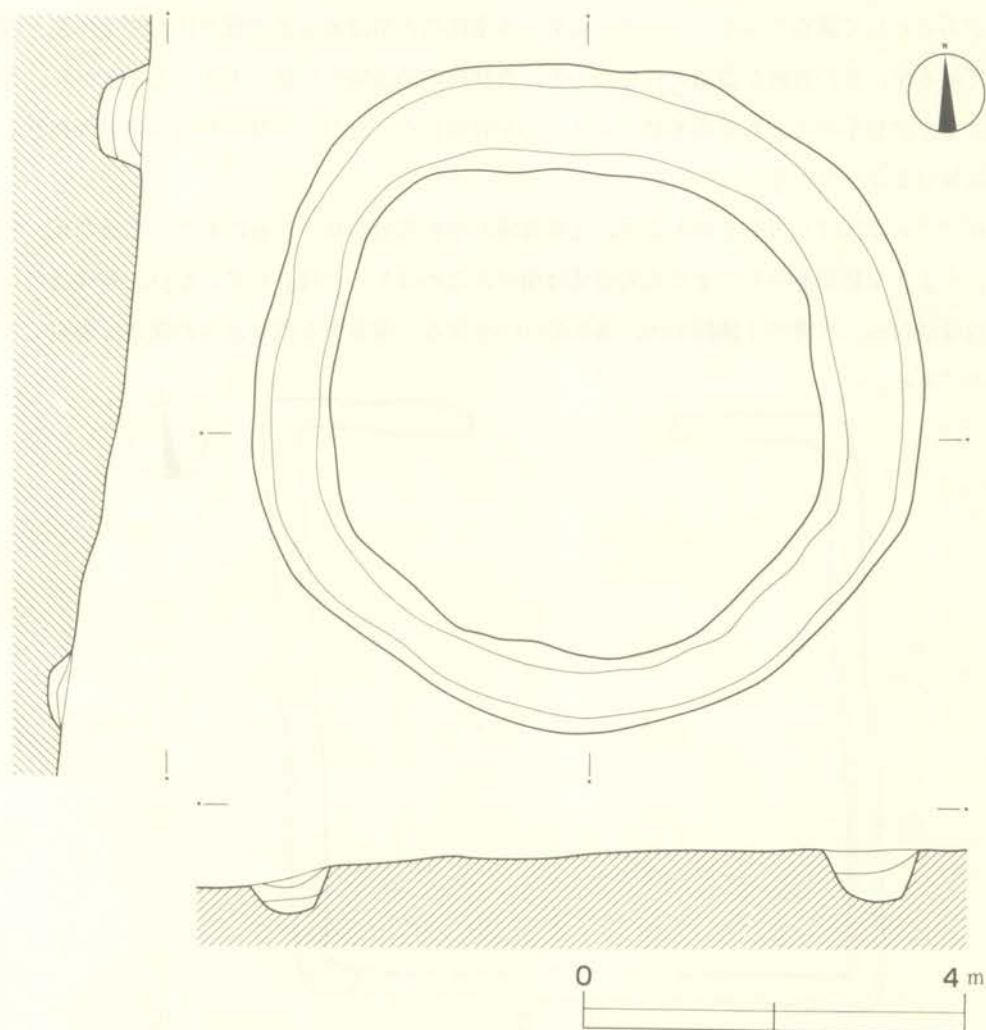
第133図 M03号跡実測図(1/50)

っている。外縁径・内縁径はそれぞれ東西7.2m・5m，南北7.2m・5.1mを測る。周溝の上端幅は100～120cm，溝底幅は40～80cmで，ソフト・ローム中に掘り込まれている。深さは約50cmとほぼ一定しており，断面は逆梯形を呈する。溝底はほぼ平坦である。覆土は自然堆積の様相を示す。埋葬施設などは検出されていない。

遺物は周溝の覆土中から土器片が数片出土したのみである。

M04号跡〔017〕（第134図，図版85-2）

舌状台地の縁辺部，M03号跡の南西4mに位置する円形周溝遺構である。埋葬施設などは検出されていない。



第134図 M04号跡実測図(1/50)

平面プランは不整円形を呈し、西側周溝はやや直線的になる。外縁径・内縁径はそれぞれ東西7m・5.2m、南北7m・5mを測る。周溝の上端幅は60～120cm、溝底幅は30～70cm、ソフト・ローム中に掘り込まれており側壁、底面とも軟弱である。緩斜面上に位置するため南側へ行くに従って次第に浅くなり、北側で50cm、南側で20cmを測る。断面は北側、東側で逆梯形、南側ではレンズ状を呈する。覆土は自然堆積の様相を示す。

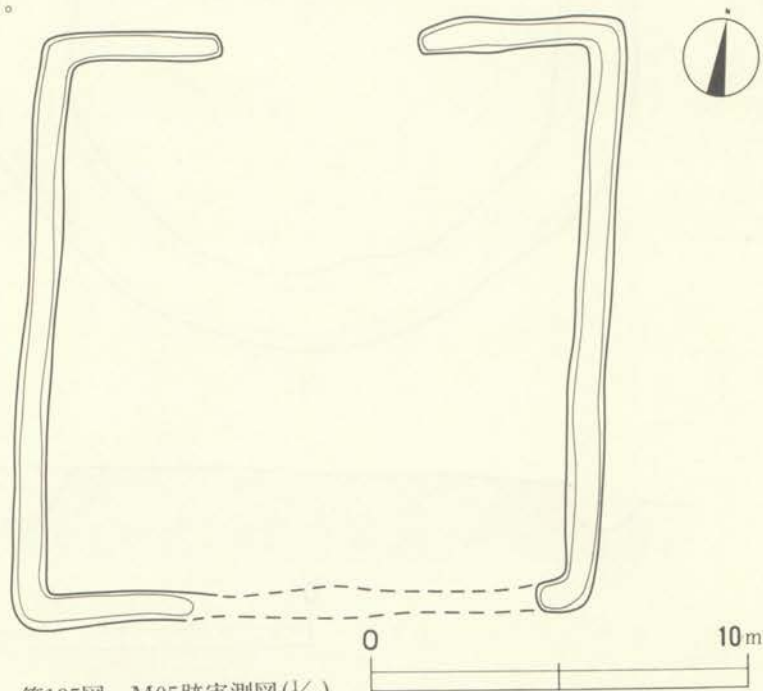
遺物は周溝の覆土中から土器片が数片出土したのみである。

M05号跡〔085〕（第135図，図版86-1）

坂崎谷津を西に望む台地の平坦部に位置している。

遺構確認面を精査中、方形に巡る溝状の落ち込みを検出、その規模から削平された方墳の可能性があると調査を開始した。その結果、本遺跡の古墳は地山まで掘り込んで主体部を構築しているが、その痕跡が認められないこと、当該時期の遺物が皆無であることなどから、方墳ではなく性格不明の方形周溝遺構であることが判明した。ただし、M01号跡～M03号跡とも性格は異なるようである。

平面プランはほぼ正方形を呈するが、北側周溝の中央部分が長さ5mにわたって途切れ、ブリッジのような様相を示し、また南側周溝は削平のためほとんど残存していない。外縁径15.5m、内縁径14m、周溝の上端幅90cm、溝底幅60cmを測る。現存する掘り込みの深さは最高で20cmほどである。



第135図 M05跡実測図(1/200)

2. 溝状遺構

M06号跡〔050〕（第136図）

調査区の北側、坂崎谷津を南西に望む台地の緩斜面上を北西から南東にやや弧状に走る溝状遺構である。調査区域外へ延びているためその全容を明らかにすることはできなかった。

調査区内での全長は34mを測る。北西側で北へ延びるもう一条の溝と繋がっている。上端幅は1.2～1.3m、溝底幅は0.7～1mを測る。ローム層への掘り込みは40～60cmで北西へ行くに従って浅くなる。断面は逆梯形を呈し、底面はほぼ平坦である。覆土は自然堆積の様相を示す。

遺物は少なく、覆土中から土器片などが数片出土したのみである。

M07・08号跡〔056・057〕（第136図、図版86-2）

調査区の東端の緩斜面をほぼ南北に走る2条の溝状遺構である。南端は確認できたが、北側は調査区域外へ延びるため、その全容は不明である。2条の溝は北側で接合し、1条となると考えられる。

M07号跡は全長24mを測る。上端幅は北側で1.2mと広がるが、その他の部分は0.8mと一定している。溝底幅は60～70cmを測り、深さは約30cmで南側へ行くに従って次第に浅くなり、緩やかに立ち上がって消滅する。ほぼ平坦な底面をソフト・ローム中に置き、断面は逆梯形を呈する。

M08号跡は全長21mを測る。上端幅は約80cm、溝底幅は40～60cmでソフト・ローム中に掘り込まれ、深さは約30cmで南側へ行くに従って次第に浅くなり消滅する。断面は逆梯形を呈し、底面はほぼ平坦である。

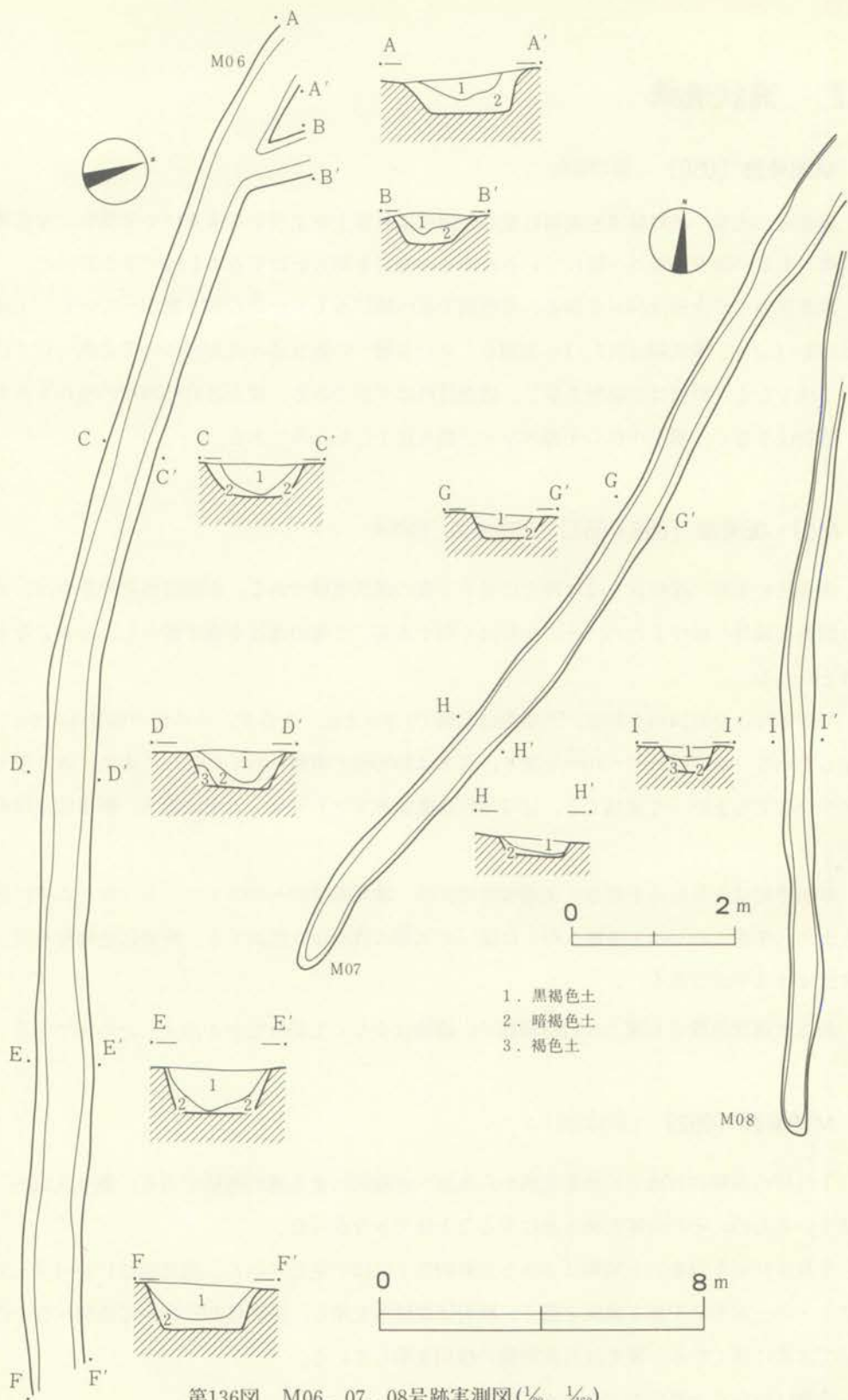
両方の溝状遺構とも覆土は自然堆積で、遺物は少なく土器片などが出土したのみである。

M09号跡〔052〕（第137図）

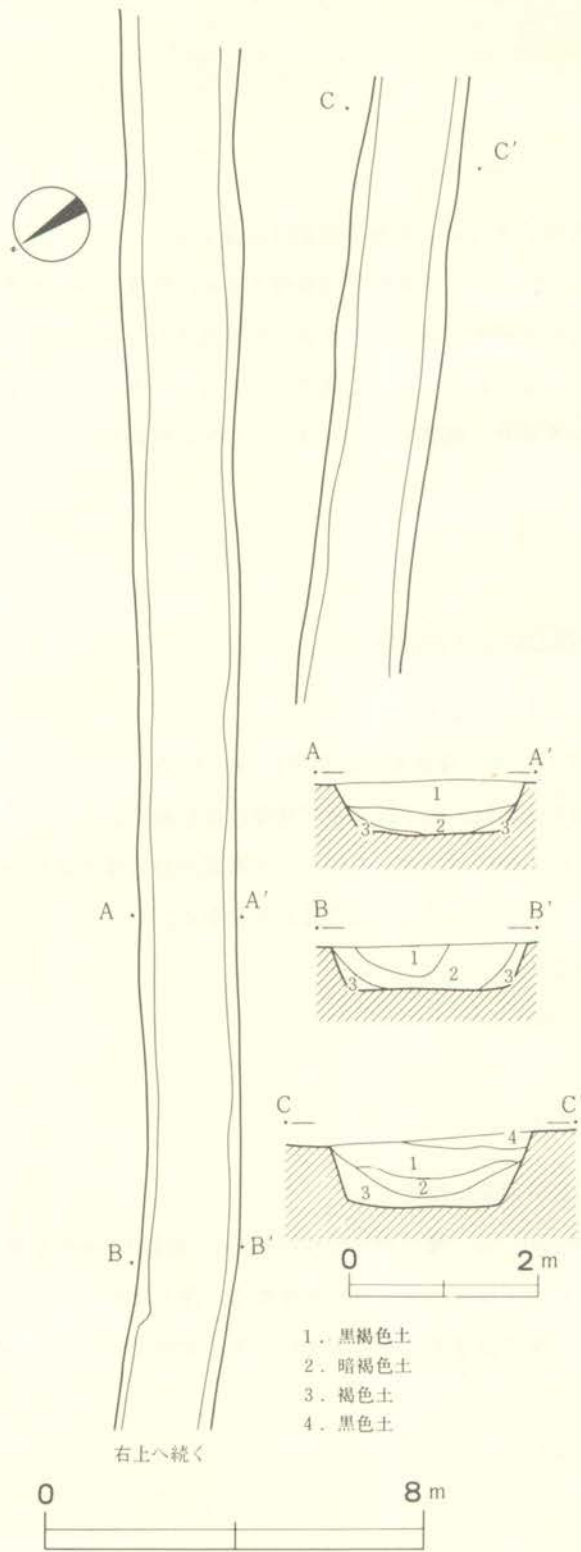
1号墳の南側の台地平坦部を北西から南東へ直線的に走る溝状遺構である。調査区域外へ延びているため、その全容を明らかにすることはできなかった。

全長は42mを測る。上端幅は2mと比較的広くほぼ一定している。溝底幅は1.4～1.8mでソフト・ローム中に平坦な底面を置く。断面は逆梯形を呈し、深さは40～70cmで西側へ行くに従って次第に深くなる。覆土は自然堆積の様相を示している。

遺物は少なく土器片などが出土している。



第136图 M06, 07, 08号迹实测图(1/80, 1/160)



第137図 M09号跡実測図(1/40, 1/160)

3. 土 壙

P01号跡〔054〕（第138図，図版87-1）

調査区の北端，J02号跡の北5mの台地平坦部に位置する。

開口部は長径1.7m，短径0.7m，壙底面では長径1.6m，短径0.5mを測る長方形プランを呈する。長軸はほぼ北方向を指す。ほとんど垂直に掘り込まれ，深さは70～80cmで底面には長軸に沿って2個のピットが穿たれている。北側のピットは30×20cmの長方形プランを呈し，土壙底面からの深さは50cmを測り，南側のピットは40×30cmの楕円形プランを呈し，深さは55cmを測る。

遺物の検出は認められない。

P02号跡〔070〕（第138図，図版87-2）

5号墳の東30m，緩斜面上に位置する。

開口部は長径1.8m，短径1m，壙底面では長径1.4m，短径0.5mを測る長方形プランを呈する。緩い傾斜をもって掘り込まれ，深さは1mで底面には長軸に沿って2個のピットが穿たれ，中央のピットは40×30cmの楕円形プランを呈し，土壙底面から深さは30cmを測り，南側のピットは25×20cmの不整形プランを呈し，深さは30cmを測る。

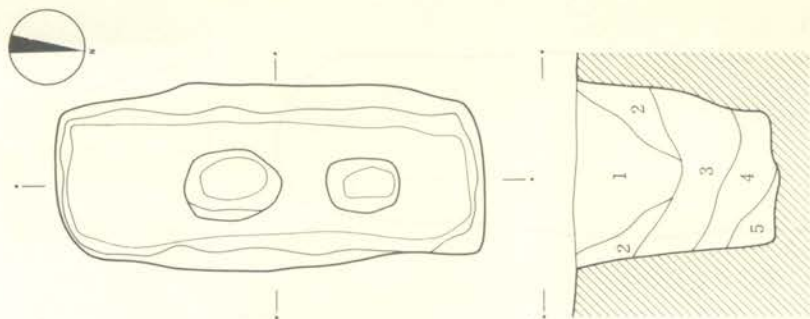
遺物の検出は認められない。

P03号跡〔064〕（第139図，図版87-3）

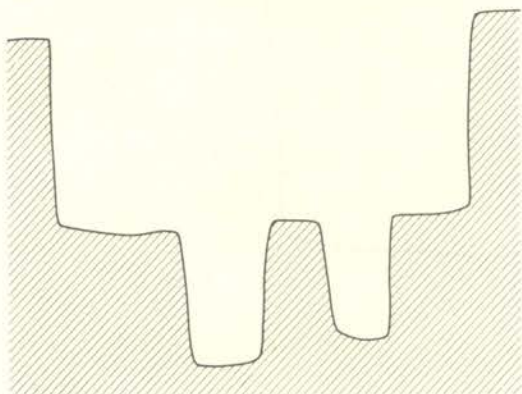
P02号跡の北西23mの緩斜面上に位置する。

開口部は長径2.5m，短径0.7m，壙底面では長径2.2m，短径0.2mの不整形楕円形プランを呈する。底面は，ほぼ平坦で不整形長方形プランを呈する。深さは約1mである。西壁は緩やかに直線的に立ち上がるが，東壁は垂直に掘り込まれ，南・北壁では下半が外彎し上方では垂直に立ち上がっている。

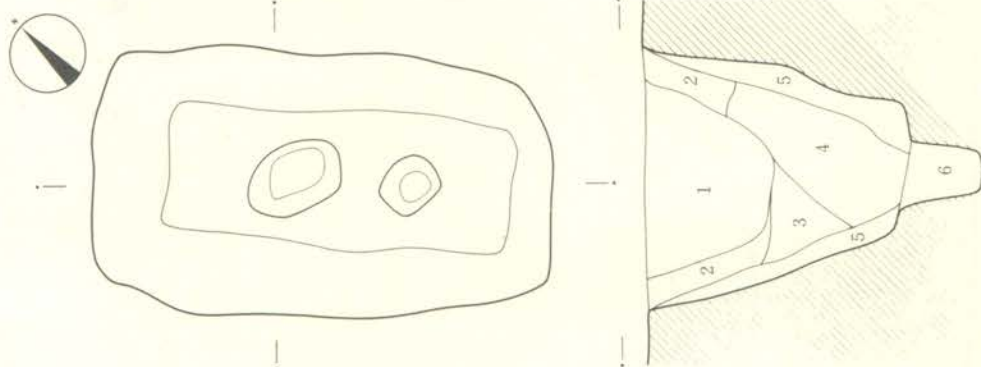
遺物の出土は認められない。



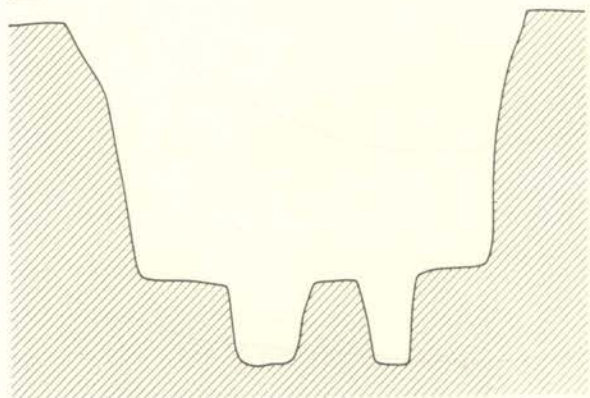
1. 黒色土
2. 褐色土(ロームブロックを多量に含む)
3. "
4. 暗褐色土
5. 黄褐色土



P. 01



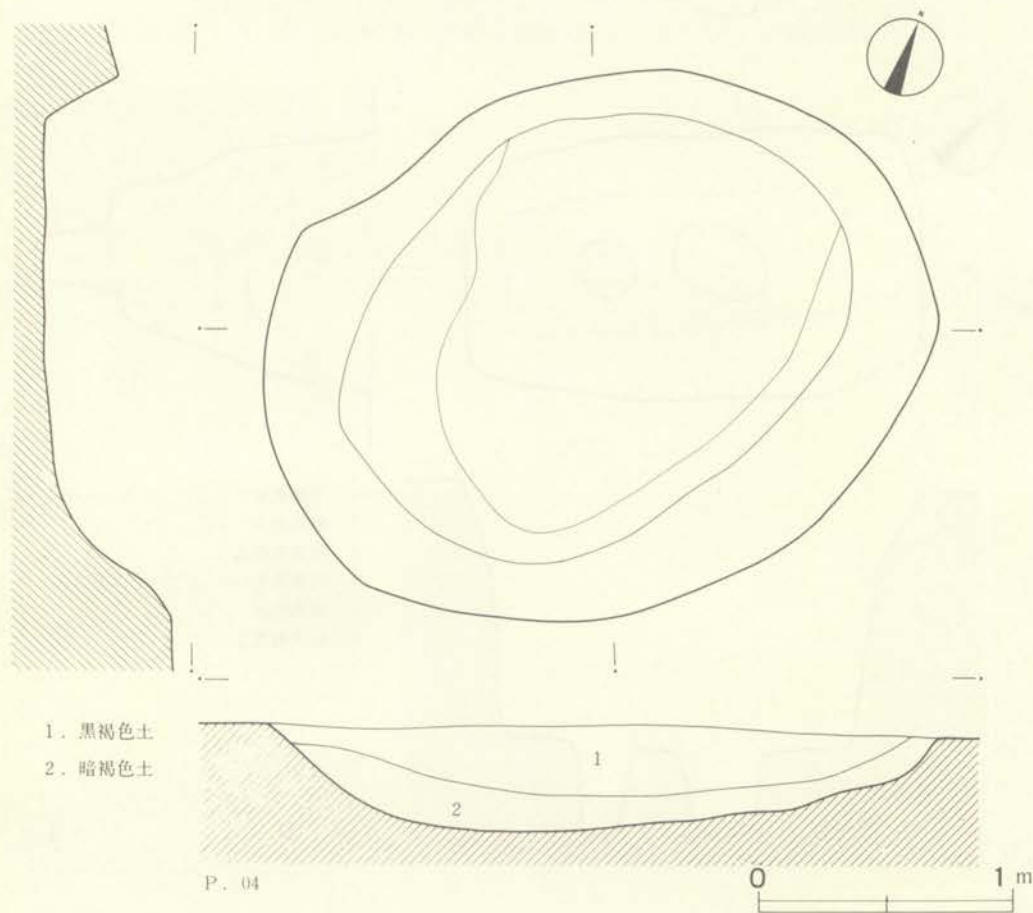
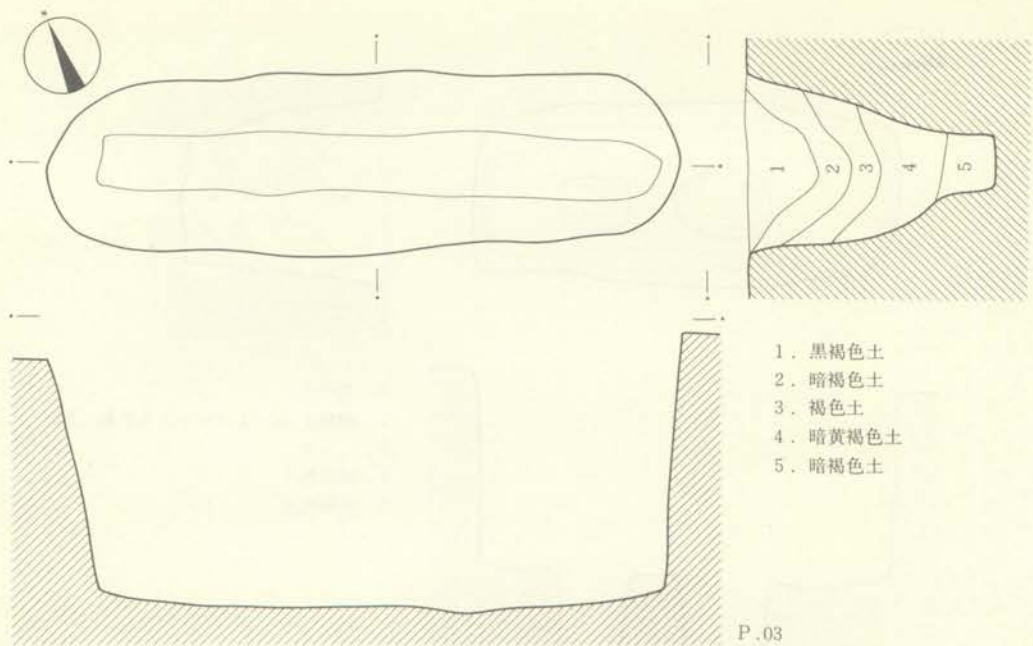
1. 黒褐色土
2. 暗褐色土
3. 暗黄褐色土
4. 暗褐色土(ロームブロックを含む)
5. 黄褐色土
6. 暗黄褐色土



P. 02



第138図 P01, 02号跡実測図(1/50)



第139图 P03, 04号迹实测图(1/50)

P04号跡〔040〕（第139図，図版88-1）

坂崎谷津を東に望む緩斜面上に位置する。

開口部は長径2.7m，短径2.1mを測る不整楕円形プランを呈する。底面はレンズ状に掘り込まれ，中央部での深さは40cmを測る。

覆土から土器片が出土したが本遺構に伴うものではない。

P05号跡〔006〕（第140図，図版88-2）

M05号跡の南西20m，台地平坦部に位置する。

開口部は長径2m，短径1.5m，墳底面では長径1.2m，短径0.6mを測る不整形プランを呈する。底面からほぼ垂直に立ち上がった壁は確認面下20～30cmの位置で稜を有してから緩やかに上がってくる。深さは中央部で1.4mを測り，底面は緩いレンズ状を呈する。

遺物の検出は認められない。

P06号跡〔010〕（第140図，図版88-3）

P05号跡の南西15mの台地平坦部に位置する。

開口部は長径1.8m，短径1.1m，墳底面では長径0.7m，短径0.6mを測る不整楕円形プランを呈する。南壁は同じ傾斜を保ちながら直線的に掘り込まれてくるが，他の壁は確認面下30cmまで外傾しそれ以下はほぼ垂直に掘り込まれている。特に西壁では鋭い稜を有している。深さは中央部で80cmを測り，底面は緩いレンズ状を呈する。

遺物の出土は認められない。

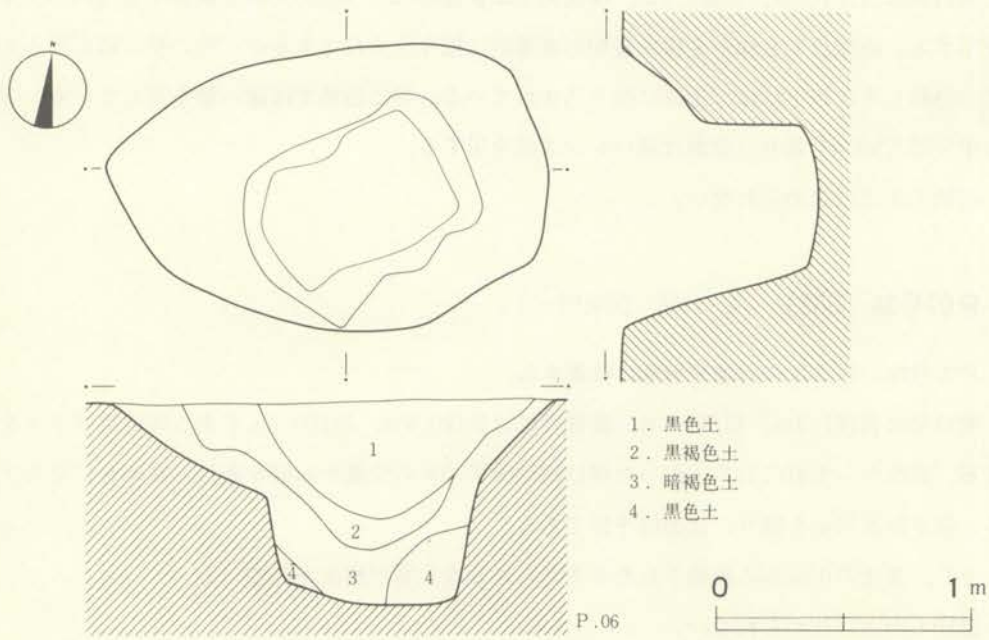
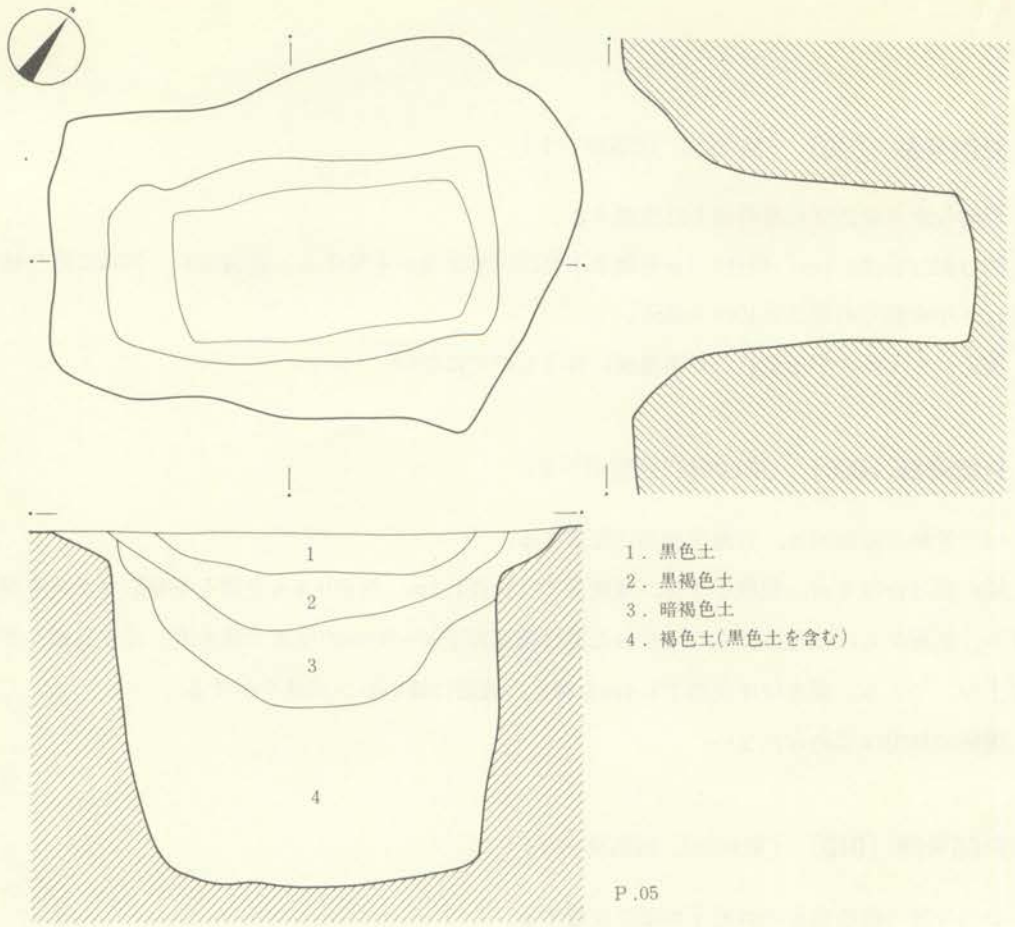
P07号跡〔008〕（第141図，図版89-1）

P06号跡の西6mの台地平坦部に位置する。

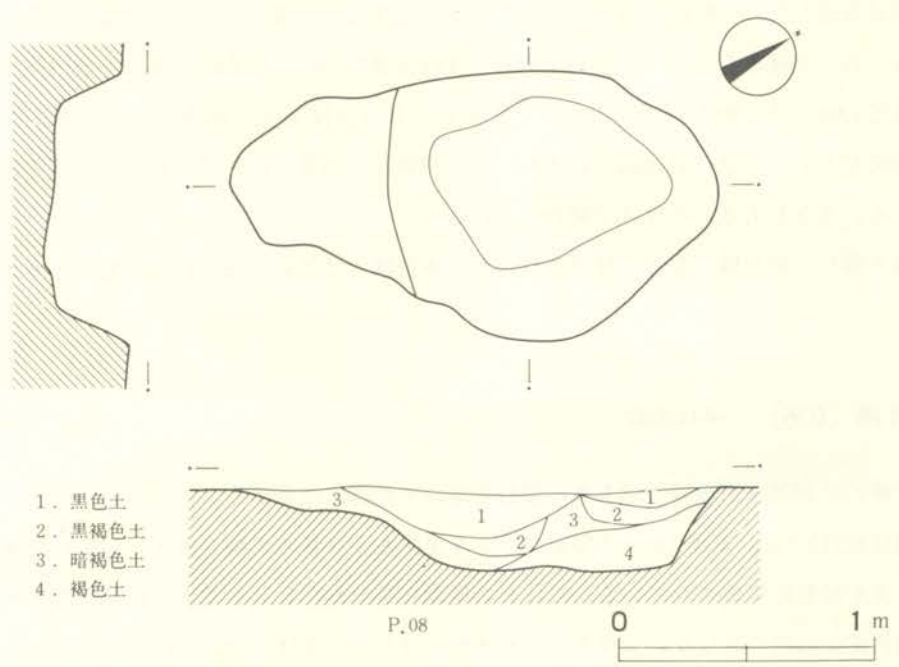
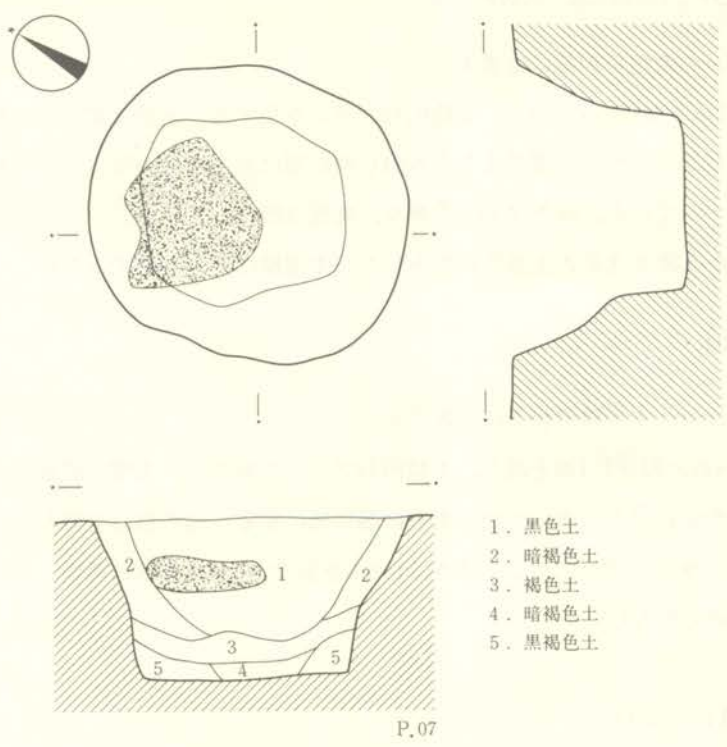
開口部は長径1.3m，短径1.1m，墳底面では長径0.8m，短径0.7mを測る楕円形プランを呈する。底面から垂直に立ち上がった壁は確認面下30mの位置から稜を有し，緩やかに立ち上がる。深さは約70mを測り，底面は平坦である。

また，覆土の中位から投棄されたと考えられる焼土層が検出されている。

遺物の出土は認められない。



第140图 P05, 06号迹实测图(1/50)



第141图 P07, 08号迹实测图(1/50)

P 08号跡〔009〕（第142図、図版89-2）

P 06号跡の南15mの台地平坦部に位置する。

開口部は長径1.9m、短径1mを測り、長楕円形プランを呈する。南壁は底面から緩やかに立ち上がってから確認面下10cmの位置で大きく外傾し開口部に至る。他の壁は同じ傾斜で直線的に外傾して立ち上がっている。深さは30cmを測り、底面は凹凸している。

遺物は覆土上面から撚糸文系の土器片が出土したが本遺構に伴うものではない。

P 09号跡〔016〕（第142図）

P 08号跡の南西17m、4号墳墳丘下に位置する。

開口部は長径1.4m、短径1.1mを測り、不整形円形プランを呈する。東壁は底面から確認面下70cmの位置まで緩やかに立ち上がってから垂直に開口部に至る。他の壁は外傾し緩い稜を有して掘り込まれてから垂直に底面に至る。深さは1.2mを測り、底面は全体に西側へ傾むいている。

遺物の出土は認められない。

P 10号跡〔004〕（第142図）

P 09号跡の北西12mの台地平坦部に位置する。

開口部は長径2.7m、短径1.4mの不整形プランを呈する。土壌というよりは2つの浅い陥ち込み（A・B）が接合したような様相である。Aは長径0.8m、短径0.75mの不整形円形プランで、深さは10cmと浅く断面形はレンズ状を呈する。Bは長径1m、短径0.8cmの不整形円形プランで、断面形がレンズ状に15cm掘り込まれ、Bの南側から西側へかけて浅いテラス状の落ち込みが広がる。AとBも浅いテラスで接合している。

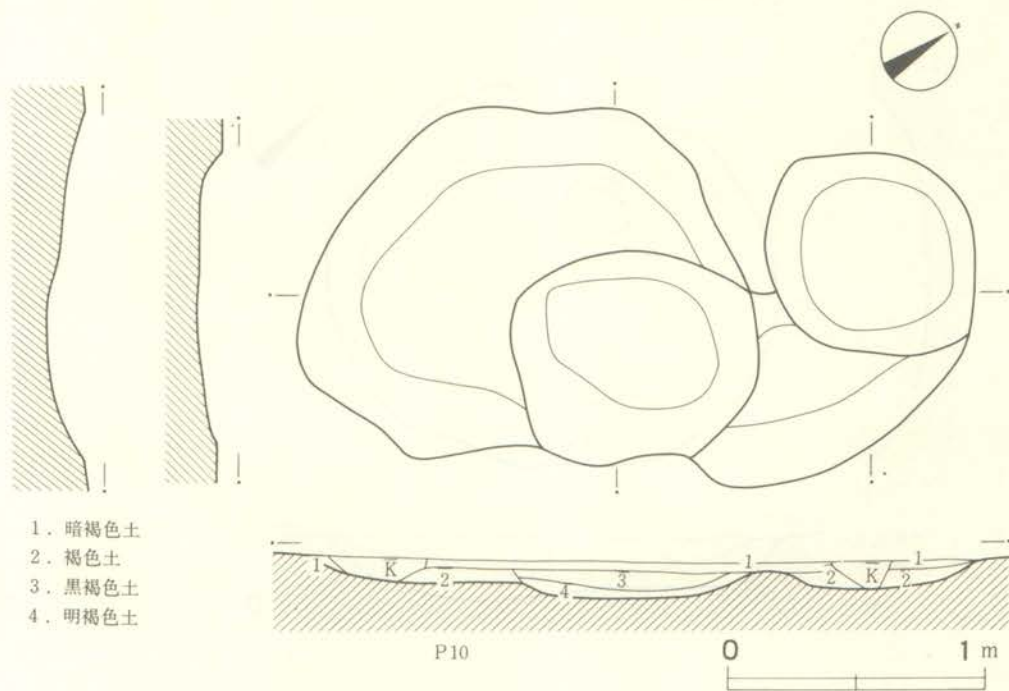
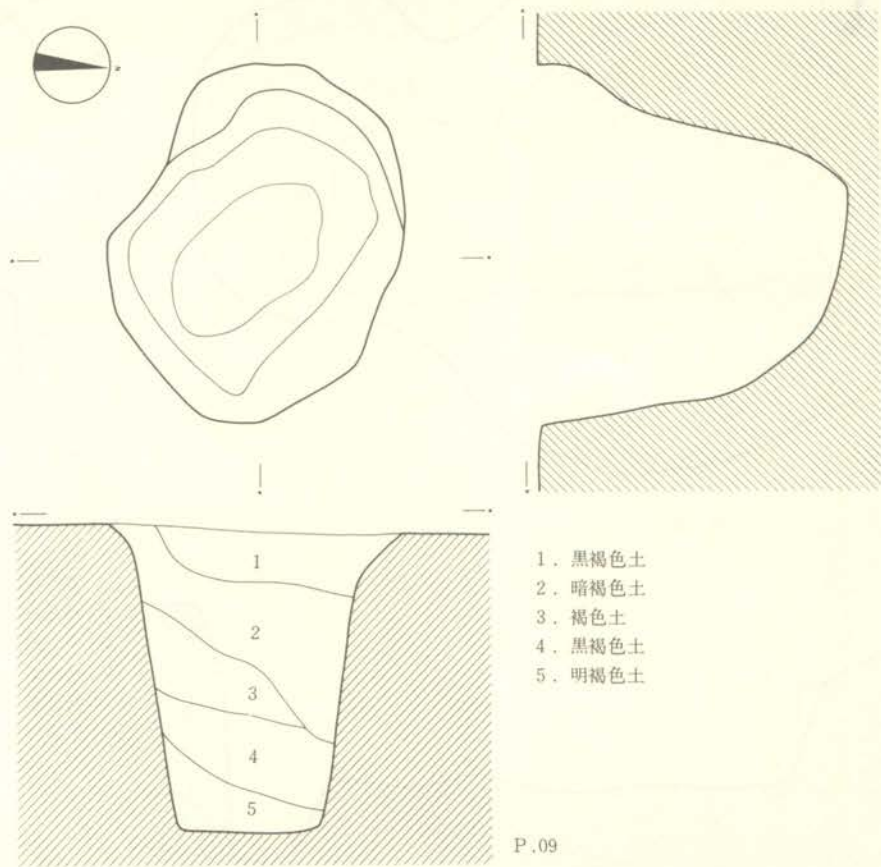
遺物は土器片、焼石破片などが検出されたが、本遺構には伴わず流れ込んだものと考えられる。

P 11号跡〔036〕（第143図）

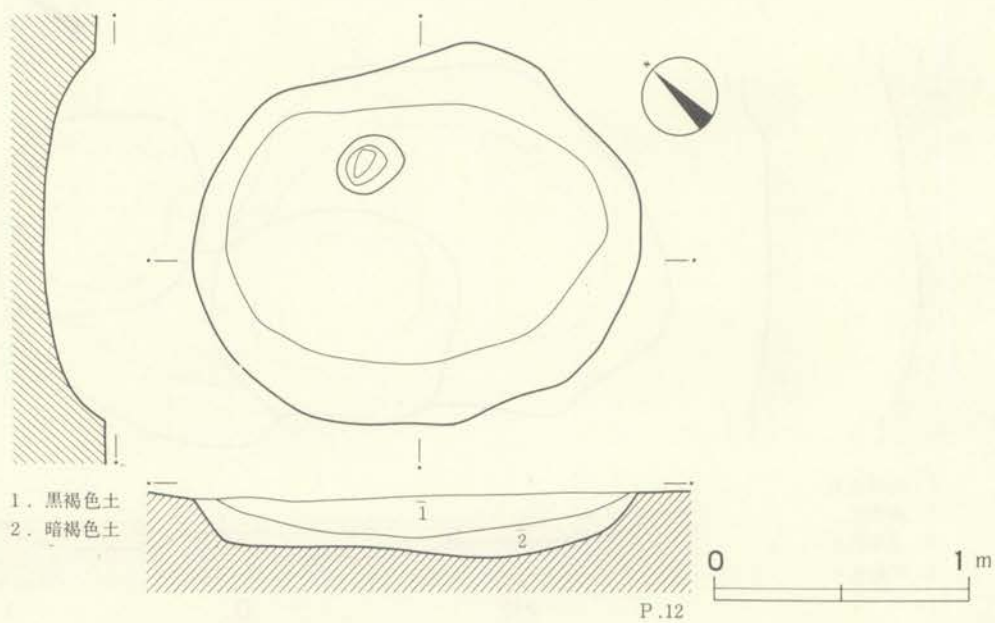
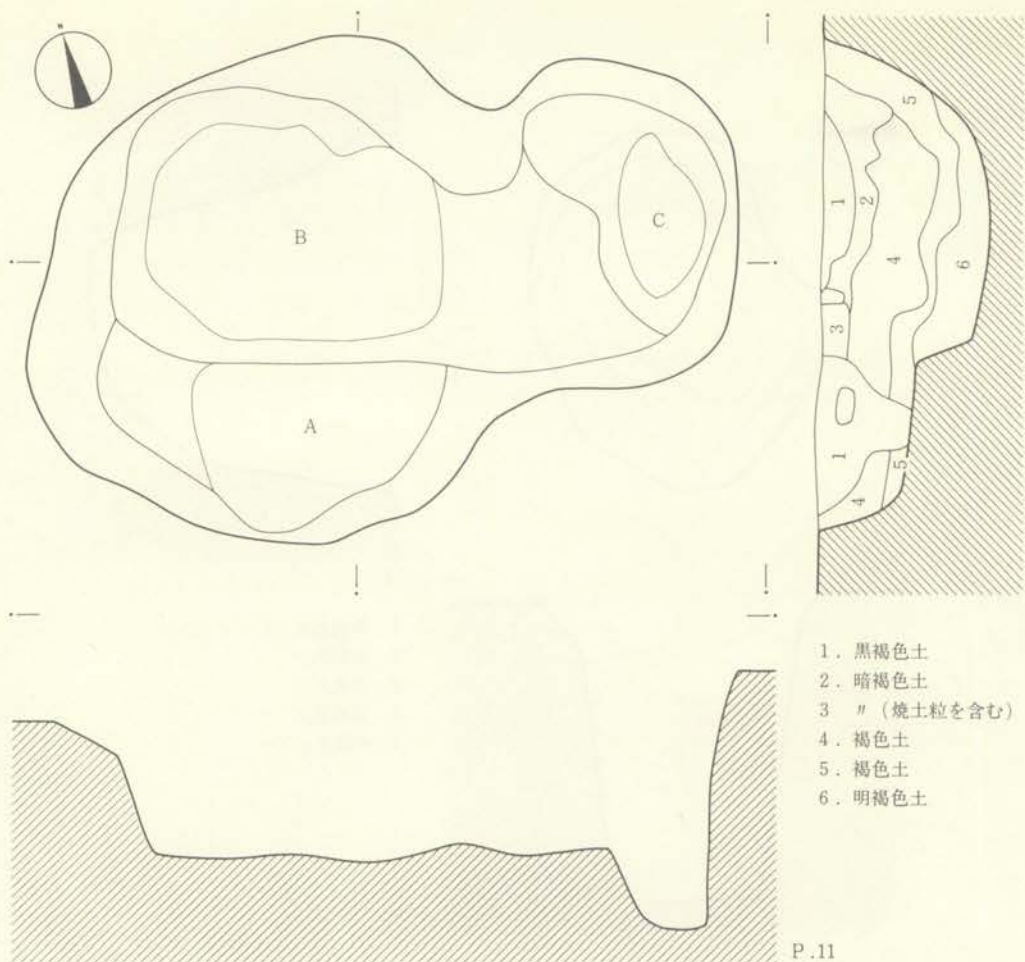
P 10号跡の北西25m、坂崎谷津を東に望む台地の平坦部に位置する。

開口部は長径2.8m、短径2mの不整形プランを呈する。3基の土壌（A・B・C）が複合している。Aが最初に形成されている。CはBの底面に穿たれたピットである可能性もあり、BとCの前後関係は判然としない。深さはそれぞれAは40cm、Bは60cm、Cは100mを測る。

縄文時代中期の土器片が覆土中から検出されたが、本遺構に伴うものではない。



第142图 P.09, 10号迹实测图(1/50)



第143図 P 11, 12号跡実測図(1/50)

P12号跡〔037〕（第143図、図版89-3）

P11号跡の南東4mの台地平坦部に位置する。

開口部は長径1.8m、短径1.4mの不整楕円形プランを呈する。掘り込みは約20cmと浅く、断面形はレンズ状を呈する。底面の北側には30×20mの小ピットが穿たれている。

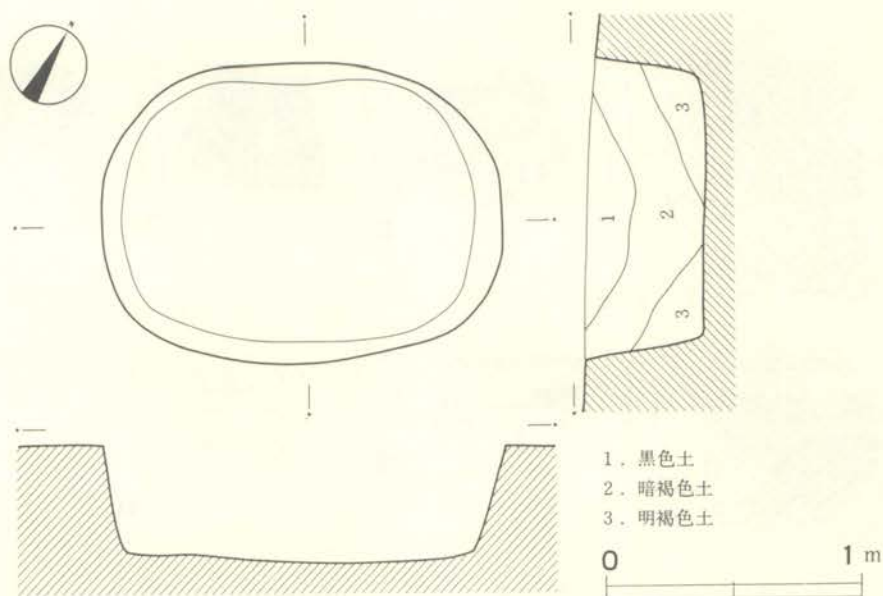
遺物はフレイク、チップが検出されているが、本遺構に伴うものではなく流れ込んだものと考えられる。

P13号跡〔030〕（第144図）

坂崎谷津を東に望む台地の縁辺部に位置する。

開口部は長径1.6m、短径1.2m、壙底面では長径1.4m、短径1mを測る楕円形プランを呈する。ほぼ垂直に掘り込まれ、深さは50cmを測り、底面は平坦である。

遺物の出土は認められない。



第144図 P13号跡実測図(1/50)

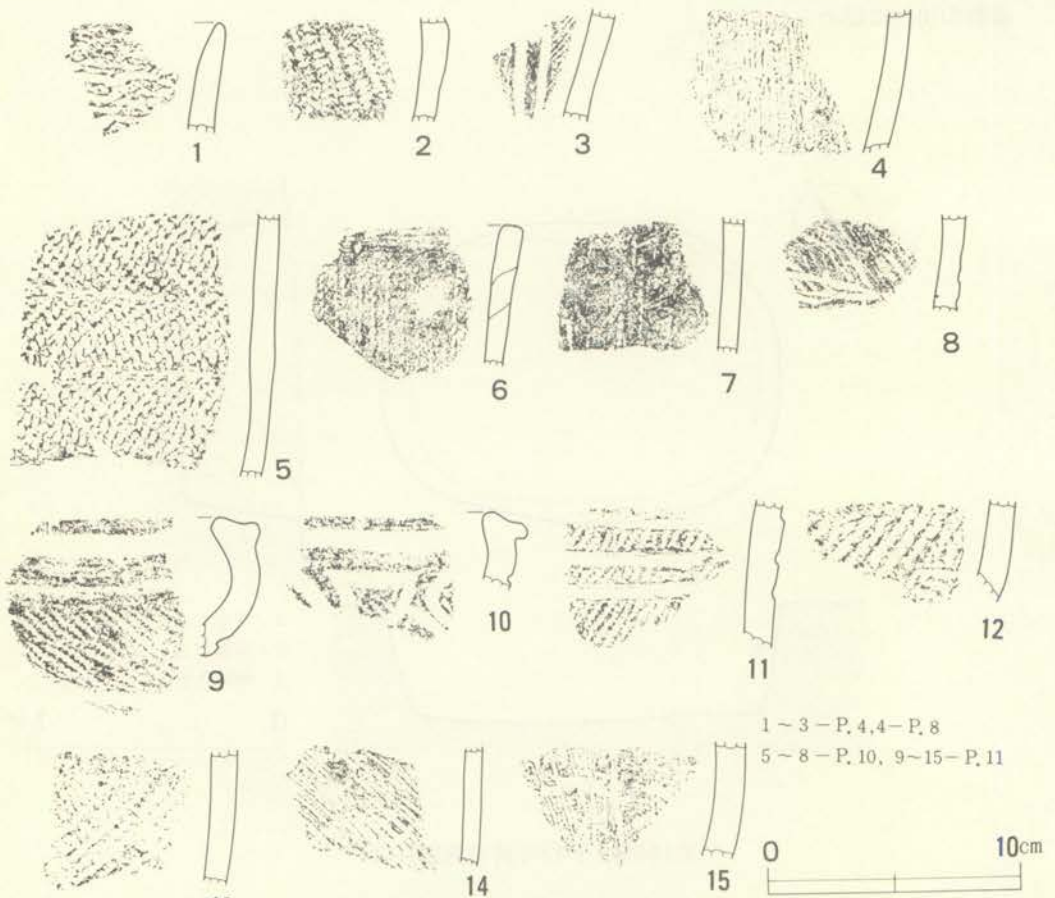
出土遺物 (第145図, 図版90)

土壌の覆土からは縄文土器片が少量検出されている。いずれも土壌に伴うものではなく、時期も早期から後期にまで及んでいる。

1～3はP4号跡から出土した。1はやや外反する口縁部をもち、器面はやや荒れて文様は明瞭ではない。2は原体RLの縄文を施文する。3は器面を2本の沈線によって区画し、区画内を磨消している。区画外をLRの縄文で充填する。

4はP8号跡からの出土である。LRの捺糸文が施されている。

5～8はP10号跡から検出されたものである。5は器面全面にLR, RLの縄文が広い帯状に交互に充填されている。6は口縁部が直立し、LRの捺糸文が施文される。また、円孔が外側から穿たれている。7もLRの捺糸文の土器片である。8は磨滅のため文様は明瞭ではないが、横走する条痕文が若干認められる。



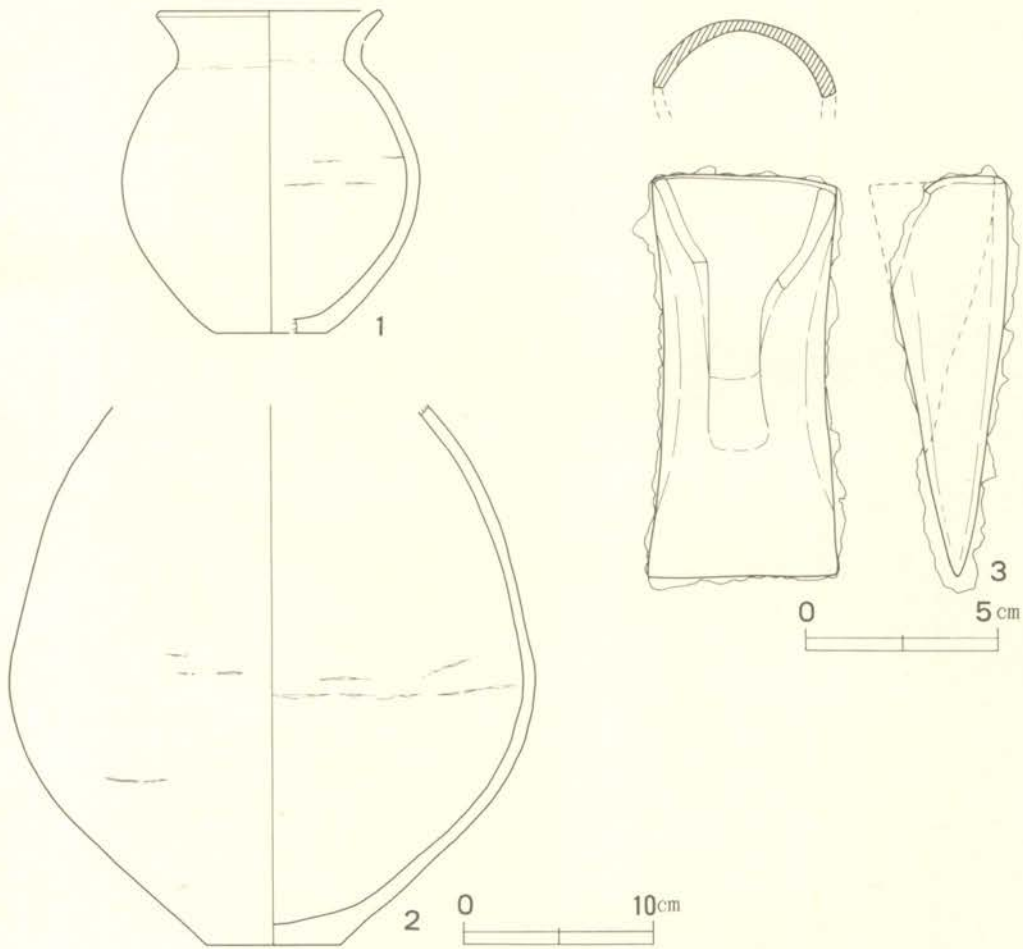
第145図 土壌内出土土器拓影図(1/3)

9～15はP11号跡からの検出である。10は内湾する口縁部で、外面には隆起帯が巡る。11はLRの縄文を施文した2条の縄文帯が配されている。12、13は器面をLRの縄文で充填施文する。14は粗い条線文が斜行している。15は縦走する沈線文が施文されている。

4. 遺構外出土遺物

以下に説明する3点は表土中より検出されたものであるが、附近にはこれを伴うべき遺構の存在を確認することはできなかった。住居跡や古墳が破壊され削平されたという様相も認められないことから、出土状況が今ひとつ判然としない。(第146図、図版91)。

1は、G10より出土した甕である。底部と体部の一部を欠損する。口径11.5cm、器高16.6cm、底径は推定で6cmを測る。口縁部は頸部から外反しながら立ち上がり、口唇部を丸くまとめる。



第146図 遺構外出土遺物実測図(1/2, 1/4)

体部は頸部から丸みをもって張りながら底部に至る。体部中位に最大径をもつ。口縁部内外面をヨコナデ、体部は縦位のへラケズリののち丁寧なへラミガキが施されている。

2は、G24より出土した。器種は甕であろう。口縁部と体部の $\frac{2}{5}$ を欠損する。底径7cm、現高27cmを測る。最大径を体部中位よりやや下にもつ。体部は縦位のへラケズリののちへラミガキを施す。内外面に成形時の輪積み痕が認められる。

3は、鉄斧である。錆化が著しく全体に遺存は悪い。袋部の接合部は欠損しており、袋部の形態は不明であるが長円形を呈すると考えられる。また、折り返し部は密着せずを開いている。全長10.3cm、刃部幅5cmを測る。G22表土層からの出土である。

VIII 自然科学分析とその結果

1. 重鉍物分析

六通金山遺跡のG-11D-90地点とG25-D-65地点で採取した立川ローム層の試料について、重鉍物分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼し、その分析結果が出たのでここに記載する。

分析方法

乾燥した試料50.0gにアンモニア溶液を加えて粘土鉍物を分散させ、超音波装置を用いながら、傾斜法によって粘土粒子を除いた。

水洗した試料を乾燥後、60mesh($\frac{1}{4}$ mm)と120mesh($\frac{1}{8}$ mm)の篩を用いて $\frac{1}{4}$ mm \sim $\frac{1}{8}$ mmの粒度のものだけを抽出した。

$\frac{1}{4}$ mm \sim $\frac{1}{8}$ mmの試料を秤量後、テトラブromエタン(比重 \div 2.96)を用いて重液分離した。重液(テトラブromエタン)に沈んだ重鉍物を秤量後、プレパラートを作成した。

顕微鏡下で重鉍物を300個体程度観察し、それぞれの鉍物の比重を考慮して、重量による鉍物組成を算出した。

産出鉍物

今回の試料の中に主に観察された透明重鉍物は、カンラン石、シソ輝石、普通輝石および角閃石の4種である。

カンラン石は全試料を通じて最も普通に見られる鉍物で、顕微鏡下において無色であり、自形のものには六角形を示す。全試料を通じ自形 \sim 半自形のカンラン石が多いが、下部(G25-D-65地点・No.2, 3)と、上部(G25-D-65地点・No.13, 14, 16およびG11-D-90地点・No.10, 11, 12)とにおいて、赤褐色に風化して丸味を帯びていたカンラン石も観察された。

シソ輝石はカンラン石に次いで多く含まれる緑色 \sim 褐色の鉍物で、自形のものには柱状の形態を示す。本試料中では自形 \sim 半自形を示すシソ輝石が大部分を占める。

普通輝石は淡緑色 \sim 無色の鉍物で、自形のものには短柱状である。本試料中の普通輝石の産出は1割以下と少なく、その形態も自形の姿をとどめていないものが多かった。比較的自形の普通輝石が目についたのはG25-D-65地点・No.12, 13と、G-11-D-90地点・No.1, 5の各試料である。

角閃石は鈍い緑色～暗緑色の鉱物で、自形は柱状を示す。本試料中では産出は少なく、G25-D-65地点・No.2の試料に自形の角閃石が見られる以外は殆んど半自形～他形であった。

なお、不透明鉱物として一括したものには、磁鉄鉱や赤鉄鉱などを含む。風化物や不明な重鉱物は、その他としてまとめた。

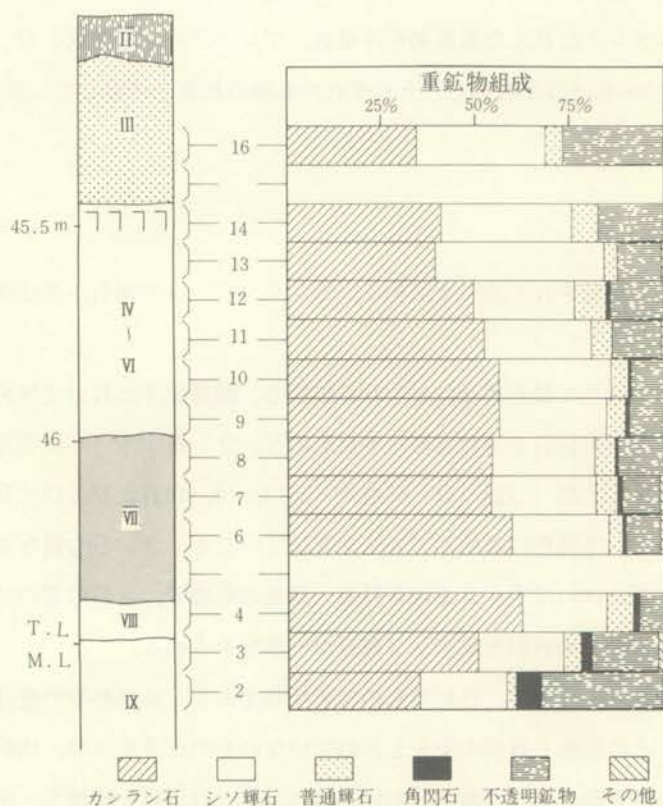
重鉱物組成の垂直変化

G25-D-65

カンラン石は、No.2 (35%) から急増し、No.4 (62.1%) を頂点にして上位に向かって減少傾向を示す。No.6とNo.7の間に約5%の減少がみられるが、No.7からNo.10までは変化がない。

No.11から上位において減少傾向を強めるが、特にNo.12とNo.13との間に10%の減少が認められる。No.4からNo.12までが約50%以上を占めているのに対し、No.13からNo.16までは約40%以下になっている。

シソ輝石はNo.2からNo.12まで約22～30%の殆んど変化のない値を示しているが、No.13からNo.



第147図 鉱物組成図 (G25-D-65)

16においては約34~44%を占めている。特にNo.13では44.4%を占め、下位のNo.12に比べ17%以上も増加していることは注目される。

普通輝石は産出が10%未満で小さな増減が見られるが、全体としては、ほぼ一定した位置を占める。

角閃石は、最下部のNo.2の6.5%を最高に、No.3(2.4%)、No.4(1.4%)と、しだいに減少する傾向が見られる。No.6より上位では1%未満しか無く、検出されない試料もある。

不透明鉱物は、No.2で32.2%、No.16で26.9%と上下両端に占める割合が高く、中央部では10%前後の低率である。No.2からNo.4へと減少し、No.4の7.1%を最低として漸増傾向を示す。

これはカンラン石の示す増減パターンと正反対である。

第26表 重鉱物分析組成表 (G25-D-65)

試料 番号	全試料中の 1/4~1/2mmの 砂分(W%)	1/4~1/2mmの 砂中の重鉱 物の量W%	重 鉱 物 組 成					
			カンラン石	シソ輝石	普通輝石	角 閃 石	不透明鉱物	そ の 他
16	1.34	60.6	37.3	38.1	5.0		19.6	
			34.4	34.2	4.5		26.9	
14	1.84	73.1	42.9	37.2	7.6		12.3	
			41.0	34.5	7.0		17.5	
13	2.00	72.3	40.5	46.8	3.6		8.2	0.9
			39.5	44.4	3.4		11.8	0.9
12	2.71	59.9	51.4	28.7	8.9	0.6	10.4	
			49.5	26.8	8.3	0.6	14.8	
11	2.17	74.1	54.0	30.2	5.8		9.3	0.7
			52.2	28.4	5.4		13.4	0.6
10	2.16	80.7	57.4	31.0	4.6	0.3	6.7	
			56.2	29.5	4.4	0.3	9.6	
9	2.00	86.5	57.7	29.6	5.3	0.3	7.1	
			56.3	28.1	5.0	0.3	10.3	
8	2.12	82.4	56.2	28.8	5.8	0.3	8.9	
			54.4	27.0	5.4	0.3	12.9	
7	2.20	77.1	55.3	29.2	6.1	0.9	7.0	1.5
			54.1	27.7	5.8	0.8	10.2	1.4
6	2.51	69.6	61.0	26.7	3.8	0.6	6.3	1.6
			59.7	25.4	3.6	0.6	9.2	1.5
4	2.81	51.9	62.9	23.4	7.3	1.5	4.9	
			62.1	22.4	7.0	1.4	7.1	
3	3.05	43.4	53.1	24.2	5.3	2.8	12.5	2.1
			50.6	22.4	4.9	2.4	17.7	2.0
2	2.55	18.8	38.6	26.0	2.8	7.8	23.8	1.0
			35.0	23.0	2.5	6.5	32.2	0.8

上段は個数%, 下段は重量%

カンラン石は増減を繰返しながら減少する傾向にある。

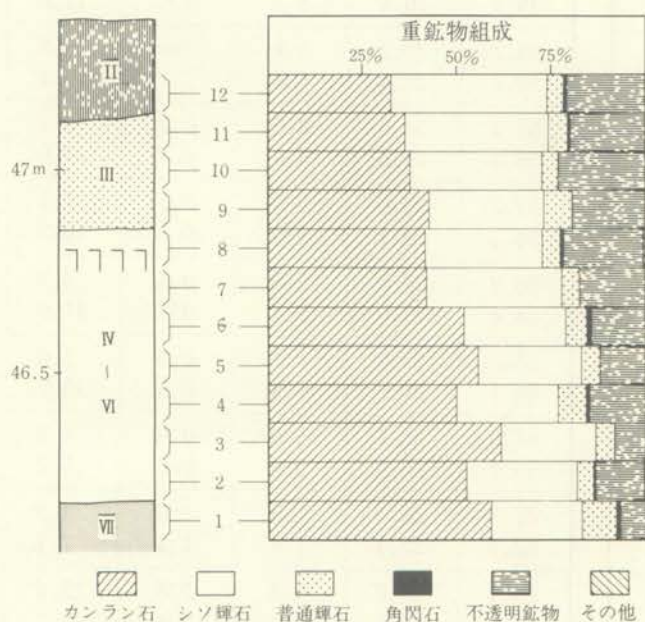
No.1からNo.6は10%前後の変動がみられるが、50%以上の高率を保つ。No.7を境に40%台に落ちむが、No.7からNo.9は変化がみられない。No.10よりNo.12は、しだいに減少する。

シソ輝石の場合は上位ほど増加する傾向があり、その途中のNo.2とNo.7の所で2つのピークが見られる。即ち、全体としてみるとNo.1の23.9%からNo.12の41.2%へと増加している。然しNo.2に於て29.2%（下位に対して5.3%増加）、No.7に於て35.9%（同・9%増加）と、2つの頂点が認められるが、前者は小さい頂点である。

普通輝石は5%前後のものが多く、No.1（9%）、No.4（7.7%）およびNo.9（7.4%）が比較的多く検出された。

角閃石は1%未満であり、変化については言及しない。

不透明鉱物は、No.1（7.3%）からNo.8まで増減を繰返しながら、しだいに増加する傾向がみられる。そして、No.8からNo.12までは約20%前後で一定している。これはカンラン石の増減傾向と逆である。



第148図 鉱物組成図 (G11-D-90)

第27表 重鉱物分析組成表(G11-D-90)

試料 番号	全試料中の 4-6 mmの 砂分(W%)	4-6 mmの 砂中の重鉱 物の量(W%)	重 鉱 物 組 成					
			カンラン石	シソ輝石	普通輝石	角閃石	不透明鉱物	その他
12	2.60	40.7	34.7	44.9	0.9	0.9	14.9	
			32.8	41.2	4.3	0.8	20.9	
11	1.28	53.4	38.4	41.1	6.0	0.3	14.2	
			36.4	37.8	5.5	0.3	20.0	
10	1.54	62.5	40.4	38.5	4.5		16.6	
			37.8	35.0	4.1		23.1	
9	2.06	76.7	45.1	33.0	8.0		13.9	
			42.7	30.4	7.4		19.5	
8	1.99	69.3	44.4	34.1	5.0	0.3	15.3	0.9
			41.8	31.1	4.6	0.3	21.5	0.8
7	2.31	57.5	44.0	38.7	4.9		12.4	
			42.0	35.9	4.5		17.6	
6	2.22	61.4	54.1	28.8	6.2	0.6	10.3	
			52.0	26.9	5.8	0.6	14.7	
5	2.03	78.8	57.4	28.9	5.2		8.5	
			55.7	27.2	4.9		12.2	
4	1.93	86.2	52.1	28.8	8.2	0.3	10.6	
			50.0	26.9	7.7	0.3	15.1	
3	1.94	86.8	63.0	26.1	5.0		6.9	
			61.8	24.9	4.7		8.6	
2	2.20	80.0	54.2	31.0	4.6	0.3	9.2	0.7
			52.5	29.2	4.3	0.3	13.2	0.5
1	2.10	79.4	59.8	24.9	9.4	0.3	5.0	
			59.0	23.9	9.0	0.8	7.3	

上段は個体数%、下段は重量%

考 察

上述した分析結果を基に地層の対比、鉱物の起原、時代などについて考察してみたい。

まずG25-D-65地点とG11-D-90地点の関係を述べる。

G25-D-65地点の下部のNo.2からNo.4のカンラン石の増加と不透明鉱物の減少がG11-D-90地点に見られないことにより、G-11D-90地点の方がG25-D-65地点の試料より全体的に上部のものであるといえる。

シソ輝石の増加とカンラン石の減少で特長づけられるG25-D-65地点のNo.12とNo.13との変化は、G11-D-90地点のNo.6とNo.7との変化に対応する。

柱状図を見ると、2地点での地層の厚さはあまり変化がないこと、試料を等間隔に採取していること、及びG11-D-90地点におけるNo.1が第II黒色帯の最上部にあることから、G11-D-90地点のNo.1は、多分G25-D-65地点のNo.8付近に相当すると推定される。

武蔵野台地の場合は、武蔵野ローム層から立川ローム層下部にかけカンラン石が増加すること、カンラン石の頂点は武蔵野・立川両ローム層の境界と第II黒色帯の間に位置すること、その後カンラン石は減少するが、立川ローム層上部に於て再び増加するなどの特長がある。

本地域のG25-D-65地点No.4は、武蔵野地域の第II黒色帯の下位のカンラン石の頂点に、またそれより上位の減少傾向は武蔵野における立川ローム層の中部にそれぞれ対応すると考えられる。

G-25D-65地点のNo.3は、カンラン石の増加傾向の途中に位置していることにより、この付近に武蔵野・立川両ローム層の境界が存在することと矛盾しない。

火山灰を主体とする立川ローム層は、火山灰の性質・地層の分布・鍵層の追跡などの事実から、主に富士山に由来する風成層であるとされている。

放射性元素による年代測定法との対応から、一般に第II黒色帯が約2万6000年前、始良丹沢火山灰(AT)が約2万2000年前とされている。

ま と め

本地域の試料の重鉍物分析によって、カンラン石、シソ輝石、普通輝石、角閃石および不透明鉍物が観察された。

カンラン石、シソ輝石および不透明鉍物の増減傾向によって、本地域の2地点の地層は対比された。

また重鉍物組成は武蔵野台地における結果とも良く一致し、武蔵野ローム層の最上部から立川ローム層に対比される。

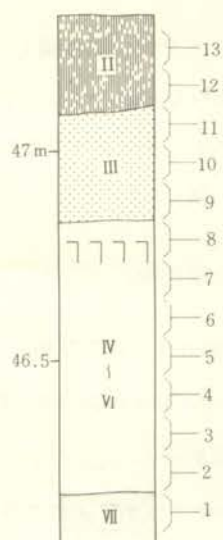
参 考 文 献

- 関東ローム研究グループ 1965『関東ローム・その起原と性状』築地書館
町田洋・鈴木正男・宮崎明子 1971「南関東の立川・武蔵野ロームにおける先土器時代遺物包含層の編年」『第四紀研究』,VOL.10, No.4 P. 290~305

2. 花粉分析

G11-D-90地点の試料については花粉分析をバリノ・サーヴェイ株式会社に依頼し、その分析結果が出たのでここに記載する。

試料は立川ローム層を中心に計13点採取した。これらの試料の試料番号、層位、土質、花粉・孢子化石産出傾向については第28表として後掲した。



第149図 花粉分析試料採取位置

結果及び考察

分析結果は鑑定した花粉・孢子化石総数を基数百分率で各試料の花粉・孢子化石の割合を算出し第29表、またこの中で主なものについてはダイアグラムで表わし、第150図として示した。図版93・95も作成したので参照されたい。

AP-1 (針葉樹花粉)

Pinus (マツ属), *Tsuga sieboldii* (ツガ), *Taxodiaceae* (スギ科), *Cryptomeria* (スギ属), [*Taxaceae* (イチイ科)・*Cupressaceae* (ヒノキ科)・*Taxodiaceae* (スギ科)]…3種の分別不能のものをT.C.T.

AP-2 (広葉樹花粉)

Juglans (クルミ属), *Pterocarya* (サワグルミ属), *Salix* (ヤナギ属), *Alnus* (ハンノキ属), *Carpinus* (クマシデ属), *Corylus* (ハシバミ属), *Castanea* (クリ属), *Castanopsis* (クリカシ属), *Cyclobalanopsis* (アカカシ亜属), *Lepidobalanus* (コナラ亜属), *Zelkova* (ケヤキ属), *Leguminosae* (マメ科), *Sapium* (シラキ属), *Aesculus* (トチノキ属), *Ilex* (モチノキ属), *Fraxinus* (トネリコ属),

NAP (草本花粉)

Thalictrum (カラマツソウ属), Crusiferae (アブラナ科), Umbelliferae (セリ科), Cardu-
oideae (キク亜科), Artemisia (ヨモギ属), Cichorioideae (タンポポ亜科), Gramineae (イネ
科), Cyperaceae (カヤツリグサ科), Plantago (オオバコ属), Leguminosae (マメ科), Fa-
gopyrum (ソバ属),

FP (形態分類花粉)

Triporate pollen (三孔型花粉), Tricolpate pollen (三溝型花粉), Tricolporate pollen (三溝
孔型花粉), Inaperturate pollen (無口型花粉),

FS (羊歯類孢子)

Lycopodiaceae (ヒカゲノガスラ科), Polypodiaceae (ウラボシ科), Monolete spore
(単条溝型孢子), Trilete spore (三条溝型孢子),

花粉・孢子化石の産出傾向は、第28表の如く、No.5, No.4, No.2, No.1の4試料が「極く稀れ」
で非常に少なかった。その他の試料は「少ない」「普通」の何れかであった。

検出された花粉のうち、主なものは、針葉樹花粉ではマツ属、T.C.T, 広葉樹花粉ではコ
ナラ亜属、アカガシ亜属、草本花粉ではタンポポ亜科、ヨモギ属、キク亜科、イネ科、カラマ
ツソウ属である。なかでも草本花粉の割合が全般的に高かった。羊歯類孢子は単条溝型の割合
が高かった。

No.1 (VII層) 試料

この試料は花粉・孢子化石が合計で27個体と非常に少なく、花粉・孢子構成についての特長
を述べるには不十分であった。

検出された花粉・孢子化石にはマツ属、スギ属、イネ属、単条溝型孢子などがあげられる。

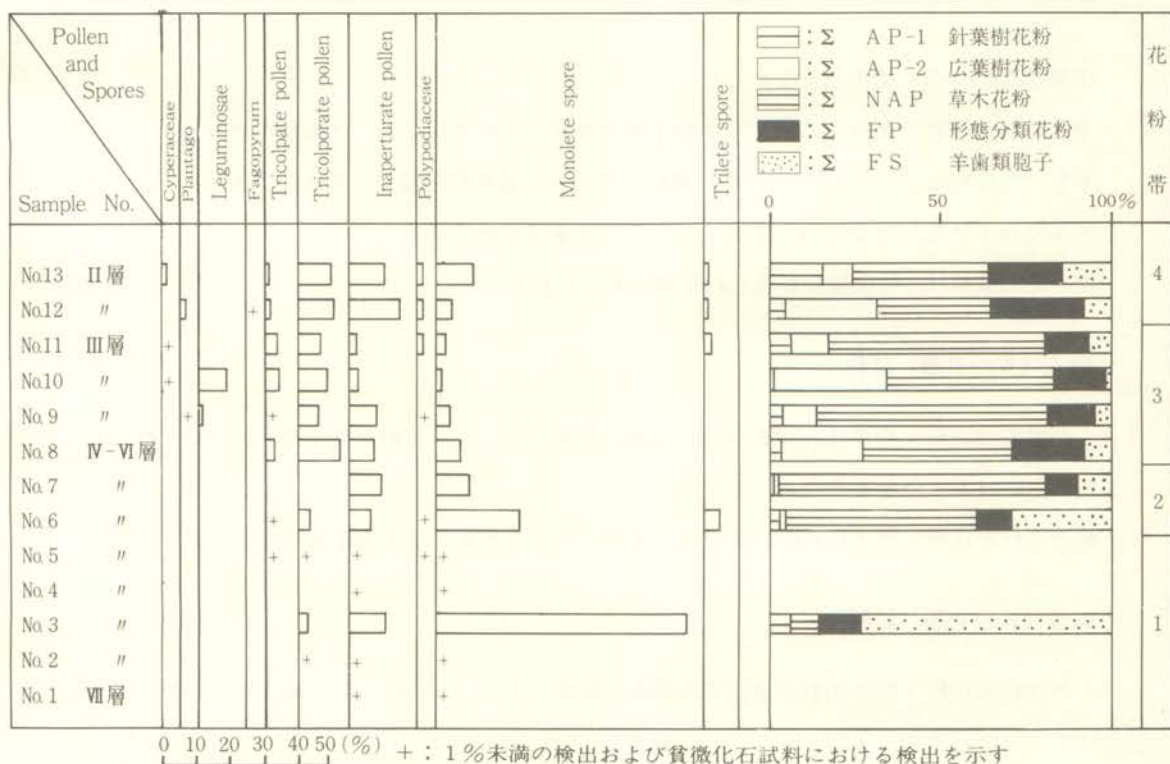
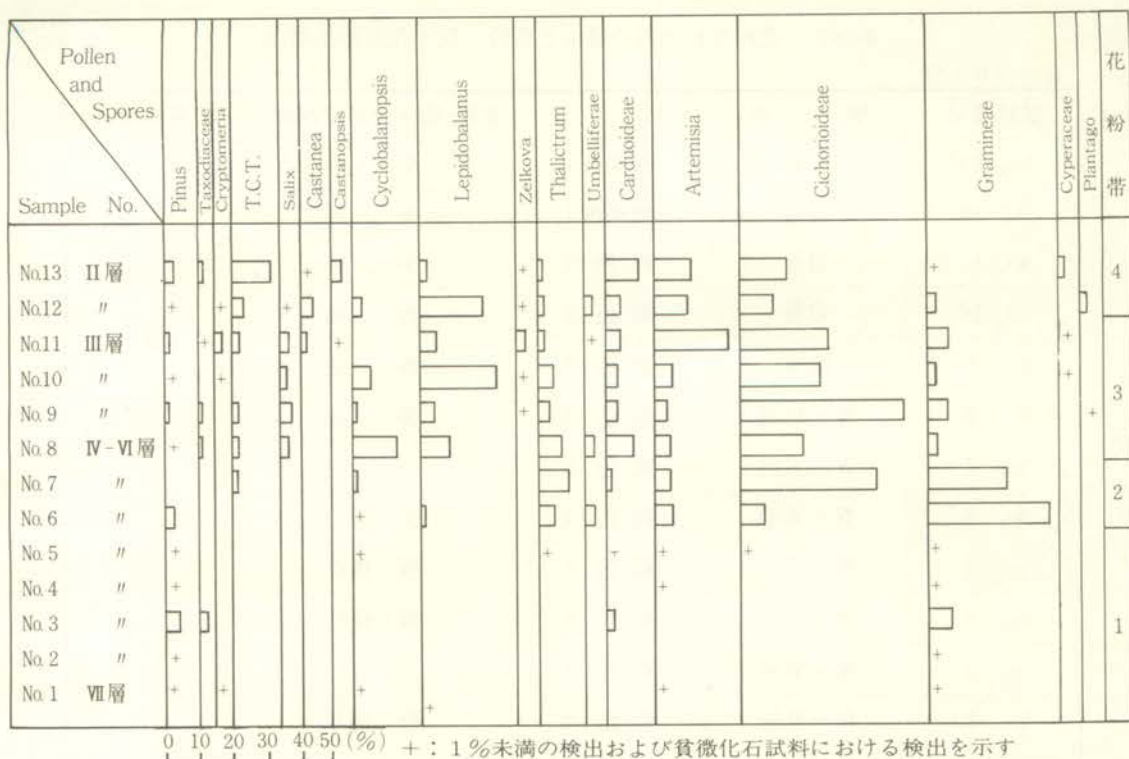
No.2 (IV~VI層) 試料

この試料も花粉・孢子化石が合計で23個体と非常に少なく、花粉・孢子構成についての特長
を述べるには不十分なものであった。

検出された花粉・孢子化石には、マツ属、イネ科、単条溝型孢子などがあげられる。

No.3 (IV~VI層) 試料

針葉樹花粉は合計で6.0%を占め、マツ属とスギ科が、それぞれ4%, 2%検出された。



第150図 主要花粉孢子化石ダイアグラム

第28表 花粉分析試料の層位と花粉・胞子化石産出傾向

G II-D-90

試料番号	層位	土質	花粉・胞子化石産出傾向	花粉帯
No. 13	II層	暗褐色土	少ない	4
No. 12	II層	暗褐色土	普通	
No. 11	III層	褐色土	少ない	3
No. 10	III層	褐色土	普通	
No. 9	III層	褐色土	普通	
No. 8	IV~VI層	褐色土	普通	
No. 7	IV~VI層	褐色土	少ない	2
No. 6	IV~VI層	褐色土	少ない	
No. 5	IV~VI層	褐色土	極く稀れ	1
No. 4	IV~VI層	褐色土	極く稀れ	
No. 3	IV~VI層	褐色土	少ない	
No. 2	IV~VI層	褐色土	極く稀れ	
No. 1	VII層	褐色土	極く稀れ	

広葉樹花粉は全く検出されなかった。

草本花粉は合計で8%を占め、イネ科とキク亜科がそれぞれ6%、2%検出された。

形態分類花粉は合計で12%を占め、無口型花粉と三溝孔型花粉が2%検出された。

羊歯類胞子は極めて多く74%を占め、殆んど単条溝型胞子であった。

従って古植生は、羊歯類が繁茂した草地が考えられる。

No.4 (IV~VI層) 試料

この試料は花粉・胞子化石が合計で18個体と非常に少なく、花粉・胞子構成についての特長を述べるには不十分なものであった。

検出された花粉・胞子化石にはマツ属、イネ科、ヨモギ属、単条溝型胞子などがあげられる。

No.5 (IV~VI層) 試料

この試料は花粉・胞子化石が合計で39個体と非常に少なく、花粉・胞子構成について述べるには不十分なものであった。

検出された花粉・胞子化石はキク亜科、ヨモギ属、タンポポ亜科、イネ科、単条溝型胞子な

第29表 花粉分析結果一覽表

Sample No.	No.13 II層	No.12 II層	No.11 III層	No.10 III層	No.9 III層	No.8 IV-VI層	No.7 IV-VI層	No.6 IV-VI層	No.5 IV-VI層	No.4 IV-VI層	No.3 IV-VI層	No.2 IV-VI層	No.1 VII層
Pinus (マツ属)	2.9	0.6	1.5	0.6	1.0	0.6		2.8	1	1	4.0	3	2
Tsuga sieboldii (ツガ)		0.6											
Taxodiaceae (スギ科)	1.4		0.8		1.0	1.2					2.0		
Cryptomeria (スギ属)		0.6	2.3	0.6									2
T.C.T. (イチイ科・ヒノキ科・スギ科)	11.6	3.5	2.2		1.9	1.9	1.2						
Σ AP-1 (N)	22	9	9	2	8	6	1	3	1	1	3	3	4
(%)	15.9	5.3	6.8	1.2	3.9	3.7	1.2	2.8			6.0		
Juglans (クルミ属)				0.6									
Pterocarya (サワグルミ属)	1.4												
Salix (ヤナギ属)		0.6	1.5	1.2	2.4	1.2							
Alnus (ハンノキ属)				0.6									1
Carpinus (クマシデ属)				0.6									1
Corylus (ハシバミ属)				0.6	0.5								
Castanea (クリ属)	0.7	3.5	1.5										
Castanopsis (クリカシ属)	2.2		0.8										
Cyclobalanopsis (アカガシ亜属)		2.9		5.8	1.0	13.1	1.3	0.9	1				1
Lepidobalanus (コナラ属)	2.3	18.9	4.5	22.7	3.9	8.7		1.0					1
Zelkova (ケヤキ属)	0.7	0.6	1.5	0.6	0.5								
Leguminosae (マメ科)					0.5								
Sapium (シラキ属)					1.0								
Aesculus (トチノキ属)	0.7					0.6							
Ilex (モチノキ属)	0.7			0.6									
Fraxinus (トネリコ属)			0.8										
Σ AP-2 (N)	12	45	14	57	20	38	1	2	1	0	0	0	4
(%)	8.7	26.5	10.6	33.3	9.8	23.6	1.3	1.9			0		
Σ AP (N)	34	54	23	59	28	44	2	5	2	1	3	3	8
(%)	24.6	31.8	17.4	34.5	13.7	27.3	2.5	4.7			6.0		
Thalictrum (カラマツソウ属)	1.4	1.8	1.5	4.7	3.4	6.8	8.9	4.7	1				
Crusiferae (アブラナ属)			0.8		1.0								
Umbelliferae (セリ科)		1.2	0.8			1.9		1.9					
Carduioideae (キク亜科)	10.1	4.7	4.5	3.5	3.4	8.1	1.3		5		2.0		
Artemisia (ヨモギ属)	11.6	10.6	22.7	5.8	3.9	5.0	5.1	5.7	6	1			1
Cichorioideae (タンポポ科)	14.7	10.6	26.5	23.9	48.6	19.2	40.4	7.5	3				
Gramineae (イネ科)	0.7	2.4	6.1	1.8	5.4	2.5	22.8	35.9	3	3	6.0	4	4
Cyperaceae (カヤツリグサ科)	1.4		0.8	0.6									
Plantago (オオバコ属)		1.8			0.5								
Leguminosae (マメ科)				8.8	0.5								
Fagopyrum (ソバ属)		0.6											
Σ NAP (N)	55	57	84	84	139	70	62	59	18	4	4	4	5
(%)	39.9	33.5	63.7	49.1	67.7	43.5	78.5	55.7			8.0		
Triporate pollen (三孔型花粉)			0.8										
Tricolpate pollen (三溝型花粉)	1.4	1.8	3.8	4.1	0.5	2.5		0.9	2				
Tricelporate pollen (三溝孔型花粉)	9.4	10.0	6.0	8.2	5.4	11.8		2.8	3		2.0	2	
Inaperturate pollen (無口型花粉)	10.2	14.7	1.5	2.3	7.8	6.8	8.9	5.7	5	4	10.0	8	6
Σ FP (N)	29	45	16	25	28	34	7	10	10	4	6	10	6
(%)	21.0	26.5	12.1	14.6	13.7	21.1	8.9	9.4			12.0		
Lycopodiaceae (ヒカゲノカズラ科)						0.6							
Polypodiaceae (ウラボシ科)	1.4	1.8	1.5		0.5			0.9	1				
Monolete spore (単条溝型胞子)	11.7	5.2	3.0	1.8	4.4	7.5	10.1	24.6	8	9	74.0	6	8
Trilete spore (三条溝型胞子)	1.4	1.2	2.3					4.7					
Σ FS (N)	20	14	9	3	10	13	8	32	9	9	37	6	8
(%)	14.5	8.2	6.8	1.8	4.9	8.1	10.1	30.2			74.0		
Σ Pollen & Spores (N)	138	170	132	171	205	161	79	106	39	18	50	23	27

註：単位：% ただしNo.5、No.4、No.2、No.1、は検出個体数で示す。

AP-1、AP-2、AP、NAP、FP、FS、の%算出方法

$$\text{ex. AP-1(\%)} = \frac{\Sigma \text{AP-1(N)}}{\Sigma \text{Pollen \& Spores(N)}} \times 100$$

どがあげられる。

No.6 (IV~VI層) 試料

針葉樹花粉はマツ層が2.8%検出されただけで少なかった。

広葉樹花粉はコナラ亜属とアカガシ亜属が僅かに検出されたにすぎない。

草本花粉は合計で55.7%を占め、主なものとしてイネ科が35.9%、タンポポ亜科が7.5%、ヨモギ属が5.7%、カラマツソウ属が4.7%検出された。

羊歯類孢子は合計で30.2%を占め、主なものとして単条溝型孢子が24.6%、三条溝型孢子が4.7%検出された。

従って古植生は、イネ科を主体としてタンポポ亜科、ヨモギ属、カラマツソウ属、羊歯類などの繁茂した草地が推定される。

No.7 (IV~VI層) 試料

針葉樹花粉はT.C.T. が僅かに検出されたにすぎない。

広葉樹花粉はアカガシ亜属が僅かに検出されたにすぎない。

草本花粉は合計で78.5%を占め非常に多く、主なものとしてタンポポ亜科が40.4%、イネ科が22.8%、カラマツソウ属が8.9%、ヨモギ属が5.1%検出された。

羊歯類孢子は単条溝型孢子が10.1%検出された。

従って古植生は、タンポポ亜科とイネ科を主体とし、カラマツソウ属、ヨモギ属および羊歯類などの繁茂した草地が推定される。

No.8 (IV~VI層) 試料

針葉樹花粉は合計で3.7%と低率でマツ属、スギ科が僅かに検出された。

広葉樹花粉は合計で23.6%を占め、主なものとしてアカガシ亜属が13.1%、コナラ亜属が8.7%検出された。

草本花粉は合計で43.5%を占め、主なものとしてタンポポ亜科が19.2%、キク亜科が8.1%、カラマツソウ属が6.8%、ヨモギ属が5%検出された。

羊歯類孢子は合計で8.1%を占め、主なものとして単条溝型孢子が7.5%検出された。

従って古植生は、タンポポ亜科、キク亜科、カラマツソウ属、ヨモギ属、羊歯類が繁茂した草地が考えられる。

付近にはアカガシ亜属、コナラ亜属なども生育し、林地を形成していたと推定される。

古気候は前述の古植生から推して暖かな温帯であろう。

No.9 (III層) 試料

針葉樹花粉は合計で3.9%と少なく、マツ属、スギ科などが僅かに検出された。

広葉樹花粉は合計で9.8%を占め、主なものとしてコナラ亜属が3.9%、ヤナギ属が2.4%検出された。

草本花粉は合計で67.7%と多く、主なものとしてタンポポ亜科が48.6%、イネ科が5.4%、ヨモギ属が3.9%、カラマツソウ属およびキク亜科が3.4%、マメ科が1.5%検出された。

羊歯類孢子は合計で4.9%を占め、主なものとして単条溝型孢子が4.4%検出された。

従って古植生は、タンポポ亜科を主体とし、イネ科、ヨモギ属、カラマツソウ属、キク亜科、羊歯類などの生育した草地が考えられる。周囲には、マツ属、スギ属、コナラ亜属、ヤナギ属なども若干生育していたことも推定される。

古気候は古植生からみて温帯であろう。

No.10 (III層) 試料

針葉樹花粉は合計で1.2%と少なかった。

広葉樹花粉は合計で33.3%を占め、主なものとしてコナラ亜属が22.7%、アカガシ亜属が5.8%、ヤナギ属が1.2%検出された。

草本花粉は合計で49.1%と多く、主なものとしてタンポポ亜科が23.9%、マメ科が8.8%、ヨモギ属が5.8%、カラマツソウ属が4.7%、キク亜科が3.5%、イネ科が1.8%検出された。

羊歯類孢子は合計で1.8%と少なかった。

従って古植生は、タンポポ亜科を主体とし、マメ科、ヨモギ属、カラマツソウ属、キク亜科が繁茂した草地が考えられる。周囲にはコナラ亜属を主体としてアカガシ亜属などの広葉樹林があったものと推定される。

古気候は古植生からみて暖かな温帯であろう。

No.11 (III層) 試料

針葉樹花粉は合計で6.8%を占め、主なものとしてスギ科が2.3%、マツ属が1.5%検出された。

広葉樹花粉は合計で10.6%を占め、主なものとしてコナラ亜属が4.5%、ヤナギ属、クリ属、ケヤキ属がそれぞれ1.5%検出された。

草本花粉は合計で63.7%を占めて多く、主なものとしてタンポポ亜科が26.5%、ヨモギ属が22.7%、イネ科が6.1%、キク亜科が4.5%、カラマツソウ属が1.5%検出された。

羊歯類孢子は合計で6.8%を占め、主なものとして単条溝型孢子が3%、ウラボシ科が1.5%検出された。

従って古植生は、タンポポ亜科、ヨモギ属を主体として、イネ科、キク亜科、カラマツソウ属の繁茂した草地が考えられる。

周囲にはスギ科、マツ属、コナラ亜属などの樹木が僅かながら生育していたものと思われる。

No.12 (III層) 試料

針葉樹花粉は合計で5.3%を占め、主なものとして、マツ属、ツガ、スギ属などが僅かに検出された。

広葉樹花粉は合計で26.5%を占め、主なものとして、コナラ亜属が18.9%、クリ属が3.5%、アカガシ亜属が2.9%検出された。

草本花粉は合計で33.5%を占め、主なものとして、ヨモギ属、タンポポ亜科がそれぞれ10.6%、キク亜科が4.7%、イネ科が2.4%、カラマツソウ属、オオバコ属が1.8%検出された。

羊歯類孢子は合計で8.2%を占め、主なものとして単条溝型孢子が5.2%、ウラボシ科が1.8%検出された。

従って古植生は、ヨモギ属、タンポポ亜科、キク亜科、イネ科、カラマツソウ属、オオバコ属、羊歯類などの繁茂した草地が考えられる。

付近には、コナラ亜属、クリ属、アカガシ亜属などの広葉樹も生育していたであろう。

古気候は、古植生から推して温帯であろう。

No.13 (II層) 試料

針葉樹花粉は合計で15.9%を占め、主なものとしてT.C.T (イチイ科・ヒノキ科・スギ科の何れかの花粉ではあるが鑑定分別が不能のもの)が11.6%、マツ属が2.9%検出された。

広葉樹花粉は合計で8.7%を占め、主なものとして、コナラ亜属が2.3%、クリカシ属が2.2%検出された。

草本花粉は合計で39.9%を占め、主なものとしてタンポポ亜科が14.7%、ヨモギ属が11.6%、キク亜科が10.1%検出された。

羊歯類孢子は合計で14.5%を占め、主なものとして単条溝型孢子が11.7%、ウラボシ科が1.4%検出された。

従って古植生は、タンポポ亜科、ヨモギ属、キク亜科、羊歯類などから成る草地が推定される。草地の近くには、マツ属、コナラ亜属、クリカシ属などの樹木も僅かながら生育していたであろう。

次に各試料の花粉・孢子構成の特長から六通金山遺跡試料を花粉帯に分けると、大きく4つに分けられる。

この花粉帯の特長及び古植生の変化について述べる。

第1花粉帯 (No. 1～No. 5)

この花粉帯はNo. 3を除くと花粉・孢子化石が極めて少ない貧花粉帯である。

No. 3は羊歯類孢子が非常に多い湿潤な草地の古環境を示していると考えられる。然し、その他のNo. 1, 2, 4, 5試料がNo. 3と同じ環境を示すものかどうかは判定し難い。

第2花粉帯 (No. 6～No. 7)

この花粉帯は、イネ科、タンポポ亜科を主体とし、ヨモギ属、カラマツソウ属および羊歯類などから構成される草地の環境を示している。

この草地の付近には未だ樹木類の生育は殆んど無かったものと考えられる。

第3花粉帯 (No. 8～No. 11)

この花粉帯はイネ科が急激に減少することが大きな特長といえる。これと反対に増加し始めるのが広葉樹のコナラ亜属とアカガシ亜属である。

従って第2花粉帯では殆んど草原の環境であったが、第3花粉帯になると、コナラ亜属、アカガシ亜属を主体とする樹木の侵入が行われたものと推定される。このとき侵入した樹木には前述のもの他に、ヤナギ属、ケヤキ属、クリ属(第3花粉地帯上部)、スギ属などがあげられる。

この花粉帯の古気候は、前述の樹木の生育からみて、暖かな温帯と考えられる。

第4花粉帯 (No. 12～No. 13)

この花粉帯になると、第3花粉帯に引続き、コナラ亜属、クリ属、クリカシ属、サワグルミ属などの侵入が行われたものと考えられる。然し、草本花粉もタンポポ亜科、ヨモギ属、キク亜科が高率で出現することから、草地の環境は続いていたものと考えられる。

古気候は前述の樹木の生育からみて温帯であろう。

IX 結 語

六通金山遺跡は、弥生時代を除く先土器時代から歴史時代にかけての複合遺跡である。周辺には古くから知られている六通貝塚や昭和51・52年度に調査されたムコアラク遺跡をはじめ多くの遺跡が分布し、今回の調査でさらに調査資料を増すことになった。以下、調査結果に基づき、いくつかの特徴を述べてみたい。

先土器時代について

今回調査した区域は調査区全体からみればわずかな面積ではあるが、東南部地区では初めて本格的な先土器時代の調査を行い、次のような成果をあげた。

第1に石器群の特徴として、明確なToolを特たずユニット、ブロック等の集中地点が明確にならないまま散漫に分布していることである。石器は自然面を残したままのものが多く、なかには素材を推定できるほど大きく残している石器も認められる。また、一次的な打撃のみで、細部の加工まで施した石器は少なく、残核も検出されている。さらに、Loc.6-5からは台石が出土している。以上のことから本遺跡の様相は、小林達雄・小田静夫の両氏により分類された石器群のパターンの中のC型、すなわち定形的な石器がなく、Core、Flakeが卓越する石器製造跡で、製品がもち去られた場として扱えられると考える。(小林・小田・羽鳥・鈴木1971)、これらの石器は第IV層～第VI層に集中して検出されている。

第2に第VII層から局部磨製石斧(刃部磨製斧形石器)が検出されたことである。基部を欠損しているもののよく研磨された鋭利な両刃を有している。裏面に自然面を残す縦割した礫を素材にしていることが特徴となっている。

第3に自然科学による分析(重鉍物分析、花粉分析)を行い、前章のような成果をあげたことである。

本遺跡をはじめ東南部地区では立川ローム層第III層(いわゆるソフト・ローム層)以下の層序の細分を肉眼観察で行うことは困難である。そのため武蔵野ローム上層から立川ロームにかけての土壌を採集し、ローム中の重鉍物組成等を分析することにより、第IV層～第VI層の明確な細分、AT(始良・丹沢パミス)と第II黒色帯の確認を行うことにした。分析結果の詳細は前章を参照していただきたいが、ここではいくつかの問題点を指適したい。まず、現場において肉眼による識別は困難であったが、わずかに黒味を帯びているため第II黒色帯(第VII層)に該当すると考えられていた層は分析の結果、武蔵野台地の第II黒色帯に比定され、第VII層は第

Ⅱ黒色帯であると確認されたことである。ただここで問題になるのはATが重鉍物分析の結果からでは認められないことである。ATについては『佐倉市星谷津遺跡』（鈴木・大原他1978）にも述べられているように、通常第Ⅱ黒色帯の直上から検出されている。第Ⅱ黒色帯が肉眼では識別しにくい遺跡ではATを確認することにより、その層序関係から第Ⅱ黒色帯を認定する作業が行われることもある。本遺跡ではG25-D-65地点のNo.4におけるカンラン石の頂点が武蔵野地域の第Ⅱ黒色帯下位のそれと対応することから第Ⅱ黒色帯を認定したが、ATが確認されないことによりやや説得力の欠けるものとなった。次の問題になるのは第Ⅳ層～第Ⅵ層の細分を重鉍物分析で行うことができなかつたことである。石器類の出土が多いこれらの層序の細分が可能な鉍物分析の方法を追求するのが今後の課題となろう。

次は花粉分析である。その目的は、土壌中に含まれている埋没花粉・胞子化石を検出し、その種類と産出量を分析することにより、過去の植生を復原し、さらに復原された植生から気候や環境の移り変りを推定することである。そして、石器群の変遷と古環境がどのようなかわりを持っていたのかを究明していくことも目的である。本遺跡では残念ながら前述したように第Ⅳ層～第Ⅵ層の層序区分が不明確であったため、この点についての十分な考察ができないのが現状である。分析の結果、従来冷涼であると推定されていた第Ⅲ層と第Ⅳ層～第Ⅵ層上部の古気候が本遺跡では暖かな温帯であると報告されている。この違いは単純に古植生の地点差やロームの堆積差によるものとは考えられないので今後検討の必要がある。

縄文時代について

住居跡5軒、埋甕3基、炉穴20基が該当する。

これらはその配置から大きく南、北の2群に分けられる。

北群は台地の比較的奥部を中心に広がり、住居跡5軒、埋甕1基、炉穴10基から成る。南群は舌状台地の先端部から平坦部にかけて広がり、埋甕2基、炉穴10基が存在するが、住居跡は検出されなかつた。

住居跡は疎らに分布しているが、未調査区域の存在も考慮すればまだ東側に広がる可能性もあり、最終的には中期として一般的な環状集落になるものと思われる。舌状台地の先端部周辺からは検出されなかつたが、これは後世の遺構により煙滅したというよりは、六通貝塚との立地関係から集落は調査区の北側を中心として広がっていることによるものと考えたい。住居跡はいずれも加曾利EⅢ・Ⅳ式土器を伴い、概ね径4m前後の不整円形を呈する。土器型式からみると、J05号跡が他の住居跡より時期的にはやや先行するようである。

埋甕は3基とも加曾利EⅢ式に含まれ、住居跡よりははややく設置されている。

北群の炉穴群があたかも中期の集落のように環状に設営されているのに対し、南群のそれは

台地斜面を中心に疎らに分布している。遺物は早期末の茅山式土器を併出するが、その中でも時間的な幅を認めることができる。

古墳時代について

古墳5基（主体部8）と住居跡2軒が該当する。

古墳群の立地は、1、2号墳が台地の比較的奥部の平坦地に位置する（以下A群とする）のに対し、3、4、5号墳は舌状台地の縁辺部に占地する（以下B群とする）。両群の距離は約155mで、この間に古墳が築造された痕跡はみあたらず、明らかに別個の古墳群として意識され、形成されたと考えられる。

墳形は、1、4号墳が径約30mの円墳、2、3、5号墳が長15～17mの方墳である。円墳は方墳よりも規模が大きく、一基の円墳の周辺に方墳を築造して一つの群を形成した様相をみせている。3号墳は斜面上にかかって位置しているためか不定形な方形の周堀をもち、やや墳形がくずれている。墳丘は1号墳が比較的良好に遺存していた他は、完全に削平されている（4、5号墳）か、あるいはわずかに40～50cmの高さに残存している（2、3号墳）にすぎない。構築は中央部に核になる盛土を行ったのち次第に高く盛り上げる方法をとっている。東南部地区の該期の古墳では通有の手法である。

主体部は、1号墳第2主体部が土壌である他は、いわゆる半地下式の横穴式石室である。隣接するムコアラク古墳群で認められたような箱式石棺は検出されていない。石室は玄室、羨道部の構造を一応とっているが、羨道部が次第に退化し形骸化しつつある傾向が認められる。特に5号墳第1石室は最も形骸化したものであろう。概してA群の石室の方が構築状態は良好である。B群のうち4、5号墳では2基の主体部が検出されたが、石室の構築状態に明らかな差異が認められる。すなわち、4号墳では第1主体部から第2主体部へ、5号墳では第2主体部から第1主体部へ、という構築の時間差が羨道部等の状態からうかがえる。構築材はいわゆる軟砂岩で、第三紀層（成田層）を切り出したものであることが確認されている（田坂・白井1979）。

また、いずれの石室でも追葬の痕跡は認められず、単次葬のために構築されたと考えられる。本古墳群では石室は横穴式石室の構造を採用しているが、機能的には追葬を行えるような石室の状態ではないので、新たな石室を構築することで「追葬」としていたと想定される。

副葬品として石室内より出土した遺物には2つの大きな相が認められる。すなわち、武器類と玉類である。武器類としては直刀、鉄鏃、刀子が副葬されていたが、これを中心に出土した古墳は、1号墳第2主体部、4号墳第2石室、5号墳第2石室である。複数の主体部をもつ古墳では一方がこの遺物相となっている。玉類のみが副葬された古墳は、3号墳、5号墳第1石室である。玉類の組成は、勾玉、管玉、切子玉、棗玉、丸玉、白玉、小玉となっている。この

うち注目される遺物としては、1号墳第1石室出土の銅製小玉と、5号墳第1石室出土のガラス製勾玉があげられる。銅製小玉は4個検出され、うち1個には紐が残存している。細い銅板を管状にまらめて製作されたと考えられるもので、いわゆる中空玉とは異なる。木更津市大山台第24号墳第2主体部から1点、同第27号墳からは8点の銅製小玉が検出されているのが今のところ県内での唯一で類列であるが、大きさは1号墳の方が大きく、製作技法も異なるようである。ガラス製勾玉は鈴木容子氏により全国的な集成がなされている(椋山・鈴木1977)。それによればこれまで46か所の古墳等から出土しているが、このうち緑色の勾玉を出土し、5号墳と同時期の古墳には酒々井町狐塚古墳と石川県鹿角郡のハリ塚古墳があげられる。県内では狐塚の他に我孫子市白山1号墳、木更津市大山台第5号墳、同長須賀から出土している。5号墳の勾玉は他のものよりやや大きめで、材質は分析を行っていないので断定はできないがアルカリ石灰ガラスと考えたい。

古墳の年代を想定し得る遺物としては須恵器をあげることができる。1号墳第1主体部掘り方北西コーナー上の墳丘盛土最上面より出土した平瓶は、肩部にやや丸味を残しているが、口頸部が二段構成のつくりから有線的に変化していることから7世紀中葉頃の所産と考えられる。2号墳は1号墳よりも後出だが、石室の構築状態等から7世紀第3四半期頃に築造されたと把えたい。3号墳石室正面の周堀覆土中から出土した短頸壺は、墳丘上に置かれていた可能性が強い。口縁部は、それまでの二段口縁から段が次第に退化し、一重口縁となっていく過程のものであることから7世紀後半頃のものと思われる。4号墳第1石室羨道部内からは、台付長頸瓶、甗、平瓶が出土している。3点とも東海地方のうち三河から遠江にかけての地域で製作されたと考えられる。台付長頸瓶は、口頸部や台脚部の形態と櫛目列点文などの特徴から7世紀第3四半期に製作されたと考えられる。甗、平瓶も同時期の所産であろう。第2石室はやや後出し、7世紀第4四半期と把えたい。5号墳第2石室はすでに盗掘を受けていたが、石室内から散乱して検出された長頸瓶口頸部は、8世紀初頭の所産と思われる。第1石室は石室の構造等からやや後出し、8世紀第1四半期に含まれると把えられる。

以上のことにより、本古墳群はまず台地奥部に1号墳が、次いで2号墳、4号墳が形成され、最後に4号墳の周辺に3号墳、5号墳が築造されていったと考えられる。被葬者の性格については現状では不明である。4号墳からは東南部地区では初めて鉄釘を用いた組合式木棺の使用痕跡が確認され、さらに東海地方との交流を物語る須恵器が検出していることから、これは単に葬送の変化というよりは、この地域の一つの時代的画期として把えられる。

2軒の住居跡から検出された土器は鬼高式の新しい時期の特徴を示している。O02号跡は、3号墳の周堀によって削平されていることから7世紀前半と考えたい。

歴史時代について

国分期の住居跡2軒が該当する。

2軒とも坂崎谷津に張り出した舌状台地の先端部と縁辺部に位置している。この台地上には同時期の遺構は認められなかったが、坂崎谷津を挟んだ台地上に所在する当該期の住居跡16軒等を検出したムコアラク遺跡との関連において本遺跡の住居跡の性格を究明することが今後の課題となろう。

参 考 文 献

- ア 青木 豊・小西 雅徳 1980 『相原田ノ上遺跡』 相原田ノ上遺跡発掘調査団
 石田 広美 1980 『君津広域水道用水供給事業に伴う埋蔵文化財発掘調
 査報告書一角山遺跡・深城遺跡・飯富遺跡・苗見作遺
 跡』 君津広域水道企業団
- 大沢 正己 1979 「西日本を中心とした鉄釘の研究」
 『郷土八幡』第2号 八幡郷土史会
- 岡本 孝之・鈴木 次郎他 1977 「尾崎遺跡」 『神奈川県埋蔵文化財調査報告』13
 小田 幸子 1971 「ガラス工」 『新版考古学講座』9 雄山閣
 小田 静夫 1979 「武蔵野台地における旧石器時代の環境と石器文化」
 『考古学ジャーナル』No.167
- カ 金子 浩昌・西川 博孝 1978 『飛の台貝塚発掘調査概報』 飛の台貝塚発掘調査団
 神原 英郎他 1976 「岩田古墳群」 『山陽新住宅市街地開発事業用地内埋
 蔵文化財発掘調査概報(6)』
- 菊池真太郎・豊田 佳伸 1976 『千葉市誉田県立コロニー内遺跡』
 千葉県文化財センター
- J.E.キダー・小田 静夫編 1975 『中山谷遺跡』 国際基督教大学考古学研究センター
 吉良 哲明 1959 『原色日本貝類図鑑』増補改訂版 保育社
- 国平 健三・岡本 孝之他 1979 「上浜田遺跡」 『神奈川県埋蔵文化財調査報告』15
 郷田 良一・小宮 孟他 1979 「木戸作遺跡(第2次)」 『千葉東南部ニュータウン七』
 後藤 守一 1928 『考古学講座 歴史時代の武器と武装』 雄山閣
- 小林 三郎・熊野 正也編 1976 「法皇塚古墳」 『市立市川博物館研究報告』第3冊
 小林 達雄・小田 静夫・羽鳥 謙三・鈴木 正男
 1971 「野川先土器時代遺跡の研究」
 『第四紀研究』 第10巻4号
- 小林 行雄 1964 『続古代の技術』 塙書房
- サ 齊木 勝・折原 繁・矢戸 三男他
 1978 『千葉市築地台貝塚平山古墳』 千葉県文化財センター
 静岡県考古学会 1979 『須恵器—古代陶質土器—の編年』

- 白石太一郎他 1976 「葛城・石光山古墳群」 『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第31冊
- 白石 浩之・山本 暉久他 1977 「当麻遺跡・上依知遺跡」 『神奈川県埋蔵文化財調査報告』12
- 梶山 林継・鈴木 容子他 1977 『請西』 木更津市請西遺跡調査会
- 杉山 晋作・沼沢 豊他 1972 『古墳時代研究Ⅰ—千葉県市原市小田部古墳の調査—』 古墳時代研究会
- 杉山 晋作 1976 「房総における古墳の変革(前)」 『史館』第6号
- 杉山 晋作 1976 「房総における古墳の変革(後)」 『史館』第7号
- 鈴木 次郎・矢島 国雄 1978 「先土器時代の石器群とその編年」 『日本考古学を学ぶ(1)』 有斐閣選書
- 鈴木 次郎・白石 浩之 1980 「寺尾遺跡」 『神奈川県埋蔵文化財調査報告』18
- 鈴木道之助 1975 「千葉県の遺跡」 『日本の旧石器文化』2 雄山閣
- 鈴木道之助・古内 茂 1976 『研究紀要1』 千葉県文化財センター
- 鈴木道之助・大原 正義他 1978 『佐倉市星谷津遺跡』 千葉県文化財センター
- 清藤 一順他 1978 「復山谷遺跡」 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書』VI 千葉県文化財センター
- 関川 尚功・生田 維道他 1979 「新庄火野谷山古墳群」 『奈良県文化財調査報告書』第31集
- タ 滝口 宏・市毛 勲他 1974 『東間部多古墳群—上総国分寺台遺跡調査報告Ⅰ—』
- 田坂 浩・白井久美子 1979 「ムコアラク遺跡・小金沢古墳群」 『千葉東南部ニュータウンⅧ』
- 田中 彩太 1978 「古墳時代木棺に用いられた緊結金具」 『考古学研究』第25巻第2号
- 田中 琢・田辺 昭三編 1977 「須恵器」 『日本陶磁全集』4 中央公論社
- 田辺 昭三 1966 『陶邑古窯址群Ⅰ』 平安学園考古学クラブ
- 田辺 昭三 1975 「須恵」 『陶磁大系』4 平凡社
- 田辺 昭三 1978 「弥生土器須恵器」 『日本原始美術大系』2 講談社
- 種田 齊吾・谷 旬 1977 「生浜古墳群」 『千葉東南部ニュータウンⅣ』
- 種田 齊吾・斉木 勝 1978 『千葉市荒屋敷貝塚—貝塚中央部発掘調査報告—』 千葉県文化財センター
- 玉口 時雄他 1975 『公津原』 千葉県北総公社

- 千葉市史編纂委員会 1974 『千葉市史—原始, 古代, 中世編—』
- 千葉市史編纂委員会 1976 『千葉市史資料編1—原始, 古代, 中世編』
- 土肥 孝・岡本 東三 1979 「福井県鳴鹿遺跡出土の局部磨製石斧」
『考古学雑誌』第65巻第1号
- 東京大学文学部考古学研究室1969 『我孫子古墳群』
- 戸沢 充則・堀越 正行 1974 「美濃輪台—A地点(貝塚)—」 『市立市川博物館研究
調査報告』第1冊
- ナ 中村 恵次・折原 繁 1976 『千葉市中野僧御堂遺跡』 千葉県文化財センター
- 中村 恵次 1978 『房総古墳論攻』
- 中村 浩他 1976 「陶邑」I 『大阪府文化財調査報告書』第28輯
- 中村 浩他 1977 「陶邑」II 『大阪府文化財調査報告書』第29輯
- 中村 浩他 1978 「陶邑」III 『大阪府文化財調査報告書』第30輯
- 楢崎 彰一他 1963 『新編—宮市史 資料編三 浅井古墳群』
- 楢崎 彰一他 1979 『岐阜市史 史料編 考古・文化財』
- 楢崎 彰一編 1979 『世界陶磁全集2 日本古代』 小学館
- 沼沢 豊 1975 「椎名崎古墳群(第1次)」
『千葉東南部ニュータウン—』
- 野中 徹他 1976 『狐塚古墳』 狐塚古墳発掘調査会
- ハ 橋口 達也他 1979 「池の上墳墓群」 『甘木市文化財調査報告』第5集
- 八賀 晋編 1980 「須恵器」 『日本の美術』170 至文堂
- 波部 忠重 1961 『続原色日本貝類図鑑』 保育社
- 原口 正三 1979 「須恵器」 『日本の原始美術』4 講談社
- 福岡 澄男 1969 「鉄釘接合木棺の復原と鉄釘について」
『滋賀県文化財調査報告』第4冊
- 古内 茂 1971 「No.55遺跡」 『三里塚』 千葉県北総公社
- マ 前園実知雄・泉 武 1978 「桜井市外鎌山北麓古墳群」 『奈良県史跡名勝天然記
念物調査報告』第34冊
- 松村 恵司・石田 広美他 1977 『山田水呑遺跡』 山田遺跡調査会
- 望月 董弘・中野 宥 1979 「駿河井庄段古墳」 『静岡市立登呂博物館研究調査報
告』第5集
- ヤ 矢戸 三男他 1972 『にとな』 仁戸名古墳群発掘調査団
- 八幡 一郎・新津 健他 1975 『佐倉道南』 船橋市教育委員会

THE ROKUTSŪ-KANAYAMA SITE

The Rokutsū-Kanayama site is located at Ōkanazawa, Chiba city, Chiba prefecture. The site sits on the Shimofusa Terrace about 47 meters above sea level. This terrace is dissected by a complex geographical system of steep-sided tributary stream of the Murata River flowing into the Bay of Tokyo.

This investigation reported here was rescue operations brought about by the construction of the Chiba Tōnanbu New Town, and was carried out by the Cultural Properties Center of Chiba Prefecture under the auspices of the Chiba Prefectural Education Committee.

Preliminary investigation was done August 27 and November 13, 1976, second June 1 and November 25, 1978, and third April 1 and September 19, 1979.

Preceramic Age

Six assemblages consisted of many flakes and chips in the Layer IV-VII were excavated. In addition, several cores, the hammerstone and the anvil stone were identified. Especially, the stone axe with polished cutting edges found in the Layer VII (the Black Band II) at Loc. 3 is the first discovered artifact in the Chiba region.

Jōmon Period

Five dwelling pits (the Middle Jōmon stage; Kasori E type), three *umegame* (burial jar, the Middle Jōmon stage; Kasori E type), and twenty fire pits (the Early Jōmon stage; Kayama type) were excavated.

Kofun Period

Five tumuli (two round-type tumuli and three square-type tumuli) and two dwelling pits were excavated. The mound of Tumulus No.1 was very high, but the other four were very low or nothing already. Many offering objects were found in the stone burial chamber: various kinds of beads (*magatama*, *kudatama*, *kirikodama*, *usudama* and so on), iron objects (swords, knives, arrow-heads, nails), and Sue wares. The features of the tumuli and those artifacts dated to be about the Middle 7th. century A. D. Two dwelling pits were dated to the Onitaka

phase (the Late Kofun stage)

Heian Period

Two dwelling pits (the Kokubu phase of the Heian period) were excavated. The set of pottery as a whole consisted of the Sue wares and Haji potteries; bowls, wide-mouthed jars, and stearmers.

圖 版



1. 遺跡全景（南東から）



2. 遺跡全景（南東から）



1. 遺跡全景（南西から）



2. 4, 5号墳全景（南から）



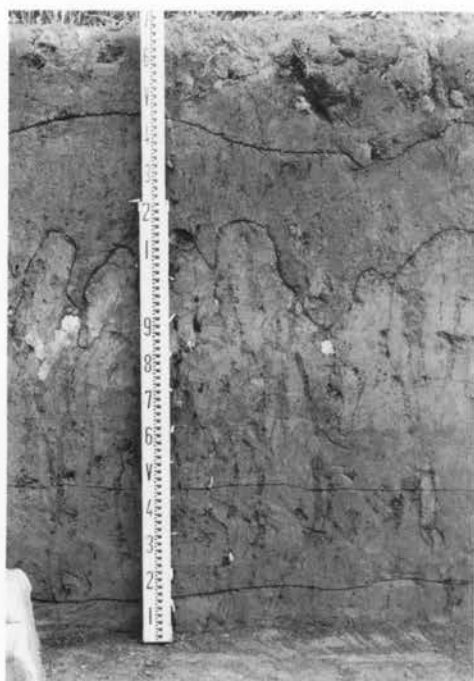
1. 遺跡近景 (調査前)



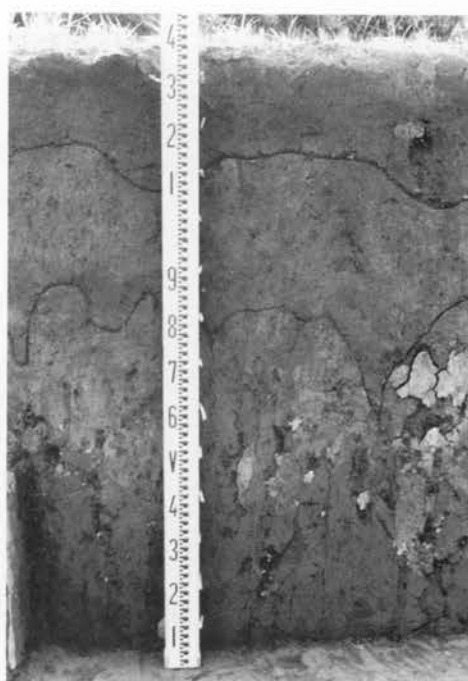
2. 遺跡近景 (調査前)



1. G32-A-3, 4



2. G11-D-30



3. G19-B-40

1. Loc. 1 遺物出土状況



2. Loc. 2 遺物出土状況



3. Loc. 6 - 5 遺物出土状況





1. Loc. 6 - 1 遺物出土状況



2. Loc. 6 - 2 遺物出土状況



3. Loc. 6 - 5 遺物出土状況



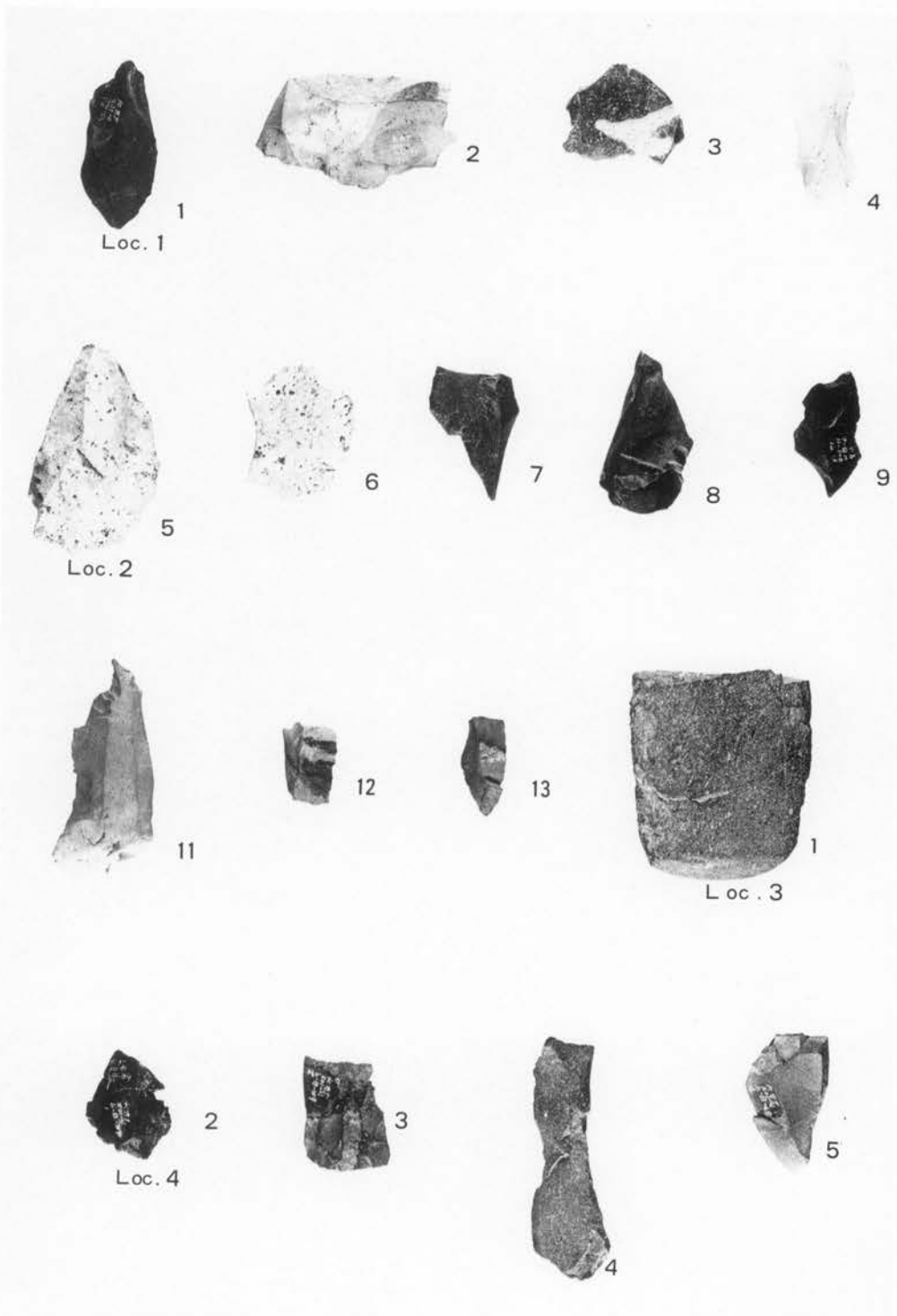
1. Loc. 6 - 8 遺物出土状況



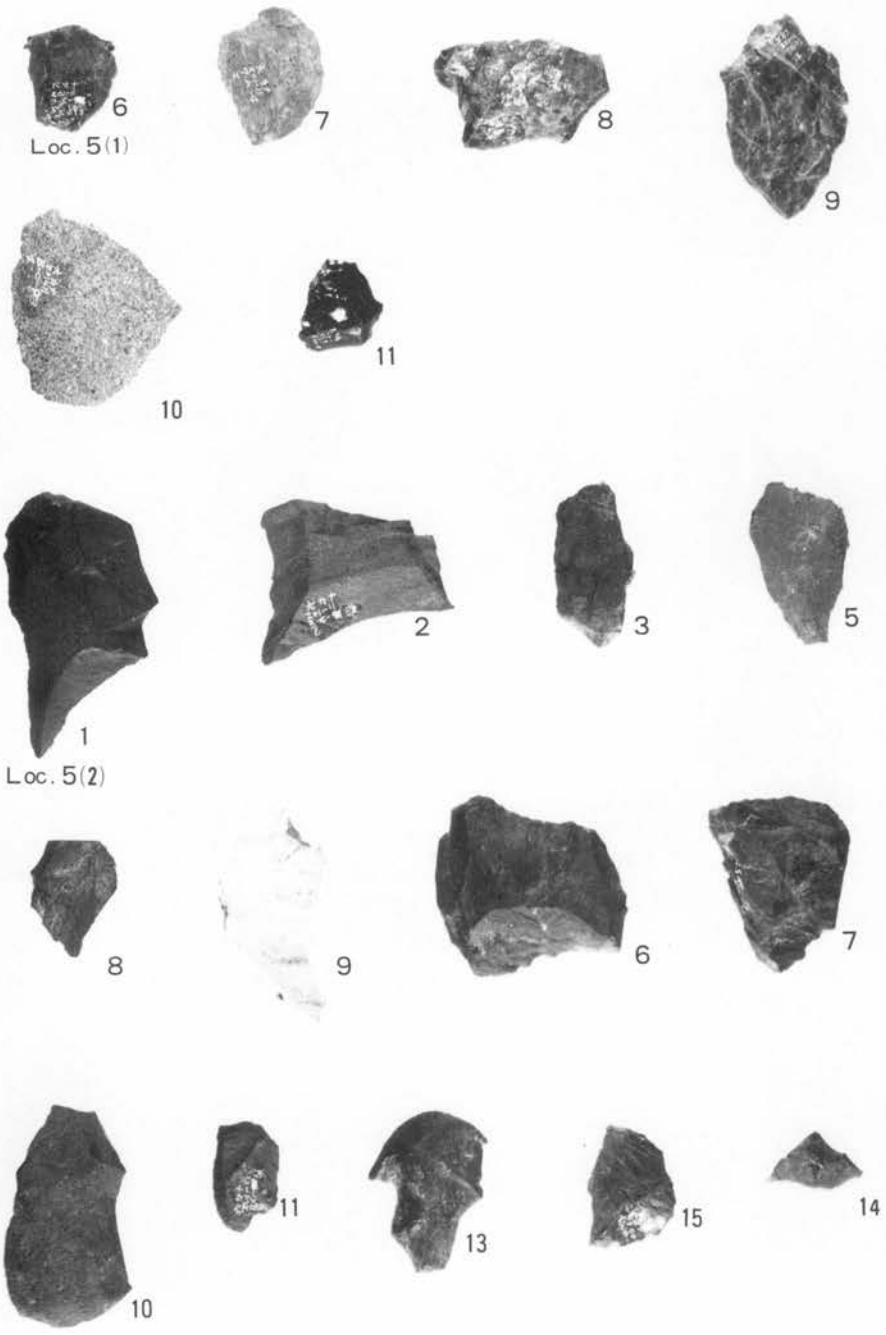
2. Loc. 5 遺物出土状況



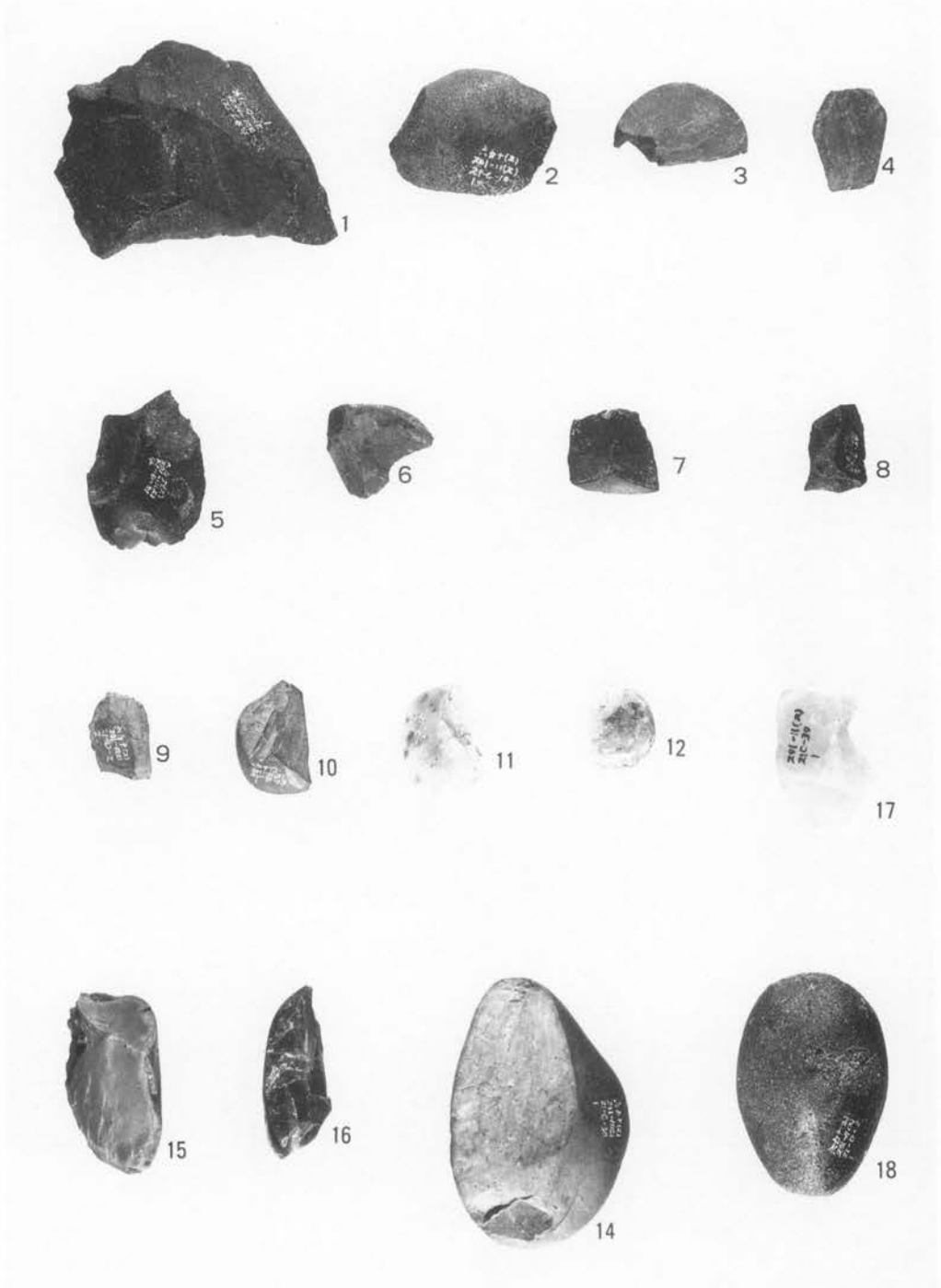
3. 発掘調査風景



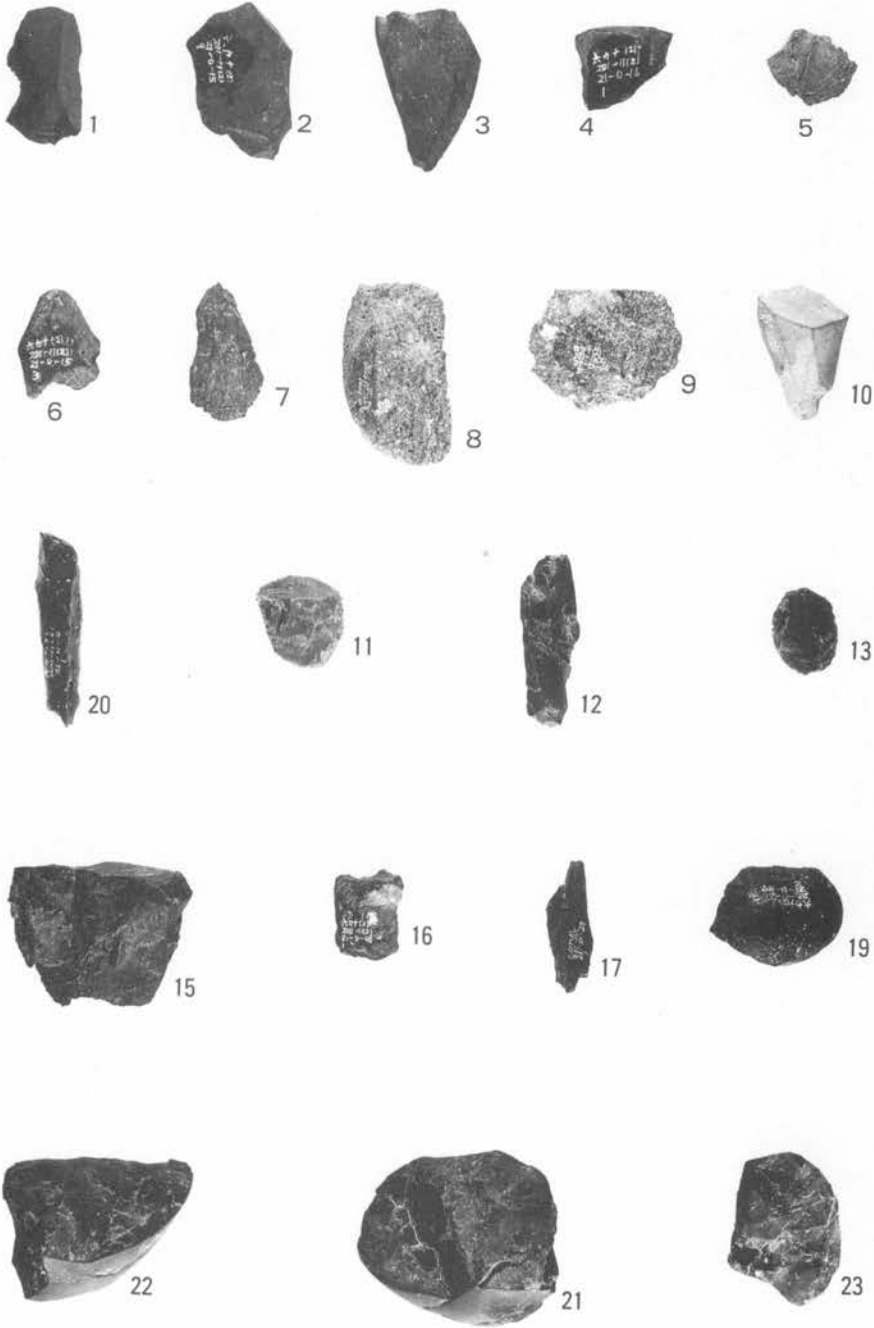
Loc. 1 ~ 4 出土石器



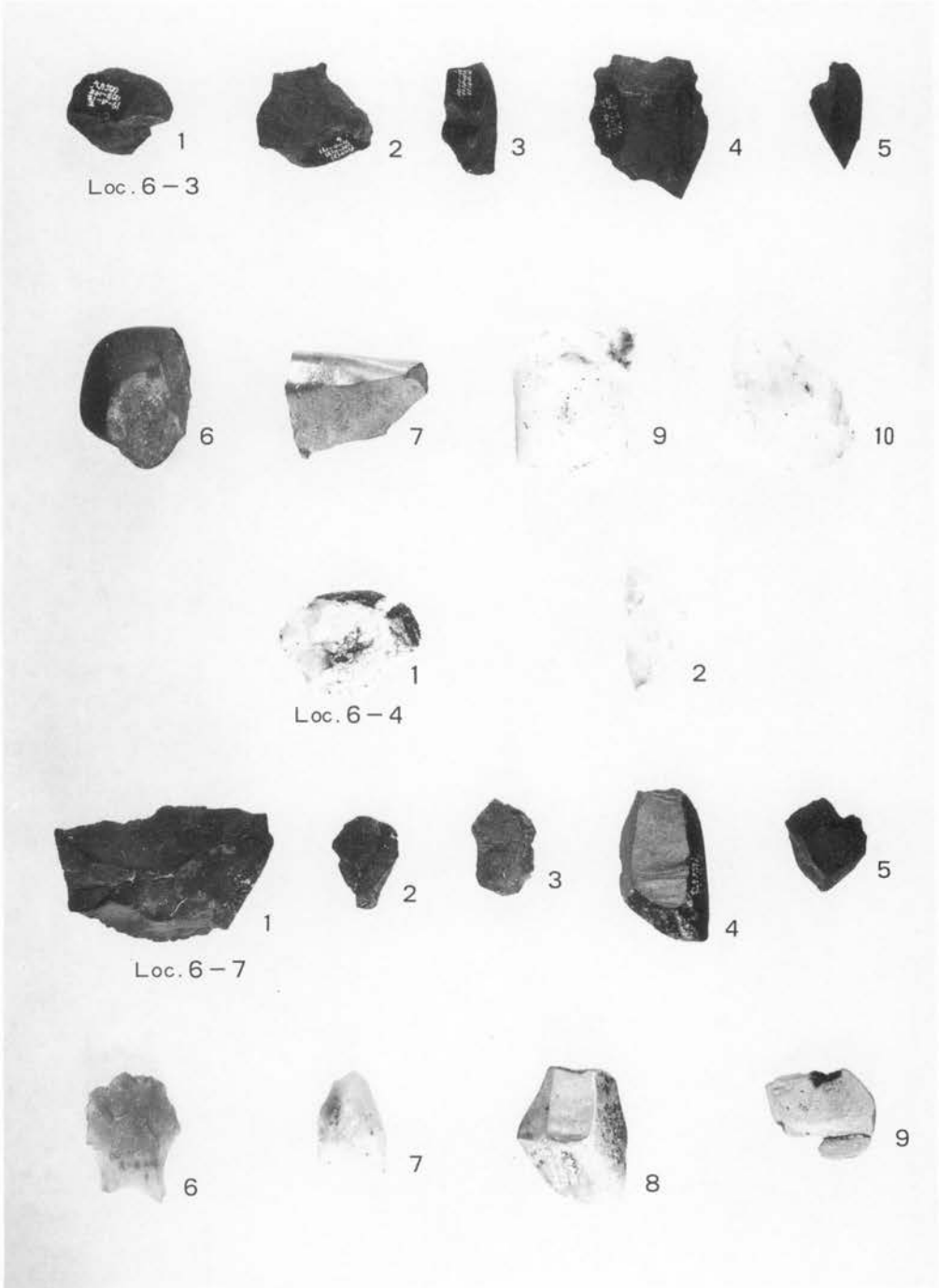
Loc. 5 出土石器



Loc. 6 - 1 出土石器

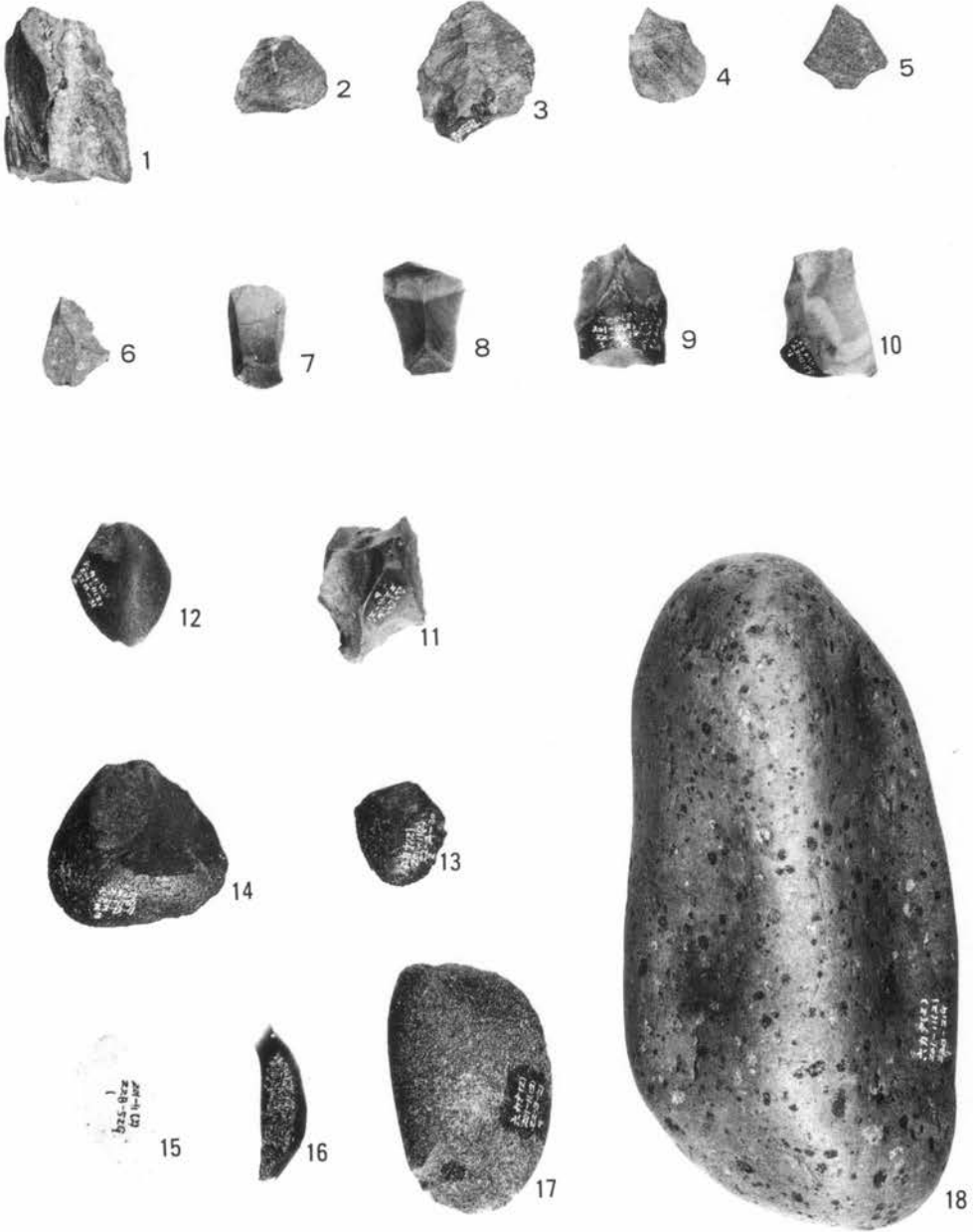


Loc. 6 - 2 出土石器



Loc. 6-3, 4, 7 出土石器

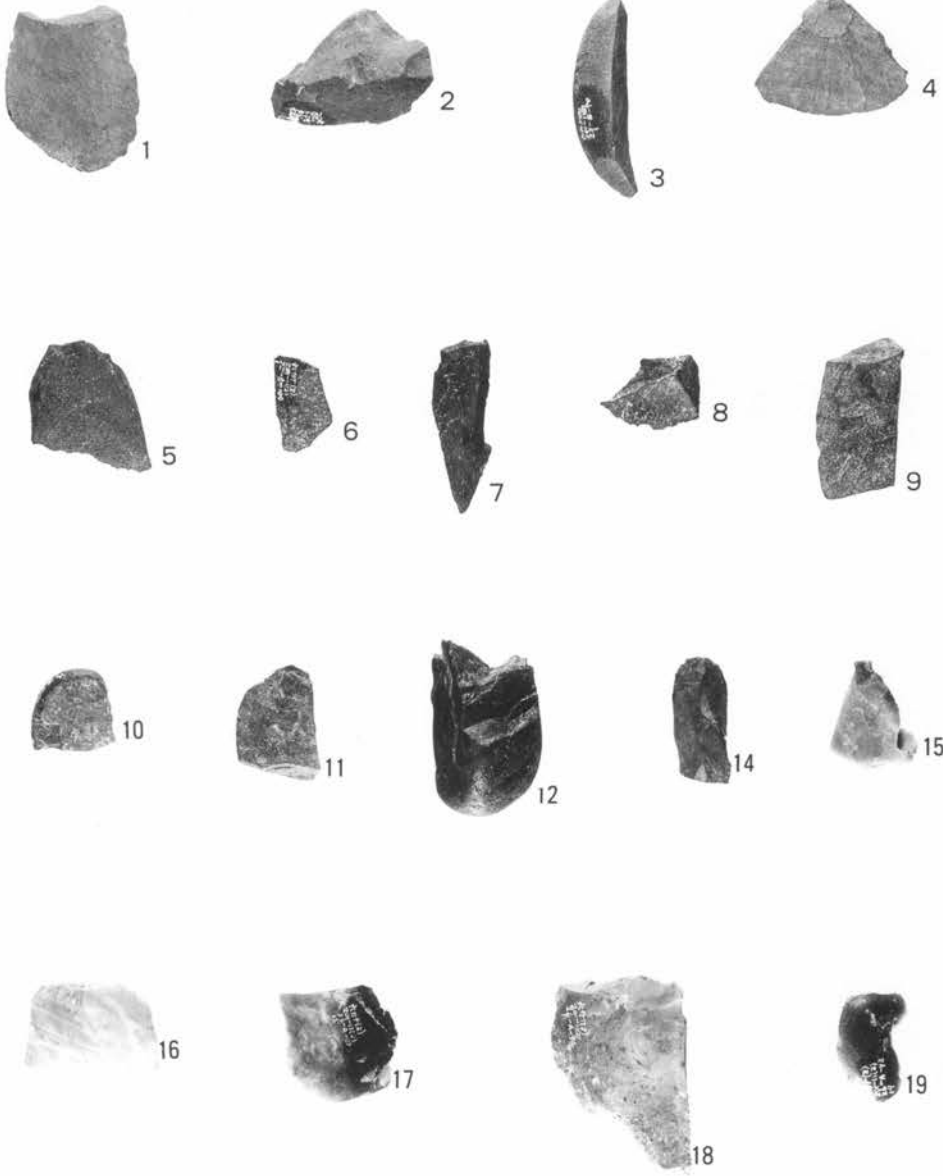
先土器時代石器(6)



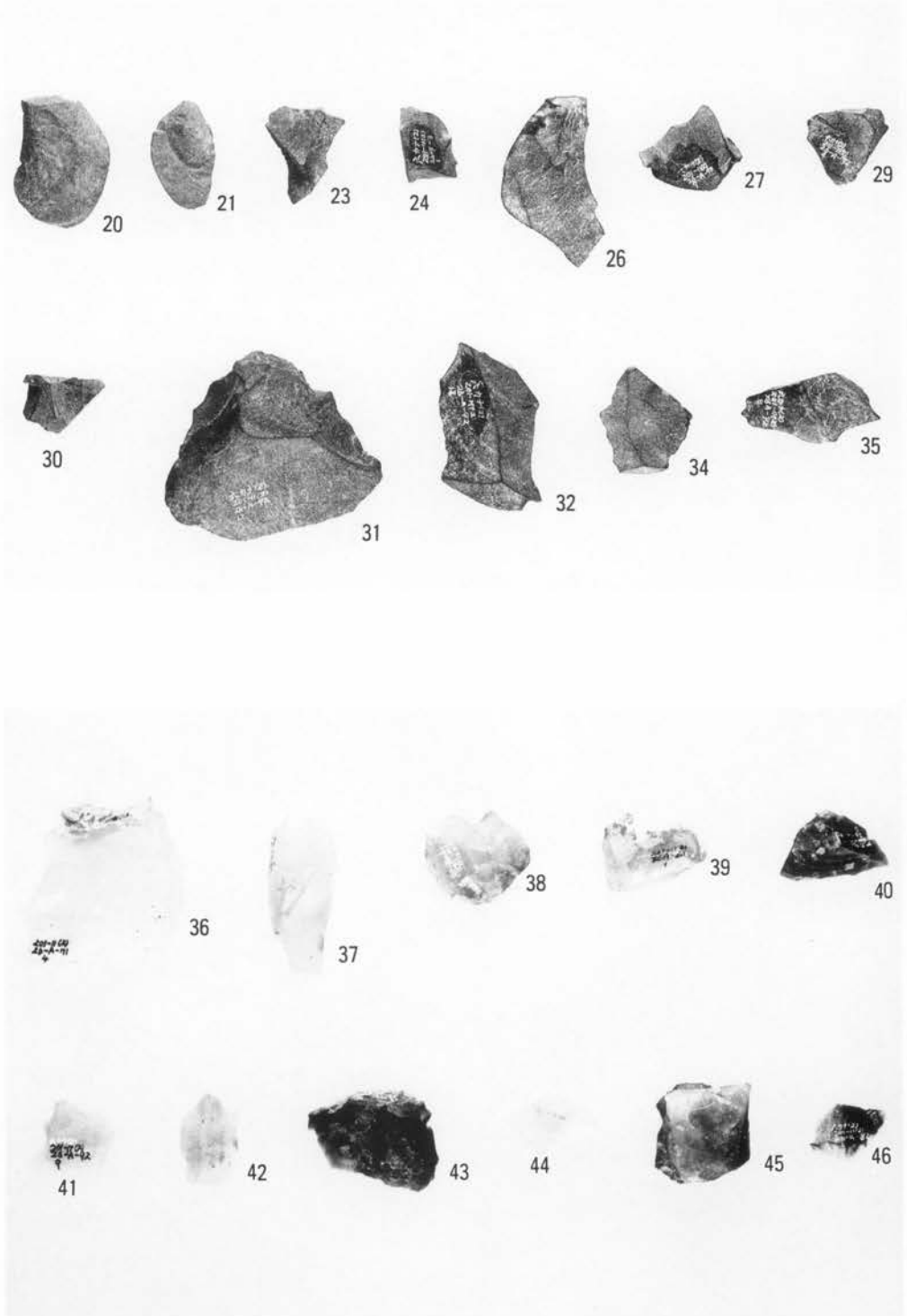
Loc. 6 - 5 出土石器



Loc. 6 - 6 出土石器



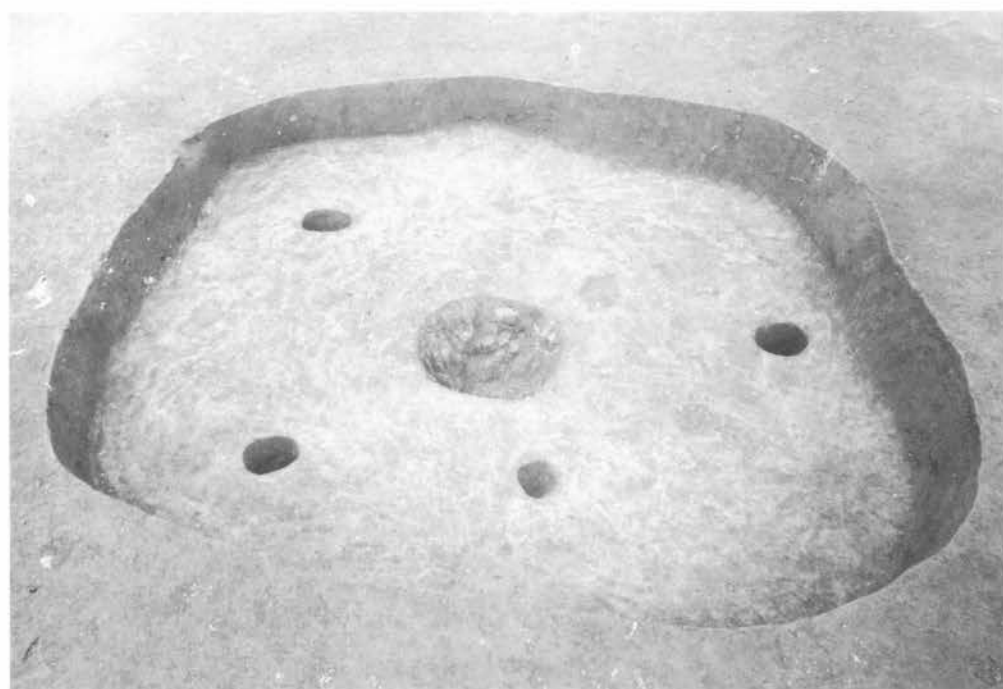
Loc. 6 - 8 出土石器(1)



Loc. 6 - 8 出土石器(2)



1. J01号跡全景（東から）



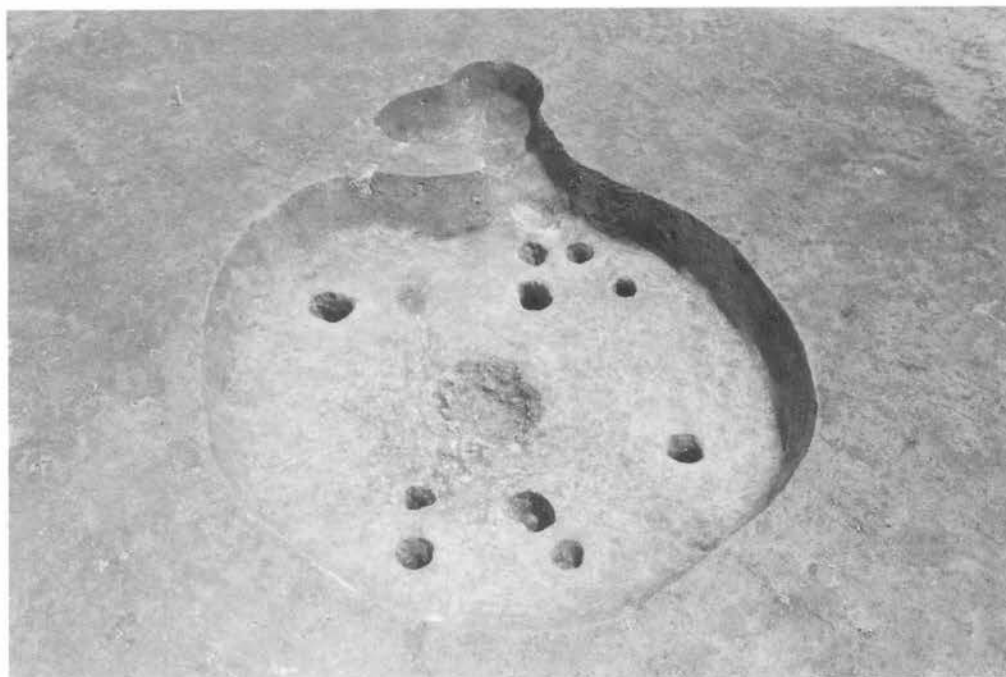
2. J02号跡全景（南から）



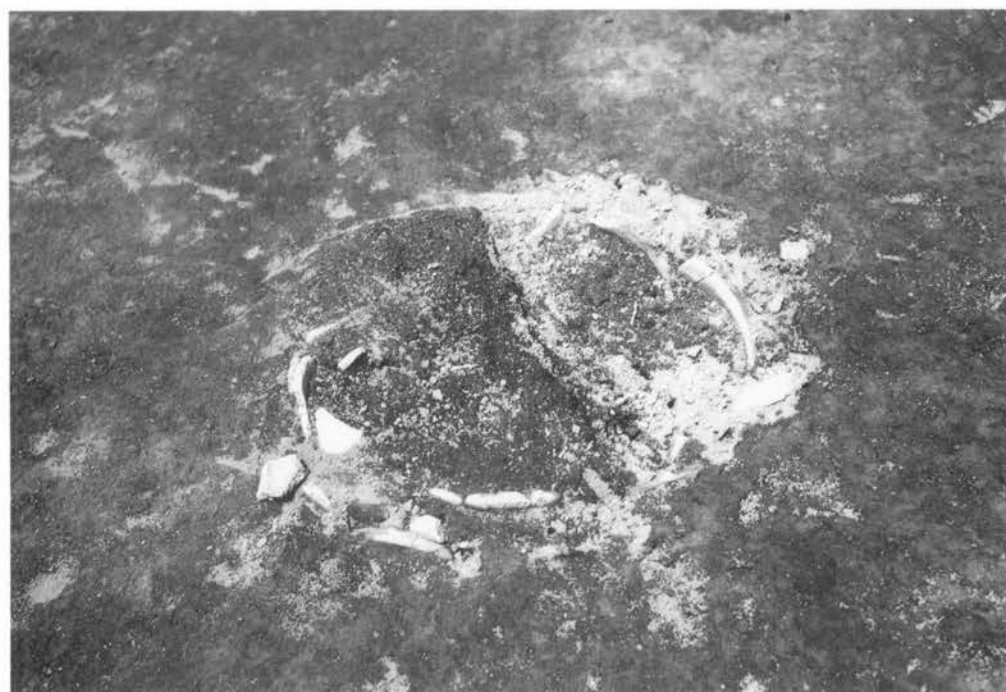
1. J 03号跡全景（南から）



2. J 04号跡全景（南から）



1. J05号跡全景(南から)



2. U01号跡



1. U02号跡

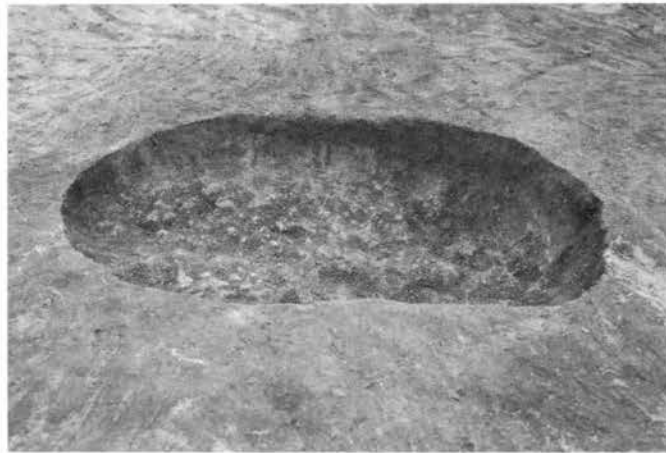


2. U03号跡

1. F.P.01号跡



2. F.P.02号跡



3. F.P.03号跡

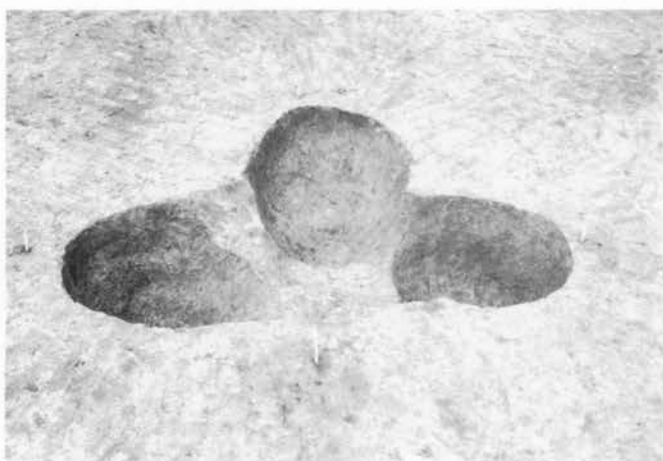




1. F.P.04, 05号跡



2. F.P.06号跡



3. F.P.07号跡

1. F.P.08号跡



2. F.P.09号跡



3. F.P.10号跡





1. F.P.11号跡



2. F.P.13号跡

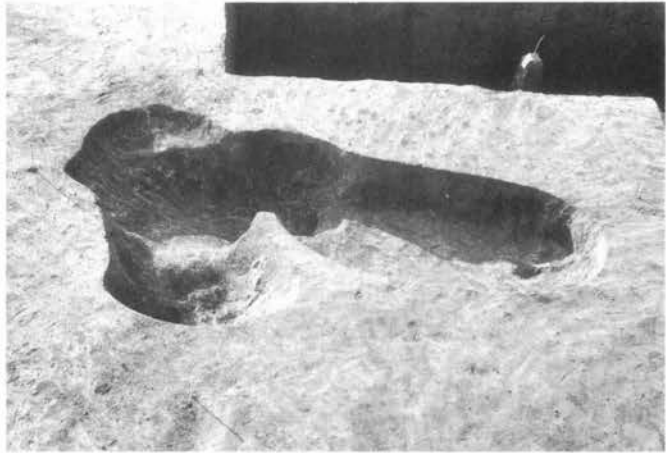


3. F.P.14号跡

1. F.P.15号跡



2. F.P.16号跡



3. F.P.17号跡





1. J 01号跡出土土器



2. J 02号跡出土土器



3. J 02号跡出土土器



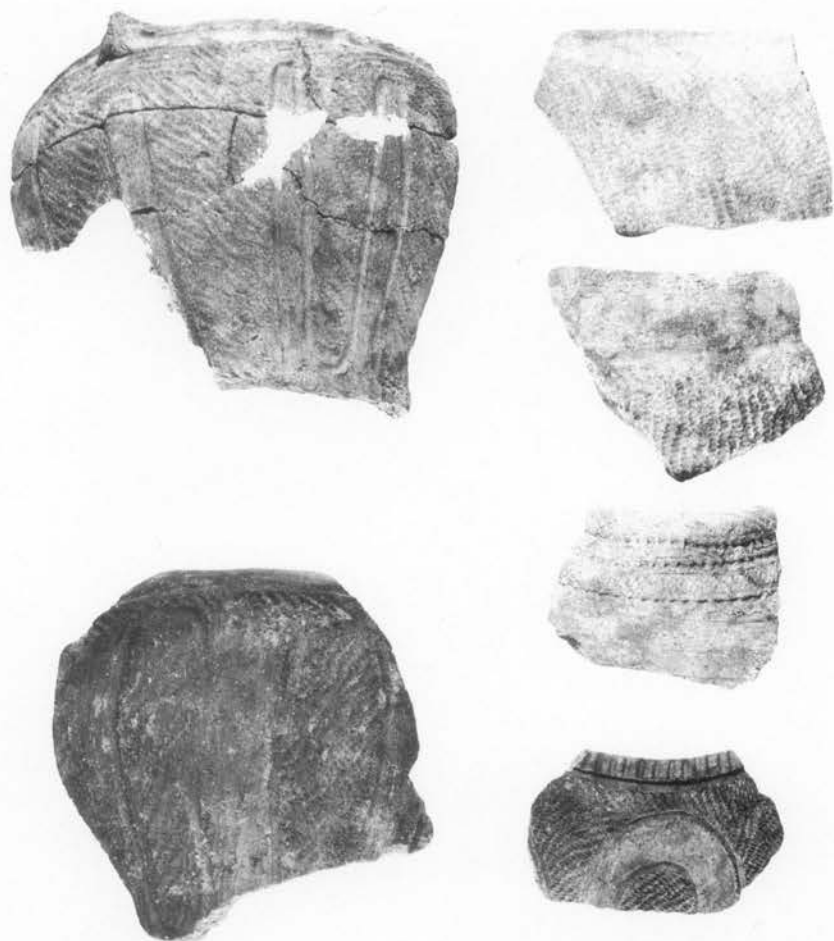
4. J 03号跡出土土器



1. J 05号跡出土土器



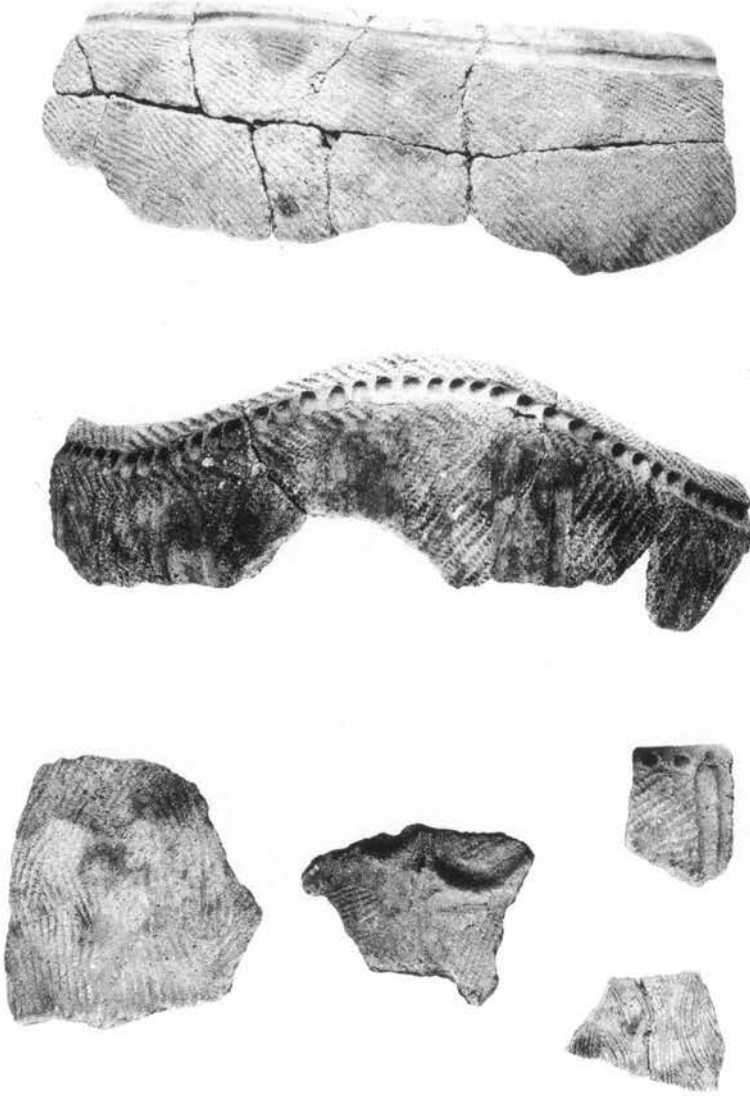
2. 住居跡出土土器

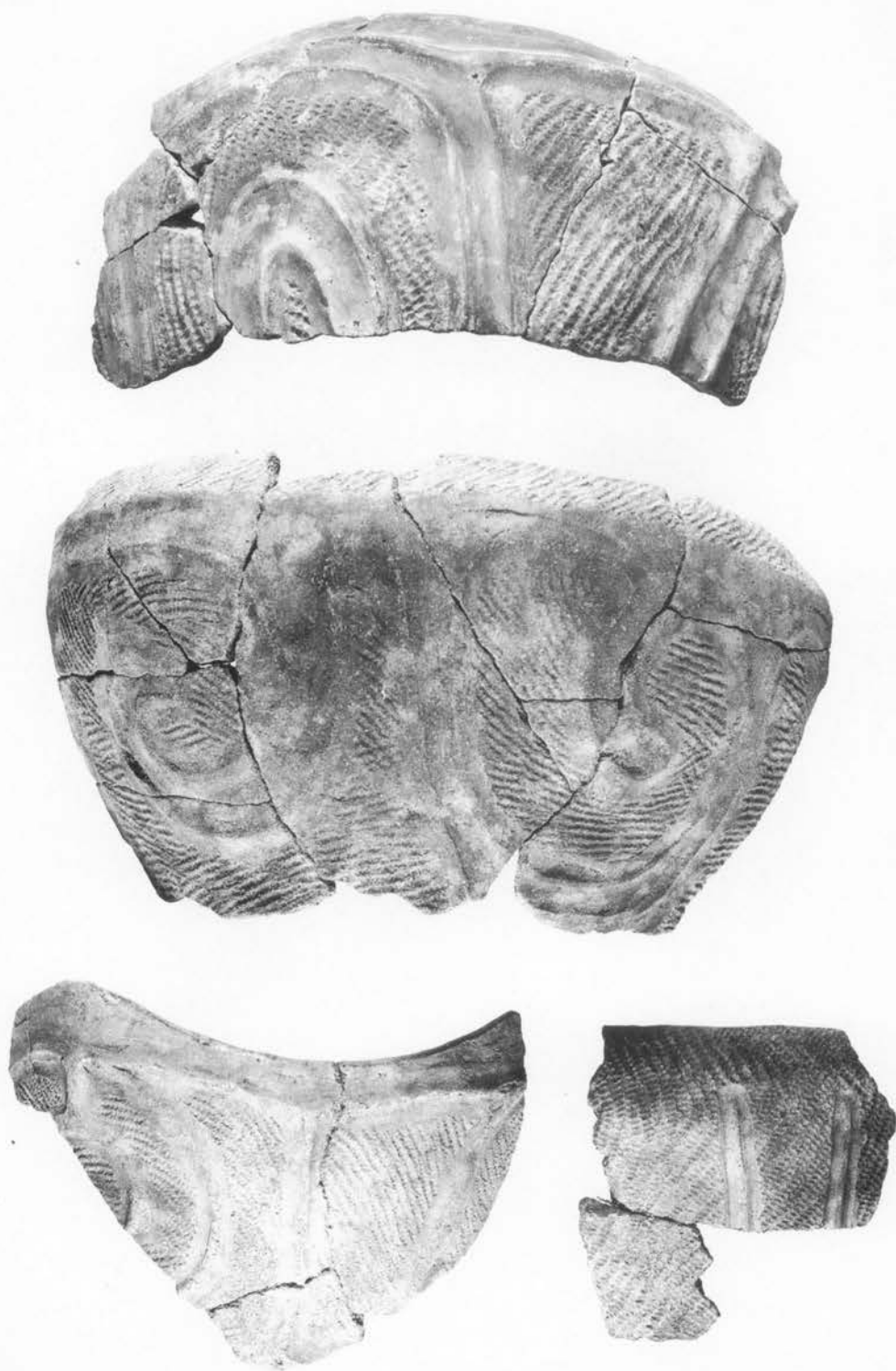


1. J 02号跡出土土器



2. J 05号跡出土土器





J 04号跡出土土器



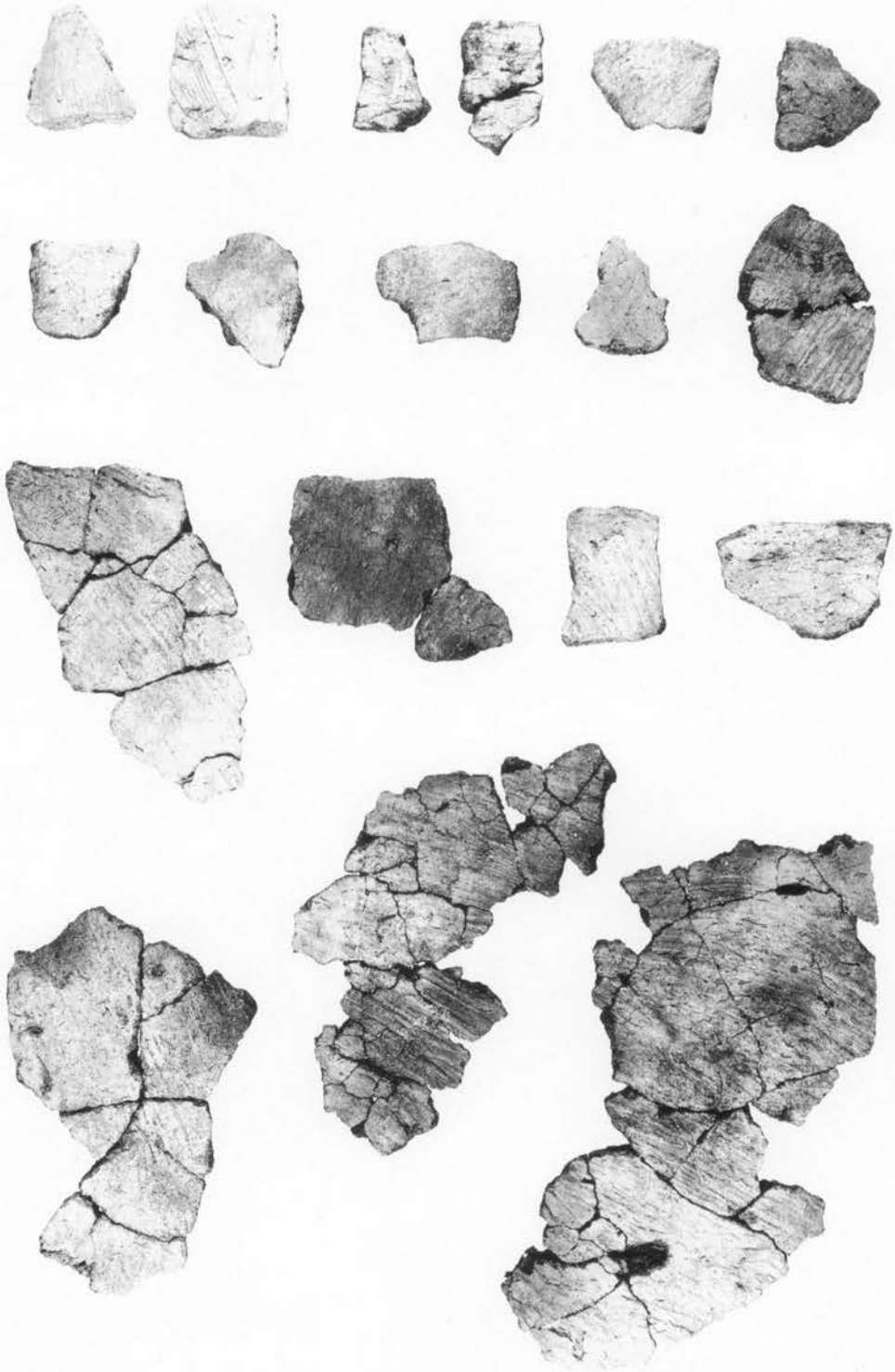
1. U02号跡出土土器



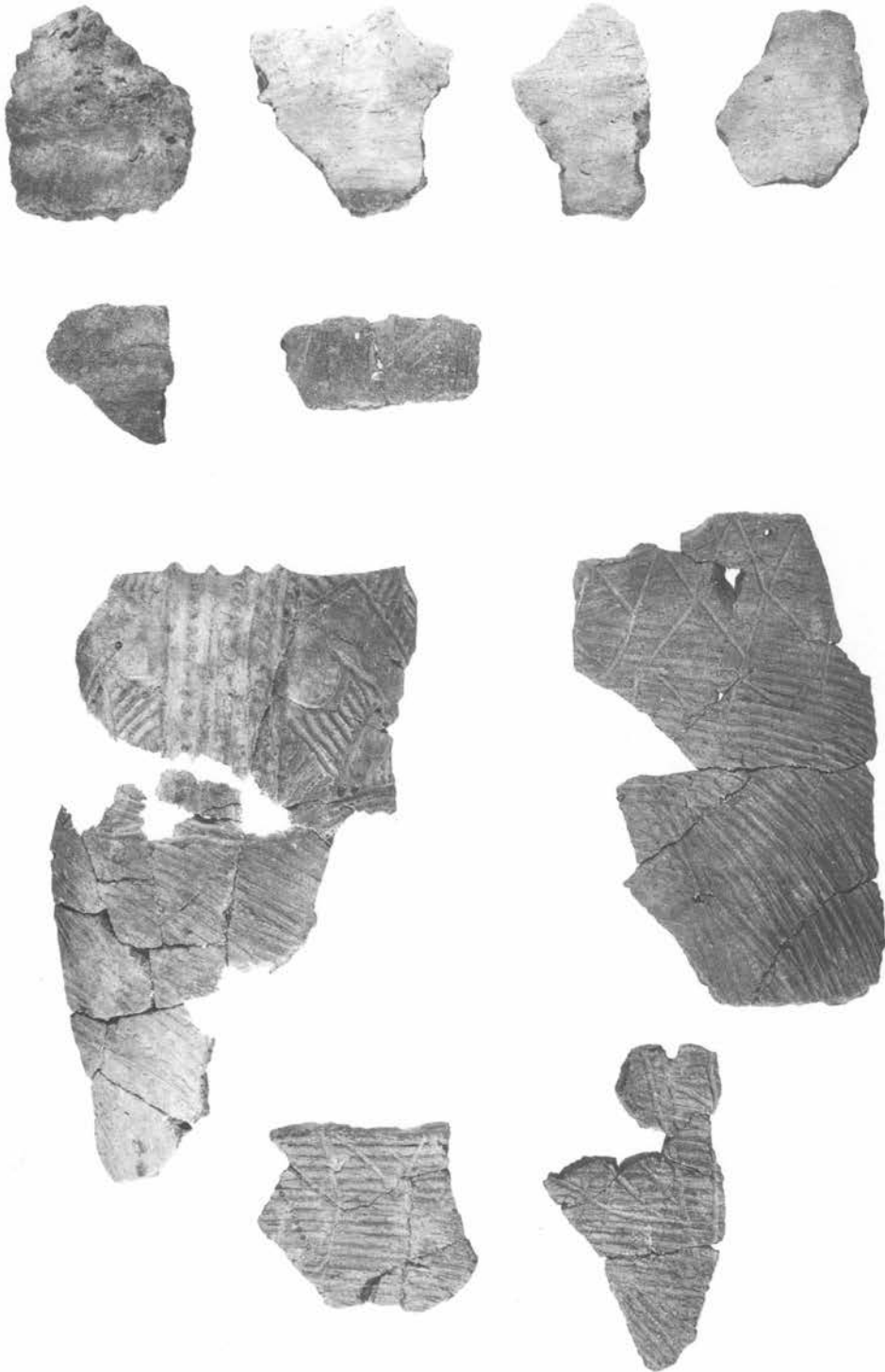
2. U03号跡出土土器



3. U01号跡出土土器



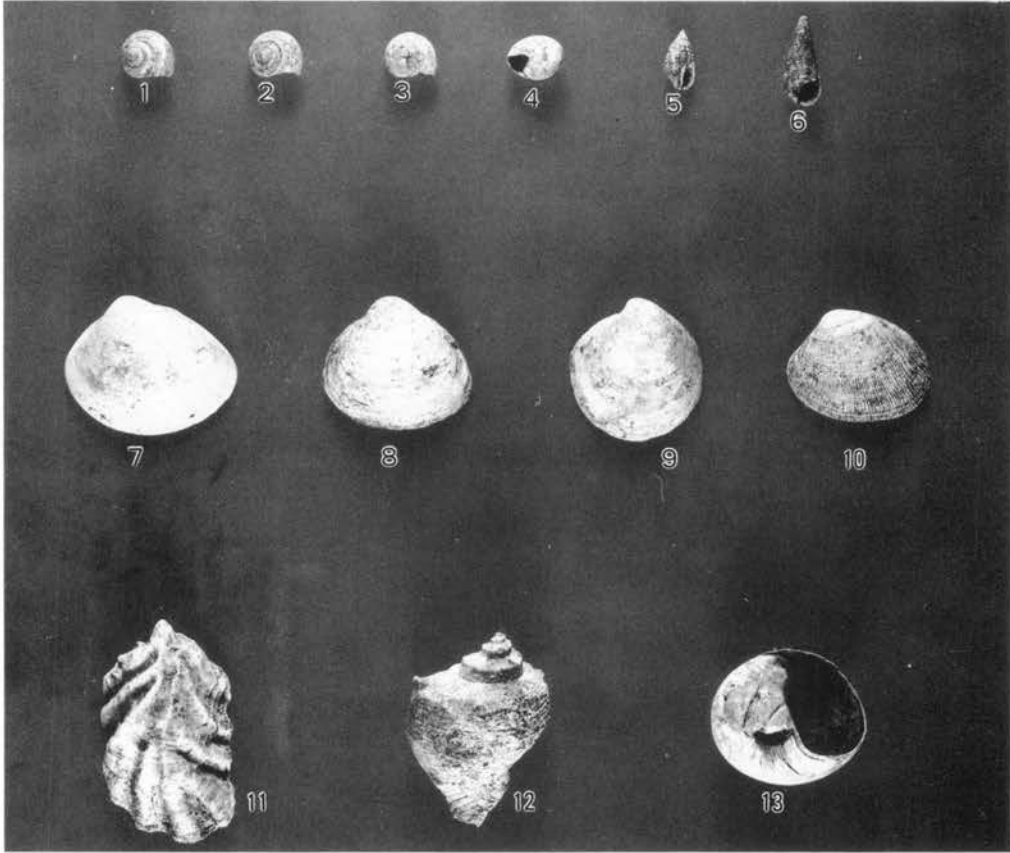
炉穴出土土器(1)



図版34

縄文時代住居跡出土の貝類遺体

1 ~ 4	イボキサゴ	<i>Umbonium (Suchium) moniliferum</i>
5	アラムシロ	<i>Hinia festiva</i>
6	ウミニナ	<i>Batillaria</i> spp
7	ハマグリ	<i>Meretrix lusoria</i>
8	シオフキ	<i>Mactra veneriformis</i>
9	オキシジミ	<i>Cyclina sinensis</i>
10	アサリ	<i>Ruditapes Philippinarum</i>
11	マガキ	<i>Crassostrea gigas</i>
12	アカニシ	<i>Rapana thomasi</i>
13	ツメタガイ	<i>Neverita (Glossaulax) didyma</i>



縄文時代住居跡出土の貝類遺体(約 $\frac{1}{2}$)



1. 墳丘全景（南から）



2. 調査後の全景（南から）



1. 墳丘断面（北西から）



2. 墳丘断面（南東から）



1. 周堀土層断面



2. 同



3. 同



1. 第1主体部全景（南から）



2. 同奥壁，左側壁（北西から）



1. 第1主体部奥壁，右側壁（北東から）



2. 奥壁背後の裏込め



3. 西側壁背後の裏込め



4. 東側壁背後の裏込め



1. 玄室内直刀出土状況
(羨道部から)



2. 羨道部内直刀出土状況
(羨門側から)



1. 第2主体部全景（東から）



2. 同直刀出土状況



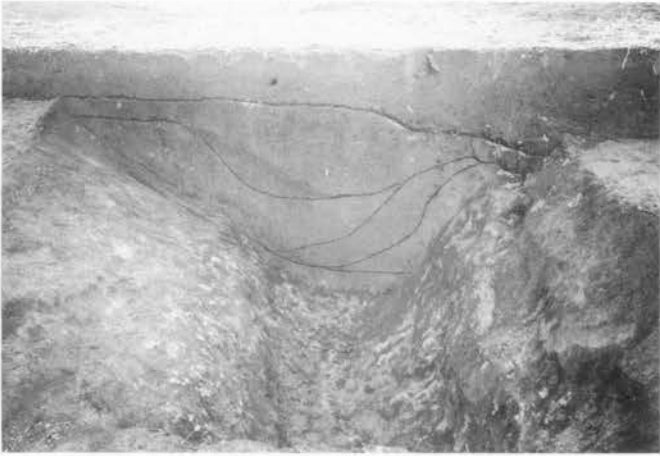
1. 墳丘全景（南から）



2. 調査後の全景（南から）



1. 周堀土層断面



2. 同



3. 同



1. 主体部全景（南から）



2. 同奥壁，左側壁（北西から）



1. 石室全景（奥壁側から）



2. 奥壁背後の裏込め



3. 玄室内遺物（人骨片）出土状況



1. 墳丘全景（東から）



2. 調査後の全景（南西から）



1. 周堀南西コーナー



2. 同北西コーナー



3. 周堀土層断面



4. 同



1. 主体部全景（南から）



2. 同



3. 同奥壁



1. 主体部の検出状況（南から）



2. 調査後の全景（南から）

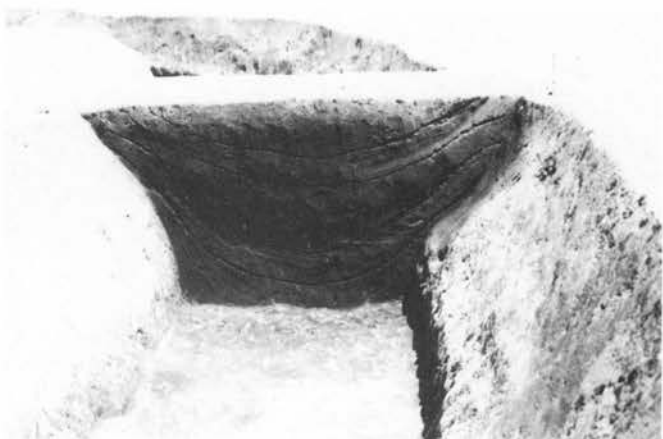
1. 周堀土層断面

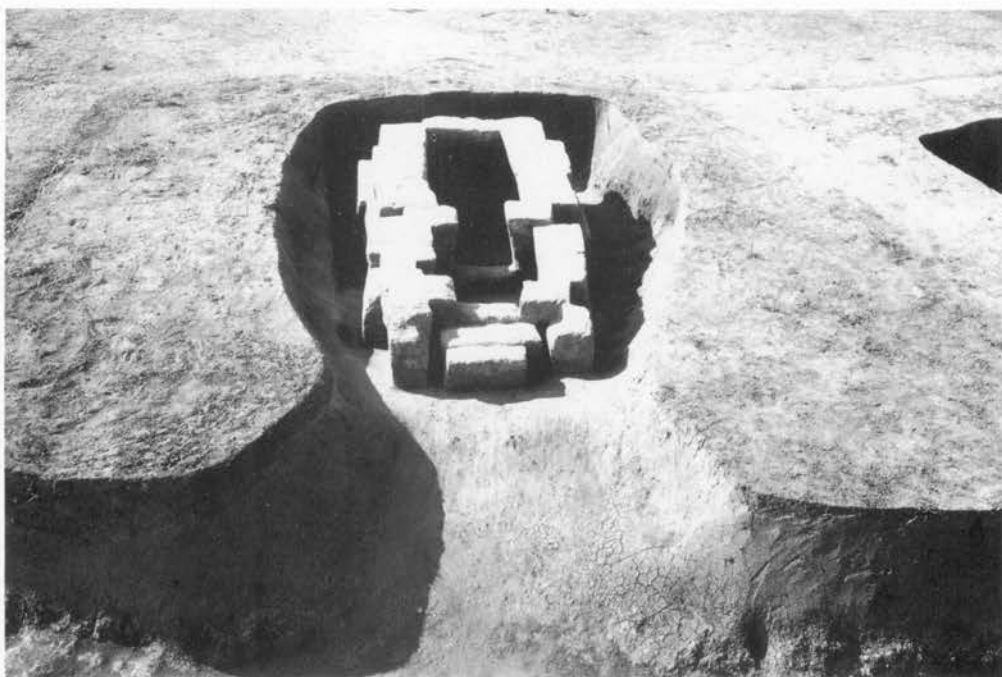


2. 同



3. 同





1. 第1主体部全景（南から）



2. 同羨道部内遺物出土状況（西から）



1. 第1主体部玄門（南から）



2. 同左側壁（北西から）



3. 同羨門閉塞状況（南から）



1. 第2主体部全景（南東から）



2. 同（北西から）



3. 同奥壁（北東から）

1. 第2主体部奥壁
(玄門側から)



2. 同玄門(羨門側から)



3. 同(奥壁側から)





1. 主体部の検出状況（南東から）



2. 調査後の全景（南東から）

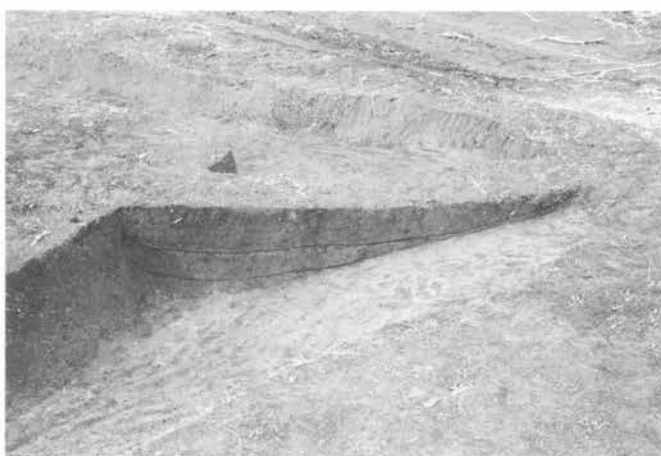
1. 周堀土層断面



2. 同



3. 同





1. 第1主体部全景（南東から）



2. 同玄室内遺物出土状況（南東から）



1. 第1主体部全景
(北西から)



2. 同奥壁(南東から)



3. 同左側壁(東から)



1. 第2主体部全景（南東から）



2. 同玄室内直刀出土状況（上から）

1. 第2主体部奥壁
(北西から)



2. 同左側壁 (南西から)



3. 同羨門 (南東から)

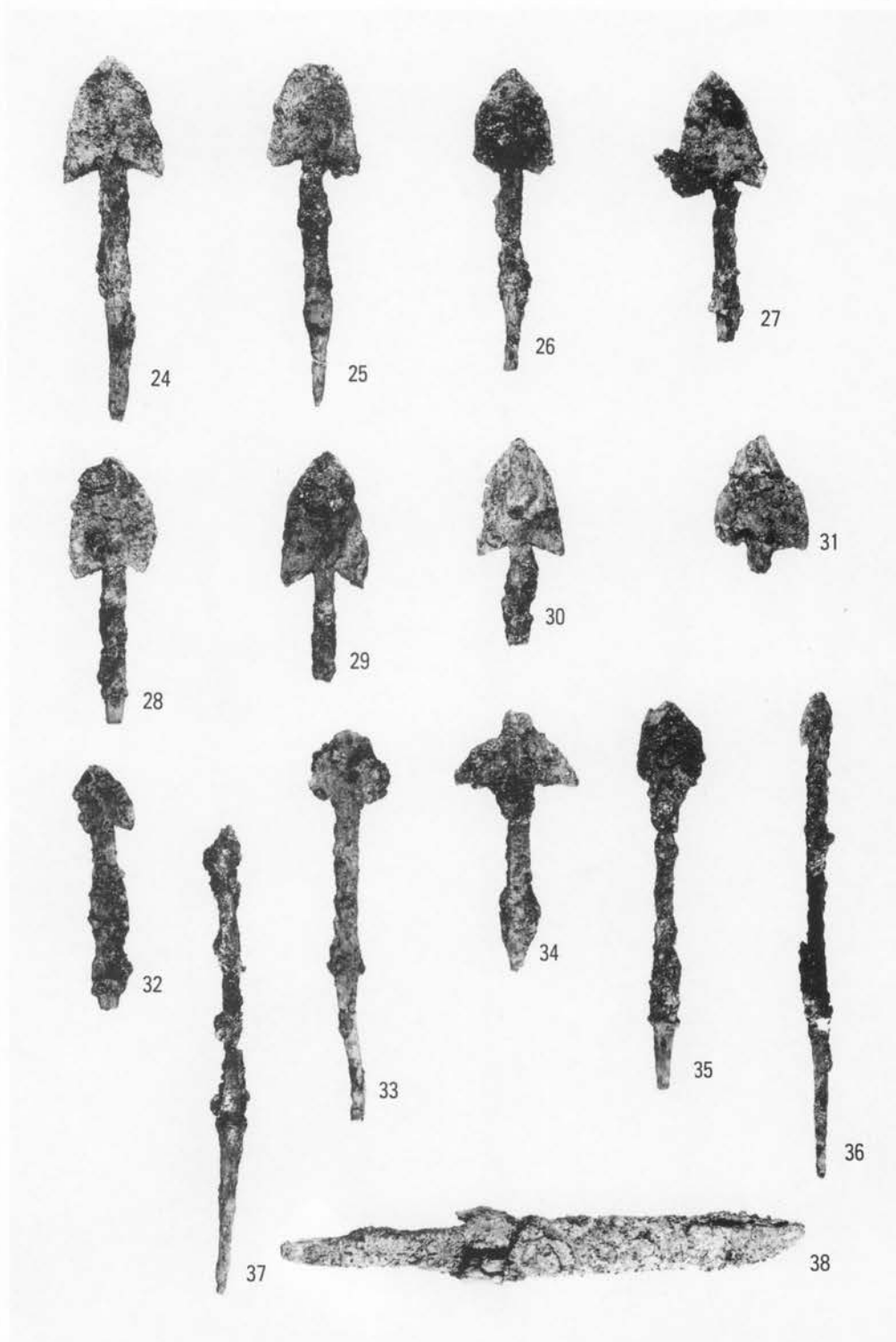




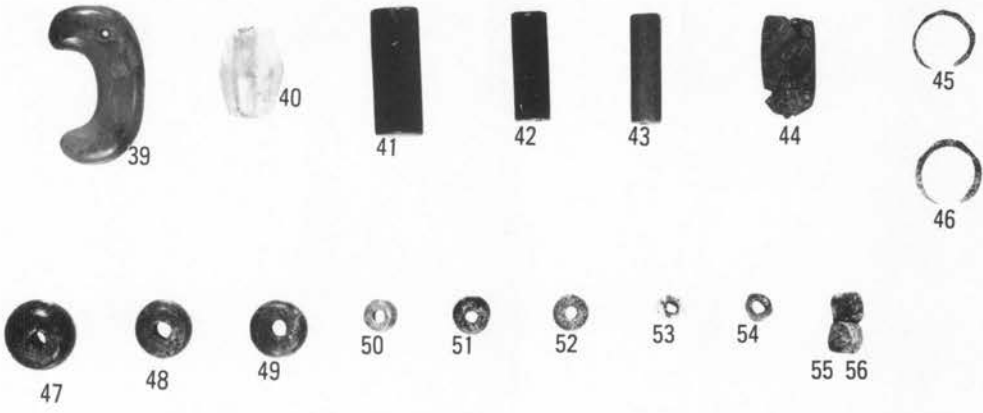
第1石室内出土直刀



第一石室内出土鉄鏃(1)



第1石室内出土鉄鏃2), 刀子



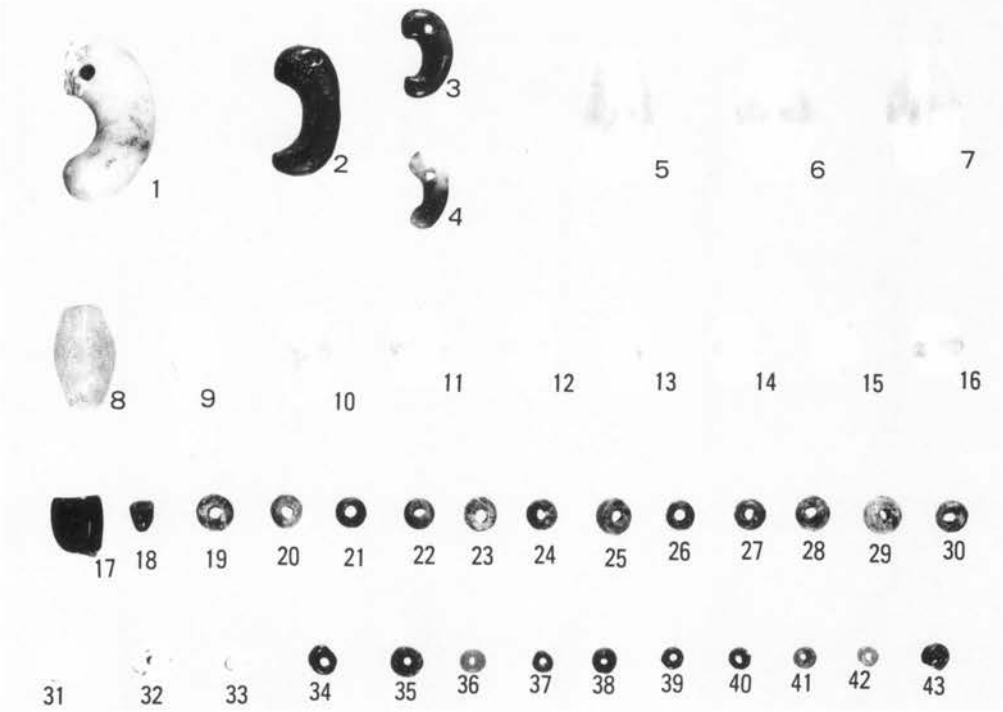
1. 第1石室内出土玉類



2. 墳丘、周堀内出土遺物



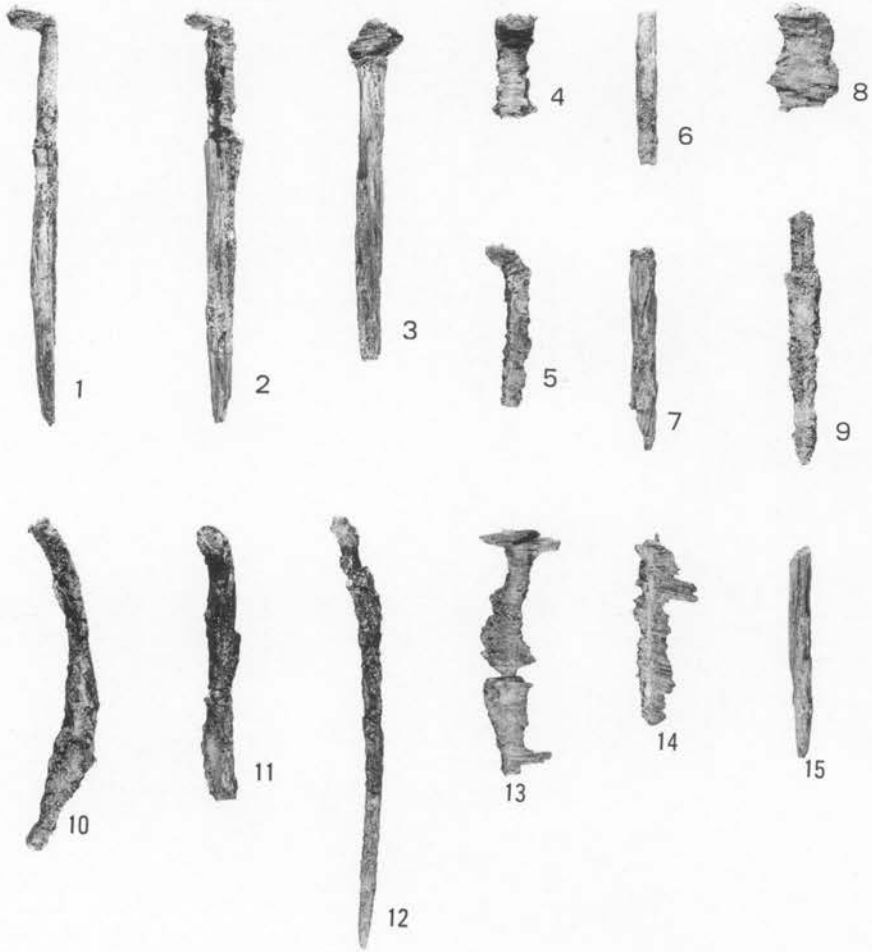
第2主体部内出土鉄製品



1. 石室内出土玉類



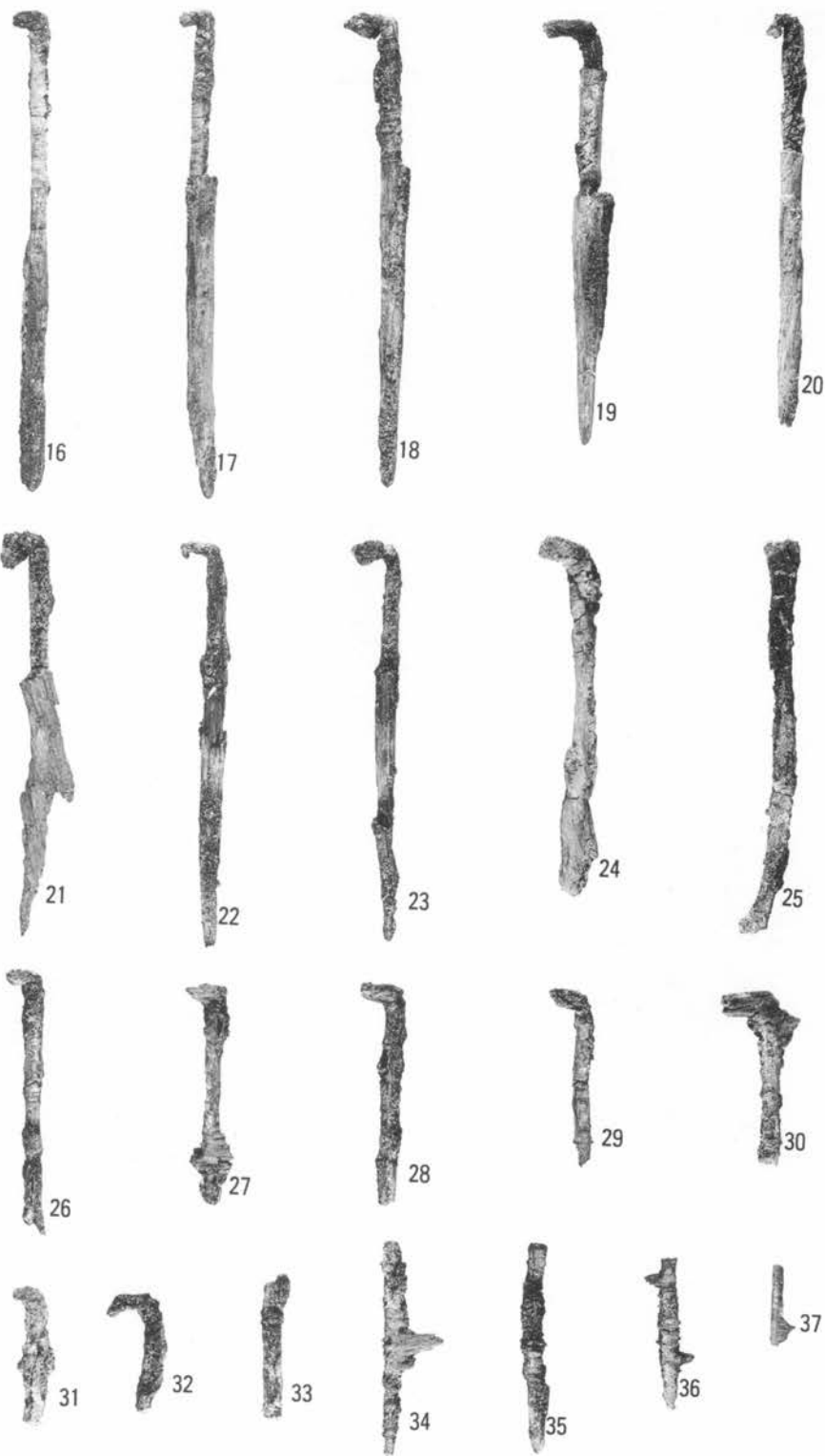
2. 周堀内出土須恵器



1. 第1石室内出土鉄釘(1)



2. 周堀内出土鉄製品



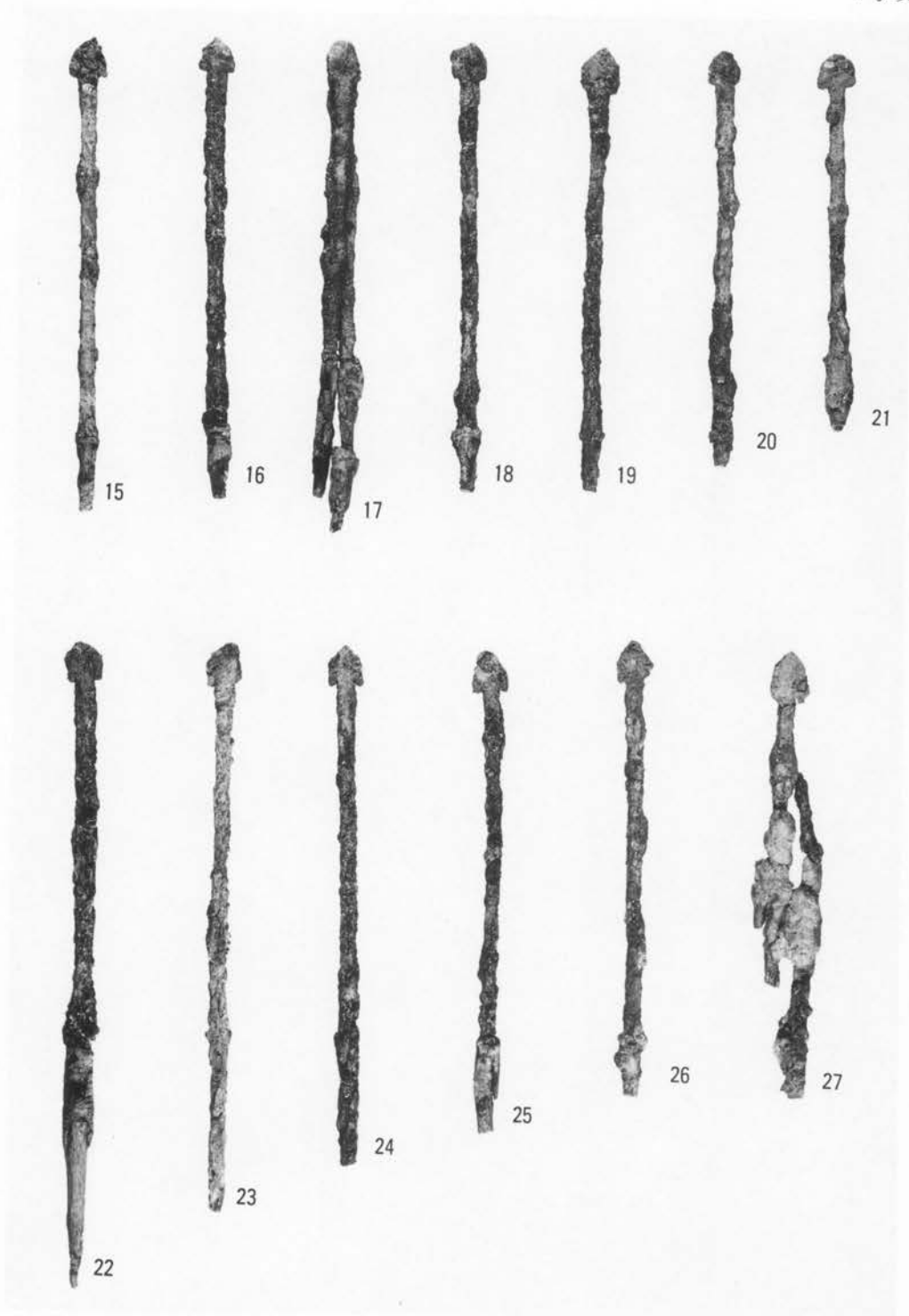
第1石室内出土鉄釘(2)



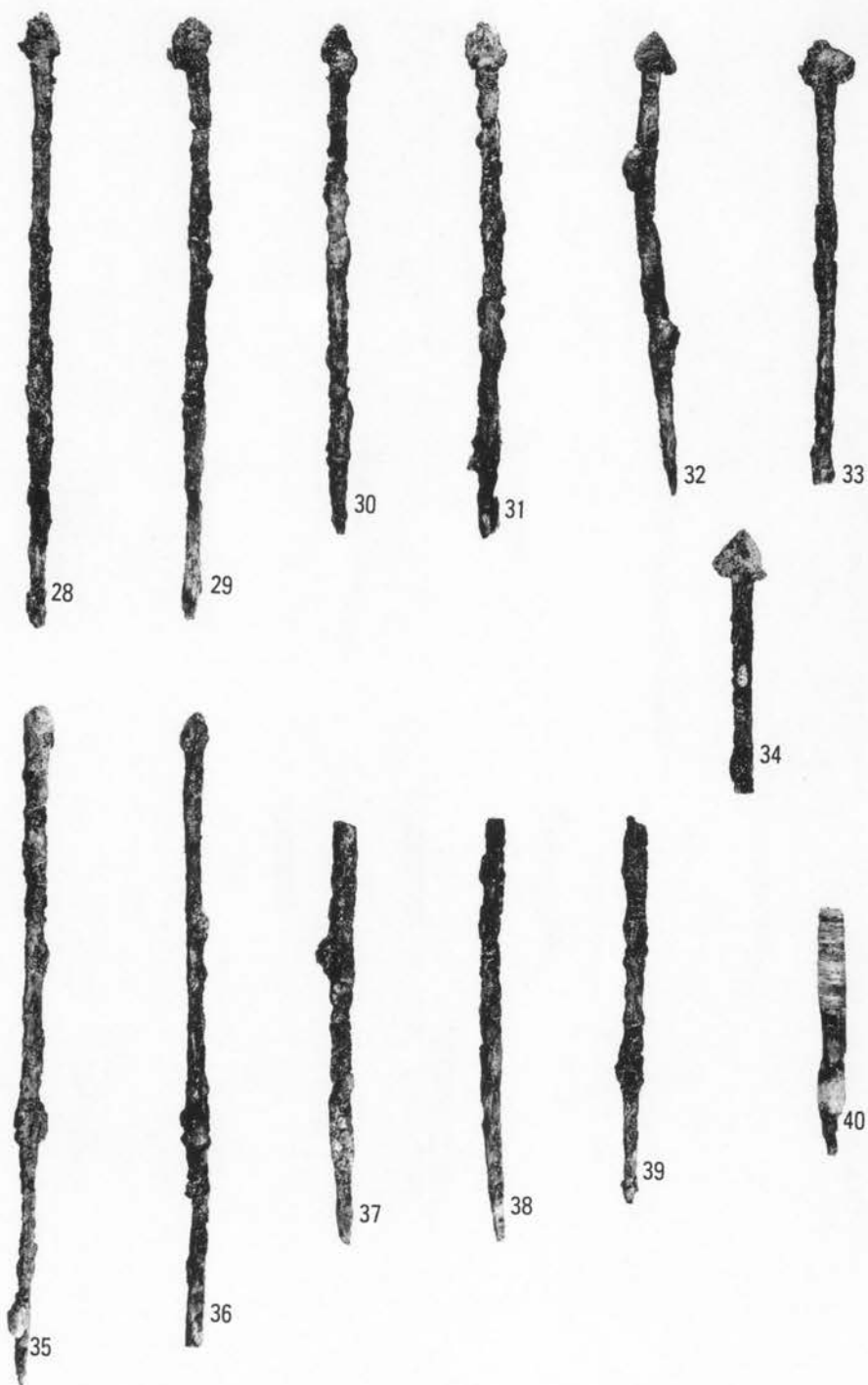
第1石室羨道部内出土須恵器



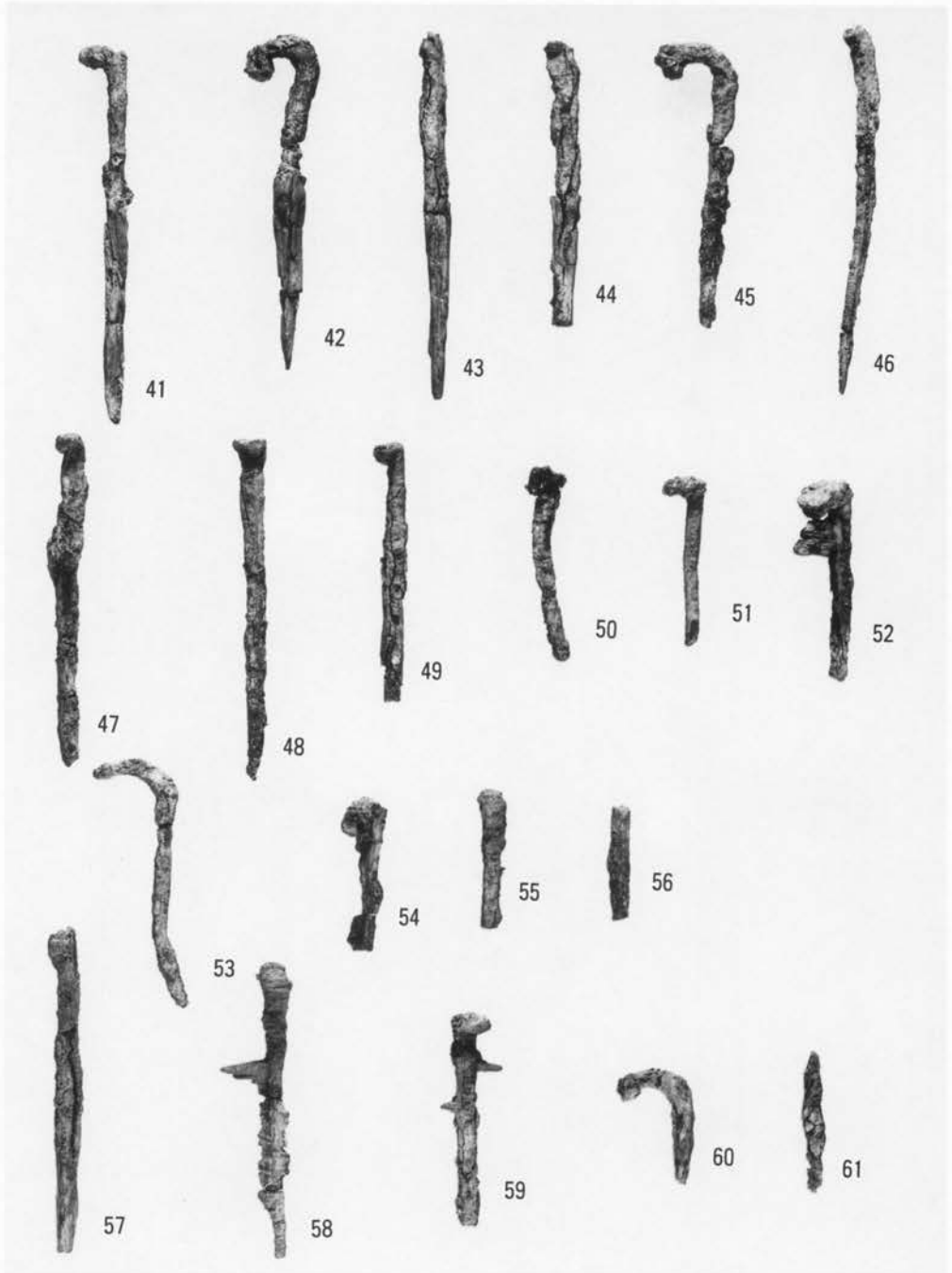
第2石室内出土鉄鏃1)



第2石室内出土鉄鎌(2)



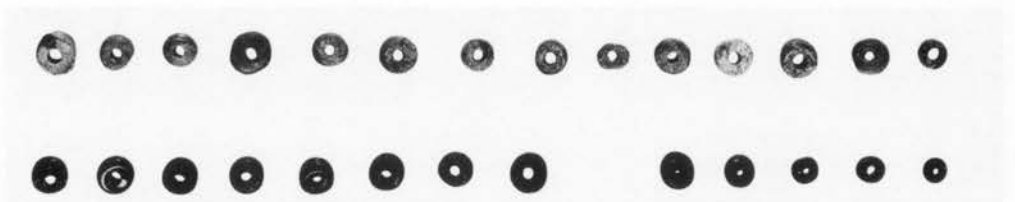
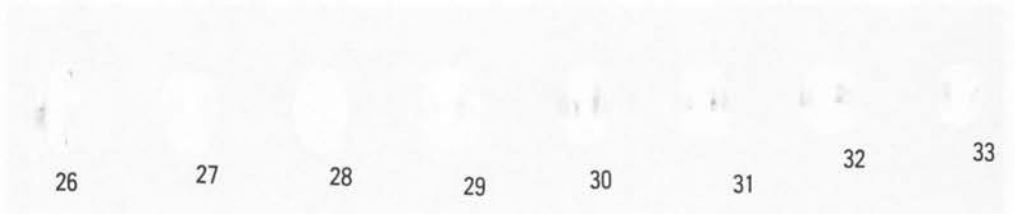
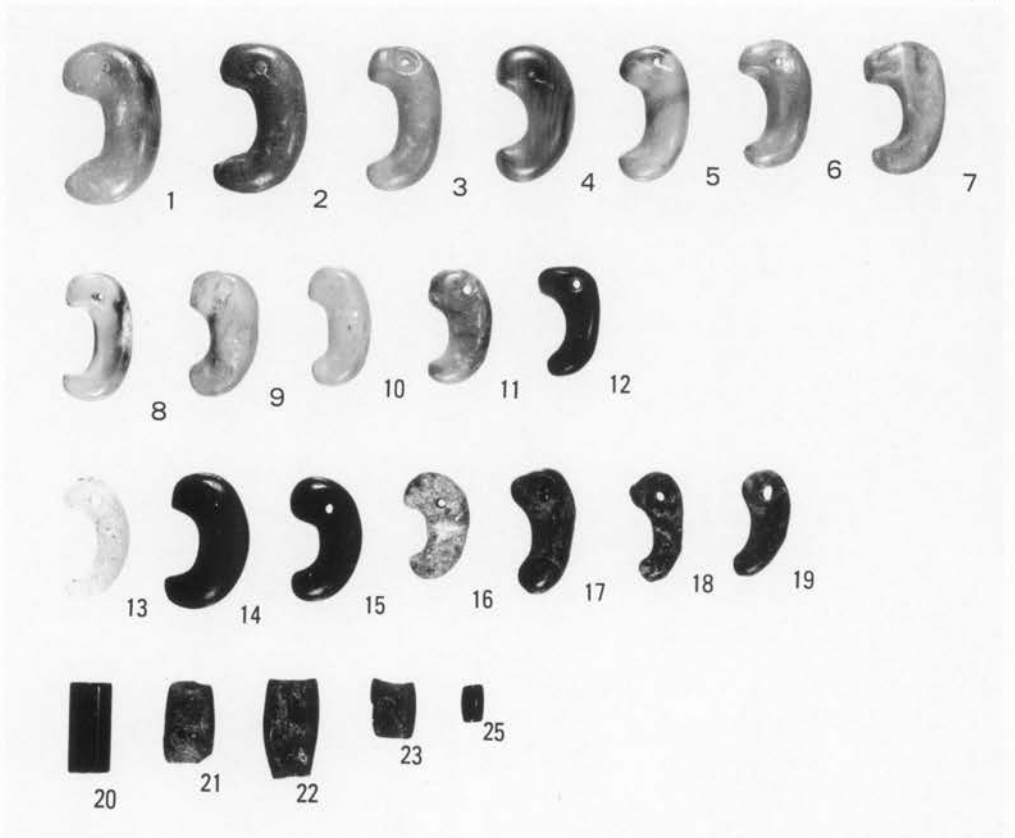
第2石室内出土鉄鍬(3)



第2石室内出土鉄釘(1)



第2石室内出土鉄釘(2)



第1石室内出土玉類



1. 第2主体部出土須恵器

3



2. 第2石室内出土直刀

1



1. 001号跡全景（東から）



2. 同カマド（南東から）



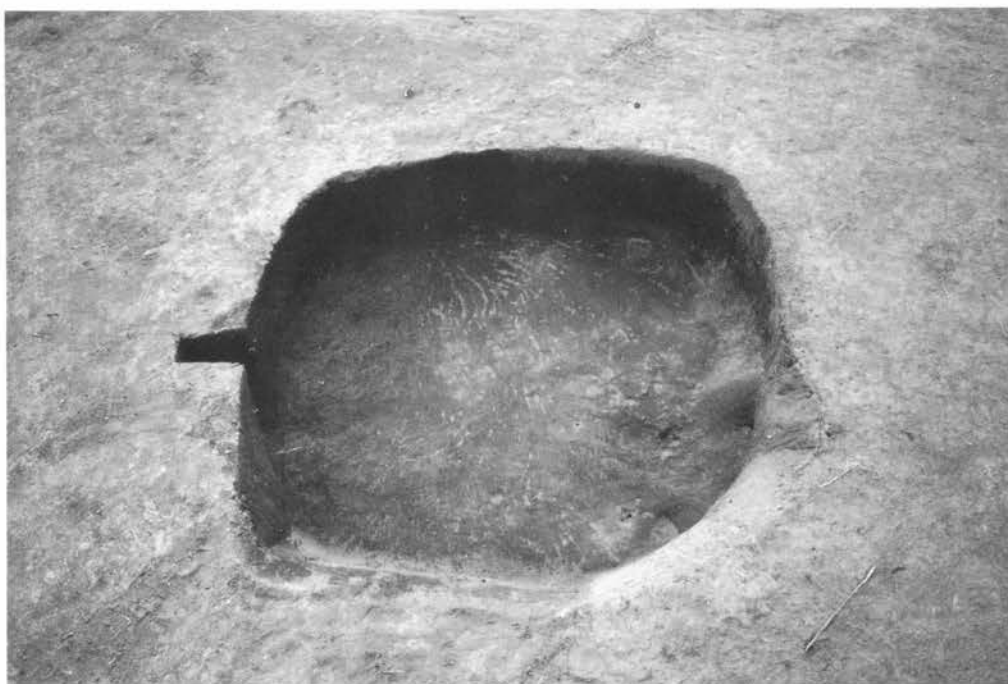
1. 002号跡全景（南東から）



2. 同カマド（南東から）



001, 002号跡出土土器



1. K01号跡全景（南東から）



2. 同出土土器



1. K02号跡全景（南西から）



2. 同遺物出土状況（南西から）



1



3



2



4

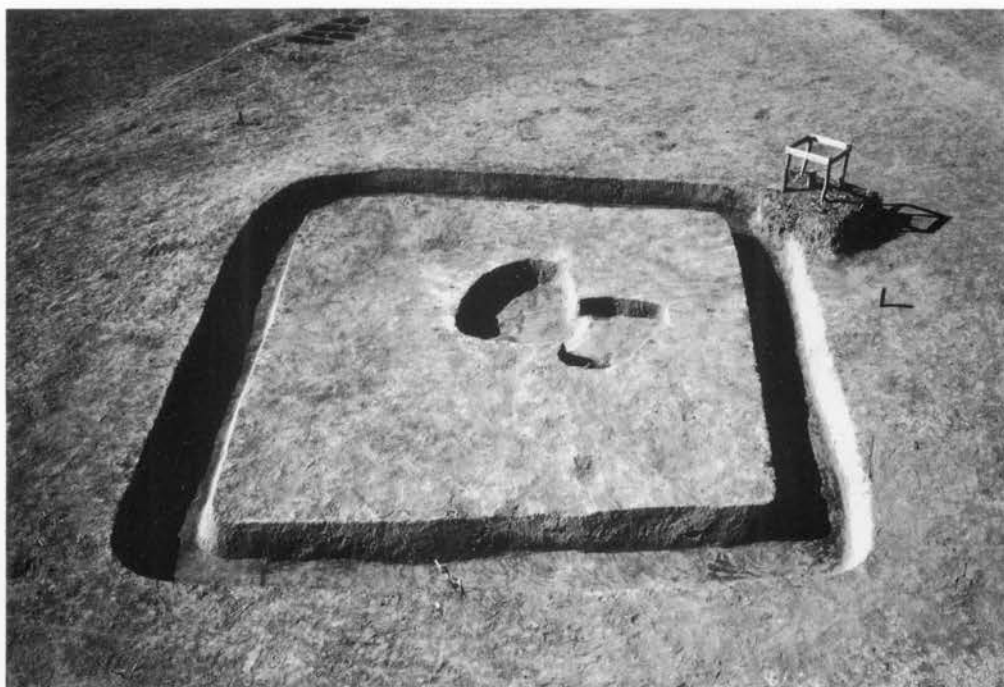


K02号跡出土土器

6



1. M01号跡全景（南から）



2. M02号跡全景（南東から）



1. M03号跡全景（南から）



2. M04号跡全景（南から）



1. M05号跡全景（東から）



2. M07, 08号跡全景（北から）

1. P01号跡



2. P02号跡



3. P03号跡

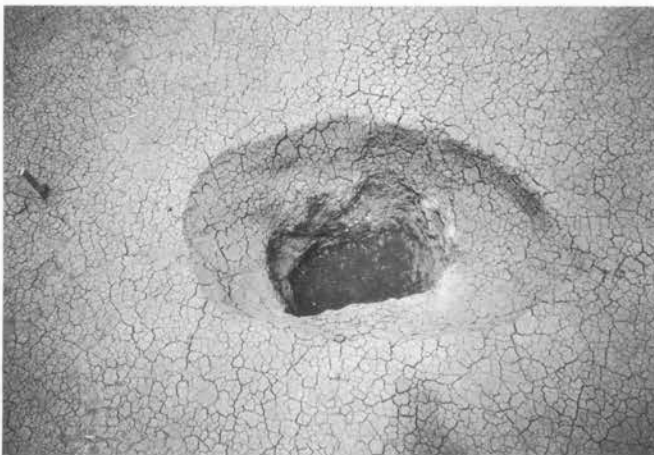




1. P04号跡

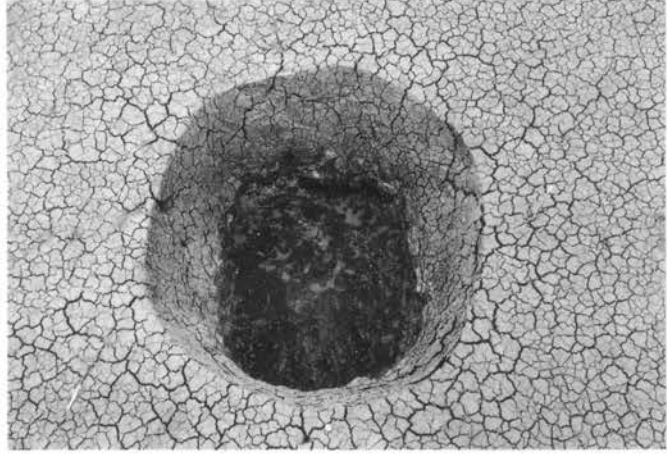


2. P05号跡

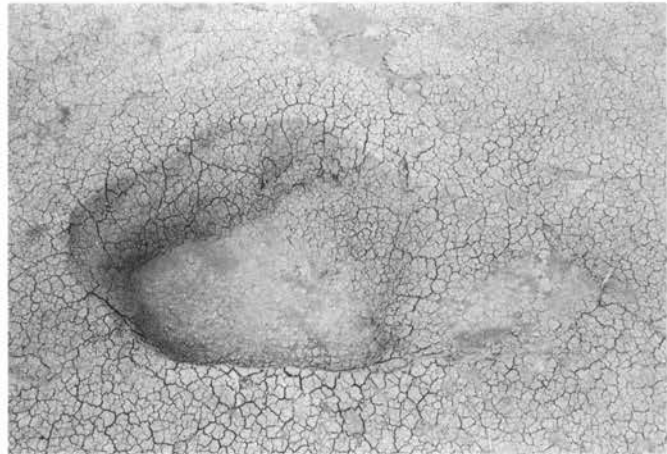


3. P06号跡

1. P07号跡

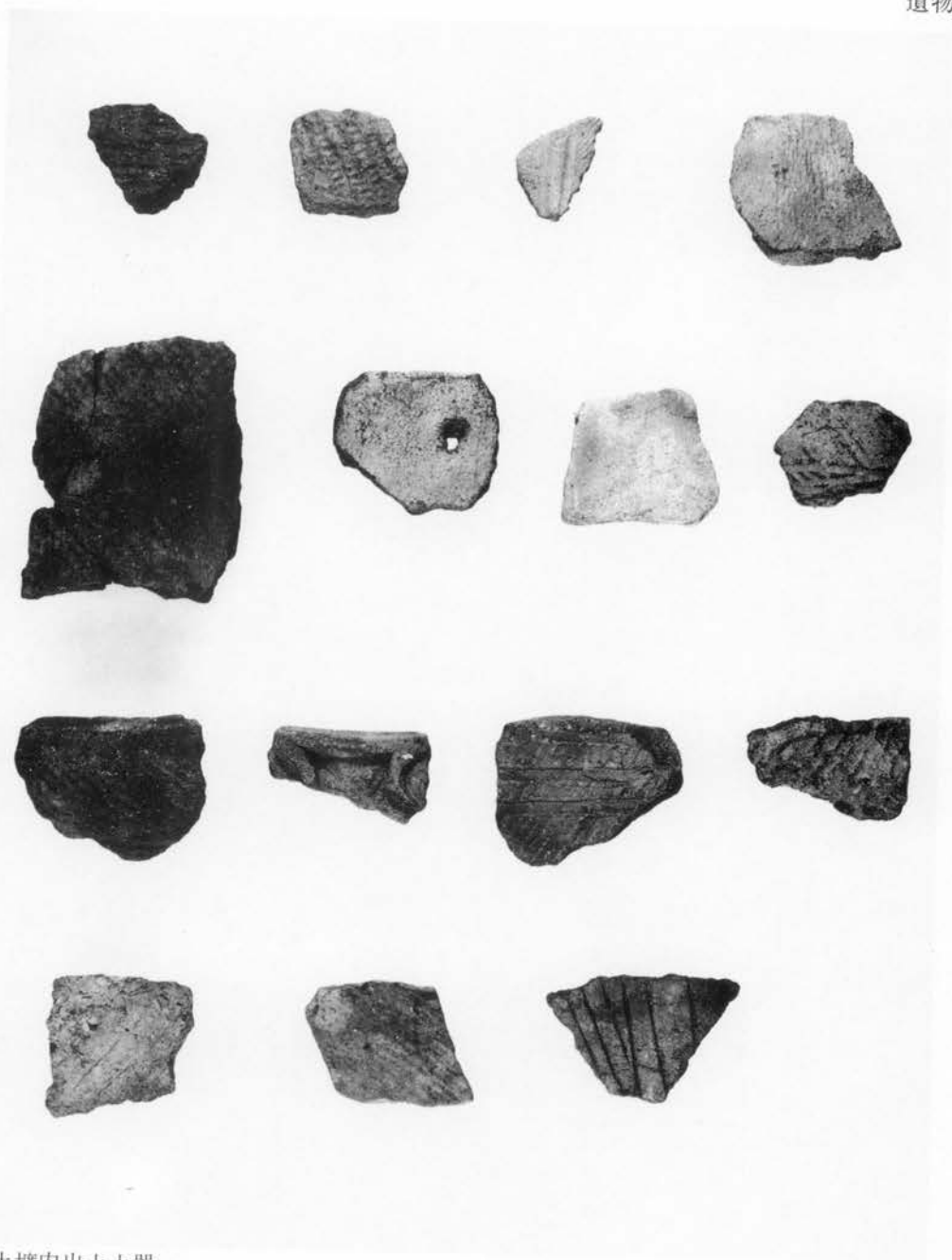


2. P08号跡



3. P12号墳





土境内出土土器



Photo No.	Sample No.	Pollen and Spores	
1	No. 6	Pinus	(約1,000倍)
2	No. 10	Leguminosae	(")
3	No. 10	Alnus	(")
4	No. 10	Cyclobalanopsis	(")
5	No. 10	Lepidobalanus	(")
6	No. 7	Thalictrum	(")

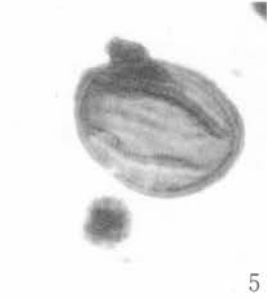
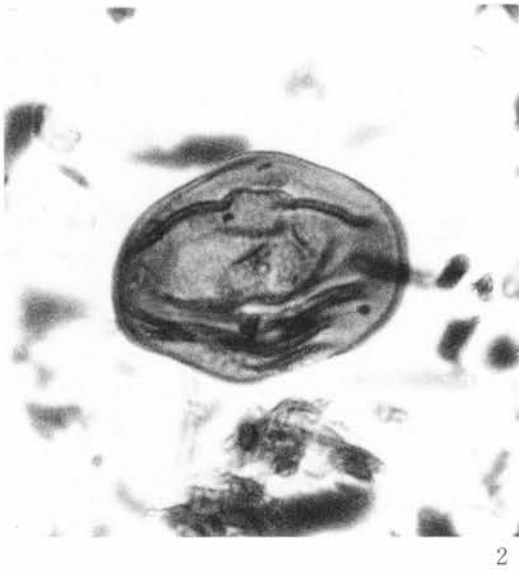
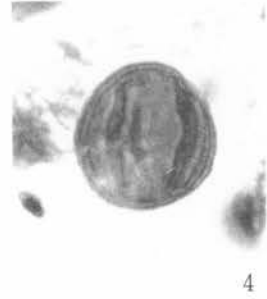
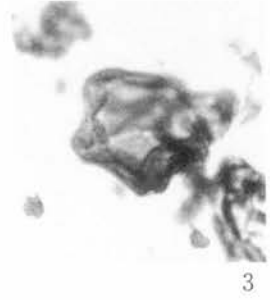
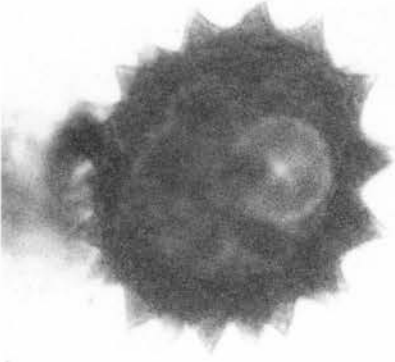
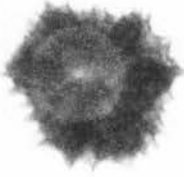


Photo No.	Sample No.	Pollen and Spores
7	No. 7	Carduoideae (約1,000倍)
8	No. 7	Cichorioideae (")
9	No. 11	Trilete spore (")
10	No. 7	Artemisia (")
11	No. 3	Monolete spore (")
12	No. 7	Gramineae (")



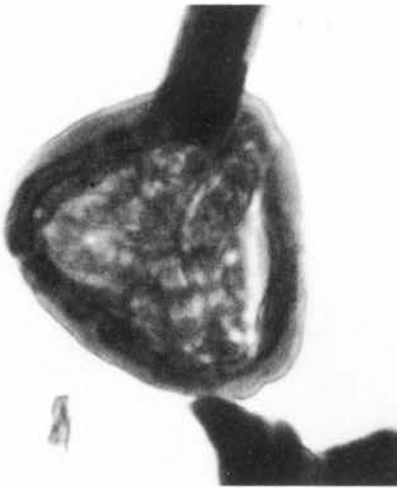
7



8



11



9



10



12



付図 六通金山遺跡遺構配置図 (1/1,000)

昭和56年9月20日 印刷

昭和56年9月30日 発行

千葉東南部ニュータウン11

－六通金山遺跡－

発行 日本住宅公団 首都圏宅地開発本部

東京都千代田区九段北1-14-6

財団法人 千葉県文化財センター

千葉県千葉市亥鼻1-3-13

TEL 0472-25-6478(代)

印刷 大日本印刷株式会社

東京都新宿区市谷加賀町1-12

TEL 03-266-2111
